

下ると、河川が軽石流堆積物を浸食して田切り地形が形成されている。塩野西遺跡群のなかでも縄文中期の遺跡は、流れ下って綾矢川に注ぐ真楽寺湧水の東西両側の標高約八五〇—九〇〇に付近の南向きの緩斜面に密集する。これらはいずれも前期初頭の塚田・下弥堂集落よりも数十メートル高所へ移動していることになる。ここでは中期前葉の集落として滝沢遺跡を、中葉から後葉にかけての遺跡として川原田遺跡を中心にとりあげて、そのようすをみていくことにする。

滝沢遺跡の 滝沢遺跡は北調査区と南調査区に分かれるようすが、そのうち北調査区の東縁辺部から五領ヶ台II式後半期にあたる住居跡であるJ12・J14・J15号住居が検出された。さらにその北側には中期初頭—後葉の時間帯でとらえられる土坑が五基確認された。いっぽう南調査区の北縁辺部からは中期後葉から後期前葉の住居跡が八軒弧を描くように並んでいる。このため集落の中心部はちようど調査区外にあたっている可能性が高いようである。J12号住居では五領ヶ台II式後半期にあたる底の抜けた深鉢が炉体土器として使われていたため、この時期が住居の使用年代として認定される。プランは円形で周溝はみられず、直径三・六メートル、床面積は九・〇八平方メートルの小形住居である。中期前葉は各地で土器埋甕炉がもつとも盛行する

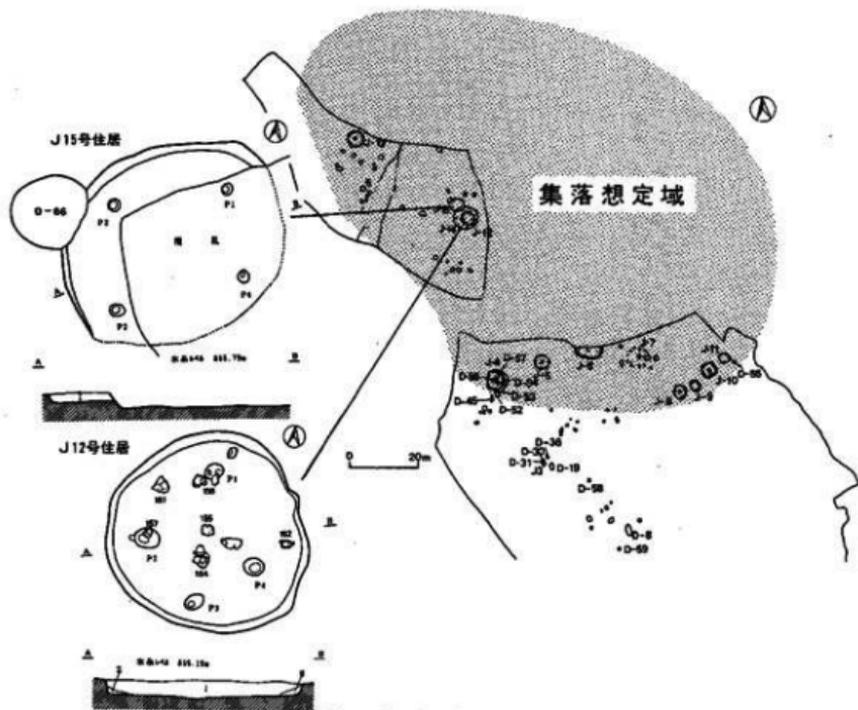


図69 滝沢遺跡遺構配置図

時期でありこの様相を反映している。四基の柱穴は直径四〇センチ程度とこぶりで配置も無作為である。本住居跡は廃絶後に土器捨て場になっており、床面から二〇センチ程度浮いた状態で五領ヶ台末から直後段階の土器が出土している。J14・J15号住居ともに柱穴が小形である点で、前期の延長にあるようである。

川原田遺跡 川原田遺跡は、年間を通じて安定した水量を保つ真梁のようす。寺湧水から約八〇ほど南に下った位置にある。北側に

浅間山を背負い、南側は佐久平方向にむかって延びる舌状台地上に立地する。図70に中期の住居跡の分布状態を示した。住居跡群は大きく西側のA群との間に約四割の空白部分を挟んで東側のB群、そして両群の北側のC群に分かれる。A群の住居跡はほぼ等間隔に分布し、

住居跡間には土坑が三〇基振倒されている。この群は遺構の並びから西側調査区外へ連続すると推定される。B群は外側のJ21号住居からJ22号住居までがほぼ弧状に配置され、その中央部に土坑が数基みられる。群の東側は遺構の空白地となっているため、この群はここで完結していると考えられる。両群の間には、本集落で唯一の掘立柱建物址F12がみられる。また、この建物の南側には土坑が等高線上に並んでいる。C群はA・B群と背を合わせるように北西から北東へ弓なりに弧を描く。円の中央部には中期後葉を中心としたD65・D66・D67・D80号土坑など数基の土坑が散在するだけで空白域となっている。見方によってはC群をA、B群に含めて大きく東群と西群に分けるともできよう。



写35 滝沢遺跡のJ12号住居の埋燗炉と住居廃絶後に捨てられた土器

つぎに三つの群と住居跡の関係を見ると、焼町土器の古段階（勝坂式ⅡⅠⅢ式前半期）にはA・B群およびC群の北東側に住居が作られる。ところが焼町土器の最盛期になると（勝坂式Ⅲ式後半期ⅠⅣ式期）C群の北に離れた部分には住居が作られなくなり、住居跡はC群の南側とA・Bに分かれる。あたかもC群の中央部分を広場として前もつ

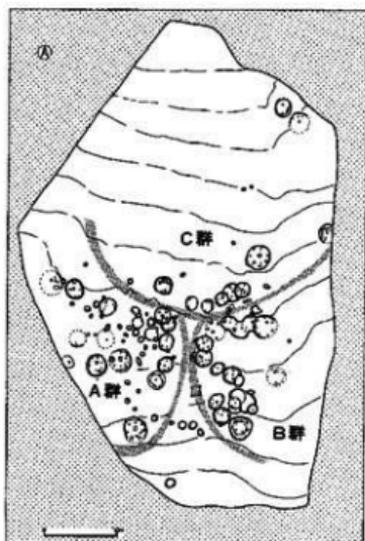


図70 川原田遺跡縄文中期遺構全体図

て設計されていた環状構成が、本格的な新段階の焼町土器の成立をもつて中断されたようにみえる。中期後葉になってもやはりC群の南側を含むA・B・C群の三群に分散する。このことからここでA・B・C群は、あらかじめ環状構成などのスペースデザインをもって住居の配置を決定することがなかったものの、居住地についてゆるやかではあるが何らかの規制を内包した群であったと考えられる。

さらに一步進んで住居が一時期に何軒建っていたかを推定するには、住居が廃絶されるときに床面におき去られた土器の年代を調べ、同じ年代の土器を保有する住居数を合計していく必要がある。ところが縄文人たちの多くは引っ越すときに家財道具を持ち去ってしまうため、つごうよく床面に土器が置かれていることはまれである。そこで住居

が放棄され埋められるもしくは自然に埋まる過程でゴミとして捨てられた土器をも加えた年代を調べて、その範囲で同時存在の住居数を合計するしかないのである。ゴミとしての土器が捨てられた時期は住居が實際建っていた時期より後になるが、何よりもそれが機能していた年代に近い値を示すことは確かである。つぎの図はそのような方法から推測した各時期の住居の時間的変遷を示している。ここでは、86、92頁で述べたように焼町土器を大きく古段階・新段階・終末段階、加曾利E式を1・2に分けて一時期としたものをI-Vの大別時期、さらに各時期の中で土器型式の細別を基準にしたものを川原田7期、13期の細別時期とし、記号で示した。

- I 焼町土器古段階（川原田遺跡第7・8期）勝坂II式、勝坂III式
 - II 焼町土器新段階（川原田遺跡第9・10期）勝坂IV式を中心とした時期）
 - III 焼町土器終末段階（川原田遺跡第11期）勝坂V式）
 - IV 加曾利E1式・曾利古式I段階（川原田遺跡第12期）大木8a終末）
 - V 加曾利E2式・唐草文系I（・II）段階（川原田遺跡第13期）大木8b式）
- 細別時期をもとに同時期の住居跡を数えていくと一時期あたり二、五・六軒という結果になろう。

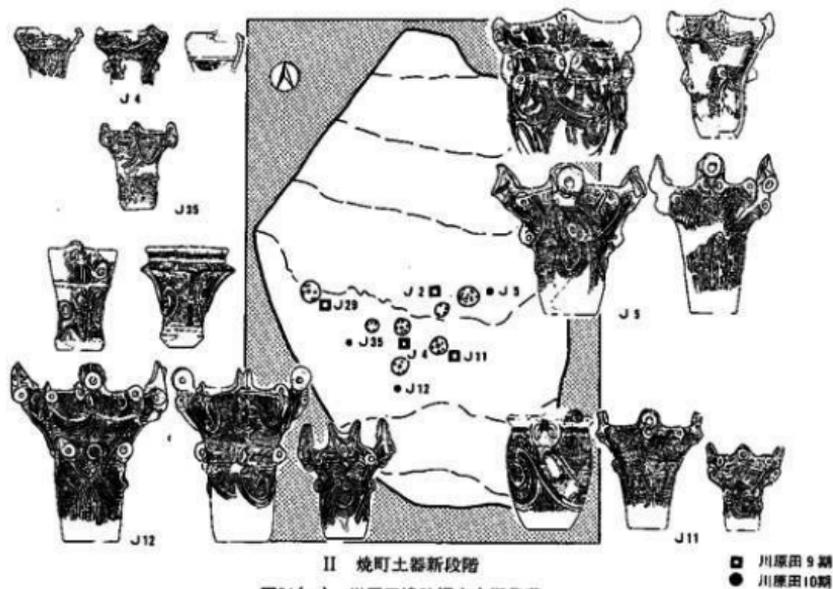
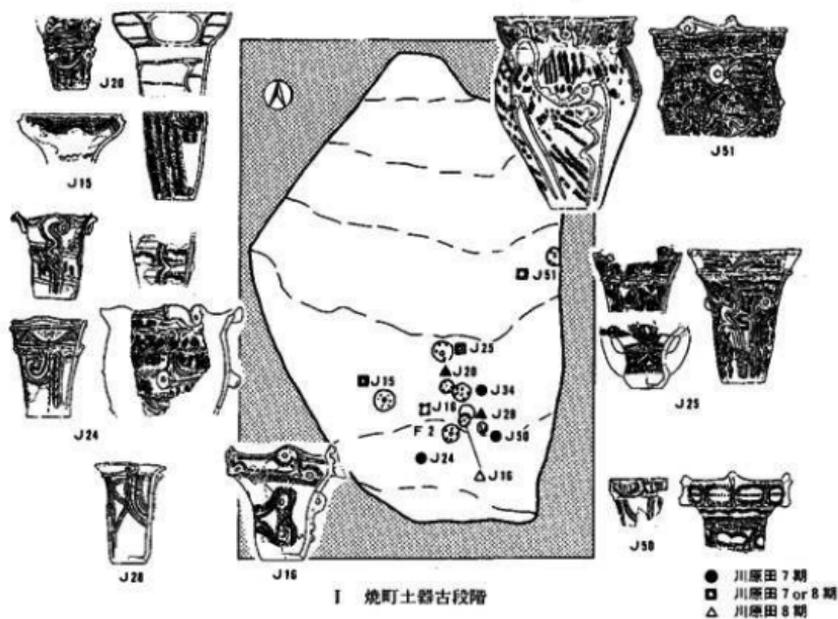
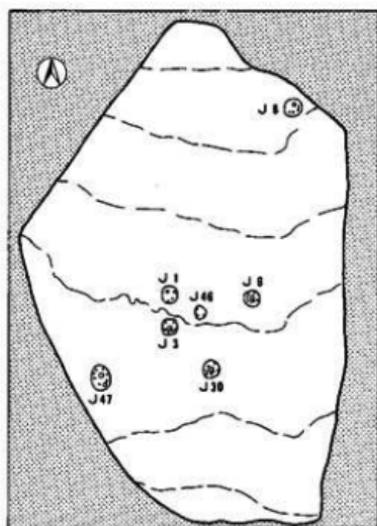
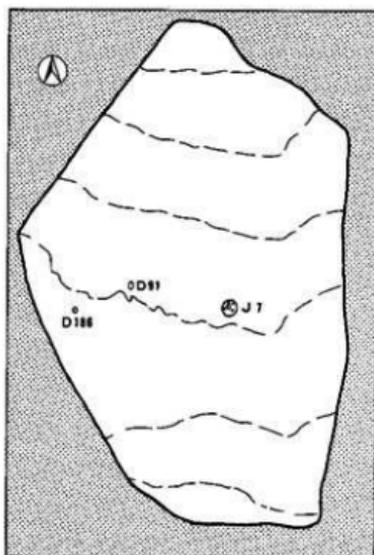
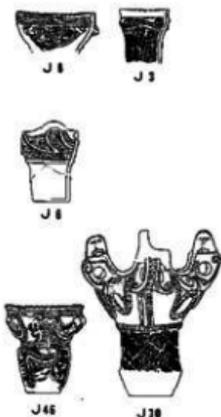


図71(a) 川原田遺跡縄文中期集落

住居跡の それではつぎに川原田遺跡の住居跡と付属施設を見て
形 態 いこう。 中期中・後葉の住居跡は例外なく凹形を呈す
る。凹形の中でも図72に示したように長径一〇〇以下の小形、一〇一〜二
〇〇の中形、二〇一〜三〇〇の中大形、三〇一〜四〇〇の大形に分かれる。
柱穴は四本が基本であるが、五〜七本が多角形に配置される例や、不
規則な配置をとるものもある。



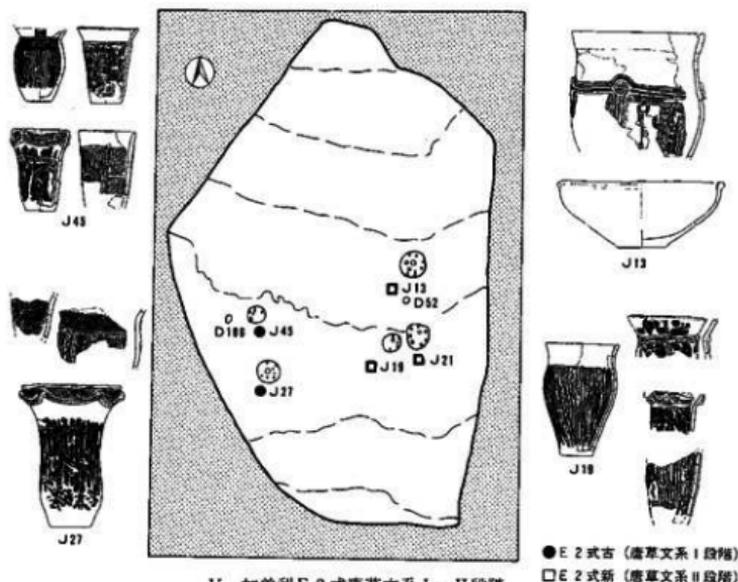
III 焼町土器終末段階



IV 加曾利E1・曾利古式I段階
(大木8a終末)



図71(b) 川原田遺跡縄文中期集落



V 加曾利 E 2 式唐草文系 I・II 段階
図71(c) 川原田遺跡縄文中期集落

外部から浸入する水の排水や壁面の土留め板を固定するなどの機能が推定される周溝や、間仕切り溝が検出されたものもある。周溝のいくつかは入り口で途切れており、その入り口と反対側の壁にやや近づけて炉が作られる場合が多い。なかには特別細い柱で支えたり口施設が残っているものもある。また、採光の効率が意識されているのか南側に入り口が作られているものが多い。

とくに J15 号住居（写 36・図 73）は、柱穴が六角形に配置され、この間に間仕切り溝が連結する。壁際にも幅一〇センチほどの周溝がほぼ全周する。また周溝と間仕切り溝に挟まれた部分が、柱の内側よりも若干高くなっているという特徴をもつ。入り口は南側の主柱穴間に想定される。

焼町古段階 つぎに住居群を時期別に概観してみよう。焼町古の住居跡 段階には、J25 号住居がやや大きめであった可能性

が残るものの、小形と中形のみで構成される。小形住居の J50・J20 号住居はいずれも阿玉台式の土器を埋設した埋燬炉を有する点で共通する（図 37）。同段階でこのほかに埋燬炉を有するものは中形住居の J51 号住居だけであるが、ここでは焼町古段階の深鉢が使われており、在地系の阿玉台式土器が埋土から出土している。これに対し石囲炉の住居跡四軒のうち三軒はいずれも中形で、すべてに在地もしくは群馬系の勝坂式土器が廃棄（J15・J24 号住居）か遺棄（J25・J16 号住居）された状態で出土している。ここから住居の使用時においては埋燬炉の住居で阿玉台式が、石囲炉の住居の一部で勝

坂式が使われている傾向が強い。焼町土器は兩者に共通する。ただしJ50・J20号住居には勝坂式土器も廃棄されており、逆にJ15・J16・J24・J25号住居には阿玉台式も廃棄されているため、住居が廃絶された後に投棄される土器の組み合わせもそのような傾向にあったかどうかはわからない。この段階には、このほかに炉のない住居跡や地床炉びしとろの住居跡がある。

焼町新段階 焼町土器新段階（中期9・10）の住居跡には、さらに中大形住居跡が加

わる。この段階以降は小形住居には炉が設置されない。古段階とは小形住居の機能に変化が生じたようである。炉の形態を見ると地床炉を有する住居跡が一軒、埋甕炉が一軒、石囲炉が三軒である。石囲炉のうちJ12号住居では炉の一片に土器が使われている。

焼町土器の終末期には、小形が消滅し中形と中大形でも小さい方にまとまってくる。地床炉・埋甕炉はなくなり、いずれも石囲いを有する炉に統一される。ただしJ3・J8号住居はさらに中央部分に土器が埋設されている石囲埋甕炉である。

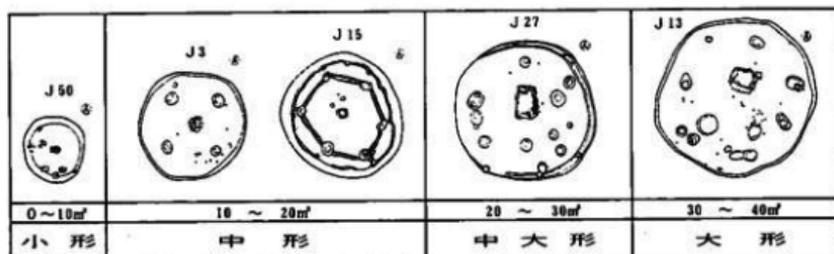
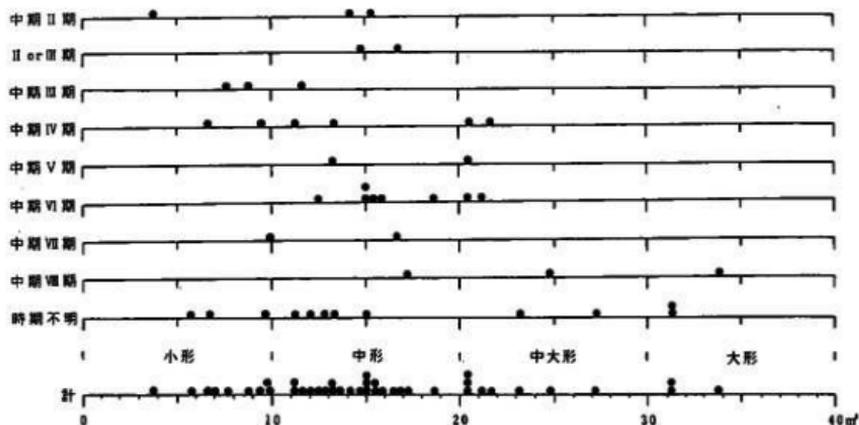
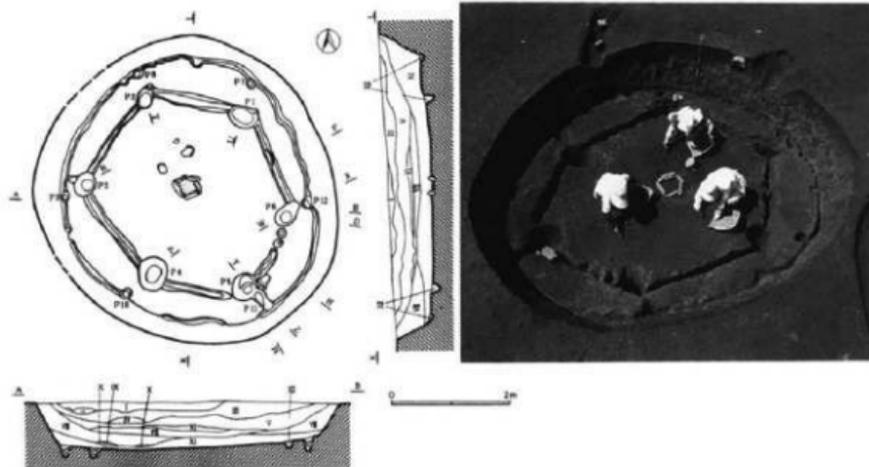


図72 縄文中期各時期の竪穴住居跡の面積分布



写36・図73 川原田遺跡J15号住居

柱穴間は間仕切りをするような溝が掘られていた。住居中央には石囲炉がある。人物から住居の大きさがわかる



写37 J20号住居の炉

阿玉台式土器が炉の囲いに使われていた

炉の形態別 炉の形態の差は機 能 何を意味していたのであろう。焼町土器古段階に属する南側のB群の住居の炉の形態をみると、J34号住居が地床が埋塞があり、J50号住居が埋塞が、J24号住居が小形石囲炉である。J50号住居の炉は埋塞がでも土器の中にわずかに焼土が入っているだけであるため、実際の煮炊きに使う土器は梁から紐で吊り下げ、埋塞がの中の弱い火でトロトロとじ

加曾利E1・2式期になると、住居のサイズは小形の住居跡から大形まで分散する。炉は中大形住居であるものの、炉が検出されなかったJ22号住居を除いて石囲炉が普及している。これに対し加曾利E2式期にあたる西駒込遺跡のJ1号住居は地床が採用されている。この住居跡は一六・二で中形に属する。周溝が全周し、南側に入り口に関係する施設と考えられるP5が掘削されている。この後塩野西遺跡群で確認されている住居跡は加曾利E3式新段階の滝沢遺跡J13号住居であり、この間が空白期間となる。



写38 J12号住居の炉
安山岩燧4個と焼町土器(図52-3)が炉縁に使われていた。

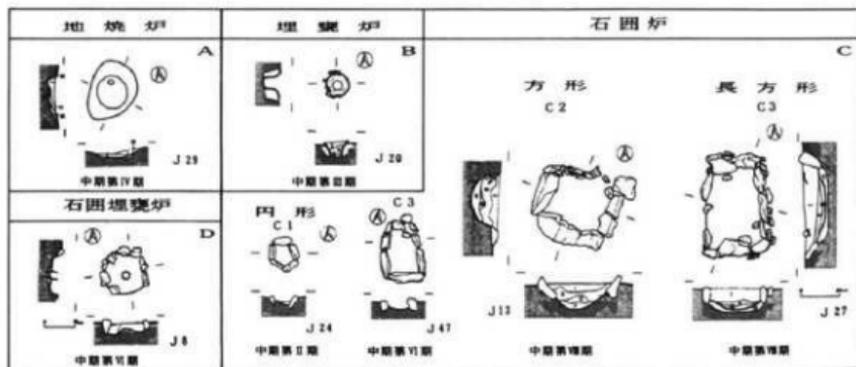


図74 炉のいろいろ

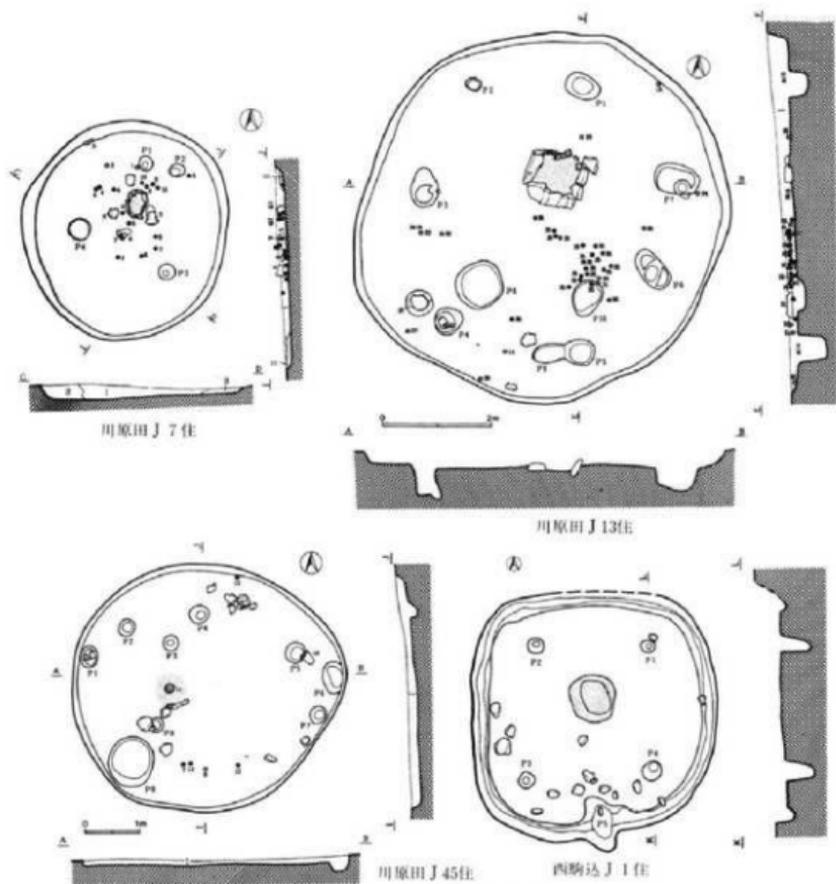


図75 加曾利E式前半期の住居跡 (1:120)



写39 土器と石皿
(川原田遺跡J30号住居)

つくり炊きあげる調理をしたと考えることもできる。これはJ51号住居やJ5号住居の埋甕がでも同様である。さらにJ24号住居の炉は石囲炉であるが石囲の内部すなわち火を入れる部分が二〇〇程度であるため、その使用時にはやはり土器を吊り下げる必要があったと考えられる。また、焼町土器終末段階のJ30号住居では同様の小形の石囲炉の脇に四単位の把手をもつ8の土器(図71)があたかも梁から落ちたままのように倒れて出土している(写39)。これは山梨県釈迦堂遺跡群野呂原遺跡で、同じく燃焼部が小さいことから土器を吊るしての煮炊きが推定されている埋甕石囲炉において、炉石に載る形で大型把手付き土器が出土した事例と類似している。炉の機能を探る好資料といえよう。

いっぽう、焼町土器終末段階J1期以降に現れる大形の方形石囲炉では、燃焼部分が広いと、土器を炉内に据えて煮炊きを行なうことができたと考えられる。これは石囲埋甕の登場と時期を同じくしている。石囲埋甕も大形の方形石囲炉と同じく、燃焼部が広いため炉体土器の上に調理に使う土器を据えて、煮炊きを行なうことができる。もしも炉の形態と「吊るす」「据える」という調理用土器の固定方法が対応するならば、川原田遺跡ではこのような炉形態の変化から、吊るす調理法から据える調理法に変化していくといえそうである。そしてその転換期こそ焼町土器終末段階である。この時期を境に焼町土器や大形把手付き土器などの把手の発達のうちじりしい土器が衰退し、代わって把手のない加曽利E式が普及することは、吊るす方式から据える方式への変化とかわわっているのかもしれない。

住居から懸れる際の祭祀

住居跡の中にはJ9・J13号住居のように床面直上に浅鉢形土器が伏せ置かれていたものがある。また、J24号住居では石囲炉に蓋をするように炉の火床

の上に石が置かれていた。このような行為は、住居から引越す際の儀礼的な意味をもっていたのではないかと考えられる。

また、石囲い部分の一面の石だけが抜き取られていた石囲炉が七例みられた。これも石囲の一部を外すことで、炉の機能を停止させる意味を込めた行為ではないかと推測される。

六 住居跡のライフヒストリー

縄文時代 近年になって千葉県加曽利貝塚博物館をはじめ実際に**の体験** 縄文時代同様の住居を造り、そこで子供たちに当時の

生活のようすを体験学習させたり、粘土探掘から土器焼きを系統的に実習できる施設が増えてきた。県内では全国に先駆けて住居跡を復元した茅野市尖石遺跡があり、千曲川水系でも川上村大深山遺跡、望月



写40 床面に伏せられた土器
(川原田遺跡J9号住居)



写41 川上村大深山遺跡の復元住居

町下吹上遺跡、戸倉町円光房遺跡、長野県立歴史館内の阿久遺跡などの住居のようすを復元している施設は多い。このような施設では住居への光の入り方に始まり、付属施設による空間の利用の仕方、道具の配置などの視覚情報に止まらず、茅と囲み藁の壁のにおいが入り交じった独特の香りで嗅覚に迫ってくるようなものもある。

住居の一生

それでは考古資料から復元できる住居での生活はどのようなものであろうか。縄文人が残した物質文化を一個とした場合、現在われわれが地下から掘り起こして手にとることができるものは一割にも満たないかも知れない。その一割を基に、われわれが祖先から実際に受け継いできた知識や、生活の中の何らかの行動系が、今なお縄文人に類似した要素を残している民族の知識を援用しながら縄文人の生活を推測してみたい。かりに縄文人が住居跡を構築し、やがてその住居が廃絶され、その窪地に土が溜まって埋まり切るまでを住居の一生とよぼう。ここでは川原田遺跡J12号住居を例として住居を中心にそこに住む人々のライフヒストリーの一端を「神泉ムラ」のストーリーとして仮想復元してみることにする。

J12号住居は川原田ムラの中でも西側のA群の外の環状部分中央に建てられた。住居を建てたのはおそらくA群に代々住居を構えてきた世帯で、たとえばJ4号住居の住人である。

神泉のムラ

トジの家族は祖母の代にこの泉の近くの村に移ってきた。ムラには四軒の家があり四つの家族が暮らしていた。平均的な大きさのムラである。トジの祖母の代には貝を土器にいったいに入れた交易人がよく時を越えた束のムラからやってきた。交易人の中には煙を吐く雄大な浅間山に驚き、そしてこのムラを潤す神の泉の水の美味しさを、山麓でいっばいに採れるドングリをつぶしてエゴマやイノシシの肉をまぜて作った餅の味が忘れられず、交換に黒曜

石をもって帰ることも忘れてこのムラに長く留まった者もいる。トジの祖母はそんな交易人の一人と結婚したのだが、その際にかれがもってきた土器をかれの進言で処に埋めたという。

さてトジの家は直径四・四じ、床面積は一・二平方じ、柱穴も二〇〇程度で頭丈な造りとはいえない。娘のトミノも一八歳になりついに婿が来ることになったが、今の家では狭すぎる。そこで新たな家を隣接する場所に造ることにした。古くはこの場所には一五〇〇年も昔

の祖先の人々が家を造っていたが、トジのいたところにはすでに埋まっていた。平らになっていた。

家造り

家造りは男の仕事である。トジの夫のもとへムラ全体の男衆が手伝いにやってきた。まず打製石斧で穴を掘る。湿気を抜くために穴を少し深めに掘っておき、掘った土を、水や土砂の流入を防ぐためにその外側に積む。これが周堤である。つぎに柱穴を掘り、そこにあらかじめ乾燥させ、土に埋まる部分を防腐のために焼け焦がしておいた直径二〇センチほどのクリ柱

を埋め込む。梁を組んで家の骨組みが出来上がるといよいよ屋根である。外縁部の周堤にむかつて垂木尻を据え付けて屋根をかけ、茅で葺く。入り口部分は開けておいて動物の皮を扉代わりに垂らす。入り口と反対側の奥に、浅間山の麓で採ったおいた安山岩で炉を造り、床には動物の皮などを敷いた。入り口部からは集落中央の倉庫がみえる。ようやく完成である。今夜は新築祝いのマツリである。久しぶりに土器太鼓が活躍することだろう。

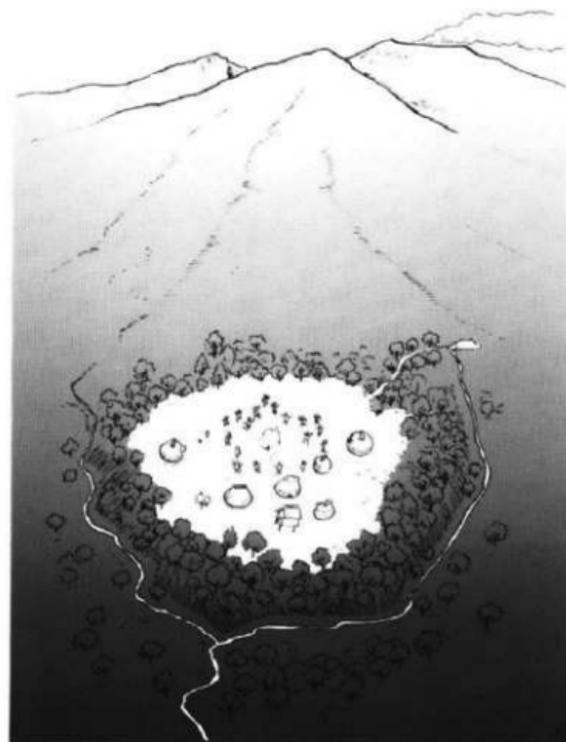


図76 浅間山のもとに営まれた神泉のムラ (さかいひろこ画)

ある秋のムラ トミノはすでに二人の子供の母のようす 親であった。この家(丁12号住居)も建ててからもう一五年になる。彼女はとなり(丁4号住居)に住んでいた両親が他界したときにその土器をすべて引き上げて形見に使ってき

た。炉の石も一つは持ち帰って使っていたがまた焼けはじけてしまった。両親の家は少し経ってから取り壊し、やがて窪地をゴミ捨て場にして今に至っている。最近ムラ人たちの間には新しい土器を作ろうとする気運が高まっていた。母たちが作りはじめていた粘土紐を貼り付けて横に展開させる文様をさらに発展させるのである。そしてこの土器をどんなに大形化しても壊れないように焼くために、皆は良質の粘土、粘土の中に入れる石、焼くときの温度などを工夫し始めた。山にいったいのドングリやトチが実り、灰汁抜きのために土器が多量に必要な季節、秋が来た。この乾燥した晴天は土器をかわかすのにも、焼

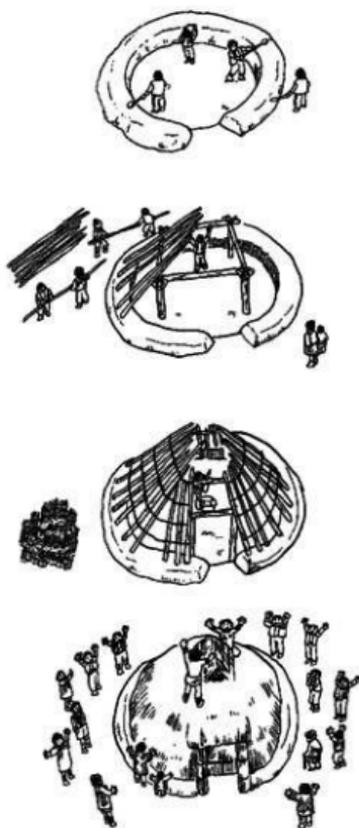


図77 竪穴住居をつくる（さかいひろこ画）

※更埴市屋代遺跡群⑥区では、縄文中期前葉の住居跡2軒で周堤が確認されている。

※川原田遺跡の中期住居跡のうちJ15・J18・J40号住居でクリ材、J16号住居でオニグルミの炭化材が発出されている。クリ材は縄文住居で一般的に多用される樹種であり、三内丸山遺跡では直径1mをこえるクリの柱の根本の部分がそのまま出土している。ここではこのようなクリの巨木を山から切り出す労働自体が、諏訪の御柱祭の祖形となるような集落の統合を喚起する役目を担っているとされている。

くのものにもちようどよい。いよいよ明日は皆で南の山に土器づくりのための粘土を掘りにいくことになった。トミメは去年作った土器を抱いて誰とも一言も話さずに向かいの炉のない小屋に入った。ほかの家の女たちもすでに集まっていた。明日山に入り良い粘土を山の神から譲り受けるためには、今夜一晩は身体を清めて休まなければならないという掟が祖母の代から、いやもつと大昔から伝えられていたからである。焼いた土器の一つは焼けはじけた炉の囲いにしようとする決めている。男たちにとっても秋はサケが千曲川に上ってくる季節である。夫は昨年捕った鹿の角で朝から鉦作りをしている。そんななか、ムラの女



図78 焼町土器を作る祖母・母と娘 トジとトミメの手つきを、フトが見守る (さかいひろこ画)

たちは静かに列を組んで山にむかって出発していった。

住居の廃絶 トミメたちの代に作られたこの土器はその娘のフトの
と**その後** 代にはもはや工夫発展することはなく、文様も簡素化

の一端をたどる。まるで気候の冷涼化にともなう、山の木の実の不作
や獲物の減少に人々の情熱が削がれたようにである。すでに廃絶され
ていたトミメの家の窪地では火が笑かれ、豊作を祈る祭りが今夜も盛
大に行なわれるようである。

注1 土器型式設定者の山内清男氏が大木式と加曾利E式の並行関係を
示したものは、前述の一九二九年の編年表と一九三六年の「縄文
土器型式の細別と大別」附表である。前者では「加曾利E2式」と
「大木8式」の並行関係が示され、「加曾利E3式」と「大木9式」
が並列で記載されている。後者では「大木8a b」式が「加曾利E」
式に、「大木9・10」式も別枠の「加曾利E」式に並行とされてい
るにすぎないものの、山内監修による「日本原始美術」1所取の一
九六四年の編年表には加曾利E1式が大木8a式と、同E2式が
8b式と、E3式が9式と並行して記述されているため、一九二九
年時点の並行関係が有効であることがわかる。さらに一九四〇年
の「日本先史土器図譜」第一部・関東地方・IX集の「加曾利E式」
解説では「磨消縞紋をともなわない古い部分(大木8a式及び8b
式)とこれをともなう新しき部分(大木9式及び10式)」に分かれる
ことを知った」とされている。加曾利E式にはその後、山内編年の



図79 縄文時代のムラの祭り（さかひひろこ画）

読み解き方の違いや新出資料の増加によってさまざまな区分の仕事が提示されている。ここでこれを一つ一つ検討する余裕が無いが、今回は東北編年との対比を重視する視点から、この学史の原点である「加曾利E2式」と「大木8式」、「加曾利E3式」と「大木9式」が並行し、かつ後者から磨消縄文施文が開始されるという立場で記述を進めたい。

注2 加曾利E式は研究の出発点である山内清男の磨消縄文の有無によって「加曾利E式の古い方」と「加曾利E式の新しい方」を分けるといふ視点が提示されたが、古い方をI式とし、新しい方をII式とする分け方と、古い方を1、2式、新しい方を3、4式とする分け方を中心に細部の違いから諸説がある。

注3 ただしD-84からは多量のトチノキの果皮の炭化破片が検出されたことから、最終的にはブミ穴として利用された。

〈引用・参考文献〉

赤沢威・米田穰・吉田邦夫 一九九三 「北村縄文人骨の同位体食性分析」『北村遺跡』

阿部芳郎 一九九六 「縄文人のなりわいと社会」『季刊考古学』第五

五号

市川健夫 一九九六 「信濃・長野県における蛙漁」『信州自治』49-

11

伊東信雄 一九七七 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古

学研究』第24巻 第3・4号

今村啓爾 一九八九 「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』

川崎保一 一九九五 「研究ノート 縄文土器の機能・用途と口縁部文様帯の装飾・形態」『信濃』第四七巻第九号

黒岩隆 一九九三 「縄文中期—飯山市誌 歴史欄上」

縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 一九九五 「シン

ボジウム縄文中期集落の新地平」

須藤隆ほか 一九九五 「縄文時代晚期貝塚の研究2 中沢貝塚II」

東北大学文学部考古学研究会

高橋保ほか 一九九二 「五丁歩遺跡十二木遺跡」新潟県教育委員会

辻誠一郎 一九九七 「三内丸山遺跡とその周辺における人と自然の

交渉史」『歴史国際シンポジウム過去一万年の陸域環境の変遷

と自然災害史』

勅使河原彰 一九九二 「縄文時代の社会構成(上)」『考古学雑誌』第七

八巻第一号

寺内隆夫 一九九六 「斜行沈線文を多用する土器群の研究—後沖式

土器—設定は可能か」『長野県の考古学』

寺内隆夫 一九九七 「川原田遺跡縄文中期中葉の土器群について」

『川原田遺跡 本文編』

寺崎裕助 一九九〇 「上越市西戸野花立遺跡の中期縄文土器」『新潟

県考古学談話会会報』第6号

戸沢充則 一九九四 「縄文農耕論の段階と意義」『論争と考古学』名

著出版

長野県史刊行会 一九八八 「長野県史」考古資料編全一巻(四)遺構・

遺物

西沢隆治 一九八二 「深沢遺跡」『長野県史』考古資料全一巻(二)

東北信

西本豊弘 一九九五 「縄文人は何を食べていたか」『縄文人の時代』

新泉社

日本考古学協会一九九七年度秋田大会実行委員会 一九九七 「縄文

時代の集落と環状列石」

長谷川豊 一九九六 「縄文時代におけるイノシシ猟の技術的基盤に

ついでの研究」『動物考古学』第六号

島山剛 一九九七 「縄文人の末裔たち」『淡流社

三上徹也 一九九三 「縄文時代居住システムの一様相」『殷古史学』

88

三上徹也 一九九五 「土器利用炉の分類とその意義—縄文時代にお

ける吊す文化と据える文化—」『長野県立歴史館研究紀要』第

1号

水沢教子 一九九六 「大木8b式の宴客(上)」『長野県の考古学』

水沢教子 一九九六 「大木式土器と火焰型土器—胎土から考えられ

ること—」『火焰土器研究の新視点』

クパプロ

南川雅男 一九九五 「骨から食物を読む」『古代に挑戦する自然科学』

宮下健司 一九八八 「先史・古代」『図説 長野県の歴史』

山口逸弘 一九八八 「新巻遺跡出土の土器について」『群馬の考古学』

山口逸弘ほか 一九八九 「房谷戸遺跡」I

第六節 縄文文化の展開—後期

一 後期の遺跡

あらし
縄文時代の気候は早期末葉から前期(約六〇〇〇年前)がもっとも暖かさの頂点であり、このころを境にしだ

いに寒冷化にむかう。その後、後期にふたたび暖かくなり、晩期には寒冷になっていく。年平均気温の変化を現在のものとは比べると、もっとも暖かい時期で二度高く、中期になると一―二度低くなるが、後期にはほぼ現在と同じ程度まで暖かくなる。そして、縄文海進があった六〇〇〇年前よりも小規模ながら、後期にもふたたび海進のあったことが、最近の花粉などの分析で判明した。

縄文人の生活における変化は、気候の変化と対応してどのような点にみられるか。最近の相つぐ遺跡の大きな発見は、従来の縄文時代観を変えるものであった。その筆頭にあげられるのは、前期から中期にわたる約五五〇〇年から四〇〇〇年前の青森県の三内丸山遺跡である。遺跡は居住域、墓域、生産域、廃棄場(ゴミ捨て場)など集落のほぼ全体が調査された。多数の竪穴住居跡群、埋設土器群(埋甕群)や土坑群の墓域、掘立柱建物群、粘土採掘穴、遺物廃棄ブロックなどは、当時の生活を復元するに足る遺構群である。遺構は中期になるとほぼ

出揃い、東西約六〇㍉、南北約七〇㍉の巨大な盛土遺構もこの時期に完成された。ここからは土偶や耳飾りなど生業に直接むすびつかない遺物が多く出土していることから、祭祀的な意図をもってわざわざ造られたものと考えられている。

中期から後期にかけては、栃木県寺野東遺跡でドーナツ形の盛土遺構が造られた。外径で一六五㍉もある大きなもので、そのほぼ中央に石敷の台状遺構が造られていた。盛土中にやはり耳飾りや土偶などが多く含まれていたことから、祭祀に使われた遺構と考えられている。寺野東遺跡の盛土遺構は後期の後半、三内丸山はさらに時期をさかのぼり、中期にはすでに大規模な盛土遺構が完成していたのである。

このような盛土遺構に類する大規模な遺構は、長野県や関東などの山間部では、中期後葉の環状ないし弧状の配石遺構としてみられる。造った目的は祭祀的な行為を行なうためであったと考えられる。大規模な配石遺構は後期まで継続して造られる。約四〇〇〇年前の中期後葉は大形配石遺構や住居形態などに縄文時代の中でも後期に次いで大きな変化がみられた時代である。

三内丸山遺跡には直径約八〇㍉を測る太いクリ材が、六か所に方形配置された柱穴内に残されていた。クリは通常群生しない樹木で、八〇㍉の直径まで育つには、人間の働きかけが必要である。このクリ材

をDNA分析したところ、同じような遺伝子をもっていることがわかった。分析結果から短絡的には栽培と結びつけるべきでないが、畑のような本格的なものではなく、家の近くに種を播いたりする程度の管理栽培が行なわれていた可能性が出てきた。いまのところ科学的なデータに基づく発見であり、栽培を示唆するような考古学的な遺構は見されていない。

ところで、採集された堅実類は、後期前葉にはおおきな土坑に貯蔵されていたことがわかっていて。たとえば、後期には穴（土坑）の中からクリが出土した事例が、中野市栗林遺跡をはじめ各地で報告されている。ほかにクリこそは見つかっていないが、後期の遺跡で円形の土坑に竹籠あるいは網代が遺存していた事例は少なくない。また、ドングリなどのアケを抜いたであろう水場の遺構が寺野東遺跡（後期初頭）で見つかっており、安定した生活を支える食料獲得の工夫が随所にみられる。平成九（一九九七）年には東京都中里貝塚で、干し貝などの加工を行なったとみられる貝処理施設やカキの殻焼が行なわれたと考えられる杭列も発見された。貝処理施設の周りには中期中葉の土器が出土しており、このことからすでに貝を保存する知恵が生み出されていたことがわかるのである。

また、富山県桜町遺跡では中期の層から貫通する穴のあいた建築材が見つかっていることから、高床式建物を造る技術があったことが指摘されている。

このように、縄文時代を通じて遺構・遺物の変化にみる面期は、中期後葉にあつたと考えられる。大規模な盛土遺構や配石遺構の登場は

定住生活を裏付けており、その生活をささえる知恵や技術がこの時代に続々と生み出され、後期に継承されていたのである。そこで、本節では縄文後期の表題ではあるが、中期後葉にさかのぼってその社会・生活のようすを探ってみよう。

浅間山麓の 浅間山麓南部は火山灰が厚く堆積しているため、遺跡

縄文時代 が発見されるのは火山灰の薄い部分に限られる上に、現在の地形の景観と縄文時代のものとは大きく変わっている可能性が高い。そのため、遺跡の分布範囲をつかむには大きな制約をうけることになるが、遺跡が千曲川の支流の湯川などの流域で、浅間山が望める日当たりの良い低い丘に存在することは間違いない。中期も終わりに近づくと、縄文人は小高い丘の縁辺から、湧き水が近くにあるような低い丘に集落を営んだ。後期になると気候が寒冷になるといわれているが、集落地の変化は気候と関係があるのであろうか。

また、いままでも地面を深く掘って構築した竪穴住居は後期までには姿を消し、比較的浅く掘った竪穴で、床面に平らな石を敷く敷石住居が登場した。このような家の造り方の変化だけでなく、後期には石を使った墓や作業場・お祭りの場がみられる。これらは現代では配石墓や石棺墓、配石遺構あるいは敷石遺構とよばれている。

敷石住居が出現し、大形の配石遺構が造られるのは、中期後葉の後半（加曾利E3式期）であり、この時期から中期末葉にかけて大きな変化がみられるため、ここでは中期後葉の一部にまでさかのぼって、そのようすをみてみる。

後期には、獲物を捕ったり、料理をしたり、家を造ったり、織物などをつくったりする道具である生活必需品以外に、豊漁あるいは収穫を祈ったり、健康・安産を祈ったりするような「祈りの道具」が増加した。中期後葉では下火であった石棒や土偶などが、後期にいたって復活したのである。とくに、人の身体の一部を象徴する耳形土製品などはこの時代の特徴的な産物である。

縄文時代を通じて、集落内において居住域、墓域などの区別が行なわれていたが、中期末葉以降、これらのほかに祭祀的な空間が目立つて造られた。たとえば、小諸市三田原遺跡群岩下遺跡では、大形の配石遺構と敷石住居跡が発見され、町内の塩野地区の滝沢遺跡では、敷石住居跡の居住域と土坑墓や配石墓による墓域が調査された。また、中期末葉から後期初頭の集落には、豊昇の宮平遺跡があり、敷石住居跡が多数確認された。

つぎに、町内のこの時期の代表的な遺跡を概観しておく。

宮平遺跡

大字豊昇字宮平一七二四―三ほかに所在する。遺跡は湯川によって開析される森泉山の山麓末端に位置し、南北二〇〇m、東西一〇〇mの範囲に広がっていると考えられる。

このあたり一帯の遺跡の存在は、比較的古くから知られていた。昭和五(一九三〇)年には、軽井沢診療所の医者で、考古学的には『PRE-HISTORIC JAPAN』の著作で有名な、N・G・マンローが宮平を訪れている。翌年には八幡一郎によって発掘調査がなされ、「北佐久郡の考古学的調査」のなかに出土品などが掲載されている。

昭和五十六(一九八一)年には町教育委員会によって発掘調査が実施された。発掘調査は農道舗装事業に先立つもので、縄文時代中期後葉から後期の竪穴住居跡が二七軒と石棺墓あるいは配石墓、土坑墓などの墓が五基発見された。竪穴住居跡のうち、七軒が板状の石を床に敷き、壁際には石を立ててめぐらした敷石住居跡であった。

中期末葉(加曾利E4式期)の住居では、出入口と考えられる施設をもつものがあつた。炉は板状石を立て、四角に囲ったものである。住居内部から出入口部の境あたりに、土器を埋設した埋窆がある。埋窆というのは、胞衣、へその緒、嬰兒、あるいは小児骨を埋窆したと考えられるもので、おもに屋内の出入口部分に土器を埋設した施設と考える説が有力である。屋外にも中期後葉から大形の土器が埋設された埋窆が目立つ。埋窆は、近世あるいは近代まで残っていた「エナシ」を家の戸口に埋設する習俗との類似が指摘されていた。最近、北関東地方の遺跡で、埋窆の土の脂肪酸を分析した結果、高等生物の遺体が存在したらしいという報告が発表され、ヒトの埋窆の可能性が科学的に示めされた。

宮平遺跡で発見された墓と考えられるものには、後期前葉加曾利B3式土器が平らな石の上に逆さになって置かれたD19号土坑がある。この土器の中には骨片が残っていたことから墓と推定された。

石棺墓という板状の石を箱形に組み合わせた墓も作られた。宮平では石棺墓の一部が発掘された。また、軽井沢町の茂沢両石室遺跡にも石棺墓があり、現在でも史跡として残されている(図84)。

宮平遺跡は道路幅のごく一部しか調査されなかつたので全体像は不

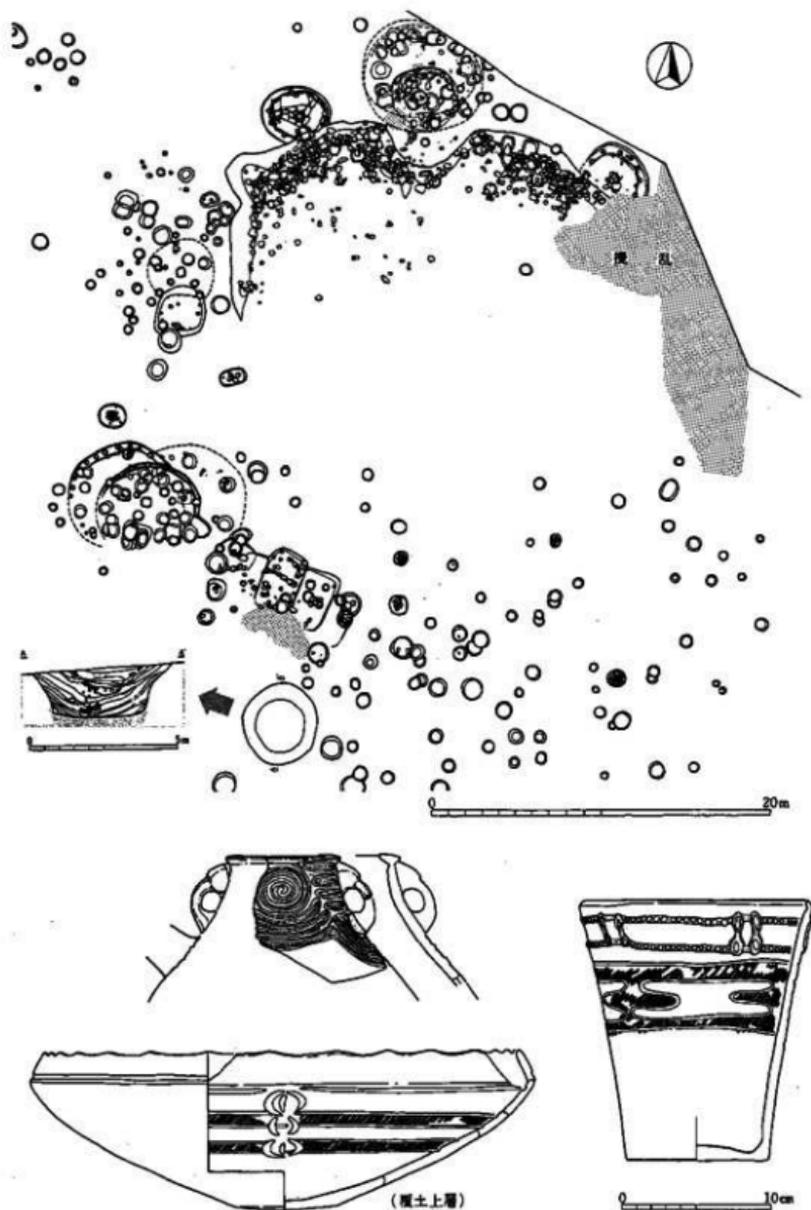


図80 小諸市岩下遺跡の環状集落と出土土器
 (『長野県縄文文化財センター年報』9より)



写42 富平遺跡J8号住居



写43 富平遺跡D15号土坑

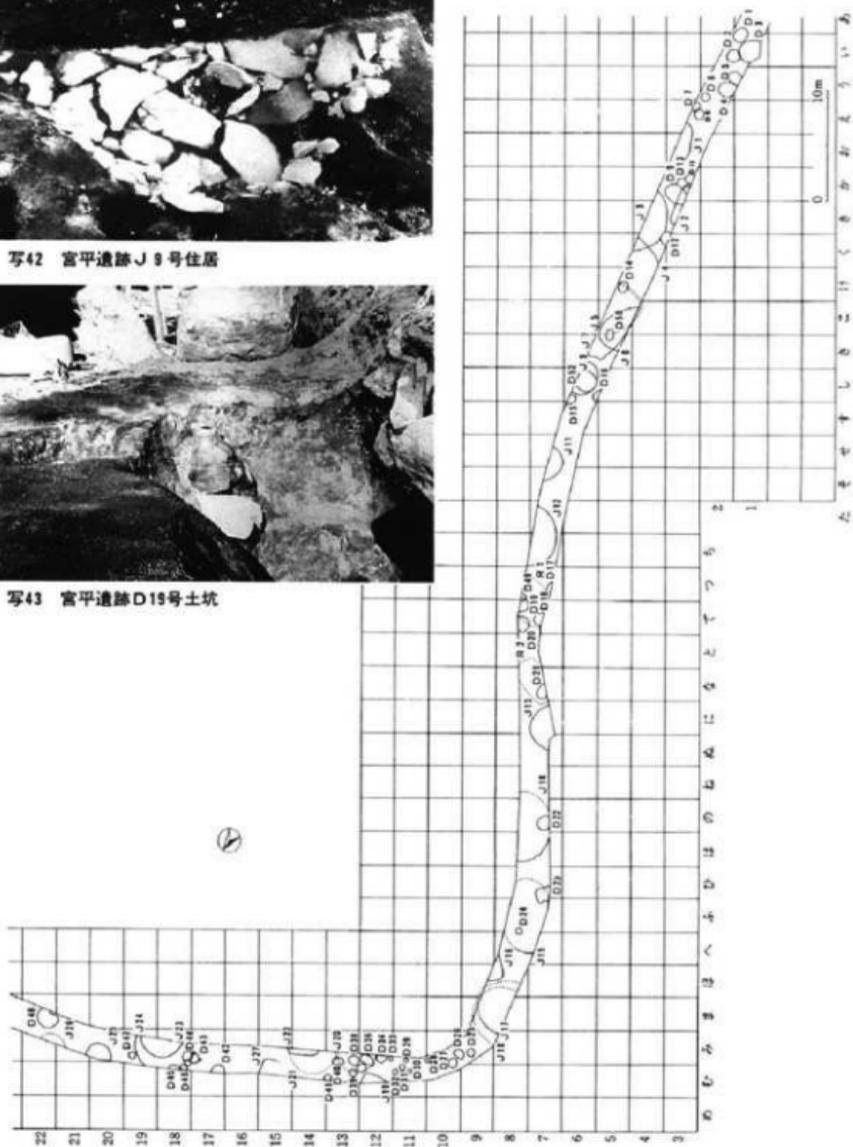


図81 富平遺跡全測図 (1:500)

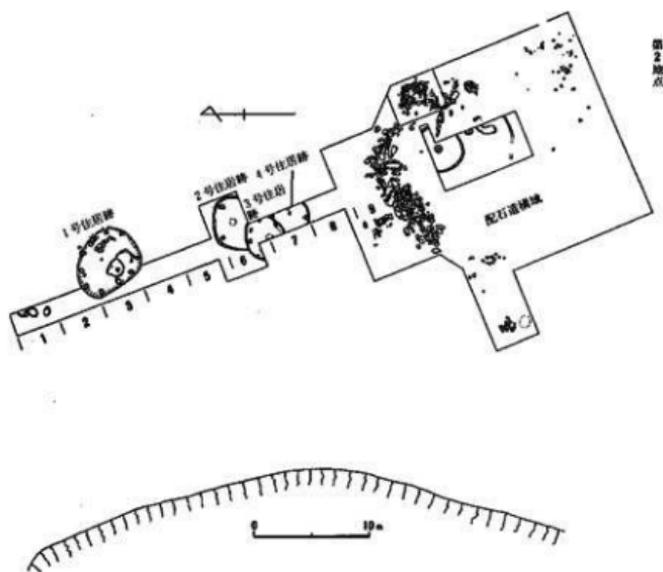


図82 茂沢南石堂遺跡全測図 (同報告書より)

明であるが、中期後葉から後期初頭にかけて居住が重なられた大集落遺跡であったことは十分に想像された。また、限られた調査でも、敷石住居跡とそれにもなう石を使った墓域などが確認された点では、大きな成果があげられたといえる。

滝沢遺跡 浅間山麓の標高約八〇〇の南斜面上に位置する。このあたり一帯は、湧き水が豊富で、現在でも豊かな水を容易に得ることができ、多くの遺跡が点在する塩野西遺跡群として知られる。本遺跡は中期後葉から後期前半の敷石住居跡を含むと竪穴住居跡が七軒、配石墓や土坑墓、埋竈などが発掘された。この時期の住居群の約一〇〇は、約六割低い位置に縄文前期の集落が確認されたことは、遺跡の立地を考える上でたいへん重要である。さらに、中期末葉から後期にかけて、ほぼ同じ位置に居住域と墓域が存在したことがわかってきた。集落の立地などは後にくわしく述べることにして、特徴的な遺構・遺物についてみる。

J10号住居は、隅四方形の竪穴内に板状の平石を床面に敷いた敷石住居跡で、角に四本の主柱をもつ。家の構造が中期末葉では主柱穴から壁際に柱をもつ形が多くなるのに対し、この住居跡はまれな例といえる。柱穴間の真ん中、炉の南側に中期末葉の土器が埋設されている。炉は平らな石を四角く組んだ石囲炉である。J5号住居は凹形の竪穴内に石が敷かれている敷石住居で、後期前半の土器が出土した。

墓と考えられる遺構に配石がある。配石には土坑のなかに円礫が置かれていたD30号土坑と楕円形もしくは凹形に石が配されているJ3

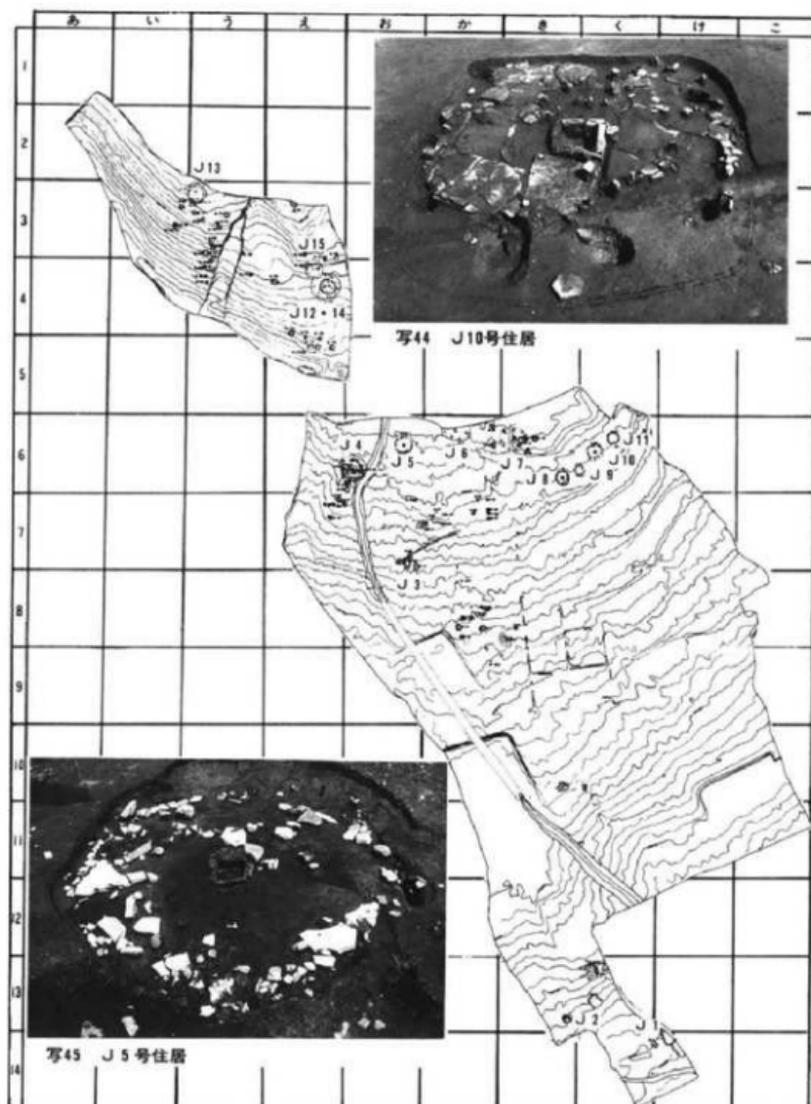


図83 滝沢遺跡全体図 (1:1,500)



写46 D30号土坑



写47 滝沢遺跡D30号土坑

石を取ったら彫刻入り石製品が出土した



写48 滝沢遺跡J3号竪穴状遺構と配石



写49 滝沢遺跡D52号土坑

号竪穴状遺構とD52号土坑がある。D30号土坑では細かい燧骨ヒノボネと考えられる燧骨ヒノボネが見つかり、石の間から彫刻の入った滑石製の石製品が出土した。D52号土坑は土坑の周囲に配石があり、石の間から耳形土製品が出土した。J3号住居は掘り込みをもたない配石遺構で、配石内に完形復元できる土器が置かれていた。いずれも後期前半の所産と考えられる。

このほか墓と考えられるものには、埋葬がある。中期末葉には埋葬は家の中と外にあったが、後期になると滝沢遺跡のように屋外につくられるようになった。

二 生活用具

縄文時代後期には土器・石器・骨器・木器・土器以外の土製品にさまざまな種類がみられる。中期までにはみられなかった特徴を土器、土製品、石器、石製品についてみてみよう。

中期と後期の考古学史をひもといてみると土器の新旧の違いは、土器の違い。器壁が厚いか薄いか問題となり、厚手式アタテシキ、薄手式ウソテシキと称され、厚手が古く、薄手は新しいものと考えられていた。その後、遺跡の発掘調査が爆発的に増えるにつれ、土器の型式的な研究と



図84 死者を葬る（さかいひろこ画）

豊昇宮平遺跡では縄文時代後期の石で囲われた墓「石棺墓」がいくつか発掘されている。ここでは、その宮平のムラでの悲しみにくれる埋葬風景を描いた。人々の服には土器と同様な文様をあしらってみた。

出土した層位にもとづき、土器の新旧を並べる編年がしだいに整備されていった。

土器の器壁の厚さは、中期前半は厚い特徴があるが、ほかの時期では薄いものが多く、それは土器の大きさに比例しており、いちがいに厚さでは時期の差を決めかねる。しかしながら、中期の土器と後期の土器をくらべた場合、同じ大きさの土器では後期の土器がより薄く、また、器面をよく磨いてつくられている傾向がある。

中期にくらべ器壁がより薄くなるのは、中期末葉からであり、後期の土器はその薄さに加え、さまざまな形の土器がつくられることが特徴である。

土器の器種 縄文土器の器種には、深鉢ふかばちや浅鉢あさばちのほかに、数は少ないが変へん化くわいいが甕かめがある。また、椀わんのように深みをもつ鉢形土器もみられる。これらの器の形は中期以降も存在する。中期末葉になると、壺かに二つの把手てをもつ両耳壺りょうじゆが目立ってくる。宮平遺跡でもこの両耳壺は出土している。

前期の深鉢の口縁部片側に注ぎ口をつけただけの形から、後期初頭称名寺期になると、液体を入れ注ぐ注口土器つぎぐちが、現在の急須に似た形に変化する。滝沢遺跡のJ5号住居出土のものに、注ぎ口は失われているが二つの把手のある土器があらわれる。後期でも時期的には新しくなるが、小諸市石神遺跡ではJ40号住居から把手と注口の部分が遺存する土器がある。このほか、まれな例として、鉢の器形で把手が一方にしかない土器が下大宮遺跡から出土した。口縁部に粘土紐を貼り

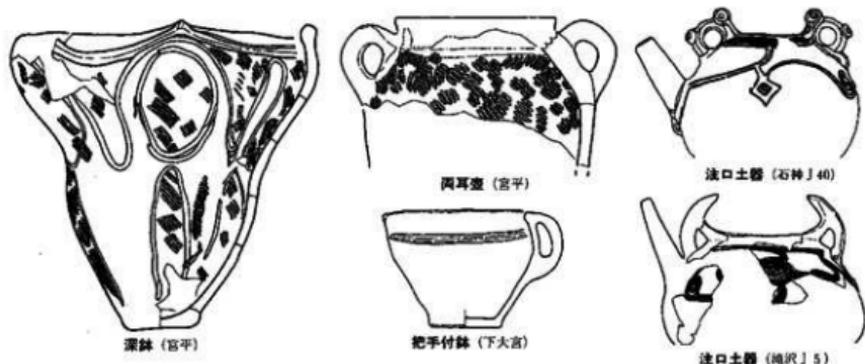


図85 器種のいろいろ (注口土器は後期堀之内式土器、他は加曾利E4式土器)

注口土器(ちゅうこうどき)は、後期になると口縁部に注ぎ口がつけられる形から、現代の急須のような形状に変化する。把手部分は土製で作られ、上図の注口土器のように環状の形が多い。下図の注口土器はつたのようなもので把手がつけられたと考えられる。

つけた隆帯だけの簡素な文様である。

精製土器と縄文時代のほぼ全体をつうじて裝飾の多い土器と飾り粗製土器の少ない土器がある。前者ではとくに中期中葉の大きな把手をもつ土器、焼町式土器などが登場したことはすでに記したとおりである。

中期後葉から土器は、より把手が小さいか裝飾が少ないことなど、以前に比べよりシンプルな形に変化した。また、後期になると裝飾のある土器と裝飾のない土器との違いが明確になった。裝飾のある土器は精製土器、裝飾の少ない土器は粗製土器とよばれている。

粗製土器としては、西覚神遺跡J2号住居出土の土器がある。これは、後期初頭と考えられるもので口縁部に隆帯をもち、柿のような工具で胴部全体に文様をつけられている。いっぽう、この土器にとりなう精製土器は、太い沈線文でJ字のモチーフが描かれた称名寺式土器である。滝沢遺跡出土の土器もさきの粗製土器と同じ文様構成であるが、器の形がややラッパ状に開くことと胴部に無文部分が多い点がいちがわり、やや新しい時期の堀之内式土器に相当すると考えられる。

粗製土器には、文様のない土器や縄文が施されただけのものもみられる。たとえば、小諸市石神遺跡J33号住居出土のものがある。精製土器としては、口縁部がラッパ状に開き、より胴部が膨らむ形の石神遺跡J33号住居出土の土器や宮平遺跡J15号住居の土器、滝沢遺跡の配石遺構出土のものなどがある。滝沢遺跡出土のものにはほぼ完全な形に復元できた土器で、口縁に四単位の把手をもち、胴部に粘土紐のね

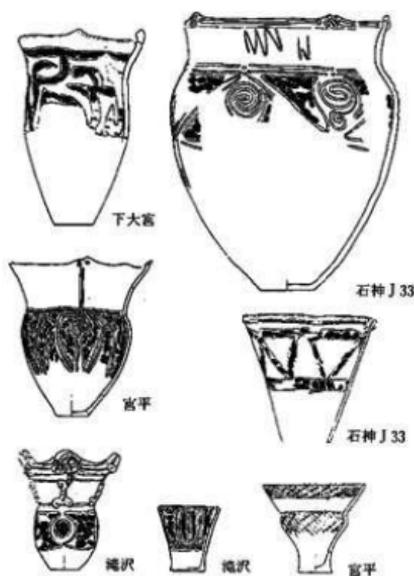


図87 精製土器

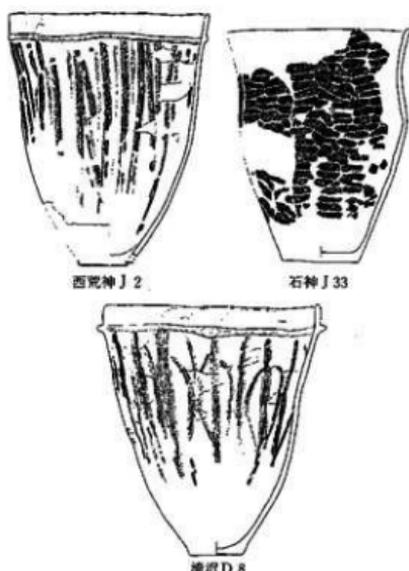


図86 粗製土器

土器の時期 浅間山麓南部で出土している土器をみてみよう。中期的な違い 後半の終わりでは千葉県加曾利貝塚E地点が標式とされる加曾利E式土器が目立って出土する。細かくみると加曾利E3式土器、加曾利E4式土器とよばれる土器である。

後期では神奈川県称名寺貝塚が標式とされる称名寺式土器、千葉県堀之内貝塚の堀之内式土器、加曾利貝塚B地点の加曾利B式土器、数は少ないが千葉県曾谷貝塚の曾谷式土器などがみられる。

後期から晩期にわたる土器では、埼玉県猿貝貝塚(安行村、現川口市)の安行式土器も宮平遺跡で僅かにみられる。これらの土器はいずれも関東地方の土器で、当地はより関東地方の交流、あるいは影響のみられる地域であることがわかる。

じれた隆帯が把手の下に貼付され、胴部下半は棒状の工具によってO字のモチーフが描かれ、縄文がつけられている。口縁の把手と連結するねじれた隆帯はめずらしい文様手法といえる。この土器は堀之内式I式土器に相当するものである。

後期前半の精製土器はほかに、比較的小形の土器で朝顔形(あまぎほがた)のものが後期前半にみられる。後者には、たとえば、石神遺跡J33号住居出土のものや滝沢遺跡出土のものがあげられる。宮平遺跡の土坑は、後期前半の加曾利B3式土器で、口唇部に細かく刻目(うご)は入れられ、ヘラのような道具で沈線文が、口縁部では格子状に、胴部の屈曲した部分と口縁部内側では横方向にめぐらされ、土器の下半分には綾杉状(あや杉がた)の文様がつけられている。

いっぽう、長野県八ヶ岳西南麓富士見町に標式遺跡がある。その遺跡の土器、曾利式土器は、関東の加曾利E式土器と時期的に並行関係にあり、中期の土器編年の柱となっているが、後期になるとこの浅間山麓南部ではみられないようである。

ここでは、この地域でよくみられる土器について、やや専門的に紹介してみる。

中期後葉の 加曾利E式土器後半 加曾利E式土器は前節でも記した土器。器 形は口縁部が丸みをおび、括れ部をもつキ

ヤリパー形が特徴である。縄文や燃糸文、沈線文に渦巻きのモチーフが粘土紐を貼付する特徴をもつ。

加曾利E式土器は、形や文様の違いなどでも四つに分類されている。これは前節に記した山内清男の業績が基礎となっている。縄文や燃糸文に沈線文や隆帯文などの文様を施す手順が異なっている。加曾利E式土器後半の土器は、つぎのような特徴がある。

①形は口縁部が脹らみ頸部がくびれる（キヤリパー形）が、やや崩れたもの

②文様に燃糸文が少なく、縄文や沈線文、櫛のような工具で細かい線（条線文）が描かれている。

③文様の付け方 縄文や条線文などの地になるに文様（地文）の上

に、棒状の工具をもちいて縄文を磨り消して沈線文を描く。

宮平遺跡の住居跡で多数出土しており、土器の文様の付け方などが

関東地方に分布するものと類似している。また、加曾利E2式や加曾利E3式土器にともなって、沈線文で波状あるいは弧状に描かれる「運弧文土器」がある。形がキヤリパー形でないことなどから曾利式土器の影響が指摘されている。

加曾利E4式土器の特徴は、以下にみられる。

①形は、口縁部が丸みをおび、胴部で広がった腹縁部（ゆるみ）のものが、胴部下半分で窄まり、小さな底部をもつ形になる。

②地文は縄文が多い。モチーフは逆U字形やV字形などが沈線文で描かれる。

③モチーフがつけられてから縄文がつけられる施文順序になる。

加曾利E3式土器と加曾利E4式土器との違いは、器形や文様の違いばかりか、文様の付け方が大きく変わる。加曾利E4式では、沈線文で文様の割りつけがなされてから縄文がつけられるのに対し、加曾利E3式土器までは縄文などの地文をつけてから文様の割りつけがなされていた。モチーフを描いた後に縄文を転がす手順、割りつけを先にするという手法は、後期以降の土器に多くみられる。

このほか、粘土紐で渦巻きなどのモチーフがつけられる土器がある。この加曾利E3式土器の隆起文の渦巻き文に、中部地方の唐草文土器の影響を指摘する説がある。この土器は、加曾利E3式土器でも新しい部類に属し、加曾利E4式土器の一部の文様に受け継がれる。すなわち、加曾利E4式土器の微隆起文土器とは、おもに器面の調整によつて隆帯文をつくりだし、あたかも指で描んでモチーフをなぞったような細い線で表現している。モチーフは渦巻きや直線の表現など



図86 宮平遺跡縄文中期後半の土器

がみられる。形は括れがないものが多く、沈線文でモチーフが施される土器とは対称的である。

また、加曾利E3式土器の新しい時期に両耳壺が特徴的にあり、加曾利E4式期になると把手の幅が広くなり楕状把手となる。たとえば、宮平遺跡J17号住居で出土しており、これが楕状把手に変化したものが、滝沢遺跡J10号住居の土器である。

加曾利E4式土器の微隆起文土器は、後期の称名寺式土器をとまなう事例が多いために、後期に含める研究者がいるが、称名寺式土器をとまなわない事例があることから、中期末葉の加曾利E4式土器に含めて考える必要がある。いずれにしても加曾利E4式土器の一部である微隆起文土器が、加曾利E3式とくらべると時間幅が短い可能性が高い。

浅間山麓南部では、さきに掲げた関東地方に広く分布する加曾利E3式土器や加曾利E4式土器が少なくない点は注目される。とくに加曾利E4式土器は柄鏡形(敷石)住居とともに千曲川沿いに東部町にもみられる。加曾利E3式土器が関東平野の利根川から碓氷峠周辺を越え、軽井沢町や御代田町を通過して、小諸市の浅間山麓南部から千曲川沿いに北へ波及したのであろう。長野市屋代遺跡でも加曾利E3式土器が出土しており、分布域はさらに拡大するものと考えられる。また、浅間山麓から北側の地域ほど、北陸や東北の影響が強くなる傾向が認められる。つぎの加曾利E4式土器についても同様で、関東地方にみられる加曾利E4式土器は、東部町の久保在家遺跡でもみられることから浅間山麓南部を中心に千曲川を東に下っていったと考えられ

る。さらに注目すべきことは、加曾利E4式土器をとまなう住居跡は柄鏡形住居跡もしくは敷石住居が多い傾向がある。土器と住居の建築様式がセットで伝播したこと、あるいは人の交流があったことが指摘できる。関東地方でも、加曾利E4式土器を出土する住居はほとんど柄鏡形(敷石)住居跡である。

ところで最近、加曾利E4式土器の一部、微隆起文土器を後期にまで下降させ、称名寺式土器と同じ段階に位置づける土器研究もあるが、称名寺式土器をとまなわない一括遺物が戸倉町円光房遺跡などで出土していることから、ここでは微隆起文土器は中期に属するものと考え

る。曾利式土器後半 加曾利E2式土器との時間的な並行関係については、今後さらに研究を重ねなければならないが、ここでは以下のように理解する。

曾利II式土器と加曾利E2式土器の一部と加曾利E3式土器の古い部分、曾利III式土器と加曾利E3式土器、曾利IV式土器と加曾利E3式土器の新しい部分、曾利V式土器と加曾利E4式土器が時間的な並行関係にあると考える。

曾利式土器は前節でも記したように、へら状ないし棒状工具で沈線文によってモチーフが描かれ、隆帯文で裝飾される土器である。形は口縁が朝顔形に開き、括れ部をもったのち、やや膨らみをもった胴部をもつ。

曾利式土器後半部分は、浅間山麓南部では意外に少ない。曾利式土器は分布の中心である八ヶ岳山麓から松本を経て、千曲川上流域沿い



写50 佐久系土器

(右 縄沢遺跡J13号住居、左 宮平遺跡出土。左は大井源寿氏蔵)

に伝わったのであろうか。曾利Ⅲ式土器は少なく、加曾利E3式土器の口縁部の文様を採用したような土器が宮平遺跡D11号土坑で出土している。曾利Ⅳ式的な文様要素は、宮平遺跡の加曾利E4式の両耳壺に逆J字のモチーフを沈線文で描いているものにみられる。なお、曾

利Ⅴ式土器は完形復元できるような大形破片では見あたらない。

佐久系土器 加曾利E3式期、曾利Ⅲ式（唐草文系土器）期に相当する土器で、前節で述べた唐草文系土器の影響で生まれたといわれているが、文様構成などの点から加曾利E2式土器の影響が色濃くみられる（図50・58）。

形は口縁が広がるが括れが少なく、文様は棒状工具で太い沈線文が魚の鱗のように描かれたり、縦方向の沈線文を地文とし、隆帯で頸部や胴部を縦に区画したりする。また、隆帯による渦巻き文も特徴的である。写真の土器は口縁部が加曾利E2式土器のような文様を備えている。発掘資料では縄沢遺跡でJ13号住居で加曾利E3式土器とともに出土している。完形に復元できた土器は写50下のみである。小破片であると唐草文系土器と判別が難しい。

後期前葉の 称名寺式土器 称名寺式土器は、神奈川県称名寺貝塚**土器**が標式遺跡である。形は口縁部が朝顔形に開き胴部が窄まる形である。J字形のモチーフなどに縄文がつけられている。関東地方に広く分布している土器で、西日本の土器である中津式土器の影響がみられる土器が南関東で少なからず見つかっている。御代田町では下大宮遺跡のD5号土坑で纏まって出土した（図89）ほか、宮平遺跡でも出土している。

称名寺式土器のなかで、より東北地方の大木10式土器の影響を受けたといわれる関沢類型は、無文部分を多つJ字のモチーフの内あるいは外に縄文が施される土器である。県内では東信に出土例が増えてい

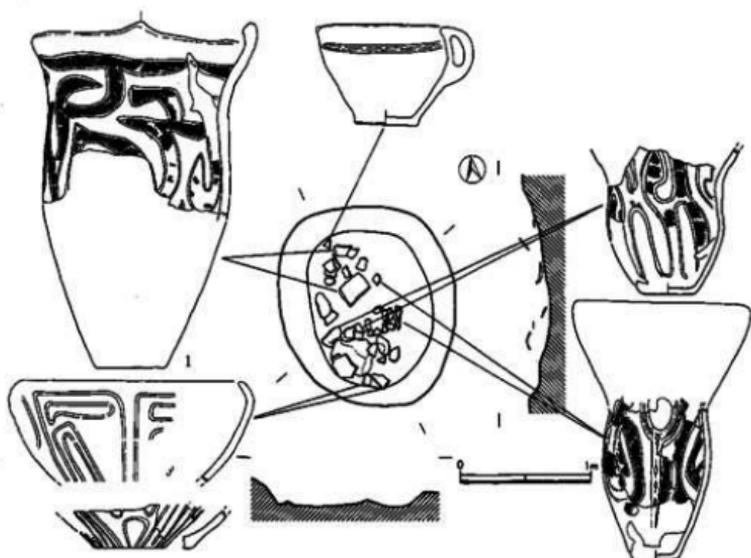


図83 下大宮遺跡出土の称名寺式土器

るようであるが、御代田町域ではいまのところ見あたらないようだ。

また、新潟県三十稻場遺跡出土の土器が標式となつて名づけられた三十稻場式土器は、称名寺式土器と同じ後期初頭の土器である。樽のような形に刺突文が施される特徴的な土器である。注目すべきことは、この土器が佐久市西片ヶ上遺跡で出土していることである。土器が柄鏡形敷石住居跡の炉に埋設されて出土した。さらに、福島県上小島C遺跡でも柄鏡形敷石住居跡の炉に埋設されて出土しており、加曾利4式土器と称名寺式土器、そして柄鏡形敷石住居跡との繋がりの狭間にあるような事例で興味深い。ちなみに、関東や中部地方に分布する柄鏡形敷石住居跡の東北地方における分布の南限は、いまのところこの上小島C遺跡である。

堀之内式土器 堀之内式土器は千葉県堀之内貝塚が標式となりつけられたもので、分布はかなり広く、長野県全域にわたるであろうか。また、堀之内式土器自体が北陸や東北地方の土器の影響を受け、地域的な特徴の土器がみられる。

器種が多くなり、深鉢形や浅鉢形のほかに、急須のような注口土器がみられる。ただし、注口土器は称名寺式土器にもみられる。さきに述べたように精製土器のほかに、文様の簡素な粗製土器がみられるのはこの時期からである。粗製土器はつぎの加曾利B式土器にまで文様や形が引きつがれていく。ここでは、精製土器について記したい。

形はおもに二通りある。一つは、称名寺式土器の系譜を受けたもので、口が大きく開き、頸部が窄まったのち胴部でやや膨らんだ器形である(深鉢A)。もう一つは、括れがない形で、底部から口縁部までラ

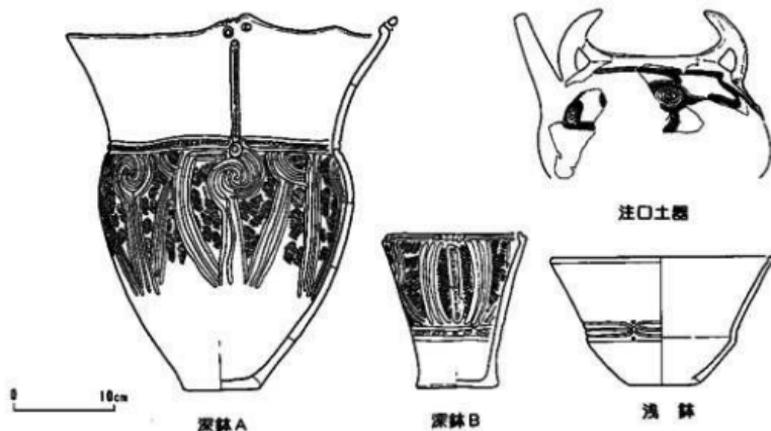


図90 堀之内式土器 形のいろいろ

深鉢Aは比較的大形で、深鉢Bは小形の傾向がみられる。深鉢Bは堀之内式土器の次にあたる加曾利B式土器にも受け継がれる形である。後期になるとより薄手で、器面全体がよく磨かれ、精巧に作られる。

ッパ状に広がるものである(深鉢B)。深鉢Aでは滝沢遺跡J4号住居や宮平遺跡J15号住居出土土器などである。深鉢Bは滝沢遺跡D58号土坑出土のものが典型的であり、深鉢Aとくらべると、小形のものが多くようである。深鉢Bの器形は加曾利B式土器にも受け継がれていく。

文様の特徴は、地文をもつ場合はLR縄文がモチーフ内に充填される。称名寺式同様、幅が狭い棒工具をもちいたり、ヘラのような工具で沈線文が描かれる。深鉢Aは、括れ部で、文様が分けられる。すなわち、口縁部は無文で、頸部から胴部にJ字文や渦巻き文、弧状や蛇行する沈線文が施され、隆帯文が付けられることがある。口縁部上端や口唇部に沈線文で楕円区画や円形の刺突文が施されるものがある。深鉢Bは口縁部から胴部上半にさきのような文様が施され、胴部下半は無文である。

加曾利B式土器 千葉県加曾利貝塚のB地点から出土した土器が標式となっている。加曾利E式土器と同じ遺跡である。

精製土器は、堀之内式土器の深鉢Bと同じ器形で、文様は幅が狭い棒状工具で帯び状に沈線文がめぐり、縄文を充填させたものが典型的である。また、口縁部裏に沈線文が施される。器壁はより薄く、器面は丁寧に磨かれて仕上げられている。

粗製土器は堀之内式土器にともなうものとの区別が難しい。形は括れの少ない口縁が広がる深鉢形土器で、無文のほかに縄文や沈線文が施される。口縁部に紐状の隆帯文をめぐらし、棒状工具で刺突文が施されるものがある。

御代田町域には宮平遺跡に多くの資料があるほか、滝沢・塚田遺跡



写51 宮平遺跡の有茎石鏃 (大井源孝氏蔵)

後期の石器 縄文時代の欠くべからざる石器として、石鏃と土製品 石鏃、スクレーパー、鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石などがある。器種のなかでは、後期になると形が変わるものがでてくる。後期の石器の特徴をいくつかあげてみよう。

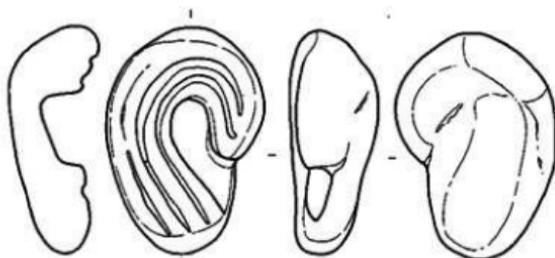
石鏃は弓矢の先端につけられた矢尻で、離れた位置から獲物を射ることができるようになった画期的な道具である。石鏃は装着部分が括れているものや平坦で三角形であったものに加え、宮平遺跡などでも舌部が突出した形がみられるようになる。また、小諸市石神遺跡出土のものにあるように、大形化したものがみられる。このような舌部をもつ大形の石鏃は、晩期に目立つてくる。

打製石斧は土掘りの道具と考えられるものである。このあたりでは長方形か短圓形であり、中期ととくに大きな変化はみられない。後期の関東地方の遺跡では、分銅形の打製石斧が分布するのと対称的である。

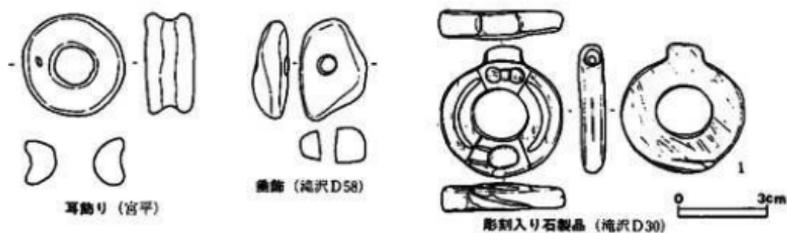
石棒は中期までは大形のものが多かったが、後期になると大形の粗雑なつくりのものに加え、小形のものや彫刻の施されているものがでてくる。宮平遺跡では頭部に文様が施されている(図91)。さらに、小形の石棒が変化して石剣が生まれる。これは、石棒の断面が円形であるのに対し、断面形が楕円形に調整されおり、ちょうど剣の鞘にあたる部分に彫刻が施されていたりする。

土製品と石製品 土器以外の土製品に、中期末葉になると蓋状土製品がある。これは後期前半までである。土器とセットで用いられたと考えられるが、ともなう出土した例は少ないうえに、実際蓋とするにはかなり小形のものが多い傾向がある。蓋状土製品は単独に住居跡から出土する例が多いようである。

人の形を模した土偶は、中期中葉で多く、いったん中期後葉で下火になるが、後期前半になるとふたたび増加する。土偶は完全な形で出土した例は少なく、手や足が失われていたり、頭部のみの破片であったりする場合がほとんどある。このため、ケガをした部分が回復することを祈るお守りであるといわれている。また、妊婦の形を表したものがあることから、安産祈願や地母神の女性格をもつ豊穡を祈ったものともいわれている。宮平遺跡では、頭から胴部上半までの破片で手が失われているものや、頭部のみの土偶が出土した。石神遺跡出土の



耳形土製品 (滝沢D52)



耳飾り (宮平)

魚飾 (滝沢D58)

形刻入り石製品 (滝沢D30)

図91 石製品と土製品 (籃状土製品以外は1:2)

みてみよう。郷土遺跡の約三、西に千曲川が流れる。郷土遺跡の西に石神遺跡、南に岩下遺跡と三田原遺跡群が接している。三田原遺跡群は横矢川沿いに位置する。滝沢遺跡はこれらの遺跡より僅か一・五、北東ないし北東の湧き水地帯にある。これら遺跡群よりやや離れた、森泉山の麓の湯川の左岸に宮平遺跡はあり、茂沢南石堂遺跡は約二・五、川をさかのぼったところにある。

浅間山南部は十二世紀の前掛山噴出物が厚く堆積しているために、遺跡が発見できないが、日あたりのよい湧き水地帯や河岸段丘面に遺跡が眠っている可能性が高い。今後、新たに火砕流下に遺跡が発見されることが期待される。

縄文後期の 御代田町では、現在までのところ後期集落の全貌を知ることができない。宮平遺跡や滝沢遺跡ではその一部が調査された。そこで浅間山麓における後期遺跡について紹介する。

遺跡から発見される生活の痕跡は、住居跡や土坑、祭祀的な意味あいの強い配石遺構、遺物の集中部などとして残されている。中期までの多くの重複する竪穴住居跡にくらべると、後期の住居跡は軒数が比較的少ない傾向があり、住居跡の重複関係や建て替えなども少ないようである。土器型式による時間的な長さが住居軒数を左右している可能性が高いが、中期末葉になると一つの遺跡で同じ土器型式をもつ住居跡が三軒から四軒程度みられる。また、中期末葉になると住居の壁を深く掘り込まない竪穴住居跡や敷石住居跡が増えてくる傾向がある。

住居の壁については、住居確認面の位置や発掘技術上の問題から検出しづらい点があげられるが、中期後葉にくらべて堅固な壁は少なくなったことは確かであろう。

住居跡以外では、土坑がある。土坑は貯蔵穴や墓などの用途が考えられる穴のことである。貯蔵穴と考えられるものは、クリなどが多量に見つかった中野市栗林遺跡の土坑が代表的である。また、墓の代表例は、明科町北村遺跡にあり、土坑内から多数の白骨が発見された。遺体が一体ずつ土坑に納められる例が多く、なかには頭部に土器をかぶせているものもみられた。

このほかに、土坑の使われ方を判断する基準は、平面形態や断面形の類似性、あるいは覆土の差異などで、さまざまな要素を分析してその機能を特定するのである。

遺物集中とよばれる土器や石器が集中して出土する箇所は廃棄場所つまりゴミ捨て場であったと考えられる。ただし、遺物集中部でも石器作りにもなって生じた未成品や石器素材、切片や破片が集中している場合は、石器製作跡と判断される。遺物集中部については、浅間山麓では調査例が少なく不明な点が多いので、つぎに住居跡や配石遺構、土坑を中心にみていきたい。

住まいの 後期における住居形態の変化は浅間山麓においても顕著にみられる。小諸市三田原遺跡群3号住居跡は、後期初頭称名寺式期の柄鏡形敷石住居跡で、壁際に柱穴がめぐり、住居中心部分（主体部）と柄部との連結部に対応するピットがある。敷石

は柄部にのみみられ、主体部では小礫が配される。炉は石囲いで内部に土器が埋設されている。この後の堀之内式期の滝沢遺跡J5号住居は円形形態の敷石住居跡であるが、炉は石囲いで土器が埋設されている。後期の敷石住居跡では石囲炉で土器が埋設されている特徴がある。望月町平石遺跡では堀之内式から加曾利B式期の柄鏡形敷石住居跡が多数発掘された。敷石は板状石を用いる。この山間部では板状石が容易に得ることができ、住居の床面に利用された。また、後期の住居は、床面を深く掘り込まず構築したため、壁が検出されなかったり、掘り込みが浅い住居跡となる特徴がある。このことから敷石住居跡が、床面を深く掘り込んだ竪穴式に対して、平地式と認識する説が提唱された。しかし、実際には発掘調査で当時の生活面を確認するのはむずかし

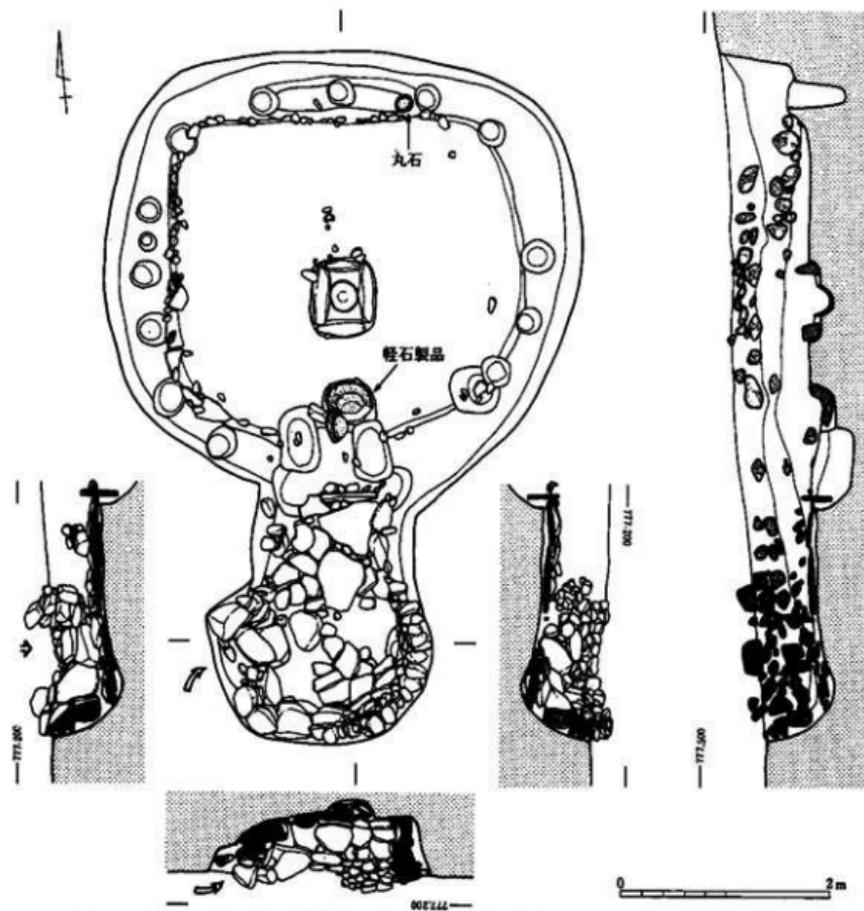


図92 小龍市三田原遺跡の柄鏡形敷石住居跡（3号住居）（長野県埋蔵文化財センター年報）より

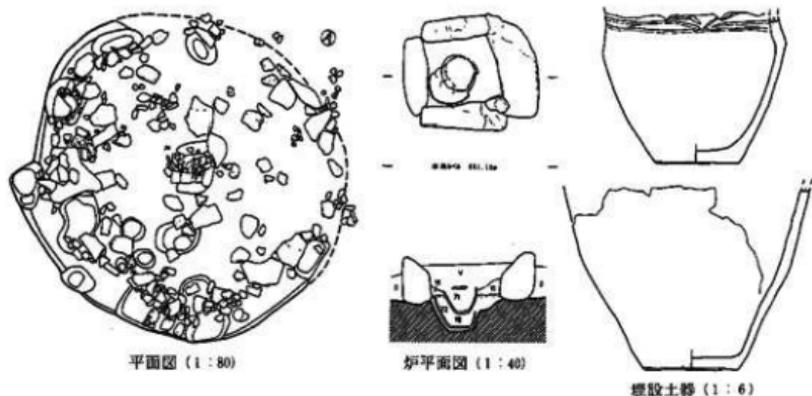


図93 滝沢遺跡J5号住居跡

炉内の土器は二重構造。上の土器が下の土器の中によびりとおさまっていた。二つの土器はともに口縁部が欠き、胴部下半から底部が残っている。土器の表面には熱を受けた跡がみられる。

く、加えて判別困難な遺物包含層のかなり上面から住居を検出しなれば壁は確認できないので、いちがいに敷石住居に壁がなかったと断定することはできない。少なくとも、中期後葉までの住居構造と比較すると、かなり壁は浅いものが多いということだけは指摘できる。上屋構造については後に記する。

敷石住居の出現 中部山地では中期後葉になると、深く掘り込んだ壁をもつ竪穴住居跡に加えて、壁が確認されない敷石住居

跡が見受けられる。長野県の浅間山麓千曲川上流域から群馬県利根川上流域に加曾利E3式期の敷石住居跡が分布する。中部山地においては敷石材として鉄平石(板状石)を多く用い、住居の床面に石を敷いている。鉄平石は東部町綱津や佐久町大日向、あるいは望月町大石あたりに産地がある。

敷石住居は中期末葉になると南関東では柄鏡形敷石住居となつて波及する。柄鏡形住居というのは、近世の柄のついた鏡に形が似ていることからつけられたものである。柄鏡形住居は単に形が柄鏡形であるばかりでなく、住居主体部と柄部とを連結する部分に対応するピットをもつ特徴がある。柄鏡形住居が関東地方に濃密に分布するのに対し、中期末葉では浅間山麓一帯に柄部をもたない敷石住居が存在する。滝沢遺跡J8号住居とJ10号住居の両者とも南側の対応するピットの間に土器が埋設されている。柱穴は住居中央から壁に近い位置にある構造になる。敷石住居跡の炉跡は方形の石囲いである。

後期前葉になると住居は大形になり、柄鏡形敷石住居に変わるもの

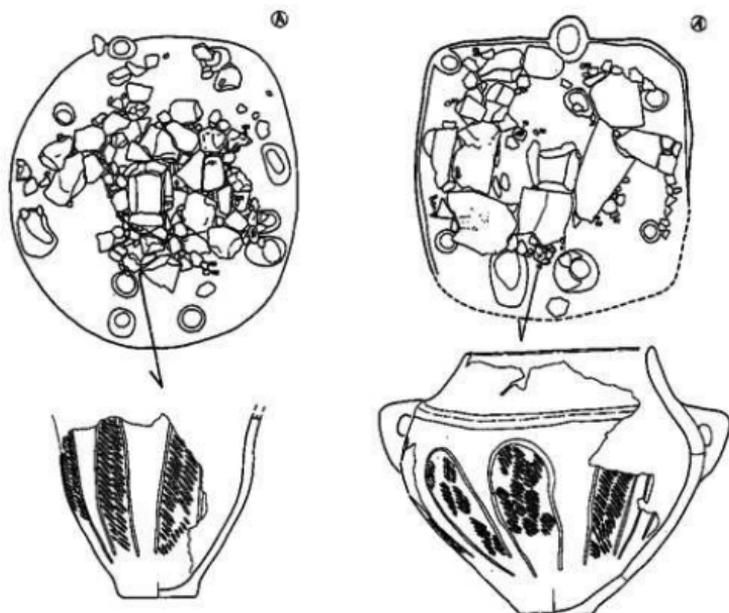


図94 滝沢遺跡J-10号住居跡(1:80)と埋設土器(1:6)

が多い。浅間山麓南部から西西部にかけて、つまり東信北信では柄鏡形敷石住居が多く分布するようになる。関東地方南部で中期末葉に広くみられた柄鏡形敷石住居が、この地域では後期にはいつて柄鏡形住居として定着するのである。いっぽう、関東地方南部では後期壺之内式期の柄鏡形でない竅穴住居がふたたび現れ、住居形態は多様化する。柄鏡形敷石住居は南信の八ヶ岳山麓ではきわめて分布が希薄である。これはおそらく土器の分布範囲と関係がある。柄鏡形敷石住居は加曾利E4式土器をもつ地域に分布する傾向があり、曾利式土器や唐草文系土器が根強く分布する地域には、浸透しなかったと考えられるのである。

敷石住居の 敷石住居にはどんな特徴があるかみてみよう。敷石 性 格 石住居とは家の床に石を水平に敷いたものをいい、中部山地では中期後葉加曾利E3式期から建築された。

一説ではその初源的な住居は、炉址・敷石・対ビット・埋設が住居の中心軸に並ぶもので、小張出部に埋設をもつ形態のものであるといわれる。しかし、この住居は、浅間山麓よりはむしろ南信八ヶ岳山麓に目立って分布する。中期末葉から後期の柄鏡形敷石住居はむしろ浅間山麓北信東信には多くみられ、八ヶ岳山麓には少ないので、小張出部をもつ住居が柄鏡形住居の初源形態とは考えがたい。発生した地域と分布の濃密な地域が、かならずしも同一である必然性はないのだが、柄鏡形住居の分布がもつとも濃い地域では埋設をもたないものが少なくないことから、小張出部

をもつ住居がそのまま柄鏡形住居に変化をしたとは考えづらい。柄鏡形住居が単に形状が柄鏡形であるばかりか、主体部と柄部との連結部に対応するピットをもち、明確な張出部をもつものに限定するならば、柄鏡形住居は中期後葉加曾利E3式期に南関東で発生したと考えるのがもっとも適当である。

小張出部をもつ住居以外に、柄鏡形住居発生に前後して関係のありそうな特徴的な遺構がある。埋壁をもつ配石遺構は加曾利E3式期から後期前葉に柄鏡形住居の分布する地域に濃密に分布するため、この遺構が屋内に取り込まれた結果、柄鏡形敷石住居という形になったと考えるのが妥当である。

柄鏡形敷石住居はどんな使われ方をしたのか考えてみる。考古遺物では、そのものの機能を想定するのは大変むずかしい。昨今は民俗例や民族例を援用することが多いのも、考古学の研究成果だけでは結論に到達できないからである。柄鏡形敷石住居が従来の竪穴住居と比較して大きく変わるのは、主柱から壁・柱への変化に加え、主体部と柄部との連結部に対応する深いピットをもつことである。埋壁が連結部に埋設されることがあることから、柄部が出入口施設であると考える説が多い。民俗例でも家の戸口に土器を埋設する風習があるため、敷石住居の柄部が出入口施設とみなされるのである。

柄鏡形敷石住居は住居でなく、特殊な祭祀的遺構とする意見もあつた。しかし、今日では数多くの発見例が報告され、柄鏡形住居で集落が構成されている遺跡が多く知られるようになってきたことから、中部地方や関東地方では縄文時代中期末葉から後期前葉に存在するひと

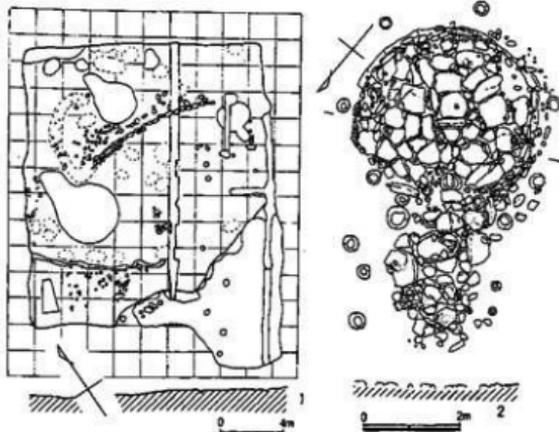


図95 山ノ内町伊勢宮遺跡の柄鏡形敷石住居跡と配石遺構
〔長野県史〕考古資料編より

つの一般的住居形態であるとする意見が主流となってきた。

なぜ住居形態が、柄鏡形なのか。住居構造は、縄文中期末葉になると柱が壁際に近い位置にうつり、連結部に深い対応するピットが存在する。中期末葉から後期初頭の柄鏡形住居跡ではこのピットの間に埋壁があるものがある。出入口施設として柄部をもつようになったと考えられる。このことから埋壁祭祀が行なわれたといわれているが定かではない。柄鏡形敷石住居跡の石の敷き方からみて、家の間取りと考えられる空間が存在する。炉の回り、奥壁部、柱の外の空間、出入口

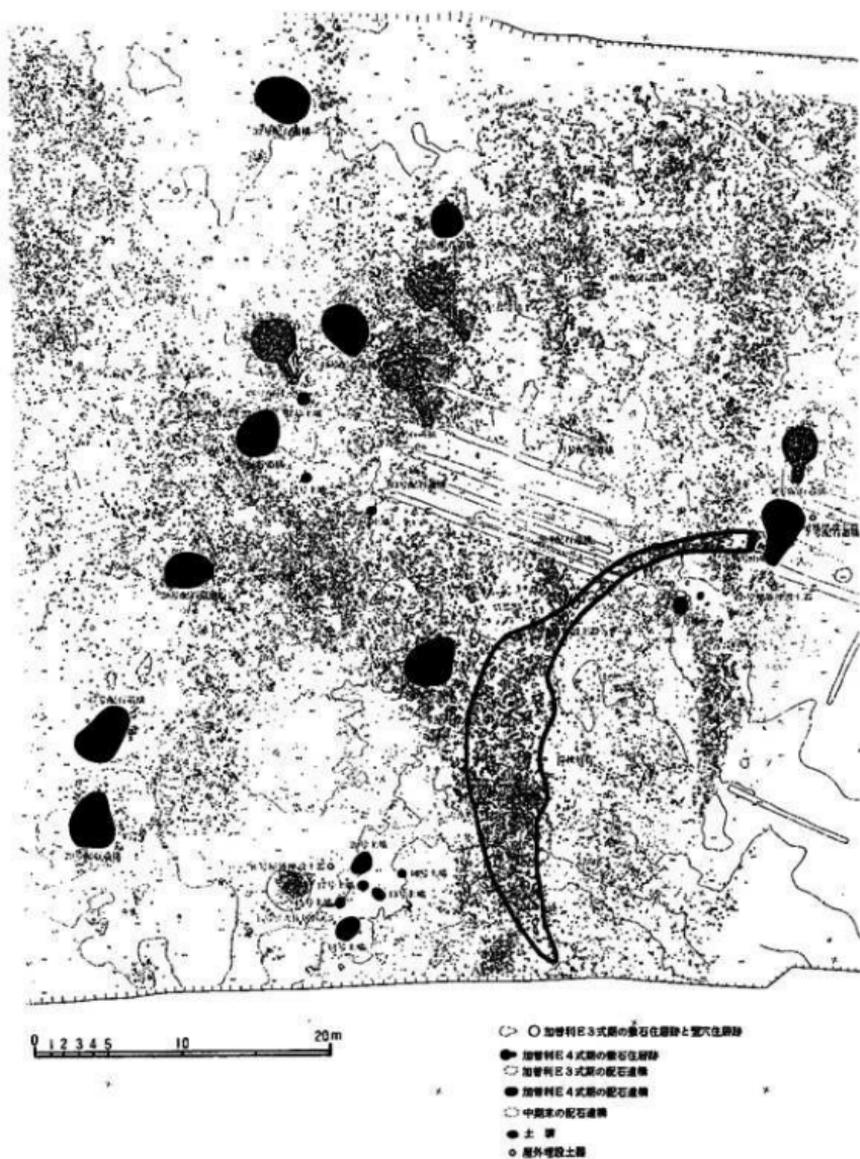


図96 群馬県田中平原遺跡の敷石住居跡と配石遺構 (1:200) (『田中平原遺跡』より)

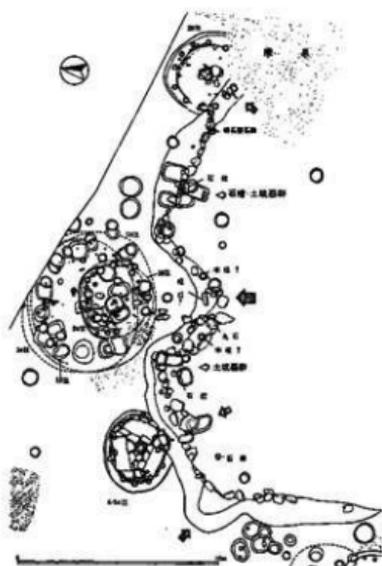


図97 小諸市岩下遺跡の配石遺構 (1:300)

部に続く連結部、出入口部、柄部に分けられるようである。奥壁部には立石や連結部に石棒、石皿が置かれていたのかもしれない。柄部に祭祀的な意味合いが込められていたのかもしれない。柄鏡形敷石住居出現前に、奥壁部に石壇状の敷石がみられる竪穴住居は、その住居の間取りを考えるうえで象徴的である。また、東京都貫井二丁目遺跡の中期末葉から後期初頭の柄鏡形住居跡には、奥壁部の壁に土器片を貼り付ける事例があり、その機能を考えるうえで注目される。中期後葉から後期初頭になると、家の間取りが明確に区分され、とくに奥壁部は祭祀的な施設として機能した可能性が高まってきたようである。

配石遺構

配石遺構とは文字どおり、石を配した構築物である。縄文時代では作業場の遺構のほかに、土坑に石を配

したりする墓としての機能や集落空間を区分的にするような祭祀的な遺構として用いられたようである。

山ノ内町伊勢宮遺跡では堀之内式期の柄鏡形敷石住居とともに、集落空間を区分するように石が列状に配されていた。小諸市三田原遺跡群や岩下遺跡でも、堀之内式期の柄鏡形敷石住居あるいは敷石住居とともに配石遺構が検出された。三田原遺跡群では4号住居跡の柄部に接して段が設けられ石が配されている。岩下遺跡でも柄鏡形あるいは敷石住居に接して、段状に地面が削られ石が配されている。この配石列の内側には墓と考えられるような土坑や配石土坑が多数存在する。

群馬県田原遺跡では中期末葉の柄鏡形敷石住居と弧状の配石が報告されている。この配石群のなかに埋甕がみられる。田原中原遺跡は弧状の配石遺構ではより古い事例である。このような配石遺構は敷石住居、多くは柄鏡形敷石住居にもなっており、山間部の後期堀之内式期の集落にみられる。これは、縄文後期の人々が集落空間を居住域と墓域の区分を配石をすることによって行なうという意識の表れで、その背景には精神的あるいは祭祀的な意味合いがこめられていたことが想像できよう。

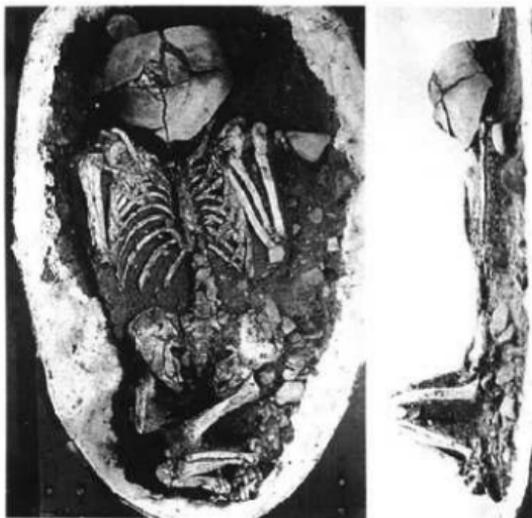
配石遺構には集落空間を区分する列石のほかに、規模の小さい円形もしくは楕円形に石を配しただけの遺構もある。滝沢遺跡J3号竪穴状遺構は、最大一・六一ぶあまりの円形の浅い掘り込みで、北側に八个の石を用いた配石が検出された。配石の内側には堀之内式土器が割られ認められるような状態で出土した。このような配石遺構は規模があまりに小さいために、人を直接埋葬したとは考えづらいが、内部の



写53 滝沢遺跡D30号土坑出土の
石製垂れ飾り



写54 滝沢遺跡D52号土坑出土の
耳形土製品



写52 明科町北村遺跡SH1125から出土した頭に土器をかぶせて埋葬された遺体（『北村遺跡』より）

土に獣の焼骨片が混入していることと墓と考えられる土坑群に隣接していることから墓に関係する遺構、もしくは何らかの祭りなどにかかわった遺構であったと考えられる。

なお、南関東・中部地方で埋葬をもつ配石遺構が、中期後葉にみられる。これが柄鏡形敷石住居出現の契機となったのであろう。

つきに、埋葬施設と考えられる配石土坑を含め、墓についてみてみよう。

墓のいろいろ

宮平遺跡D19号土坑墓^{ミヤヒラ}では、穴の上部に底部に穴を開けた土器が石の上に逆さまに置かれていた。土器の内部には骨粉のようなものが入っていた。土器は曾谷式土器で、口の部分が欠かれているものほとんど完全な形を保っていた。宮平遺跡の事例は半分以上が調査区外にあるため、土坑の形状が不明確であるが、類例をみるとそのほとんどは、長楕円形もしくは楕円形の平面形で、底面は平らである。こういった形状の土坑はどのような機能をもつものだろうか。明科町北村遺跡では、このような形態の土坑の内部に土器がかぶせてあり、その下に頭骨骨が発見された。土坑の中に遺体は畳み込まれるような状態で埋葬される屈葬^{くつざう}の状態であった。埋葬後、土を戻す前に顔の部分に土器をかぶせたのである。長い年月の間に、人骨のほとんどが朽ちてなくなってしまうが、北村遺跡ではいくつかの好条件に恵まれたために、良好な状態で縄文人骨が保存されていた。こうして縄文時代の大墓群の存在が判明した。

滝沢遺跡では住居跡群の南に墓と考えられる土坑群が集中していた。

D 8号土坑は長さが三びあまりの土坑で、口縁部の直径が四二〇もある大形の中期末葉の土器が覆土上部に埋設されていた。土器のなかからは骨粉が見つかった。墓のなかで特筆されたのはD 30号土坑から石製の垂れ飾りと人の歯、D 52号土坑から耳の形をした土製品が出土したことである。D 30号土坑は北側が破壊されているが、長さが一・三びと想定され、西側に楕円形の土坑が隣接していた。D 52号土坑は南側に長さが四〇〇ほどの礫が二個、土坑の上部に倒れたような状態で出土した。おそらく墓標のような役割をもっていたものであろう。この礫のかたわらに耳形土製品が出土している。また、土坑覆土から網代痕がつけられた土器の底部がかぶせられていた。これらの土坑に共通

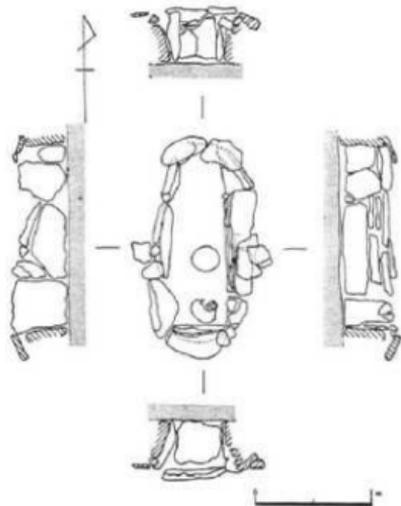


図98 軽井沢町茂沢南石堂遺跡の石棺墓
〔茂沢南石堂遺跡より〕

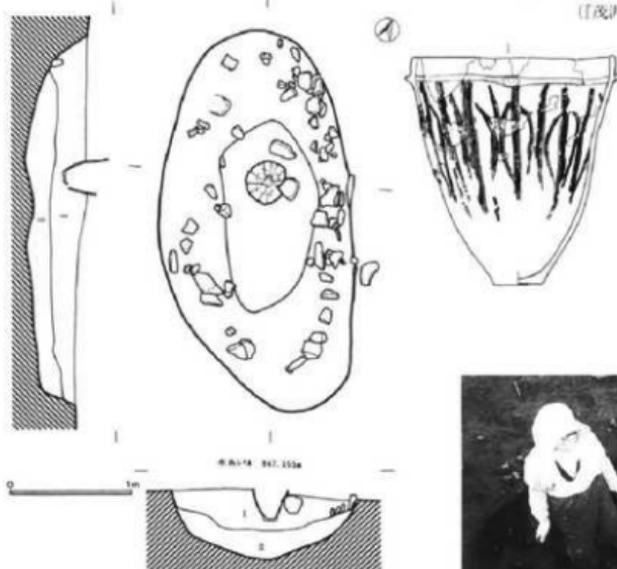


図99 滝沢遺跡D 8号土坑

- I層 濃い黄褐色土 (10Y R 4/3)
径10mm内外のバリスを多量、ロームブロックを少量含む
- II層 黒褐色土 (10Y R 2/3)
ロームブロックと鉄分を少量含む



写55 滝沢遺跡D 8号土坑

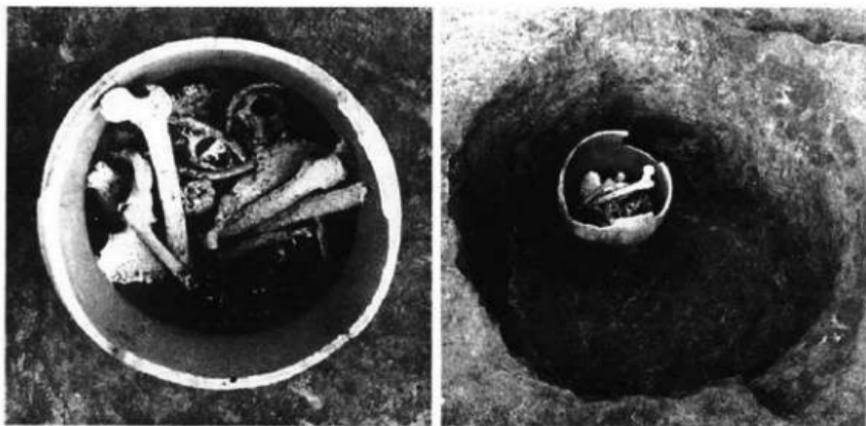
している点は、形態が楕円形で、底面が平らで断面形が鍋底形を呈するなど、同じような形態の土坑が集中していることである。また、骨粉などの遺物や、垂れ飾りのような非実用的な遺物が出土していることから墓として機能していたことが想定される。

軽井沢町茂沢南石室遺跡では、長方形の土坑に板状石を箱形に組み合わせた遺構が敷石住居跡とともに検出された。これが石棺墓である。石棺の南側に加曽利B式土器が伏せてあった。後期前葉加曽利B式期では、このような石棺墓がたびたび発掘されている。

土坑をとまなう埋葬施設ほかに、大形の土器に人骨を収納する土器棺、幼児あるいは胎児、嬰兒や胎盤など埋納されていたと考えられている埋葬がある。

土器棺は後期初頭称名寺式期の埼玉県坂東山遺跡で発見されたものがより古い。しかし、このように人骨が残っている例はきわめて少ない。土器棺は遺体が直接埋葬されたのではなく、おそらく白骨化した骨を集めて、ふたたび土器に、納めた再葬の可能性が高い。なぜなら入れ口の小さな土器に遺体を埋葬するのはむずかしいと考えるからである。

埋葬は住居内に納められた例が、中期後葉から後期初頭までしばしばみられる。そのいっぽうで、屋外の埋葬は中期後葉から後期前葉に多くみられる。埋葬の機能は、近代まで土器に胎盤や袍衣などをいれて家の出入りの多い敷居などに土器を埋設する民俗例と同様であったと想定され、死産した胎児などの再生を願う妊娠呪術にかかわるものといわれている。一例をあげると、千葉県殿平貝塚では埋葬のなかから幼児骨が発見された。また、内部の土を脂肪酸分析などの科学分



写58 埼玉県坂東山遺跡の土器棺（『坂東山遺跡』より）

析を行なった結果では、少なくとも高等生物の存在などが認められるなど、最近しだいに埋葬の機能がわかってきた。

貯蔵穴

土坑の機能は、内容物が残されているような遺存状態の良好な遺構によって、はじめて特定できる。墓は人骨が残ることによって、はじめてそれであることがわかる。浅間山麓では墓以外の土坑で機能を明確化できた例に乏しい。そこで、千曲川を下った善光寺平北部の段丘面に立地する中野市栗林遺跡についてみてみよう。

栗林遺跡は千曲川右岸で水面との比高差が約一〇〇の位置にあり、湿地で泥炭層にパックされていたために、植物遺体の残りが良い遺跡であった。縄文後期初頭から中葉までの貯蔵穴が多数検出され、遺存状態がよい第56号貯蔵穴は、円形の土坑が二つ重なっているような形態で、全体の長さが二倍弱、深い方の径が約八〇で、深さは八四と四〇で、底面は平らである。土坑のなからクリの板材のほかに、トチ・ドングリ・クルミが多数出土した。貯蔵穴と考えられる土坑は、円形の形態であるものが多く、底面が平らで断面形で見るとトライのような形である。

後期縄文人 中期末葉になると縄文人は台地縁辺からより水辺に近

の生活 低い丘に移り住み、敷石住居などを構築するようになった。住居は出入り口に対応するピットをつくった柄鏡形住居なども造られた。後期人はときとして、地面を深く掘った堅牢な竪穴住居の代わりに、石を並べた敷石住居を構築した。石材の豊富な中部地方



写57 中野市栗林遺跡の第56号貯蔵穴（「栗林遺跡 七瀬遺跡」より）

植物遺体や貯蔵穴内にあった板材が遺存していたのは、遺跡が河川の氾濫原にあり、泥炭層によって良好な状態を保つことができたためである。低地遺跡の発掘調査では、このような有機物が残されているので多くの情報を得ることができる。

では、住居だけでなく墓にも石を用い配石墓や石棺墓がつくられた。また、垂れ飾りなどや耳形土製品など珍品が出土した土坑墓は、特別な墓であったと考えられる。後期に身分の差異を現す構築物や造形品の存在は明らかでないが、このような特異な品々が出土することからみて、ムラ長的な人の存在も否定できない。

後期になると、気候は寒冷になったとされる。敷石住居跡の出現と気候との関係は不明であるが、敷石を家に施すことは、単に住居空間

の利用の一手段であるばかりでなく、祭祀的な意図をもっていたことは指摘できる。また、遠くから石材を運んできて敷石住居を構築する行為は、それだけの労力を費やすだけのゆとりが生まれたことが想像され、より安定した豊かな生活の裏付けがあった時代だったのかもしれない。敷石住居の存在から、頻繁な移動は考えづらく、定着した安定した生活が想像できる。また、後期前葉の遺跡では貯蔵穴が発見される例が多い。貯蔵穴の存在は、不安定な採集生活のなから生まれた人々の知恵のひとつの証である。当時、貯蔵せざるをえなかった自然環境の厳しさがあった反面で、食物獲得のために移動しなくとも、一定の地域で食料を補う知恵が発達した結果、貯蔵穴が生まれたとみることもできる。貯蔵穴は、定着性の強い生活を送っていたかを裏付ける遺構である。余剰食物と生活の安定化は、身分的差異の芽生えともとれる。また、土坑からクルミなどが出土したことは、縄文人の貯蔵方法をわれわれに伝えているだけでなく、何を食していたかがわかる点で重要な生活痕跡である。

いっぽう、中期末葉になると中部地方の遺跡では、配石によって集落空間が分割される遺跡が現れる。これらはおもに居住域と墓域に分けられるようであるが、そこに祭祀的な空間も介在しているようである。集落における空間分割がどのような意味をもっていたかは、いままのところ明らかではないが、滝沢遺跡や三田原遺跡群などでは前述のように居住域と墓域の区別されていることが明らかにわかる。

浅間山麓では、集落全体が把握できるような遺跡は少ないが、宮平遺跡、滝沢遺跡・岩下遺跡や三田原遺跡群の調査によって、その断片

が明らかになってきている。今後、低湿地遺跡などの新たな発見によって縄文時代像が少しずつ見えてくるであろう。

〔引用・参考文献〕

埼玉県教育委員会 一九七三 「坂東山」

長野県 一九八二 『長野県史』全一巻(2) 主要遺跡(北・東信)

群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九八五 『荒砥二之塚遺跡』

本橋恵美子 一九八八 『縄文時代における柄鏡形敷石住居址の研究』

『信濃』40:8・9

本橋恵美子 一九九二 「埋蔵」にみる動態について—縄文中期後半

の遺跡の検討から— 『古代』第94号

都築(本橋)恵美子 一九九〇 「竪穴住居址の系統について—縄文中

期後半から後期初頭の住居姿遷と時間的動態

— 『東京考古』第八号

群馬県埋蔵文化財センター 一九九一 「上信越自動車道埋蔵文化

財発掘調査報告書2—佐久市内その2—」

群馬県埋蔵文化財センター 一九九二 「長野県埋蔵文化財センタ

ー 年報9」

群馬県埋蔵文化財センター 一九九三 「中央自動車道長野埋蔵

文化財発掘調査報告書 11北村遺跡」

群馬県埋蔵文化財センター 一九九四 「県道中野豊野線バイパス

志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書

栗林遺跡 七瀬遺跡」

第七節 縄文文化の終焉—晩期

一 縄文晩期という時代

縄文時代晩期 御代田町宮平遺跡は長野県内でも代表的な縄文時代の研究史 代後期の遺跡であるが、そこに一片だけだが、入組三叉文と呼ばれる先端三叉状の沈線が入り組む文様が描かれる縄文時代晩期初頭の土器片が出土した(写58・図100)。この入組三叉文は東北地方の大洞B式という縄文時代晩期初頭の土器に特徴的な文様で、研究者の間では三叉文の出現、もしくはそれが主体となる大洞B式の出現をもって、縄文時代晩期の開始と理解されている。宮平遺跡出土の土器片もその作り手が東北の大洞B式から何らかの影響を受けて製作した結果によるものであろう。詳細は後述するが、縄文時代晩期とは大洞B式も含めた東北の大洞式、もしくは亀ヶ岡式土器(図101)という彫刻的な手法で精巧に華麗な文様が作られる時期を指し、これらが晩期という時期区分に重要な役割をはたす。

青森県西津軽郡木造町の亀ヶ岡という地域では、古くから精巧なつくりの土器が地中より出土することで有名であった。元和九(一六六五)年に津軽藩が残した「水様日記」ではこの地で水を入れる瓶の形をした「奇代之瀬戸物」が地中から多数出土することから亀ヶ岡と地

名が付けられた経緯が解説されている。亀ヶ岡出土の土器は江戸時代において好事家や文人などの興味を引き、いくつかの書物にも紹介されていた。

明治十(一八七七)年、エドワード・S・モリスによる東京都大森貝塚の調査以降、近代的な日本考古学がスタートした。明治、大正時代の学問の進展により、亀ヶ岡の「奇代之瀬戸物」は縄文式土器に包括され、精巧、多様な文様、意匠・香炉型・注口・皿・高坏・浅鉢・深鉢などの多様な器種をもち、おもに東北一円に分布するこれらは亀ヶ岡式土器と呼称されるようになった。この亀ヶ岡式土器に年代的秩序を与えたのが山内清男である。山内は昭和五(一九三〇)年、岩手県



写58・図100 宮平遺跡の大洞B式土器

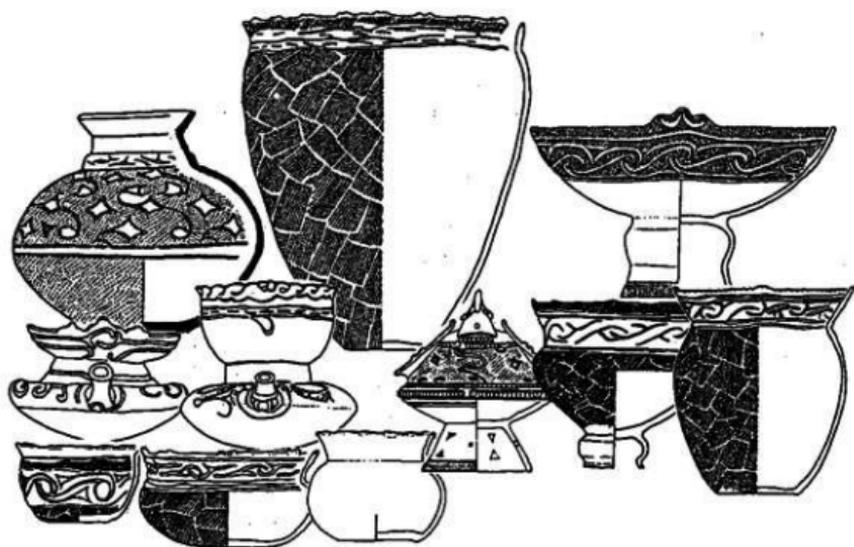


図101 亀ヶ岡式土器のいろいろ (図は大洞B式中心)

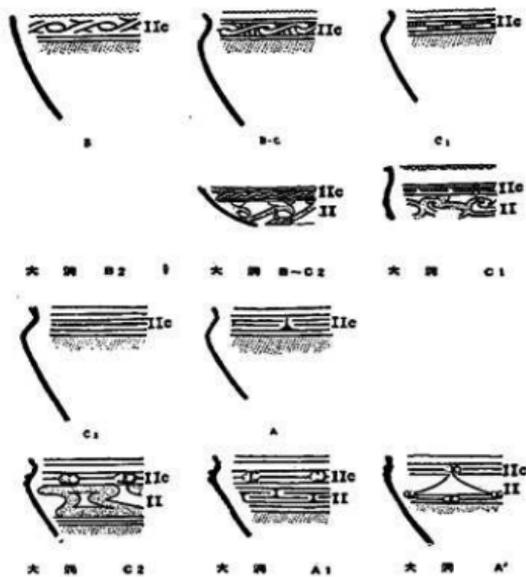


図102 山内清男の大洞式の室通横式図



写59 戸倉町円光房遺跡の晩期土器群



大船渡市大洞貝塚出土の亀ヶ岡式が、時間差によりB、C、A、A'地点で土器の文様などが異なる点を確認、それらが大洞B・B・C・C1・C2・A式・A式と称して土器型式としての時間的な序列を整備した(図2)。そしてこの大洞諸型式が縄文時代でも終末に位置付けられ、東北でもみ出土する大洞諸型式が関東、中部、近畿でもそれぞれ地域に特徴的な土器型式にもなって広域に出土する点に注目し、昭和十二(一九三七)年、大洞(亀ヶ岡)式が用いられ、またそれに並行する土器型式が日本列島で用いられた縄文時代でも最終の時期を縄文時代晩期と扱うことを論じた。

山内博士により提唱された縄文時代晩期の概念は、五〇年を経過した平成の今日でも有効である。それは山内が築いた大洞諸型式の秩序が根本的に揺るがず、また、広範囲に広がる大洞諸型式により、列島規模での縄文時代の終末を論ずることを可能とするからだ。近年、大分県大分市植田市遺跡や福岡県福岡市雀居遺跡では、九州の晩期後半の刻目突帯文土器にともなって大洞C2式が出土した。東北が本場の大洞(亀ヶ岡)式が九州でも出土した訳で、大洞(亀ヶ岡)式が広範囲に広がることを示す良い例だ。後で述べる中部高地の縄文時代晩期の土器(写59)の研究も、中部高地に出土した大洞諸型式と中部高地で独自に発達した縄文土器型式との比較検討作業の過程で進められてきた。

晩期の暦年代

さて、大洞諸型式を基準とする土器型式編年綱に位置付けられた晩期であるが、放射性炭素年代測定法ではおよそ三二〇〇年前から二五〇〇―二二〇〇年前の絶対年代が与

えられる。放射性炭素年代法とは動植物が生存中に大気中から同化吸収する放射性炭素 ^{14}C が五七三〇±四〇年で半減することを利用して、放射性炭素 ^{14}C の吸収が止んだ動植物死後の遺体の ^{14}C 濃度を測定、その減少度合いから動植物遺体の年代を測定する理学的な年代測定法である。いっぽう、放射性炭素年代測定法に対し、考古学的な手法で暦年代を推定する方法もある。縄文時代晩期に後続する弥生時代の研究では、すでに国家が成立して暦年代が整備されている中国製の鏡や貨幣、また中国と対比可能な朝鮮半島製青銅器などが出土する北九州地方の遺跡での共伴事例をもとに弥生式土器編年と暦年代を対比する研究が行なわれている。弥生時代中期初頭の佐賀県唐津市宇木汲田12号甕棺や山口県下関市梶栗浜遺跡では朝鮮半島系の細形銅剣と多鈕細文鏡が出土した。朝鮮半島出土青銅器と暦年代の整備された中国系の考古学資料との年代対比を試みる研究によると、宇木汲田12号甕棺や梶栗浜遺跡出土の青銅器は紀元前二二〇年から紀元前一五〇年ころの朝鮮半島の青銅器に對比できるといふ。弥生時代中期初頭の暦年代が紀元前一二〇〇年から紀元前一五〇年ころとするならば、弥生時代前期末の年代の下限が紀元前二二〇年と予測でき、前期初頭の年代は紀元前三世紀初頭ないし四世紀代にさかのぼりうる。

ちなみに弥生時代中期前半末の北九州の甕棺では、中国の前漢時代の鏡がともなうことが多く、弥生時代後期初頭の西日本の遺跡で、中国の新時代から後漢初頭まで鑄造された貨泉という貨幣が出土するものがある。前漢が紀元前二〇二年から紀元八年、新が紀元八年から紀元一三年、後漢が紀元二五年から二二〇年の国家であり、また貨泉

が新時代の紀元一四年から後漢時で紀元四〇年に五銖銭が鑄造されるまで、鑄造、使用されている。とすれば弥生時代中期は紀元前二二〇年から紀元元年前後と推定される。かつ近年、大阪府池上曾根遺跡の弥生時代中期末の木柱穴を理学的な年代測定法の一つである年輪年代測定法で年代測定すると紀元前五二二年の値が得られ、大陸系の遺物からの暦年代考察の結果と大きな開きはないようだ。

さてさきに述べたとおり弥生時代前期の暦年代を紀元前四世紀代から三世紀初頭前後としよう。東日本と西日本では狩猟採集漁労を基盤とする縄文時代の晩期終末と本格的な農耕社会が開始する弥生時代前期に時間的な差が若干ある。土器による年代と地方の単位である土器型式の比較では、東北の縄文時代晩期最終末の大洞A式とほぼ同時期の中部高地の晩期末の水1式は、東海の櫻王式、そして西日本の弥生時代前期を三段階区分した中段階のものと同時期の可能性が高い。とすれば中部高地、そして東日本の縄文時代晩期終末の下限を考古学的な手法で紀元前三世紀半ばから紀元前四世紀半ばの範囲で推定することも可能である(第二編図5)。

晩期の気候

この縄文時代晩期に入ると気候は冷涼期にむかう。花粉分析による植生復元から推定したこの時期の気温は年平均気温が現在より一度低かったという。気温は標高一〇〇m以上高くなることに〇・五度低くなるので、今日われわれが住む地域より標高が一八〇m以上の地点の気候を考えればよいであろう。縄文時代前期の縄文海進のころの年平均気温は現在より二度高いと推定される。そ

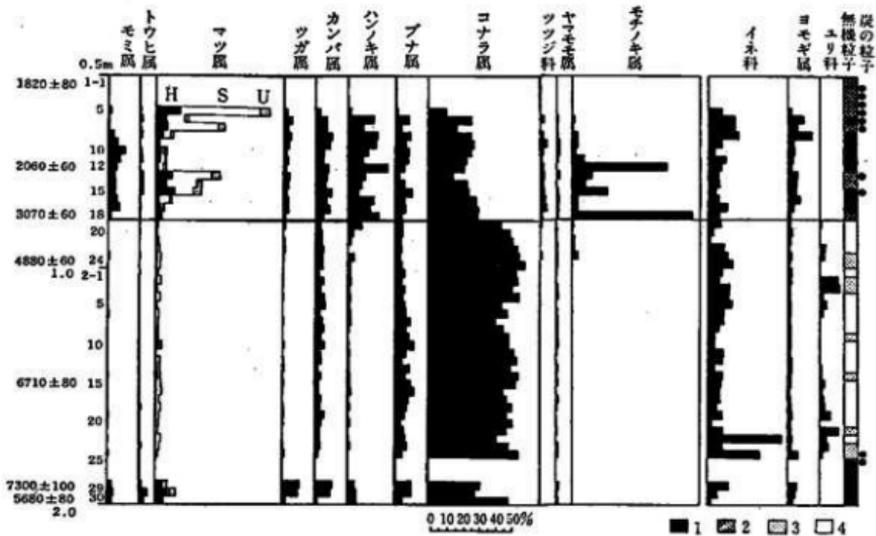


図103 唐花見泥炭地の花粉ダイアグラム 1 非常に多い 2 多い 3 少ない 4 非常に少ない H ゴヨウマツ亜属 S ニヨウマツ亜属 U 同定不能 (『尾瀬ヶ原の自然史』より)

して前期以降気候は全体的に冷涼の傾向となるが、晩期にかけてその傾向がいちじるしくなる。

長野県北安曇郡八坂村の犀川丘陵にある唐花見泥炭地は広い平坦面の低凹地に泥炭が堆積した温帯である。唐花見泥炭地がある北安曇地方の現在の標準的な植生は標高九五〇より上帯にブナを中心とするミズナラ、トチノキ、クルミなどの冷温帯落葉広葉樹林帯、下帯にモミ、ツガなどの針葉樹とコナラ、イヌブナ、アカシデの落葉広葉樹のある暖温帯落葉広葉樹林帯に区分されるが、標高九四五の唐花見泥炭地はその中間に立地することになる。唐花見泥炭地の花粉分析の結果を示す花粉ダイアグラム(図103)では放射性炭素年代で三〇七〇年前とほぼ縄文時代晩期の初頭に相当する年代に境に冷涼気候を好むモミ属、トウヒ属、ゴヨウマツ亜属、ツガ属、ブナ属などの花粉が増加し、温暖気候を好むエノキ属、ケヤキ属、オニグルミ属の花粉が減少、また灌木のモチノキ属、草木のヨモギ属、炭化粒子が増加する。植生の基本は現在と大きな差はないが、冷涼な気候を好む属の割合が増す。近隣の新潟県、群馬県、福島県にまたがる日光国立公園の尾瀬ヶ原は標高一四〇〇より、ブナを中心とする冷温帯落葉広葉樹林帯の中にある。尾瀬ヶ原の花粉ダイアグラムでも放射性炭素年代法で、ほぼ三〇〇〇年前から二五〇〇年前にかけての時期に高山帯下部に生息するハイマツのものと同定される半球形マツ属の花粉が全体を占める割合が増加する。これは高山帯に生息するハイマツが気候の冷涼化で、その生育域が下降したことを示す事例といえよう。

花粉分析による当時の植生復元以外の作業からも縄文時代晩期での

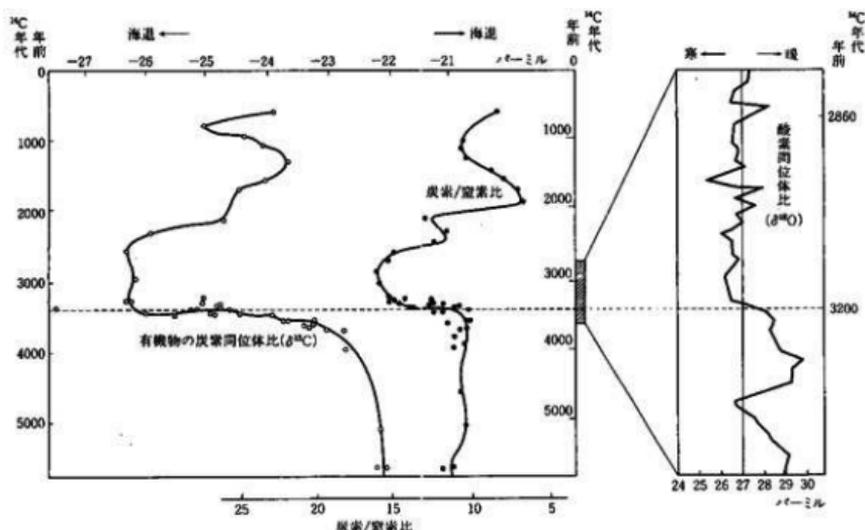


図184 川崎市川中島中学校のボーリングコアの有機物の炭素同位体比と炭素/窒素比(中井ほか, 1988)とオランダ、エンゲベルトスディジュクスビーン湖原の炭素同位体比の分析結果(右端、Brennik-meijer, 1983)

気候の冷却化を証明するデータがある。愛知県果瓜郡遺跡（あいちけん ぐわごほり）など弥生遺跡調査では、地中に埋もれた当時の埋積浅谷が発見され、当時の海面が現在にくらべて二―三メートルほど低位にあったことが明らかになった。この海面の低下現象は当初弥生時代の遺跡で確認され、かつては弥生の小海退の概念で呼称された訳だが、今日までの研究ではこの海退現象は縄文時代後・晩期までさかのぼるようだ。神奈川県川崎市海岸部でのボーリング調査で採取した堆積物コアの分析では、ほぼ三二〇〇年前を境に有機物の炭素同位体比が海洋中のプランクトン起源の炭素同位体比の数値からと陸上の生物遺骸起源の数値に近づき、その状態が二〇〇〇年ころまで続くという(図則)。有機物の炭素同位体比の分析からも、縄文時代晩期での海退現象を証明できようである。

この海退現象は、極北地方をはじめ世界各地での氷床の拡大に連動したもので、気温や海水温の低下は汎世界的な現象の日本列島でのあり方と評価することができる。ほぼ三〇〇〇年前から二〇〇〇年前の汎世界的な気候の冷却期は、地学の術語でネオグラシエーションと称されている。日本列島の縄文時代晩期の気候も世界的な冷却化傾向に歩調をあわせるようだ。縄文文化は時代全般において世界でもほかの新石器時代文化に例のない土器の多量な製作、消費を行なう独自の狩猟採集漁労文化を展開させていたが、縄文時代晩期もその例に漏れない。縄文時代晩期は汎世界的な気候の冷却化、そしてそれにもなう海面の低下など気候環境や地形環境の変換期に相当、新たな生活様式の萌芽がみられるなかで生産活動が営まれ、縄文時代の終焉を飾るに相応しい文化が展開するのである。

二 縄文晩期の器

晩期の土器 縄文時代を特徴づけるもの一つに、縄文式土器がある。縄文時代の遺跡を調査するたびに多くの出土量を

誇るものが土器であり、縄文時代は多くの時間と労力をかけて華麗な装飾が施された土器が製作されていた。世界各地の新石器時代においても、日本列島の縄文時代ほど土器の製作にエネルギーが注がれた例はほかにない。考古学の中でも縄文時代の研究を専らとする研究者の多くが、この縄文式土器の分析にかかわったのも、縄文時代の本質から当然のことなのである。

さてこの縄文式土器の研究は、大きく三つの方向性をもつ。一つは縄文式土器が地域や時期によってその装飾、文様や器の形が共通するということである。これを代表的な遺跡名をとって佐野式・水一式など型式という概念で単位化し、年代的に序列する。年代的な序列はこれらが埋没、堆積した時間差を示す層位差と装飾、文様、器形の変化の連続性を究明する型式差により決定する。これを一般に編年研究と呼称するが、土器型式による編年研究が整備されることで、縄文時代のより細かな文化変遷を語る事が可能になる。土器編年研究は、縄文時代の研究が歴史学を志向する上での必要欠くべからざる基礎研究といえることができる。

二つめは年代と地域との単位である土器型式は、同じ時期でも地域により型式、つまり装飾、文様、器の形などを異にするが、ほかの地域の土

器型式を模倣、もしくは搬入されることがある。たとえば小諸市石神遺跡では、東海地方に主体的に分布する縄文時代晩期後半の五貫森式土器がもたらされている。そして中部高地の縄文時代晩期後半の土器型式である女鳥羽川式の変が、東海・五貫森式の奥からの影響で変化するようになり、土器型式は製作側自らの変化、またほかの地域の土器型式からの影響で変化する。土器の変遷の過程ではかの地域からの影響関係を検討することで、当時の地域間の交流を見出すことができる。

三つめには土器は本来、器そのものであり、水や食物を入れて貯蔵や煮炊きするなど器としての機能をもつものである。生活の日常用具としての土器の用途や機能を分析することで、先史時代の生活を復元できる訳である。ただ一万年以上も続く縄文時代の土器を一括して生活史の復元を論ずるには無理があり、さきに述べた型式による土器編年にはあまり有効でないとの前提がつく。

以上の三点が縄文式土器を研究する上での主要な方向性といえるが、土器による地域交流、用途機能からの生活を明らかにする上で、基礎となるのが土器型式による土器編年といえる。

では、御代田町および周辺の北佐久地方を中心として、縄文時代晩期の文化を語るにあたり、まずその基礎研究として土器の変遷に触れてみたい。ここでは解説の都合上、縄文時代晩期のみならず縄文時代後半から弥生時代前期末までを取り扱う。なお中部高地の晩期編年で、とくに型式設定がなされていない時期は適宜、代表的な遺跡名や東北の大洞B、BC、C1、C2、A、A'式と続く大洞式との対比で触れる。

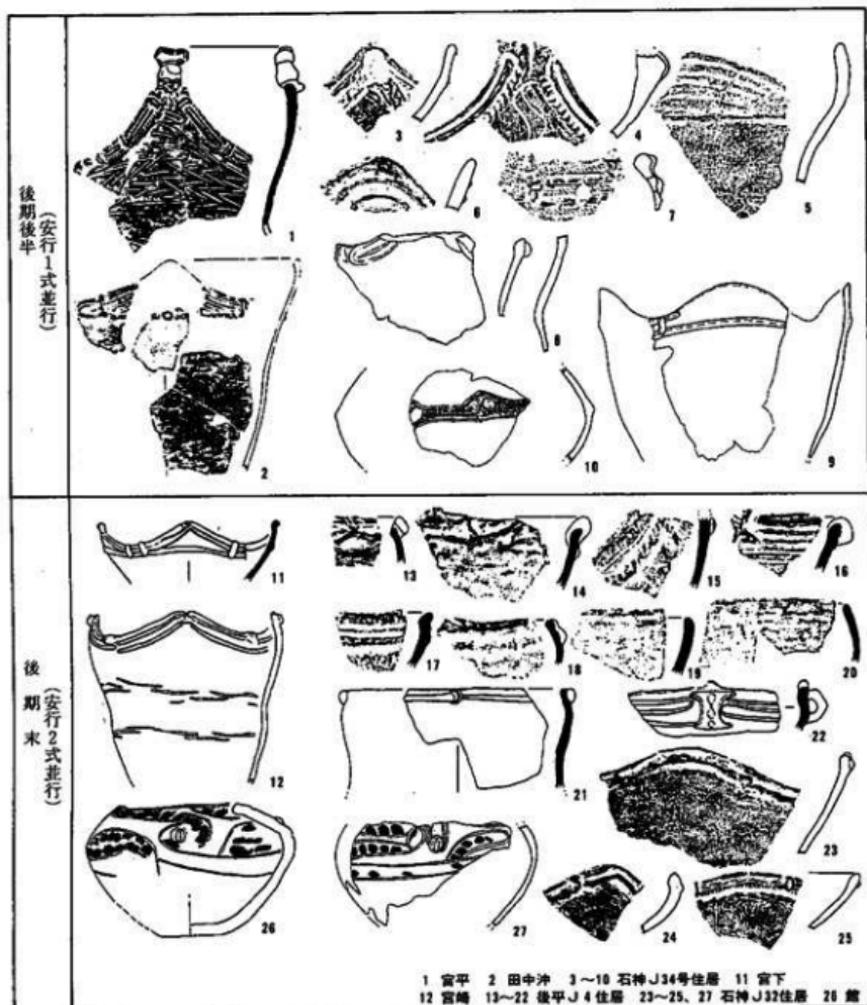


図105 後期後半の移り変わり

図105の26・27は東北の縄文時代後期末「瘤付土器」第4段階の文様を取り入れた壺、もしくは注口土器。しかし、本場の東北では26・27の入り組む文様は深鉢に多く、壺・注口土器に付されることはない。したがって26・27は、東北の土器文様を取り込みながらも、中部高地独自に成立した土器といえよう。

小諸市石神遺跡 小諸市石神遺跡J34号住居出土資料の主体は、

J34号住居の土器 縄文時代後期後半のものと考えられる。中部高地ではまだ適当な型式はないが、関東西部の高井東式の後半段階と共通する部分が多い。関東の後期後半安行1式と並行しよう。

石神遺跡J34号住居出土資料には、低い大形波状口縁で水平に隆帯がめぐり、隆帯の上位が沈線が無文の精製深鉢(図版—2・5・9)、波状口縁で口縁に沿って柵状文をもつ深鉢(図版—8)、波状口縁で口縁に沿って隆帯や柵状文をもち、さらに沈線が施される深鉢(図版—1・4)、粗製の無文深鉢がある。また、精製注口土器では平行沈線間に刻目、瘤が貼り付けられ、東北の後期後半の瘤付土器第三段階の文様をもつ(図版—10)。本場の東北では深鉢の器種に施される文様であるが、中部高地では独自に注口土器にその文様を取り込むようだ。石神遺跡J34号では帯縄文をもつ関東の安行1式も出土する(図版—7)。また東北の瘤付土器第三段階とも並行するようだ。御代田町では官平遺跡にこの時期の良好な資料がある。

後期末の 南佐久郡佐久町後平遺跡J4号住居出土資料の多くは、

土 器 縄文時代後期末のものと考えられる。中部高地ではまだ適当な型式名はないが、関東の後期末安行2式と並行しよう。

波状口縁、また平口縁に沿ってミガキが顕著な低隆帯、もしくは凹線を装飾とする深鉢(図版—13・14・18)が指標となる。口縁部の装飾では小突起や縦の小隆帯ももつ。粗製の無文深鉢もこれにともな

う。精製注口土器では東北の後期末の瘤付土器第四段階の入組文の文様をもつもの(図版—26・27)が組成する。この文様も東北では深鉢の器種に施される文様が、中部高地では精製注口土器に独自に取り込まれたようだ。東北の影響を受けた入組文をもつ中部高地独自の精製注口土器の好例は、小諸市石神遺跡、塩尻市館遺跡、飯田市中村中平遺跡にある。

石神遺跡J32号住居は後期後半から晩期初頭までの時期幅をもつがこの時期を含み、望月町浦谷B遺跡でもこの時期が多い。御代田町では官平遺跡にこの時期の好資料が恵まれる。

晩期初頭の 東北の大洞B式、関東の安行3a式と三叉文が出現、

土 器 もしくは主体的になるなど東日本の土器の文様で三叉文が重要な位置を占める時期である。ただ大洞B式、つまり晩期の開始を三叉文の出現とするか、三叉文が主体となる時期とするかで研究者の見解が分かれている。今回はかりに口縁部付近に三叉文が出現する時期をもって大洞B式、つまり晩期の開始とする。研究者によっては後期末と扱う時期である。なお大洞B式はさらに三叉文が出現、主体となる大洞B1式、入組三叉文などが展開する大洞B2式に区分される。さて中部高地では晩期初頭の土器型式が設定されていないが、断片的な資料をもとにその見とおしを述べる。

口縁部に三叉文が出現する段階では、富士見町大花遺跡2号住居出土資料に代表される。鉢の肩部に隆帯文が出現し、その上位に三叉文をはじめとする文様をもつ(図版—1・2)。この三叉文は大洞B式の

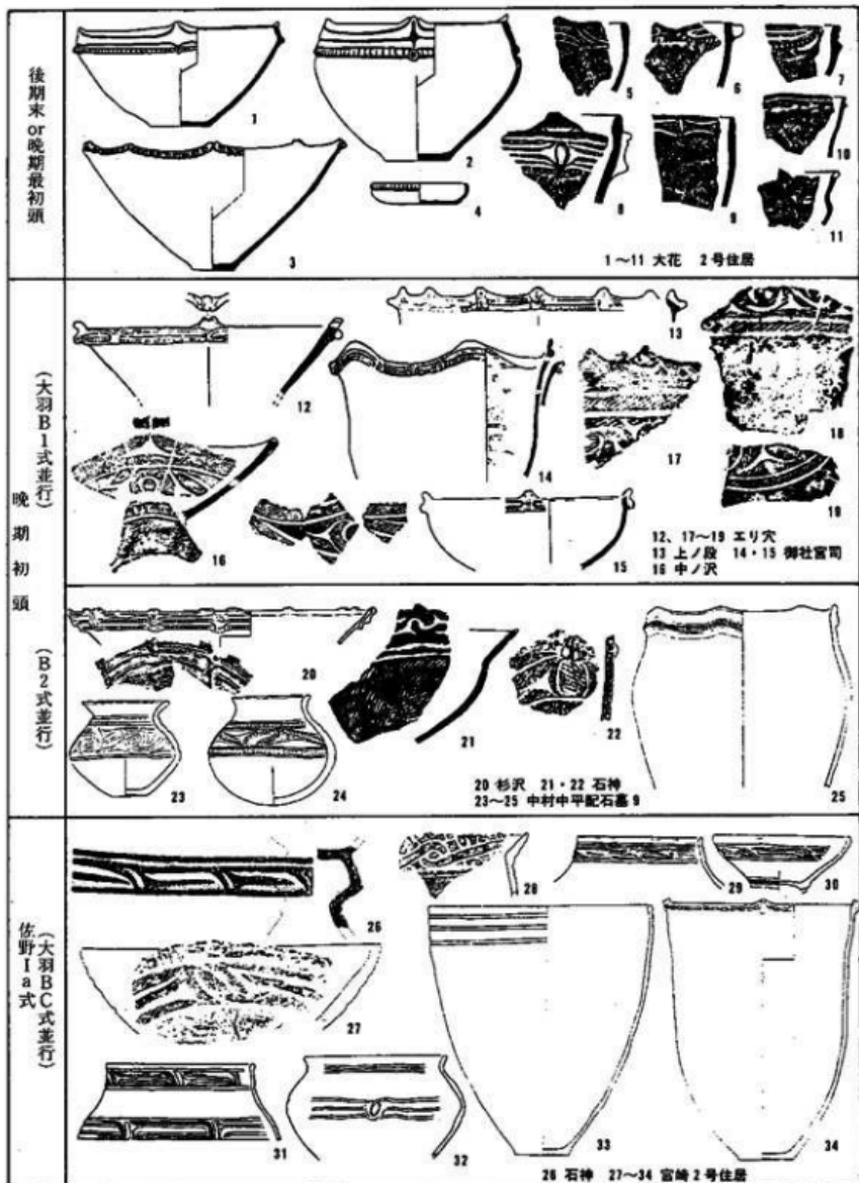


図186 晩期最初頭の移り変わり

三又文と系統は異なるが、その影響で在地的に出現した可能性が高い。口縁部に対弧状の沈線をもつ深鉢(図版—5・9)もともなう。この段階を後期最終と扱うか、晩期最初と扱うかは課題である。

三又文が主体的な大洞B1式に並行する段階は松本市元穴遺跡、南牧村中ノ沢遺跡などで確認できる。この段階の隆帯文土器の系統は不明である。小諸市石神遺跡で美瀬津一夫氏採集の上面付注口土器(写62)は関東の安行3a式のものだが、この段階の資料であろう。

大洞B2式に並行する段階は、単体ながら小諸市石神遺跡の美瀬津一夫氏採集の資料にある(図版—22)。御代田町宮平遺跡出土の入り組三又文の土器もこの段階のものである(図版—)。また、おそらくこの段階に三又文が在地的に変形して、佐野Ia式の成立母体となるのであろう。隆帯文土器の系統では、隆帯上位の文様がやや消失傾向気味になる。

佐野Ia式

山ノ内町佐野遺跡出土資料を基準に佐野Ia式は設定される。佐野Ia式はかつて連鎖状三又文を基準に考えられたが、むしろ長野市宮崎遺跡2号住居出土資料(図版—27・29—33)を基準に考えることができる。その文様は三又文が変形したもの(図版—27・29—32)、変形した三又文が多様に入り組むものが展開する。器種では深鉢、浅鉢、壺、皿、蓋形土器などがある。粗製深鉢は砲弾形に幅広い数条の沈線をもつもの(図版—33)、無文のものなどであるが、これらに隆帯文土器とされる、口縁部に隆帯をもち隆帯より上位に文様をもたない土器(図版—34)をもとまう。

宮崎遺跡2号住居では、大洞BC式の影響を受けた羊歯状文をもつ土器(図版—34)と関東の安行3b式が、戸倉町円光房遺跡26号住居で東海の元刈谷式が佐野Ia式にともなった。佐野Ia式は東北の大洞BC式、関東の安行3b式、東海の本刈谷式に並行しよう。御代田町では佐野Ia式の出土例はまだないが、小諸市石神遺跡で出土例がある(図版—26)。

佐野Ib式

佐野Ib式はまだ一括資料にめぐまれていないが、佐野Ia式、Ib式がまとまる戸倉町円光房遺跡1号土器集積から佐野Ia式を引き算することが可能である。鍵の手法という文様(図版—1・3)がその指標とされるが、それに変形した三又文が多様に入り組む文様がともなう。鍵の手法をもつ器種は深鉢、浅鉢、壺、鉢などである。また直線的な縄文帯をもつ深鉢、浅鉢、平行沈線間に列点刺突をもつ深鉢、浅鉢などもある。粗製深鉢では砲弾形の器形で数条の幅広い平行沈線をもつものや無文のものがある。

戸倉町円光房遺跡1号集積では佐野Ia式、佐野Ib式に羊歯状文をもつ東北の大洞BC式、雲形文をもつ大洞C1式がともなった。佐野Ib式は東北の大洞C1式、東海の稲荷山式に並行しよう。御代田町では佐野Ib式の出土例はまだないが、小諸市石神遺跡で出土例がある。

佐野II式

中部高地で独自に発達した粗大な工字文(図版—7・10)という文様がその指標となる。粗大な工字文は上下文互に三又状に器面を彫ることで隆線で工字状の文様がなされ、

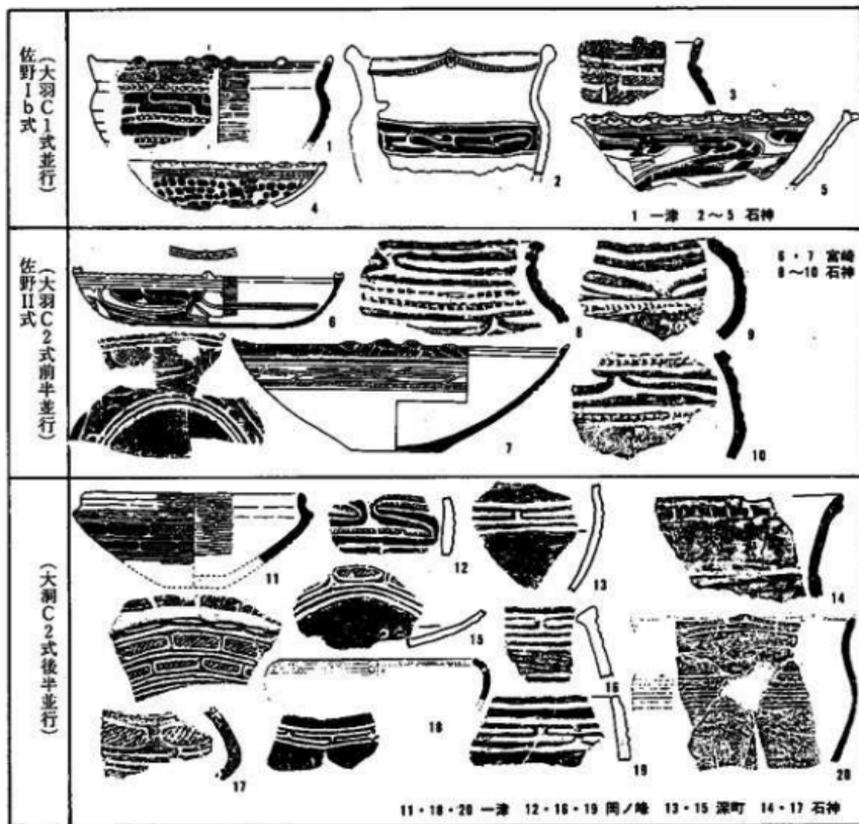


図107 晩期 佐野式の移り変わり

その文様は一段となるものが大半である。文様帯は二条の平行沈線間の列点刺突により区画されるものが多く、それらの口縁部内面には幅八〜一二の凹線状の平行沈線が一〜三条施され、波状口縁の内側は三叉状の影り込みとなる。いっぽう、少数ながらも口縁部内側には幅三〜六、で棒状工具による平行沈線が施されるものもある。粗大を工字文をもつ器種は深鉢、壺、浅鉢、鉢である。粗製深鉢は不明な点もあるが、砲弾形の器形で数条の幅広の平行沈線をもつものや無文のものがともなうようだ。

長野市宮崎遺跡の調査では佐野II式(図107-7)と東北の大洞C2式前半段階の土器(図107-6)が共伴した。これまで水峯光一により佐野II式と大洞C2式の同時性が論じられていたが、具体的な共伴例がなかった。宮崎遺跡の調査で初めて大洞C2式前半との並行関係が明確となった。

御代田町で佐野II式の出土例はまだないが、小諸市石神遺跡では美斎津一夫氏採

集の資料、また小諸市教育委員会の調査で良好な資料がまとまっている。

大洞C2式 東北の大洞C2式後半段階は新潟では上野原式、東海後半の土器では五貫森式前半段階に並行するが、中部高地ではそれに並行する土器は明確でない。ただ千原として以下の三案が考えられる。

①大町市一津遺跡、丸子町深町遺跡、中条村宮遺跡などでは佐野II式の粗大な工字文が直線的に変化した類(図版13・16・18)が存在する。これらは佐野II式に時間的に後続する可能性が高い。

②野沢温泉村岡ノ峯遺跡には新潟の上野原式の影響を受けた土器(図版12)と、①の佐野II式の系統を引く直線的な工字文(図版16・19)が出土した。ただ上野原式の影響を受けた土器は北信濃の地域を考慮する必要がある。

③粗大な工字文をもつ佐野II式が大洞C2式前半のみならず、C2式後半にも並行する。ただこの場合、佐野II式と女鳥羽川式との型式的な非連続性を充分に説明できないという問題点をもつ。③案の可能性も否定できないが、現状での中部高地の大洞C2式後半並行の土器は、①②案の可能性が高い。なお、図版14の石神遺跡例は、東海の上貫森式である。

女鳥羽川式

松本市女鳥羽川遺跡出土資料を基準に設定された。精製浅鉢は内湾する器形で肩部に眼鏡状の付帯文、肩部以下は数条の平行沈線をもつもの(図版1・2・6)、工字文をもつもの(図版9・10)、直線的に外反する器形で外面や内外面に数条の

平行沈線をもつもの(図版4・5)、粗製深鉢・甕では口縁部に一、二条の平行沈線をもち、胴部が無文のもの(図版12・13・15)などが型式を構成する。

精製浅鉢の眼鏡状付帯文は、東北の大洞C2式後半からA式前半、新潟の上野原式から鳥屋1式の精製浅鉢に見られる特徴で、女鳥羽川式の精製浅鉢は東北や新潟方面からの影響で成立する。いっぽう、女鳥羽川式の粗製甕の器形は、東海の上貫森式の甕からの影響で成立する。ただ粗製甕の口縁部の沈線は佐野II式に少数ながらある口縁内面にある幅狭な三六の沈線からの系統である。女鳥羽川式は佐野II式の系統を母胎として東北・新潟や東海の影響で成立する。

女鳥羽川式は東北の大洞A式前半段階、新潟の鳥屋1式、東海の上貫森式後半段階に並行する。愛知県豊橋市五貫森貝塚では女鳥羽川式と上貫森式後半段階が伴している。なお御代田町ではまだ女鳥羽川式の出土例はない。

離山式

穂高町離山遺跡出土資料を基準に設定された。精製浅鉢は内湾する器形で、隆線を束ねて調整した浮線文(浮線網状文)をもつ(図版16・17・19)。浮線網状文は上下を平行沈線で区画される。直線的に外反する精製浅鉢では外面、内外面に三条以上の沈線をもつ(図版18)。粗製深鉢・甕では口縁部に三条以上の多条な沈線をもち、胴部は無文のものが多い(図版24)。胴部の地文では木口を引いた細密条痕、燃った糸を軸に巻いて回転させた燃糸文も少数ながら出現する。粗製甕の形態の肩部に精製浅鉢の浮線文をも

つ半精製土器も多くなる。甕が変化してできた大型甕もこの時期に出現する。

離山式では浮線文精製浅鉢が発達、半精製土器が発達など新潟の鳥屋2a式からの影響が多く見られるが、粗製甕では器形は女鳥羽川式からの伝統で、鳥屋式の粗製甕とは異なる。ただ甕が変容した大型甕の出現は、弥生化への兆候といえよう。

離山式は東北の大洞A式後半、新潟の鳥屋2a式、東海の馬見塚式と並行する。西日本ではこの時期に弥生時代前期に突入する。離山式は御代田町ではまだ出土例がない。

水1式

小諸市水遺跡出土の水遺跡第1群を基準に設定された。中部高地における縄文時代晩期最終末の土器型式である。精製浅鉢では口外帯という口縁端部の裝飾、外湾する頸部の無文帯、胴部に浮線文(浮線網状文)をもつ(図10—3・9・10・12・14)。離山式の浮線は隆線を束ねて調整するのに対し、水1式の浮線文は器面を彫り込むことで浮彫り状に浮線を作出する。離山式と水1式の精製浮線文浅鉢とは、文様帯構成および浮線の表出法で異なる。浮線文をもつ精製器種には浅鉢のほか甕(図10—11)や壺(図10—15・17)もある。また精製浅鉢では口外帯、頸部無文帯をもち、胴部無文の精製無文浅鉢(図10—22・23)もある。粗製甕では口外帯以下に数条の浮線をもち、胴部には細密条痕が施される(図10—8・19・27)。細密条痕には船状の沈線が施されるものもある。胴部無文のものもある。底面

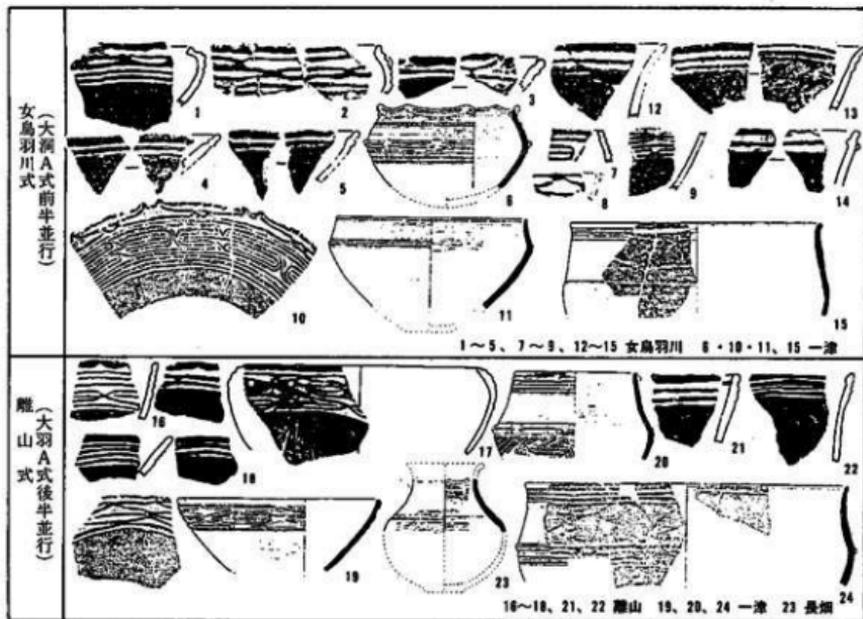


図100 女鳥羽川式から離山式への移り変わり

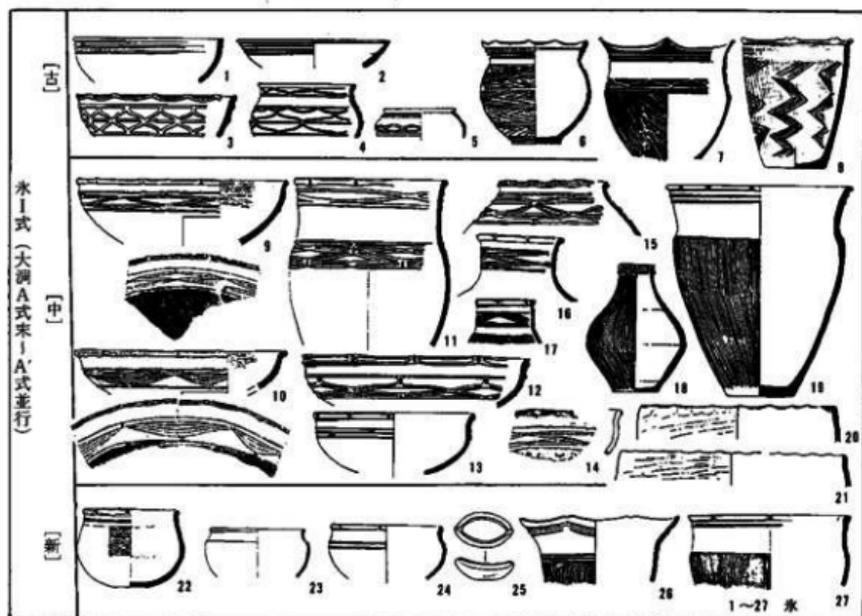


図109 晩期末水Ⅰ式

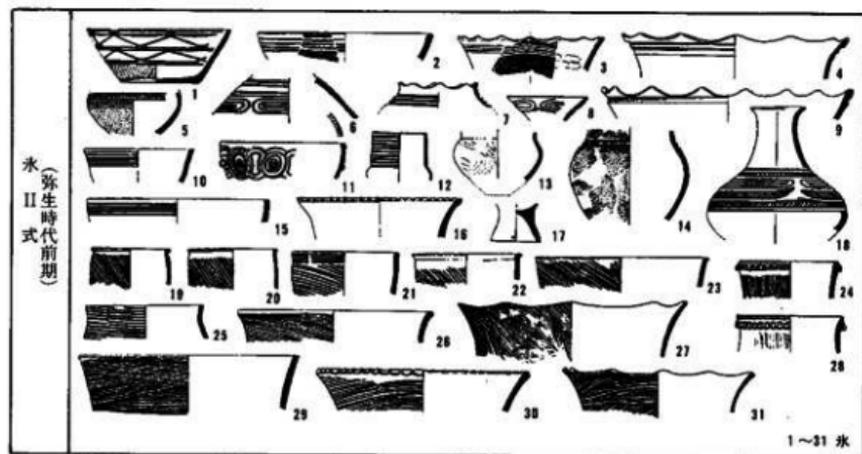


図110 弥生前期 水Ⅱ式

は土器製作時に編物を敷いた跡が確認される網代底である。半精製甕もある。

水Ⅰ式は長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点や群馬県倉沢村三ノ倉落合遺跡出土資料をもって古、「水遺跡第1群」でも主体の資料により中、松本市石行遺跡出土資料をもって新とさらに三段階にその変遷過程が認められる。古段階では精製浮線文浅鉢で頸部無文帯が短く(図100-3)、粗製甕の口外帯以下の浮線が三条以上と多条(図100-8)、中段階では精製浮線文浅鉢の頸部無文帯が発達し(図100-9・10・12-14)、粗製甕では口外帯以下の浮線が二条となり(図100-19)、新段階では精製浮線文浅鉢の数が激減、粗製甕では口外帯以下の浮線が一条となる(図100-27)。また新段階で水式突帯壺という中部高地で独自に発達した突帯が口縁部にめぐり、甕から変化した大型壺が出現する。水Ⅰ式の精製浮線文浅鉢はその文様意匠で東北や新潟方面からの影響を受けるものもあるが、基本的には水Ⅰ式粗製甕の變形器形の製作手法を取り入れ、精製浮線文浅鉢の頸部が短いものから長いものへと発達する。水Ⅰ式の精製浅鉢は型式内の内在的な要因で変化するといえる。粗製甕の變形器形は女鳥羽川式、離山式からの系統だが、鳥屋2式の粗製深鉢からの影響で胴部に細密条痕が多くなる。いっぽう、新段階に出現する水式突帯壺は水Ⅰ式の粗製甕が大型壺化したものだが、突帯をもつ東海の壺王式の壺の影響を受けて、中部高地で独自に発達した在地的な突帯をもつ。ちなみに水Ⅰ式の時期には東海の壺王式の流入が目立つようだ。

水Ⅰ式の主体は東北の大洞A式、新潟の鳥屋2b式、東海の壺王式

に並行する。近畿では弥生時代前期中段階に相当する。御代田町では戻場遺跡に水Ⅰ式がまとまる(図103)。また近隣では標式遺跡の小諸市水遺跡のほか、佐久市下茂内遺跡などで水Ⅰ式がまとまる。

水Ⅱ式

小諸市水遺跡出土の水遺跡第2群・3群を基準に設定された。かつては中部高地の縄文時代晩期最終末の土器型式とされたが、今日では弥生時代前期の土器型式として扱われている。甕では口外帯が消失し、口縁端部は面取りされたり、刻目をもつ。

胴下半部や胴部全面に条痕が施されたり、無文である(図101-16・23・26・27・29-31)。条痕は水Ⅰ式の木口による条が整った細密条痕から植物の茎を束ねた条が不整な条痕へと変化、また貝殻による条痕もある。甕の口縁部には数条の平行沈線をもつものもある(図101-2・3)。ただその沈線の出現は水Ⅰ式までさかのぼるようだ。水Ⅰ式で出現した水式突帯壺もこの時期に卓越する(図101-24・28)。浮線文浅鉢は消失するが、精製浅鉢では東北からの搬入、もしくは影響を受けたものが目立つ(図101-1)。

水Ⅱ式は東北の砂沢式、青木畑式、新潟の緒立式、東海の水神平式に並行する。御代田町ではまだその出土はみられない。

三 御代田町周辺の晩期遺跡

北佐久地方の縄文時代晩期の遺跡は、隣接する小諸市石神遺跡、水遺跡、望月町浦谷B遺跡など、学史的に著名な遺跡に囲まれているに

もかわならず、御代田町では一九九七年現在のところ宮平遺跡と炭場遺跡の二遺跡しか確認されていない。今後新たな遺跡の発見も当然予想されるが、まずはこの二遺跡、そして周辺の代表的な遺跡を紹介する。

宮平遺跡 後期の配石遺構で

著名な宮平遺跡では、大量かつ良好な縄文時代後期の遺物が数次にわたる調査で出土しているが、そのなかで一点ながら縄文時代晩期初頭の土器片が確認される(図10)。この土器片は小破片ながら東北の縄文時代晩期初頭の大洞B式の特徴である入組三又文の文様が施され、東北からの影響を受けたものである。

炭場遺跡 炭場遺跡は御代田町大字馬瀬口字炭場、柳沢嘉兼氏所有の畑一帯を中心に存在する(写60)。柳沢氏の畑は古

くから縄文式土器片が採集でき、それらを柳沢氏は大切に保管されていた。嘉兼氏の子息賢次氏は勤務先が東京大学であったため実家に保



写60 炭場遺跡の立地

管していた縄文土器の鑑定とその扱いを同じ東京大学文学部考古学研究室の大塚達朗に依頼したことで遺跡が周知された。

柳沢家の畑で採集された資料は、縄文時代早期細久保式・田戸下層式・田戸上層式・「下炭田遺跡早期第一群」、早

期末では最終木仮称「ブレ塚田式」と扱わなければならない。多岐多岐の絡糸体圧痕文の縄文尖底土器など早期の良好な資料が中心だが、そのなかには中部高地の縄文時代晩期最終末土器型式の水1式土器も確認された(図11)。

御代田町で早期の資料は塚田遺跡、下炭田遺跡、川原田遺跡などでこれまで確認されていたが、水1式土器の資料は隣の小諸市に水遺跡が存在するにもかかわらずそれまで確認されていなかった。御

代田町教育委員会では資料の重要性をかんがみ、付近のめがね塚古墳第二次調査の際に炭場遺跡の範囲確認調査を行なった。

炭場遺跡の現地に立つと小諸市水遺跡と遺跡立地が似ていることに



写61・図111 炭場遺跡出土の水1式土器(図1:2)

気付く。戻場遺跡は戻場地帯を東西に流れる横矢川の北側に位置し、標高七六〇m。浅間山の火砕流の堆積物を河川が刻んだ崖状地形（田切り地形）中段の南向き斜面に立地する。いっぽう、小諸市水遺跡も千曲川の対岸ではあるが、崖状地形の斜面地に立地する。中部高地の縄文時代晩期末の遺跡では、集落域と廃棄場が分離する傾向にあり、廃棄場は斜面地や湿地化した凹地が選択されるという。国学院大学による水遺跡の調査では、斜面地から大量に遺物が出土した水遺跡では斜面地の上段台地の平坦な部分におそらく集落域があり、そして生活でのゴミとなった食物残渣、使用不可となった土器や石器などが斜面地に廃棄されたのであろう。戻場遺跡の場合はまだ遺跡の性格を判断するに、まだ十分な調査がなされていないが、範囲確認調査によると斜面地に黒褐色土の遺物包含層が堆積し、水1式土器が出土した。本格的な調査はこれからの遺跡であるが、戻場遺跡もその斜面地が廃棄場として扱われた可能性が高い。御代田町の縄文時代晩期末の歴史を復元する上で、今後の戻場遺跡の本格的な調査に期待がもたれる。

小 諸 市 小諸市石神地帯では湧水地付近の二本の榊の木に挟
石 神 遺 跡 まれ、弥都波能売命を祀る石の祠がある。明治十三（一八八〇）年の旧八満村の記録では「御魂代の石槌数基、長二三尺、大小あり。美質にして青白に二種、又陽形なるあり。杜地の四面田あり。又畑あり。平坦にして土中より、祭器の碎たる古瓦等多く出で、砂石に混ず。又矢の根石の出ること多し。」と記述され、御神体に縄文時代の石榊が祀られ、付近の田畑では土器や石榊が採集できたことが知り

うる。石神の地名は御神体の石榊に由来するのであろう。

石神遺跡では明治年間から今日においても、縄文時代早期から晩期にかけての土器や石器を採集することができる。遺物が採集できる範囲、つまり遺跡の範囲は標高七七〇—八二五mの東西の緩斜面上には一〇万平方mと広がる。とくに小諸市の故美齊津一夫氏が、小諸市立火山博物館（現小諸市立郷土博物館）に寄贈された採集資料には中部高地の縄文時代晩期前半佐野式の良い資料のほか、晩期初頭の人面付き注口土器（写62）、東北の晩期前半特有の遮光器土器、またそれぞれ一片ながら北陸の晩期初頭の八日市新保式土器、東海の晩期晩期後半五貫森式土器と縄文時代晩期での地域交流を語る長野県内でも重要な資料が確認されている。

石神遺跡の本格的な調査は、平成三（一九九二）年に農地の圃場整備にともなう小諸市教育委員会による調査、また上信越自動車道建設工事にとまう長野県埋蔵文化財センターによる調査と開発にともない行なわれた。小諸市教育委員会による調査では、縄文時代前期の住居一三棟、後期の住居二〇棟、土坑墓四基、平石の石棺墓二一基、配石遺構一基、埋壘一基、晩期の住居六棟など、遺物では早期から晩期までの土器、石器、土製品、石製品、骨角器、動物遺体などが出土した。とくに縄文時代後期の集落と墓地を検討する上でも、重要な遺跡と評価できる。

縄文時代晩期についても、石神遺跡は貴重な資料を提供する。それは長野県内において六棟以上の晩期の住居が発見された例はほかに類例のない点、晩期前半中葉のものとして推定される石榊が七九一点、また

大量な剥片が出土して石鏃が多量に生産された跡がうかがえる点、晩期の石神の人々の装身具や精神生活を知る手がかりとなる土製耳飾り、玉類、石棒、独結石^{トコトシ}が出土した点などに問題が集約されよう。

石神遺跡の晩期の住居跡はJ24・J27号住居が晩期前葉のもの、J15・J28・J37・J38号住居が晩期中葉のものであるが、そのほかおそらくJ22・J29号住居も晩期中葉の住居であろう。調査で確認された、もしくは推定復元された石神遺跡の晩期前葉から中葉までの住居跡の平面における形は、不整な円形か楕円形気味の形となる。J37、J38号以外はすべて住居の中央部付近に石に囲まれた炉をもつ。J37、J38号住居もその中央部が後の時期の土坑で壊されているが、実際には石囲炉^{いしごま}をもっていた可能性が高い。晩期の石囲炉の石はJ24号住居の石囲炉の石以外は、すべて安山岩質の礫を用いている。柱の穴は住居の壁に沿ってめぐらされている。やや楕円形気味の平面形、中央部に安山岩質の石による石囲炉、壁に沿ってめぐる柱と石神遺跡の晩期前半の住居形態の傾向が見えてくる(写64)。

晩期前半のJ15号住居からJ22・J28・J29・J37・J38号住居を結ぶ半円形内、一二×八ほどの狭い範囲内から晩期前半の七九一点の石鏃と多量の石器剥片が出土した。石鏃や剥片の石材は佐久市八風山^{やま}産の安山岩がほとんどである。剥片のほとんどは一〇センチ以内の大きさで、石鏃を作る途中のものである。石神遺跡では石鏃が数量的に卓越するいっぽうで、土を掘る打製石斧、トチの実やドングリなど堅果類を砕く磨石、石皿などのほかの石器が少ない。石神遺跡では晩期前半において石鏃を多量に生産、保有していたと理解することができる。



写62 石神遺跡の人面付注口土器

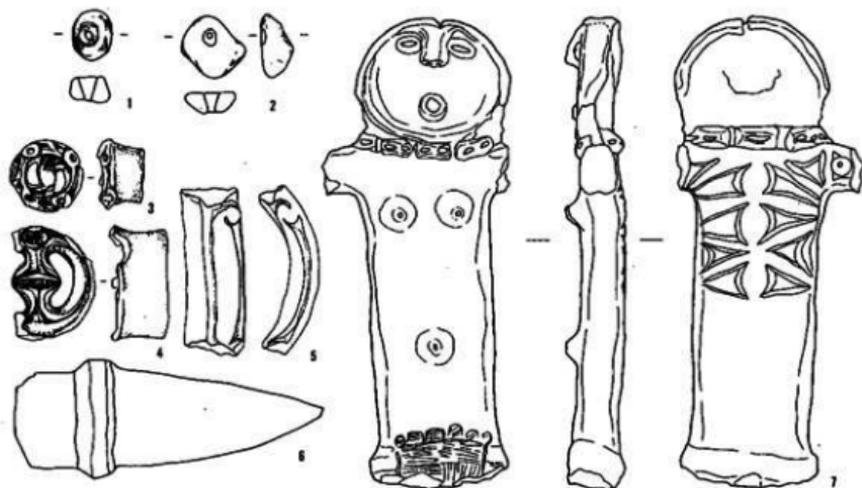


写63 石神遺跡の透光器土偶



写64 石神遺跡J15号住居跡(小諸市教育委員会提供)

石神遺跡では晩期前半の装身具関係の遺物でヒスイ製の玉(図112)やその原石、土製耳飾(図113・115)、また呪術関係と考えられる石製の刀剣状の形をした石剣^{ユツリ}、仏具の独結^{トコトシ}に似た形をする独結石(図116)なども出土した。ヒスイは新潟県姫川^{つばが}付近でしか採集できず、



1、2 ヒスイ製玉 3～5 土製耳飾 6 独鈷石 7 土偶

図112 石神遺跡の晩期遺物（「石神」より）

また硬質のため穿孔などの細工には多大な努力、時間を必要とするが縄文時代全般でヒスイ製の石製品は北海道や九州にも出土して広範な分布を示す。西村正衛はヒスイ製の石製品を縄文時代においてもつとも価値が高い財と考えた。ヒスイ製の石製品は今日の宝石のように輝かしい装飾品であるとともに、価値が高い財産の役割をはたしたのかもしれない。

華麗に装飾された土製耳飾り（図112—3～5）は縄文時代後期半ばから晩期前半のころに流行した装飾品である。宮平遺跡でも後期後半の土製耳飾が出土している。埼玉県岩槻市真福寺遺跡出土の縄文時代晩期のミズク形土偶の顔面の耳のあたりには、この土製耳飾が耳に装着された表現がある。土製耳飾が文字どおり耳に装着されたものとみて間違いない。さて土製耳飾を耳に装着する場合、耳朶に穴を開けなければ装着できない。今日耳にピアスをつけるために耳朶を穿孔する人もいるが、縄文時代晩期前半の人々も同様のことをしていたのであろう。

さきに述べた石神遺跡出土の東北の晩期前半に多い遮光器土偶は長野県内では坂城町横町遺跡、戸倉町円光房遺跡、大町市一津遺跡など数例しかないものだが、石神遺跡ではそのほかに興味深い中部高地独自の晩期土偶が出土する（図112—7）。J32号住居出土の土偶はその全体像を知りうる貴重な例だ。J32号住居は後期後半から晩期前半の土器が出土して時間幅をもつが、J32号住居出土の土偶は晩期前半の特徴をもつ。板状の形状、中実で顔面は後期の仮面土偶の系統を引く。首の回りには短沈線、もしくは刺突をもつ隆帯がめぐり、胸部には乳

房を表現した一対の突起をもつ。突起は腹部にもある。股部は細沈線が充填されたパンツ状の文様が、また背面には三叉文が施される。まづ板状の形状は中部高地の晩期前半の土偶の特徴、また股部の細沈線を充填するパンツ状の文様は東北地方の晩期前半の土偶に見られる特徴だ。また土偶の背面の三叉文は晩期前半の土器文様と関連がありそうだ。土偶は縄文時代の特徴的な遺物であるが、その用途はわかっていない。J32号住居の晩期土偶は乳房の表現から女性を意識したものとまではいいうるが、それよりさきの根本的な分析はこれからといえる。

ヒスイ製の石製品・土製耳飾り・石剣・独鈷石・土偶などこれらの遺物は、直接的には狩猟漁労採集などの生業活動にはかかわりがなく考古学資料である。土偶・石剣・独鈷石などはまたその使用目的も定説がないのが現状だ。ただこれらの遺物は縄文時代の流行、風俗、また精神生活を知る手掛かりとなることは間違いない。これらの資料が得られたことは石神遺跡の調査の大きな成果の一つといえる。

小諸市水遺跡 昭和二十九(一九五四)年五月、北佐久郡川辺村川
の調査 辺中学校(現小諸市。川辺中学校は現小諸市立芦原

中学校に統合)に二人の青年が訪れた。二人の名は水峯光一と樋口昇一。現在の国学院大学教授と長野県文化財審議委員の若き日の姿である。二人は「信濃史料」編纂作業のため長野県内各地を回り、各施設に所蔵されている考古学資料の調査を行っていた。連日の調査作業で若干疲労気味の二人ではあったが、調査を開始した途端にある資料が目が釘づけとなった。学校の所蔵資料のなかに、それまで中部高地

では実態が不明であった縄文時代晩期でも終末の良好の資料がまともっていたからである。

縄文時代晩期とは戦前に山内清男が「亀ヶ岡式およびそれに並行する土器型式」をくくった大別区分であり、東北は勿論、西日本にまで広域に分布する大洞式(亀ヶ岡式)が、型式群をくくる有効な指標となる点に着目して規定した概念である。大洞式(亀ヶ岡式)の本場である東北では晩期の土器編年は戦前においてほぼ確立されていたが、中部高地の縄文時代晩期の土器は一部しか知られておらず、その時点では実態が不明であった。

川辺中学校所蔵資料の重要性に気づいた二人は早速、資料が採集された地点にむかった。そこは千曲川の段丘上、小諸市川辺地区大久保水部落の前田禎氏の桑畑で、畑には中部高地では縄文時代晩期末の土器の大型破片が散乱していた。思いがけない重要遺跡との邂逅に二人は驚喜し、晩期末の資料の採集を始めた。

これが中部高地の縄文時代晩期末水式の標式遺跡である水遺跡発見の経過である。東京に戻った水峯はその後、国学院大学考古学研究室として昭和三十(一九五五)年四月に中部高地の縄文時代晩期文化解明のために遺跡調査を行なった。また平成六(一九九四)年にも四〇年振りに水遺跡第二次調査を行なっている。

水遺跡で出土した考古学の遺物は土器・石器・土偶・土製品・管玉、獸骨などである。水遺跡出土の土器を水峯光一は浮線網状文の施される土器群などを中心に水遺跡第1群土器、沈線文が施される土器群などを中心に第2群土器、条痕文土器群を中心に第3群土器に分類し、

水遺跡第1群土器を基準に水1式、第2群土器とそれにとまう第3群土器を基準に水2式を型式設定し、水2式を中部高地の縄文時代晩期最終末の土器型式と位置づけた。

水1式は土器の器面を彫刻的にえぐり、浮線という細かいレリーフ状の細かい線で浮線網状文（浮線文）とよばれる文様が描かれると浅鉢、木の木口を原体として細密条痕という細かい条痕が引かれて胴部に地文が施される深鉢や甕が特徴である。深鉢や甕の細密条痕の上には稲妻状文とよばれる沈線が施されるものもある（図四、写65）。

水2式は東北の変形工字文土器の影響を受けた浅鉢、平行する数条の沈線を受けて突帯をもつ壺、整った細密条痕が崩れ、粗雑な条痕が施される甕や壺、貝殻条痕に近い条痕が施される甕などを特徴とする。ちなみに水遺跡第2群の変形工字文系浅鉢は東北の土器編年研究にもとづくと、最近では縄文時代晩期末のものというより、弥生時代前期末の砂沢式のものに近いという見解が示されている（図四）。

一九八〇年代以降の研究成果にもとづけば、今日では水1式が縄文時代晩期の最終末型式、水2式は弥生時代前期の土器型式に扱われる見解が主流となり、また水遺跡第2群の一部は水1式と同時期のものである点も確認されているが、水峯による水遺跡の調査、そして水式土器の型式設定が中部高地の縄文時代晩期の研究を大きく前進させたことは間違いない。

水遺跡では石鎌、打製石斧、磨製石斧、石錐、磨石、石皿、横刃型石器などの生業活動の痕跡を示す石器類も出土している（図四）。磨

石、石皿はトチの実、ドングリ類などの堅果類を食用に粉砕できる道具で、生業における植物質食料への依存を暗示させるものだ。狩猟活動での矢に使う石鎌では舌をもった飛行機鎌との呼び方もある特徴的な形をしているものが多い。その石材は黒曜石がほとんどだ。中部高地の縄文時代晩期前半の遺跡から出土する石鎌が北信ではチャート質小諸市石神遺跡では佐久市八風山産の安山岩の石材を用いるものが多い点を考慮すれば、中部高地の晩期後半のある時期に石材産地からの石材の供給ルートに何らかの変化がおこったのだろう。

水遺跡の土製品の中でもスプーン状土製品の存在は当時の器以外の

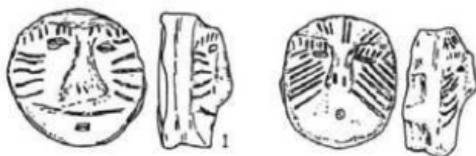


写65 水遺跡出土の水1式土器(上)と遺跡の調査(下)

(小諸市教育委員会提供)

食器を知る上で興味深い(図11)。水遺跡で生活した人々は出土した石鏡を先端に付けた矢で捕らえた獣、採集して石皿で粉砕した堅果類をもって今日の研究者が氷式土器という器に入れて煮炊きし、スープを作っていたのだろうか。では熱いスープをどのようにして食べるか。素手を使えば当然のこと、火傷を負ってしまう。おそらくこのスプーン状土器製品を用いたり、木製のスプーンを用いたのだろう。

中部高地の水Ⅰ式などが出土する遺跡では、水遺跡のみならず野面土偶とか有髻土偶とか特徴的な顔面装飾をもつ土偶が出土する(図11)。これらは顔面の頬のあたりにかけて数条の線が施される(図11)。これは顔面の頬のあたりにかけて数条の線が施される。弥生時代後期末の話だが、邪馬台国や卑弥呼のことを記録することで著名な



写66・図113 松本市石行遺跡(上)(松本市立考古博物館提供)と水遺跡(下)出土の野面土偶

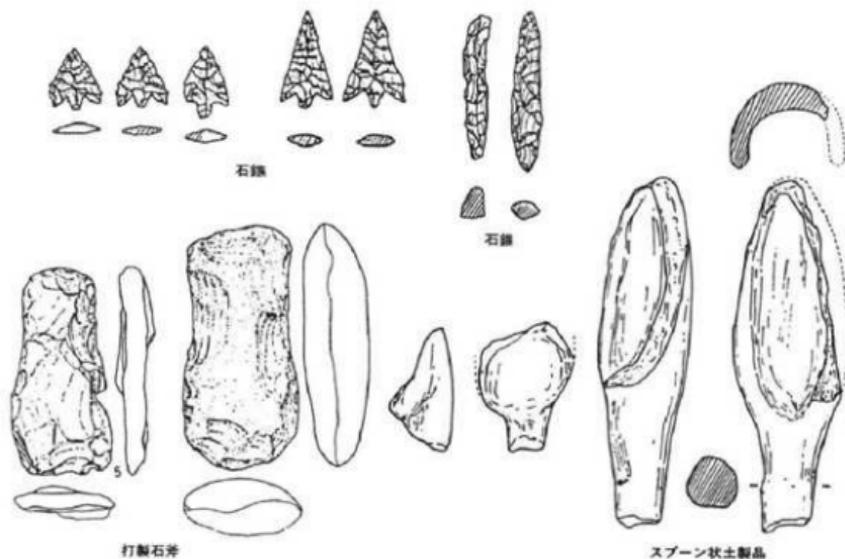
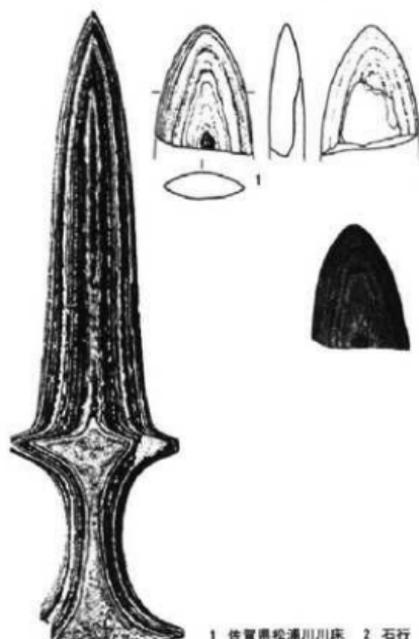


図114 晩期の道具(水遺跡出土品)



写67・図115 木目状編文様のある磨製石剣

魏志倭人伝では「黽面文身」と、当時の倭国に住む人々が入れ墨を顔や体に施していたことを記録している。これらの土偶は中部高地の縄文時代晩期末のころの人が、顔面に入れ墨をしていたことを物語るものかもしれない。

農耕とは直接関係ないが、弥生時代にかわりのある遺物が水遺跡に出土している。甲元眞之が「弥生系管玉」と定義する弥生時代に特徴的な管玉が第二次調査で見つかった。また、松本市石行遺跡出土の木目状編文様のある磨製石剣は朝鮮半島の影響を受けた有柄式磨製石剣であるという(図15)。松本市石行遺跡の磨製石剣は水Ⅰ式末の時期のものである。思わぬ早さで弥生系の文物がこの中部高地にもたらされたことを示す資料であろう。

四 晩期の生業

縄文時代晩期 南信の駒ヶ根市荒神沢遺跡は、縄文時代晩期末の木
の植物食 Ⅰ式を主体とする時期の遺跡だ。この遺跡に縄文時

代の終焉の植物利用の一端をかいま見る手がある。荒神沢遺跡Ⅱ号土坑は長さ四〇×二五の楕円形、深さ一五と浅めのたらい状の形をし、同遺跡のほかの晩期末水Ⅰ式期の土坑に近い形態だが、このⅡ号土坑から火熱を受けて塊となったトチの実が一〇〇個近く出土した。出土したトチの実のほとんどは外皮がむかれていた。

また低湿地の新潟県巻町御井戸遺跡では、縄文時代晩期後半Ⅰ末の包含層からA層とB層の二層に分かれてトチ、ドングリ類、クルミ、クリなどの可食植物種子である堅果類の利用残滓が層をなして検出された。縄文時代晩期の植物食がうかがえる事例である。うちA層ではトチが大半を占め、B層ではトチの実のほか、常緑広葉樹のカシ類、落葉広葉樹のナラ類、クヌギ類のドングリの利用残滓が多くを占めた。御井戸遺跡出土のトチの実はそのほとんどが外皮が取り除かれ、ドングリでは外皮そのものが廃棄され、層をなしていた(写68)。

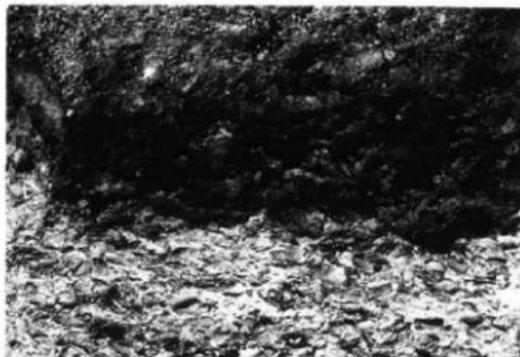
晩期前半では北信の長野市宮崎遺跡Ⅱ号住居で晩期前半の佐野Ⅰa式土器にともない、クルミの殻が多数出土した事例もある(写69)。

縄文時代全般においてその生業活動で植物質食料の採集が重



写69 長野市宮崎遺跡から出土したクルミの殻

(「宮崎遺跡」より)



写68 新潟県御井戸遺跡から出土したトチの実

(巻町教育委員会提供)

御井戸遺跡からは、トチ・ドングリ類・クルミ・クリなどの堅果類の利用残滓が層をなして検出された。

要な役割をはたしていたことはいまでもない。すでに前章で述べたとおり、明科町北村遺跡の縄文時代後期人骨のコーラゲン分析では、摂取食物に占めるトチの実やドングリなどの堅果類や根茎類の割合の高さが指摘されている。ただ御代田町の遺跡では、一九九八年現在までのところ縄文時代晩期の植物質食料利用の痕跡となる遺物や遺構が確認されていない。しかし、尻場遺跡や宮平遺跡で晩期に活動した人々がトチの実、ドングリ類、クリやクルミなどの木の实、天然のヤマイモなどの根茎類を採集、食べて生活していたであろうことは想像に難くない。では前述の荒神沢遺跡、御井戸遺跡、高崎遺跡をはじめとする晩期の遺跡、また諸研究の成果から御代田町における縄文時代晩期の植物質食料の利用形態を推定してみる。

まず御代田町の現在の植生から当時の植生の復元を試みる。御代田町の標高は七二〇～二五六メートル、そして縄文時代晩期の宮平遺跡で標高八〇〇メートル、尻場遺跡で七六〇メートル、周辺の小諸市水遺跡で六〇〇メートル、石神遺跡で七九四～八四五メートル、望月町浦谷B遺跡で八〇〇～八四五メートルと御代田町を中心とする北佐久地方の晩期遺跡では、標高にして七五〇～八五〇メートル前後に立地するものが多いようだ。さて、今日における御代田町の植生では、クリやコナラを主とする落葉広葉樹林帯がほぼ標高一〇〇〇メートル以下の地点で広がり、標高一〇〇〇メートルから一七〇〇～一八〇〇メートルまでの範囲をミズナラを主体とした林、それ以上の浅間山をはじめとする地帯では、亜高山もしくは高山帯の植物の林となる。さきに述べたとおり縄文時代晩期の平均気温が今日より約一度低く、標高一〇〇〇メートル高くすることに気温が〇・五五度下がる訳だから、単純



図116 トチのコザワシ作業全景図

赤山陣屋跡遺跡調査の成果と古環境調査の成果をもとに、当時の作業風景を復元した。描写の留意点として、時期の設定、湧水の利用、斜面崩壊土の堆積による水辺空間の形成、周辺の斜面林を構成する管理されたトチの林、トチ棚の北側への増設、地盤沈下への対応、他の付帯施設の位置関係から想像される作業空間のロケーションなどの諸条件を考慮した。〔『季刊考古学』55号より〕

に考えればこれに今日の植生の範囲より標高にして約一八〇メートル高い地点での植生を想定する必要がある。とすると縄文時代晩期の御代田町域では、ほぼ標高九〇〇メートル以下の地点はコナラやクリなどの落葉広葉樹林帯にあり、晩期の主要遺跡も落葉広葉樹林帯の中に位置していたものと推定できる。一般に縄文時代晩期では東日本で落葉広葉樹林帯が、西日本で常緑広葉樹林帯が分布するとされるが、縄文時代晩期の御代田町も東日本の植生の中にあるといえ、そこで活動した縄文時代晩期の人々はコナラ、クヌギやミズナラなどのドングリ類、クリ、クルミ、トチの実など落葉広葉樹の植物種子を採集、生活の糧としていたのであろう。

さて、コナラ、クヌギやミズナラなどの落葉広葉樹のドングリ類ではタンニン、またトチの実ではサポニン・アロインとアクを含み、そのままでは食することができない。クヌギやミズナラなどのドングリ類は水晒して加熱、トチの実は灰汁を用い、水晒しに加熱を行なってアク抜きをする必要がある。そしてアク抜きする過程、またアク抜き後に粒や粉状にしてようやく口にすることができた。埼玉県川口市赤山陣屋跡遺跡では縄文時代後期末から晩期前半にかけて水を管理した杭と加工材の集積、トチの実のアク抜き作業を行なった板囲い遺構、大量のトチの外皮が廃棄されたトチ塚、大型粗製深鉢の出土からなるトチの実加工場が発見された(図116)。赤山陣屋跡遺跡以外にも栃木県小

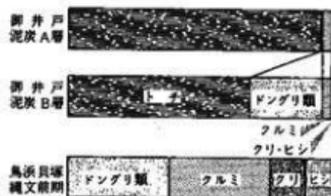


図117 新潟県御井戸遺跡のトチ依存率
 (『巻町史』より)

量消費による結果と考察されている。

さきに触れた御井戸遺跡ではA層でトチの実が主体、B層でも全体のほぼ三割とトチの実に対する利用依存度は高い。トチの実のほかの堅果類にくらべカロリーが高く、御井戸遺跡の人々が堅果類のなかでもトチ嗜好の強い食生活をしていいたのではないかと推測された(写68)。青森県本道町亀ヶ岡遺跡の縄文時代晩期の層の花粉分析ではトチノキ属の花粉が三〇割と高い出現率、クリ属、クルミ属の花粉でも高い出現率の結果が得られた。トチの木は天然の状態では群生をせず、落葉広葉樹林の中に単木で生える場合が多い。にもかかわらずトチの木の花粉数値が高い割合を示すことは、おそらく縄文時代晩期の人々がトチの実をたわわに実らせるトチの木、またクリやクルミの生える環境を下草刈りなどで手を加えて保護した結果などであろう。また石川県金沢市米泉遺跡では晩期前半の集落域の近くにクリ林が存在し

山市寺野東遺跡、山形県寒河江市高瀬山遺跡、中野市栗林遺跡などで縄文時代後晩期の木組遺構、つまりアーク抜き加工場が近年発見され、当時かなり体系だつてトチの実などのアーク抜き処理が行なわれていたことがうかがえる。ちなみに関東地方の縄文時代後期後半の土器で粗製深鉢が大量化、大量化する背景は堅果類の

アーク抜き作業による煮沸用深鉢の大

たことを示すクリの根株跡が発見された。縄文時代晩期の遺跡の調査で確認された建物の柱跡ではクリの材が用いられることが多く、木材としても縄文時代晩期の人々にきわめて有用である。ちなみに米泉遺跡では集落付近の河川跡では推定クリで約二六万個、トチの実で約二四万個分の食物利用残滓が見つかっており、食物としてもクリがきわめて有用であったことはいままでもない。米泉遺跡の集落付近のクリ林には、その利用価値を熟知した集落の人々が何らかの保護を加えていた可能性は高い。

縄文時代 トチの実、ドングリ、クリなど堅果類の植物食は炭水

化物の摂取の点で、縄文時代晩期の食生活に大きく比

重を占めていたが、狩猟、漁労活動によりえた動物食も蛋白質の摂取で重要である。御代田町の晩期遺跡のデータでは動物食物の食べ層である骨などの動物遺存体、狩猟にかかわる遺物はまだ確認されていない。ただ周辺遺跡の調査成果、御代田地域の現在の動物生息から晩期の狩猟を推定することはできる。

御代田町で今日生息する動物は大型哺乳類でツキノワグマ、ニホンカモシカ、ホンシユウジカ、中型哺乳類でイノシシ、ニホンザル、タヌキ、キツネ、アナグマ、テン、イタチ、ノウサギ、ムササビなどがある。小諸市石神遺跡では後期中葉加曽利B2式期の住居で食料残滓でイノシシ、シカの獣骨を主体として、ニホンオオカミ、キジの骨が出土した。縄文時代の遺跡では食物残滓としてイノシシ、シカの骨が出土することが多く、縄文時代全般的に狩猟はイノシシ、シカを主体、

かつそのほかの獣も狩猟対象としていた。御代田町周辺の縄文時代晩期でもイノシシ、シカを主体、またそのほかの獣も狩猟対象としていたのである。

さてイノシシ、シカをはじめとする獣を仕留める飛び道具としては弓矢がある。宮城県石巻市南境貝塚では縄文時代後期の石鏃が射込まれたシカの肩甲骨、静岡県浜松市蜷塚貝塚でも後期の石鏃が貫通したシカの骨盤が出土している。これは縄文時代の弓矢が獣の骨まで達するほどの威力をもっていたことを示し、弓矢が狩猟においてきわめて有効な道具であったことを物語る。縄文時代の遺跡から出土する石鏃では破損したものがあがるが、射的で獣の骨まで接触した結果として石鏃が破損した例も多いと推定されている。

縄文時代の矢はその全体像を知りうる資料はないが、矢の先端に装着する石鏃は遺跡で普遍的に出土する。御代田町周辺の佐久地方の晩期の石鏃は、小諸市石神遺跡の晩期前半の佐野式期の石鏃では佐久市八風山産の安山岩製が主であるのに対し、小諸市水遺跡の晩期末水I式期の石鏃では、和田峠産の黒曜石製のものが多くなる。また水I式期の石鏃は有茎のものが主である(図118)。

石鏃が装着された矢柄の一部は埼玉県大宮市舞能泥炭層遺跡(図118—4)、北海道木古内町札刈遺跡で出土する。舞能泥炭層遺跡出土の矢柄は直径約5cm、肉厚約1cmの中空円筒形のイネ科竹笹類、札刈遺跡例も竹の類である。御代田町に現生する竹笹類はアズマザサ、シナノザサ、ネダケ、ヤダケなどがあり、これらが晩期でも矢柄の材となつた可能性は高い。石鏃の製作の実験では、要した時間が一点〇—二

〇分に対して、石鏃や矢羽の装着をも含めた矢柄の製作では一本一時間かかったという。海外の民族

例でクンブッシュマンは矢柄の製作に手間をかけ、手負いの獲物を追う前に矢を採すなど矢柄を大切に扱う例もある。縄文時代でも狩猟後に装着した石鏃を交換して、矢柄を再利用した可能性は高い。

石鏃を矢柄に装着することに關しては舞能遺跡出土遺物によると矢柄の側面をU字状に削り出し、その先端をベン先状にして石鏃を挟み込んでいる。またいっ

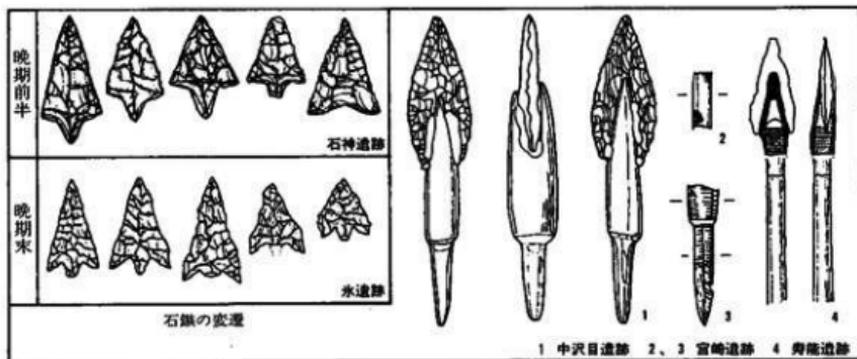
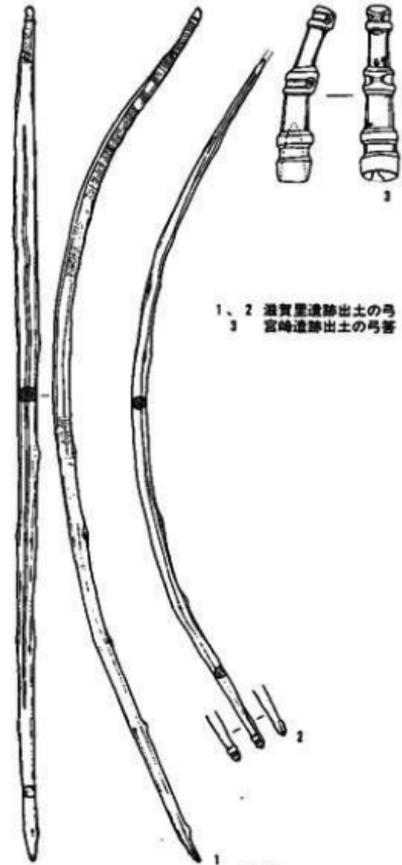


図118 石鏃と横挟み

ばう、後期末から晩期の東北、東海地方では根挟みとよばれる骨角器が石鏃の装着に用いられる場合もある。宮城県田尻町中沢貝塚では晩期前葉大洞BC式期の石鏃が装着したままの根挟みが出土している。佐久地方ではまだ晩期の根挟みの出土例はないが、長野市宮崎遺跡では晩期前半の土器が多出する5号トレンチでは根挟みが二点、真田町唐沢岩除遺跡では、晩期から弥生時代の層からも根挟みが四点出土した。

宮崎遺跡例や唐沢遺跡例も石鏃の装着に用いられたものであろう(図118)。石鏃を矢柄や根挟みに装着する場合は、松脂や漆などが用いられた。また、東北や北海道南部では膠着材としての天然アスファルトが用いられ、石鏃や根挟みにアスファルトが付着する例も少なくない。ちなみに狩能遺跡の矢柄例では漆が膠着材であった。

弓本体は長野県内では出土例はないが、青森県是川遺跡、岩手県森内遺跡、埼玉県寿能泥炭層遺跡、伊奈氏屋敷跡遺跡、滋賀県滋賀里遺跡など縄文時代後晩期の遺跡では、三〇〇〇年近くの時を越えて木製の弓が地下水に浸かって腐食せずに残存して出土する例がある(図119-1・2)。これらによると縄文時代後晩期の弓には丸木弓、飾り弓、小型弓の三種があり、短弓もあるが、長弓が一般であった。材ではカヤ、イヌガヤ、カマツカ、クリが用いられている。弓に弦を掛けるた



1、2 滋賀里遺跡出土の弓
3 宮崎遺跡出土の弓鏃

図119 弓と弓鏃

めの弓筈では、弓の両端には削り出しによりコブ状、また焦がして削り込んだものをもつものもある。また、弓に弦を張る両端部の飾りとなる弓筈状の骨角器が、弓の両端に装着される場合もあった。長野市宮崎遺跡では晩期前半の土器が多出する5号トレンチから弓筈状の骨角器が出土する。これは弓の両端に装着されて弦が掛けられ、狩猟用の弓に使用されたのであろう(図119-3)。

さて小諸市石神遺跡では、晩期前葉から中葉の土器が多出する地区から石鏃が七九一点、また多量の剥片類が出土する。剥片類では総じて一〇がより大きいものは少なく、剥片類の多くは石鏃の素材と考えられる。石神遺跡で多量の石鏃が製作されたことを物語る例であろう。長野県内の晩期遺跡では石神遺跡のほかにも山ノ内町佐野遺跡で晩期前葉から中葉の石鏃が一〇〇〇点以上、長野市宮崎遺跡で晩期前葉の



写70 真田町唐沢岩陰遺跡 (真田町教育委員会提供)

石鏃が少なくとも二・八五点以上、茅野市御社宮司遺跡で晩期末水1式
の石鏃が四二点と石鏃が多量に出土する遺跡がある。遺跡が継続す
る時間の長さ、遺跡の規模の大きさも石鏃の数量の多さに反映される
部分もあるが、長野県内のはかの晩期遺跡とくらべて石鏃が多量に出
土する晩期遺跡が存在するのも事実である。これらの晩期遺跡では石
鏃を多量に製作、保有していたことになるが、この現象をいかに考え
たらよいのであろうか。

千葉県高根木戸遺跡や高根木戸北遺跡の縄文時代中期の集落で、石
鏃の保有に格差が大きいことに着目した研究によると、石鏃を集中的
に破格の量を保有する集落では、狩猟活動に投下する労働量と規模の
大きい、加えて、かなり組織化された狩猟集団が存在した点を指摘し

た。そしてさらにはかの集落間と共同して狩
猟集団を編成した可能性を想定し、石鏃を卓
越して保有する集落は
その集団狩猟編成で射
手を擁するなど卓越し
た位置を占めていたこ
とが推定された。この
研究は関東東部の縄文
時代中期を分析対象と
するが、ほかの地域を

対象にすると、縄文時代晩期では千葉県山武姥山貝塚や愛知県伊川津
貝塚など集団狩猟までを想定できるほどに多量なイノシシやシカの骨
が出土する遺跡があるという。長野県内の晩期遺跡でもさきに触れた
石鏃を多量に製作、保有する遺跡については集団狩猟とのかかわりを
考慮することが必要のようだ。

縄文時代でもに狩猟対象となったイノシシやシカを狩るには、集
落周辺の林や野山で十分に狩猟活動を行なうことができるが、縄文時
代晩期ではさらに深山においてもその活動の痕跡をうかがい知りうる。
深山の中に存在する洞穴遺跡では、縄文時代草創期での利用が著名だ
が、意外に多いのが縄文時代早期押型土石器期、前期末や時代晩期後
半から弥生時代の出土遺物である。高山村湯倉洞穴遺跡、真田町陣の
岩岩陰遺跡、唐沢岩陰遺跡は長野県内で著名な洞穴遺跡であるが、そ
れぞれに晩期後半の洞穴利用の痕跡が認められる(写70)。これらの洞
穴の標高は湯倉洞穴遺跡で約一五〇〇m、陣ノ岩岩陰遺跡で約一四〇
〇m、唐沢岩陰遺跡で約一二四〇mと高く、年間を通じた定住的な利
用がなされたと考えられるよりも、交易などで遠隔地を渡り歩く人、また
狩猟集団が狩猟活動の際の一時的な居住、つまりキャンプの場として
利用したものと考えるべきであろう。さきに述べた唐沢岩陰遺跡晩期
包含層出土の骨角器の根組みや石鏃は、洞穴を利用した人や集団が狩
猟活動に深くかかわっていたことを示唆するものである。深山に分け
入り、洞穴を利用して狩猟を行なった集団は麓の集落の者たちかもしれ
ないし、マガギのように各地を渡り歩く狩猟専門集団であったかも
しれない。

稲作の受容 縄文時代の生業基盤が狩猟採集漁労、弥生時代の生業と穀類土器 基盤が水稲耕作をはじめとする食料生産を基礎とする

ものと一般に説明されるが、近年の発掘調査の成果はこの常識に再検討を求めた例が相ついで。まず昭和五十三（一九七八）年、福岡県福岡市板付遺跡G-7区の調査でそれまで縄文時代晩期末の夜臼式土器（刻目突帯文土器）の時期の水田跡が発見された。刻目突帯文土器の時期の水田跡はその後、福岡県二丈町曲り田遺跡、岡山県岡山市津島江道遺跡などで検出され、これらの遺跡では刻目突帯文土器期の木製農具、石包丁、大陸系摩製石斧など農耕文化にかかわる遺物の存在も確認された。刻目突帯文土器とは、西日本一帯に分布する縄文時代晩期末の土器型式群の総称である。この水稲耕作が開始された時期を従来どおり縄文時代晩期末で扱う説がある。いっぽうで、弥生時代早期と扱う説もある。論点は水稲耕作の開始を重視するか、定着を重視するかである。

考古学で水稲耕作の開始と定着の過程の検討は、水田跡の遺構、木製農具、石包丁、大陸系磨製石斧などの農耕にかかわる遺物、植物遺存体としての稲穂や根痕土器など、コメの存在を示す遺物の出現とその組合せを土器型式編年と対応させ水稲耕作の痕跡を推し量る。刻目突帯文土器期では水稲耕作にかかわる遺構、遺物が出揃い、考古学的にも水稲耕作の存在を証明できるが、近年の発掘、研究の成果ではコメの存在はさらにさかのぼる。岡山県総社市南溝手遺跡では、縄文時代後期末の福田KⅢ式土器に根の圧痕が、青森県風張遺跡では縄文時

代後期の住居跡から炭化米が出土した。さらに岡山県美甘村姫笠原遺跡出土の縄文時代中期中葉の土器の胎土分析をした結果、イネ科植物の存在を示すイネ科植物の細胞珪酸体（プラント・オパール）が検出されたという。縄文時代中期までさかのぼりそうだが、エゴマ、リョクトウ、ヒョウタンなど栽培種の植物種子が縄文時代の遺跡でもこれまでに発見されている状況をも考えると、縄文時代でもイネ科植物を含めた植物栽培が何らかの形で行なわれていた可能性が高い。しかしかりに植物栽培が行なわれていたにしても、縄文時代晩期末の刻目突帯文土器の時期をさかのぼる部分については狩猟採集漁労を主とする経済基盤を変化させるには至らなかつたのであろう。

さて、これまでは西日本を中心に水稲耕作の開始の問題に触れた。中部高地を含めた東日本では、弥生時代前期は存在せず、中期初頭の時期から弥生時代と扱われていた。しかし、一九八〇年代以降の東日本の弥生土器の編年研究の結果、東日本でこれまで中期初頭の弥生土器と扱われたものの一部が弥生前期のものであることが明らかになった。また西日本一帯に分布する弥生時代前期の遠賀川式土器の影響を受けた土器の分布が東北地方でも確認された。そして青森県弘前市砂沢遺跡では砂沢式期の水田跡、山梨県韮崎市宮ノ前遺跡では水Ⅱ式期の水田跡と縄文式直後かつ弥生時代前期末並行の水稲耕作の跡が見つかった（写真71）。この二〇年程の間（一九九八年三月現在）で汎日本列島の稲作受容期の考古学の常識がくつがえったことになる。

中部高地の稲作受容期の状況は先述のように山梨県韮崎市宮ノ前遺跡で弥生時代前期の水Ⅱ式期の水田跡が発見されている。しかし、長



写11 山梨県宮の前遺跡の弥生前期水田跡

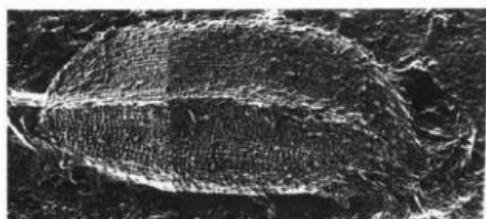
従来、中部高地を含む東日本では、弥生前期は存在せず、中期初頭から弥生時代がはじまると考えられてきた。青森県砂沢遺跡や上写真の宮の前遺跡の水田跡発見で、東日本の稲作の起源は確実にさかのぼった。〔宮の前遺跡〕より

野原では弥生時代中期末の粟林式期の水田が現状では最古のものである。農耕具に関しても木製農具は弥生時代中期末粟林式期のものが最も古となるが、磨製石包丁は長野県岡谷市庄ノ畑遺跡で弥生時代中期初頭の庄ノ畑式期のものが発見されている。長野市新諏訪町遺跡出土の

磨製石包丁もこの時期のものであろう。これに対しイネの存在を示す考古学資料は時期がさらにさかのぼるようだ。長野県飯田市石行遺跡出土の縄文時代晩期後半の浅鉢に稲稈の圧痕が認められる(図10)。この浅鉢は東海の縄文時代晩期後半の五貫森式の影響を色濃く受けたものである。五貫森式土器はさきに触れた西日本の刻目突帯文土器に含まれるもので、この時期には西日本では水稲耕作が確実に開始されている。飯田市石行遺跡の稲稈の原因となった稲が飯田の地で耕作されたものが、東海で作られ、中部高地まで搬入されたものかはわからないが、中部高地に水稲耕作の情報が伝播するにあたり、東海からの影響、そして天竜川ルートが重要な役割をはたしたことを飯田市石行遺跡の稲稈土器は物語る。

さて、これまでも茅野市御社宮司遺跡、大町市一津遺跡、山梨県韮崎市中道遺跡の出土資料など、縄文時代晩期末の稲状圧痕の土器は研究者の間では注目されていた。これらの多くは飯田市石行遺跡例より若干新しい縄文時代晩期最終末の水一式の時期のものである。飯田市石行遺跡例をも含め、これまで肉眼による観察で稲状の圧痕があると研究者に認識され、水一式の時期に稲稈が存在する証拠と考えられていた。しかし昨今の研究の進展はいちじるしく、この縄文時代晩期末の土器の「稲状圧痕」が本当にイネ稈の種子による圧痕であるか鑑定できる分析法が登場した。

レプリカ法とは土器の圧痕や石器の剥片など考古学資料の圧痕にシリコン樹脂を注入、固体化させて圧痕のレプリカを複製する。そしてそのレプリカを走査電子顕微鏡を利用することで圧痕の原体を鑑定す



写72・図120 飯田市石行遺跡の榎痕土器(上)(1:4)と
レブリカ写真(下)

る分析法である。レブリカ法による分析でこれまで肉眼での観察に難
のあった土器の文様や地文・地文具の原体、種子・圧痕の種子の同定では
大きな成果を挙げている。

中部高地の縄文時代晩期末の榎痕土器をレブリカ法で分析した結果、
たしかに飯田市石行遺跡の縄文時代晩期後半の土器の圧痕はイネ・榎種
子が土器を製作中に付着してできた圧痕であることが確認され、中部
高地でも最古の榎痕であることが科学的に証明された。しかし飯田市
石行遺跡例に後続する一律遺跡、御社宮司遺跡、中道遺跡の縄文時代
晩期最終末の榎痕土器の観察結果は思いがけないものであつた。
圧痕の原因はイネ・榎種子によるものではなく、イネ・榎種子に近い

サイズの木の小片や骨片、イネ・榎以外の植物種子などによるもので、
イネ・榎によるものではないということである。

水一式は中部高地の縄文時代晩期最終末の土器型式だが、西日本の
弥生時代前半にも並行する微妙な時期のものだ。同じ時期に西日
本では農耕社会が定着する訳で、西日本と東日本の接点にあたる中部
高地で榎痕土器が存在する点にはさほどの違和感はなかった筈である。
しかし、レブリカ法で証明された水一式の時期の榎痕土器は、皆無と
いうことになる。レブリカ法による中部高地の榎痕土器の観察は、縄
文時代晩期後半の中部高地最古の榎痕土器を証明したが、いっぽうで
榎痕を鑑定するむずかしさを痛感させる結果となった。

なお佐久地方における縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての
稲作にかかわりうる考古学資料の存在は、とくに発見されていない。
全国的に著名な水遺跡が存在するにもかかわらずである。今後の考古
学の調査成果に期待したい限りである。

〔引用・参考文献〕

- 青木和明・天口忠良・鶴田典昭 一九八八「宮崎遺跡」 長野市教育委
員会
- 阿部芳郎 一九八七「縄文中期における石鏃の集中保有化と集団狩猟
編成について」『貝塚博物館紀要』第14号 千葉
市立加曾利貝塚博物館
- 阿部芳郎 一九九六「生業と組織」『季刊考古学』第55号 藤山園
石川日出志 一九八五「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信

【第37巻4号 信濃史学会】

石川日出志 一九九三「縄文と弥生をめぐって」『新視点日本の歴史1』

新人物往来社

金箱文夫 一九九六「埼玉県赤山陣屋跡遺跡」『季刊考古学』第55号 雄

山間

金子弘昌・忍沢成規 一九八六「骨角器の研究 縄文編1・II」慶友社

川島雅人・前原 豊 一九七五「長野県北佐久郡宮平遺跡出土の後期縄

文土器」『信濃』第27巻第4号 信濃史学会

群馬考古学談話会編 一九八三「第4回三県シンポジウム 東日本に

おける黎明期の弥生土器」群馬考古学談話会

他

酒井隆一 一九九七「弥生の世界」講談社

阪口 豊 一九八九「尾瀬ヶ原の自然史」中公新書

佐藤山紀男 一九九六「縄文・弥生変換期の彩形土器」『考古学の諸相』

坂詰秀一先生追善記念会

海入秀敏・児玉卓文他 一九七九「深町」九子町教育委員会

設楽博己 一九八二「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』

第34巻4号 信濃史学会

設楽博己 一九九五「木目状編模様の磨製石剣」『信濃』第47巻4

号 信濃史学会

信濃史料刊行会編 一九五六「信濃史料」第1巻下 信濃史料刊行会

島田恵子他 一九八七「後平遺跡」佐久町教育委員会

島田哲男・設楽博己 一九九〇「二津」大町市教育委員会

鈴木正博 一九九二「水が解けるととき」『利根川』13 利根川同人

須藤隆他 一九八四「中沢目貝塚」東北大学考古学研究会

高橋龍三郎 一九九二「四万戸川流域におけるヒガンバナ・木の葉の食

習」『民俗文化』近畿大学芸学部

高橋龍三郎 一九九四「近畿地方における弥生文化形成の問題」『淀川

文化考』② 近畿大学芸学部

竹原 学他 一九八七「松本市赤木山遺跡群II」松本市教育委員会

友野良一・安孫子昭二他「田中沖遺跡」宮田村遺跡調査会

中沢道彦 一九九二「長野県の概要」『東日本における稲作の受容』東

日本埋蔵文化財研究会

中沢道彦 一九九三「女鳥羽川式」生成小考」『突帯文土器から条痕文

土器へ』突帯文土器研究会

中沢道彦 一九九四「御代田町戻場遺跡の「水式土器」について」『佐

久考古通信』No.63 佐久考古学会

中沢道彦 一九九五「下荒田遺跡早期第1群土器について」『下荒田遺

跡』御代田町教育委員会

中沢道彦・曾田 明 一九九六「長野県北佐久郡御代田町戻場遺跡採集

の縄文土器について」『縄文時代』第7号 縄文

時代文化研究会

中沢道彦 一九九七「土器型式論 晩期」『縄文時代』第8号 縄文時

代文化研究会

考古学会 長野 昭和四十三年

水峰光一 一九九五「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就い

て「石器時代」第1号「石器時代研究会

水峰光一他 一九六七「佐野」長野県考古学会

水峰光一 一九六九「水遺跡の調査とその研究」『石器時代』第9号 石

器時代研究会

水峰光一・小林青樹 一九九五「水遺跡第2次調査概要報告」『信濃』

第47巻第4号「信濃史学会

西本豊弘 一九八七「骨角製漁具」『季刊考古学』第21号 雄山閣

西本豊弘 一九九六「縄文時代の狩猟と儀礼」『季刊考古学』第55号 雄

山閣

花岡 弘 一九七九「小諸市水柳沢採集の水式土器」小諸市誌 歴史

編(一) 小諸市教育委員会

花岡 弘・角張淳一・綿田弘実 一九九四「石神」小諸市教育委員会

樋口昇一他 一九七二「長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告

書」松本市教育委員会

平林国男他 「八坂村誌 自然編・自然編資料」八坂村誌刊行会

藤沢宗平・山田瑞穂他 一九七二「離山遺跡」穂高町教育委員会

前山精明 一九九六「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤 新潟県御井

戸遺跡出土植物性食料残さいの計量分析から

『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念

論集刊行会

御堂島正 一九九二「石鏡と有舌尖頭器の衝撃剝離」『古代』第92号 早

稲田大学考古学会

宮下健司 一九九二「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』

第37集

御代田町誌編纂委員会編 一九九五「御代田町誌 自然編」御代田町

誌刊行会

御代田町誌編纂委員会編 一九九六「御代田町誌 民俗編」御代田町

誌刊行会

向坂鋼二 一九六一「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾り」『第四紀

研究』第二巻第1号「第四紀研究

百瀬長秀 一九八四「羽状の沈積をもつ土器の系統と展開」『長野県考

古学会誌』第49号「長野県考古学会

百瀬長秀 一九八六「浮線文系土器の変遷と分布」『歴史手帳』第14巻

2号

百瀬長秀 一九八七「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書

1「長野県埋蔵文化財センター」

安田喜恵 一九八〇「環境考古学事始」NHKブックス

安田喜恵 一九九三「気候が文明を変える」岩波書店

家根祥多・中村 豊 一九九六「長野市宮崎遺跡の発掘調査」『信濃』

第48巻第4号「信濃史学会

山内清男 一九三〇「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」

『考古学』第1巻第3号「東京考古学会

山内清男 一九三七「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1

巻第1号「先史考古学会

山内清男編 一九六四「日本原始美術1縄文式土器」講談社

渡辺 誠 一九七五「縄文時代の植物食」雄山閣

第八節 縄文時代の暮らし

一 道具の用途

縄文土器の 今から一万五〇〇〇年ほど前、日本列島に土器が登場用 達した。土器の基本的な用途は、煮炊き・貯蔵・盛りつけなど調理・食食用であり、それ以外の特殊な事例として、骨煮として利用されたり、太鼓として利用された例なども推定されている。

最初に器の形の移り変わりについてふれておく(図10)。縄文時代早期から前期初頭の土器は、砲弾形をして華美な装飾のなされない尖底土器であった。やがて前期には、底が平らでそのまま置くことができ、平底土器が登場する。そして中期になると、その中ころをピークとして派手な装飾が土器に施されるようになる。焼町土器に代表される時期である。この時期を境として土器の華美な文様は衰退し、ふたたびシンプルな文様となる。縄文後期を迎えると、注口土器というヤカンの形の土器も登場する。

煮湯用の土器 日本最古の土器の一例とされる神奈川県上野遺跡の土器の内部にはススが付いており、土器は出現当初から煮湯に使用されたらしい。森のドングリなどの堅果類やワラビなどの山菜類を食べるには、煮沸によるアク抜きが必要不可欠である。そうした必要性か

ら日本では土器が誕生したという説が有力である。

土器の登場によって人々の生活は格段に進歩した。食物のアク抜きはもちろん、煮沸によっていろいろなものを煮込んで味つけやメニューのバラエティも広がり、消化が助けられ、殺菌効果もあった。

塩野下弥堂遺跡で発掘された尖底土器(縄文前期六〇〇〇年前)の内面にもススの付着がみられ、煮沸に使われたことがわかる。また、同じ土器の外面にもススが付着していたが、そのススは土器の上半部に限られていた。つまり、尖り底の下半分が地面などに埋められ、その上半分が火にあたって煮沸が行なわれたことがうかがえる。

縄文土器工芸の極致ともいえる塩野川原田遺跡の焼町土器(縄文中期五〇〇〇年前)も、その豪華な装飾ゆえに実用品かどうか疑問視されることがあるが、やはり内面にはススがみられ、煮沸に用いられたことがわかる。また、焼町土器には上部に四か所の把手のつくものがあり、四か所にヒモが通され、吊して煮沸に用いたものがある。

貯蔵用・盛りつけ用の土器 縄文時代中期から後期にかけてみられる大型の深鉢土器は、木の実やあるいは水などの貯蔵に用いられたものがあつた。豊昇の宮平遺跡からは高さ六五センチの大型の深鉢土器(縄文中期後半)も出土しているが、これも貯蔵用の可能性がある。このほか漆や接着剤としての天然アスファルトなどを貯蔵した土器も国内

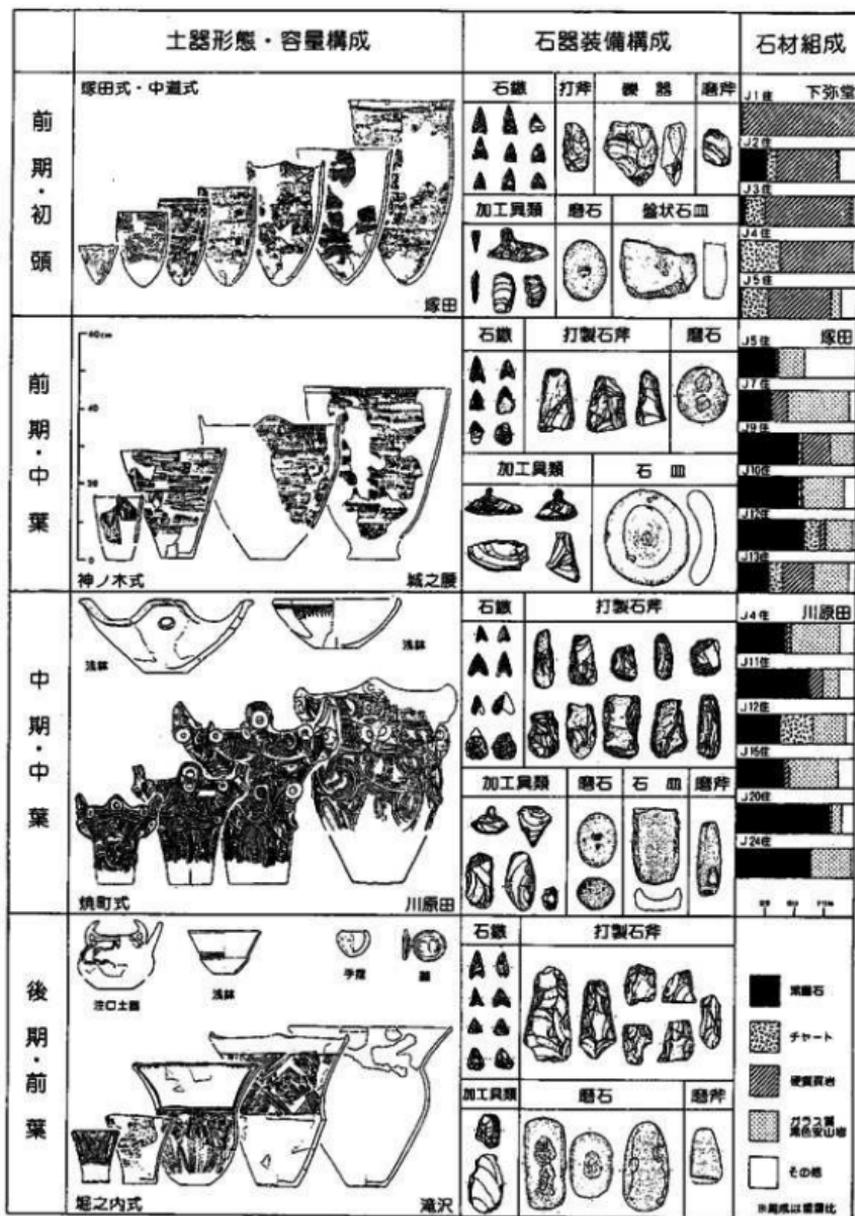


図121 塩野西遺跡群の石器と土器の変化

で発見されている。

浅鉢とよばれる土器は、川原田遺跡や宮平遺跡から出土しているが、これは食物を盛り込む土器とみられる。この浅鉢にはベンガラなどで赤い彩色が施されている場合も多い。

液体を注ぐ土器 宮平遺跡や塩野の滝沢遺跡では、注口土器といってヤカンのような格好をした縄文後期の土器が発掘されている。文字通りこれは液体を入れて注ぐための土器であるが、中にいれられた液体が酒であったという説、ビタミン不足を補うための飲用の動物血液を入れたとする説などもある。

塩野下大宮遺跡では、把手と注ぎ口のついたカップ状の土器が出土しており、これもやはり液体を注ぐための土器と考えられる。また、めずらしい例では川原田遺跡のコップ状の小型土器がある。

さまざまな用途の土器 このほか人骨を納めるために使用された土器がある。住居内に埋められる埋葬には、死産児の骨が入れられたという説と新生児の成長を願って胎盤が入れられたという説がある。また、宮平遺跡の土坑内部に伏せてあった縄文後期の深鉢には骨片がみられ、人骨を中にいれて埋葬したものと考えられる。

いっぽう、煮沸などに用いた土器で、一部破損してしまつたものを、炉に埋設して再利用している例が川原田遺跡の中期の住居にある。

土器の縁に鈎が付き小さな穴の開けられた有孔鈎付土器は、その穴にヒモを通し、口のまわりに皮を張って太鼓にしたという説がある。

このほか酒の醸造具だったという説、種子の貯蔵具というもあり、その機能が確定していない土器である。

石器の用途

縄文時代の石器を用途別にみると、狩猟具・漁労具・工具・調理具などに大別できる。具体的にそのそれぞれに該当する石器と使われ方をみてみる。

狩猟具 川原田遺跡で見つかった町内最古の石器「有舌尖頭器」は、槍の先端などにつけられて獲物を刺す投射用の狩猟具だったと考えられる。この石器は旧石器時代から縄文時代に入つてまもなくすると普遍的にみられるようになる。黒曜石などで作られた石鏃（矢じり）は、町内のどの遺跡からもたくさん出土しており、茎のつくものやハート形の二股のものなどがある。石鏃は、有舌尖頭器より一歩進んだ飛び道具で、弓矢の先につけた狩猟具である。

漁労具 漁労具とわかる石器は町内からは出土していないが、やはり石鏃のなかには、モリの先などに埋め込まれて使用される例もあつたと考えられる。このほか網のオモリとなる石錘などが縄文遺跡から出土する場合がある。

工具 打製石斧とよばれる石器は、とくに縄文時代中期以降に発達する道具である。これは石斧と名づけられながらも実際は土を掘るための道具だったらしい。その表面がトロトロに磨り減つた打製石斧が川原田遺跡でもたくさん出土しており、その使用頻度がかなり高かつたことがうかがえる。これを使つたヤマノイモ掘りなど、根茎類の採取がさかんだったことを示している。

打製石斧が土掘り用とみられるのに対し、磨製石斧は木の伐採などに使われた道具である。滝沢遺跡から出土した磨製石斧には、木を加

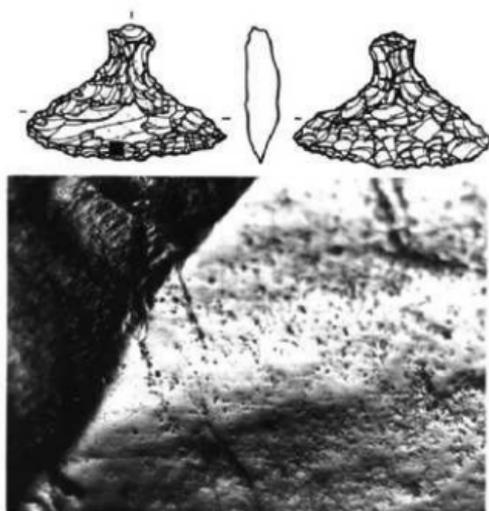


図122・写73 下弥堂遺跡の石匙(上)と残された使用痕(下) イネ科植物を削った時の光沢で、図の■部分の100倍顕微鏡写真

工したときに特徴的に生じる使用痕―光沢がみられている。

石匙とよばれる石器はつまみがつき、ここにヒモなどが通され、常時携帯されて使われた石器である。かつてこの石器は皮はぎなどといわれたが、使用痕分析によると万能ナイフのようなもので、ときには肉を切ったり、草を切ったり、木を削ったりした石器と考えられる。塩野下弥堂遺跡の石匙には、イネ科の植物を切ったときに特徴的に生じる光沢がみられるもの(図122・写73)、乾燥した皮を加工した時に生じる光沢をもつものの二種類があった。このことはこの石器が草刈りや皮の加工などをさまざまな用途に使われていたことを示す実例である。このほかの工具としては、石器を打ち欠くための敲き石、穴をあけ

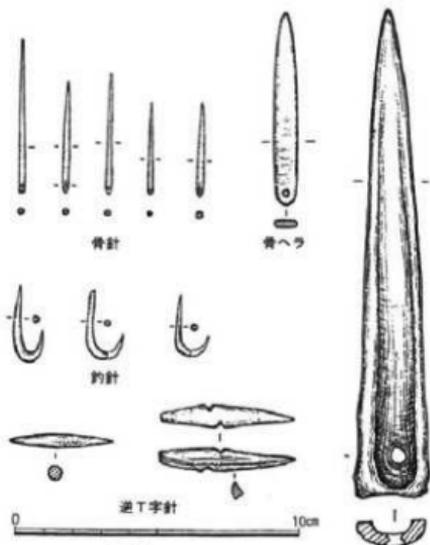
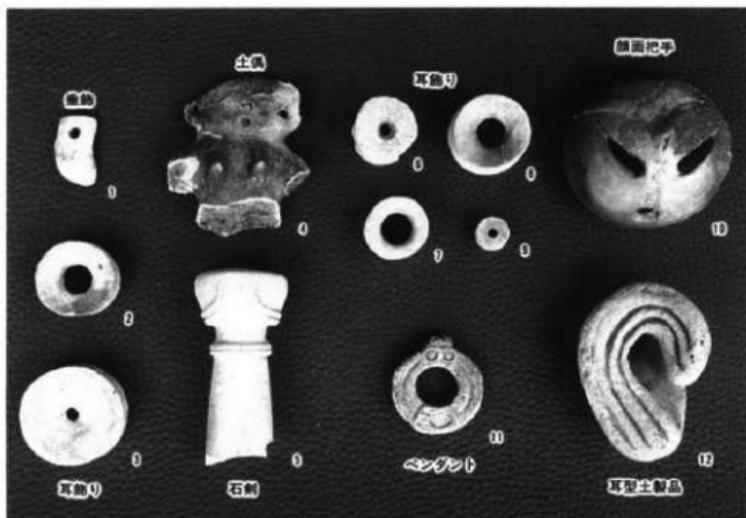


図123 楊原岩陰遺跡の骨角器(縄文早期) (『長野県史』考古資料編IVより)

るための石錐、物を削るための削器などが町内の遺跡から出土している。

調理具 明らかに調理具と考えられる石器に、磨石と石皿がある。丸い形の磨石により石皿の上で、ドングリやトチの実などをすり潰し製粉したり、肉などをミンチにしたものと考えられる。また、さきの石匙なども工具だけでなく調理にも使われたものとみられる。

木器・骨角器 石器にくらべ腐食しやすい木器や骨角器は、町内の縄文遺跡からは発見されていない。塩野の西隣の小諸市石神遺跡からは、海産であるハマグリに殻に刃をつけた貝刃という骨角器やイノシシの歯で作られた骨鍼が発見され、浅間山麓では初めての骨角器の出



写74 縄文時代の精神遺物と装飾品

(1～5＝宮平遺跡(豊井) 6～10＝川原田遺跡(塩野) 11・12＝滝沢遺跡(塩野)

土例となった。千曲川をさかのぼった北相木村の栃原岩陰遺跡(早期)からは三二点という大量の骨角器が発見されており注目される(図四)。なかには現代の縫い針と変わらないような精巧なシカの骨製の針、J字形をした釣り針などが発掘されている。縫い物をしたり、釣りをした縄文早期人のようすが彷彿させられる。

このほか木器は、近隣の遺跡からは発見されていないが、低湿地遺跡などから発見されるさまざまな木器をみても、当時の浅間山麓でも多種の木器が使われていたことが想像できる。

精神遺物と装飾品 信仰や呪術などに用いられた土偶・石棒などの縄文時代の精神文化に関する遺物、耳飾りや垂飾りなど縄文

時代の装飾品について取り上げておく(写74)。

精神遺物 縄文時代の代表的な精神遺物である土偶は、その多くが女性をかたどったもので、縄文時代早期に出現、とくに後期から晩期にかけて多く作られる。町内では川原田遺跡の中期集落、宮平遺跡の後期集落から土偶が発掘されている(4)。宮平遺跡の土偶は乳房の表現もはっきりしており、女性像であることがよくわかる。また、国内で発見される土偶の大部分は壊された状態で出土する。川原田遺跡や宮平遺跡の土偶もやはり手・足・顔の一部などが破壊されていた。

こうした土偶の用途については、単に置き物や玩具などとする説もあるが、祭祀にかかわる遺物であることは間違いない。その製作法をみると壊されることを前提に作られている。祭りにおいて壊され捨てられることによって、大地への豊饒や生命の再生を祈った、というの

が土偶の用途についての有力な解釈である。

男性性器をかたどった石棒も、誕生や再生・繁栄などを願って作られた精神遺物である。石棒も土偶と同様に川原田遺跡や宮平遺跡・塩野滝沢遺跡などから出土している。滝沢遺跡では炉のそばから石棒が出土しており、信仰の対象として火のある炉のそばに立てられているものと考えられる。また、同じく男性性器をかたどった石剣という石製品も宮平遺跡から出土している(5)。

近隣でもほとんど例がないが、滝沢遺跡の墓穴には耳をかたどった土製品が副葬されていた(12)。どんな理由からこの製品が入れられていたかはわからない。

裝飾品 塩野塚田遺跡では縄文前期後半の球状耳飾りが出土しており、町内から出土した裝飾品としては古い事例である。

宮平遺跡では中期後半から後期にかけての、凝った作りの耳飾りが数多く出土している。今日、耳飾りといえば耳たぶに穴を開けないイヤリングと耳たぶに穴を開けるピアスの二種類があるが、当時の耳飾りはおそらくピアス式につけられているものと考えられる。宮平遺跡の耳飾りには直径7mmのものがあるが、こうした大きなものがピアスとしてつけられていたことを考えると驚きである。また、これよりやや古い時期の川原田遺跡から発掘された縄文中期ごろの耳飾りは、宮平遺跡の中期後半のものにくらべ、シンプルな糸巻き型であった。

垂飾りといわれるペンダントはヒスイ製のものが宮平遺跡と滝沢遺跡から発掘されている。滝沢遺跡では縄文後期の壺之内1・2式といわれる土器・鳥の骨などとともに垂飾りが出土した。また、滝沢遺跡

ではイモガイという貝を模したともみられる滑石の円形のペンダントが出土した。このペンダントには赤いペンガラが塗ってありヒトの歯とともに墓穴から出土した。おそらく死者の首に下げられて埋められたものと考えられる。

このほかの裝飾品として、同じ浅間山麓の小諸市石神遺跡では、イノシシの歯に穴を開けて作ったペンダントや、イノシシの骨を加工し飾り細工をしたかんざしが出土しており、縄文人のアクセサリーの一端をみることができ。

二 縄文時代の食生活

縄文時代の 縄文時代遺跡からは、土器や石器のほかに骨角器や人
多様な文化 骨、動植物の骨や木の実などが出土する。この項では
縄文人たちがどのような食物を口にしていたのか、またどのように暮
らしをたてていたのかを、食べ物を中心にみてみたい。

縄文時代は約一万年も続いた時代で、日本列島内ではさまざまな文
化が開いた。一口に縄文時代といっているが、その遺跡ごとの内容
は時代によっても地域によってもかなりの差があるものである。こ
ではまず食生活についての大きな考え方からみてみる。

経済というのは、衣・食・住でなりたつが、これを支えるのが文化
である。昔はそれぞれの環境が文化を決めるという考え方もあったが、
現代的な考え方は、環境は文化の条件という考え方のほうが妥当で
ある。もちろん環境は大切だが、同型の環境におかれた異なる人間集

団がまったく同じ文化を育むなどということはない。文化は時間的にも空間的にも多様であり、しかも文化は個性的・個別的なのである。

経済の枠組み・ ここでは「経済の枠組み」・「経済戦略」・「戦術」
経済戦略・戦術 という三つの見方で文化を説明してみる。

最初に「経済の枠組み」とは、時代の経済の枠組み、歴史的に醸成された時代の枠組みである。時代の枠組みは歴史の大きな転換がないかぎり変化しない。たとえば現代は資本主義体制の経済である。経済活動はこの制度の中で実現される。

いっぽう縄文時代は「採集と狩猟と交換の経済」が時代の枠組みである。縄文時代は、縄文的な組織で狩猟と採集を行ない、縄文的な市場で地域を異にしている人々と交易をしている。これが縄文時代の経済の枠組みである。そこに現代的なマーケットの概念はない。もし市場があるとすれば、縄文時代に生まれた縄文的な市場がある。これを理解しておかなければ、縄文時代の暮らしの記述が、現代的な考え方で解釈され、歴史記述の意味がなくなるのである。

つぎに「経済戦略」がある。これは歴史的体制の中で実現される経済実現方針である。これが異なるから人間は環境に適應できることになる。現代社会でいえば、スーパーマーケットをやるのか、銀行をやるのかという選択である。縄文時代でいえば狩猟に依存するのか、栽培植物に依存するか、漁労に依存するのかということであり、さらにそれぞれに細かな戦略がある。この経済戦略のひとつの側面が、環境適應という言葉で表されている。もし採集・狩猟経済という枠組みで、

それぞれの環境（条件）に適應する経済戦略をもたなければ、たちまちのうちに絶滅してしまうだろう。だからといって、同型の環境だから同型の文化が成立するとは限らない。

縄文時代では、居住している周囲にどのような資源があり、いつそれを獲得するかが、重要な経済戦略となっている。海に近い遺跡では海産物が、山岳地帯では山菜などが、というようにそれぞれの条件によつて使い分けられる技術がある。

「戦術」は具体的にはアクションである。経済戦略を実現するためにさまざまな試行錯誤が繰り返され、実用的なノウハウが蓄積されてゆく。戦術には失敗も成功もある。具体的な行動が戦術として反映されているので、一見すると多様である。

わたしたちは以上の三つの概念を使い分ける必要がある。遺跡に残されるのは常に具体的行動の化石としての遺物・遺構である。これは戦術レベルの化石である。この戦術を、技術と時期で区別し、さらにほかの遺跡と比較することで経済戦略がうかがいあがってくる。

さらに経済戦略を時代と地域で比較することで経済の枠組みが理解される。最初から与えられている経済理論は通用しない。それが過去をひもとくのに必要なことである。

食料資源の 縄文時代人は、どのような食物をとっていたのか。それが**得** れば周囲の資源ともっている技術、技術の使い方という三者で決定される。

この三者は関連して一体の文化となるが、それぞれを復元するには

分析対象が違ふ。周囲の資源は、古環境の分析による。もっている技術は遺物や遺構の分析による。そして環境をどのように利用したのかは（その文化）は、遺跡に残される動物の骨や植物遺存体の分析と遺跡に残される遺物の分析の総合からわかるのである。このように整理しながら、縄文時代の食料資源とその獲得についてみてみよう。

草創期末から 縄文時代草創期末から早期の遺跡（九〇〇〇年前
早期の食料獲得 から七〇〇〇年前）には北相木村に栃原岩陰遺跡がある。縄文時代草創期末から早期にかけての岩陰遺跡で、動物骨も多く出土している。

イノシシ、シカのはかにサルの骨がもつとも多い。また魚骨ではサケ科の歯が出土している。この遺跡にはとりわけ石鏃が多量に残されている。草創期末の石鏃は小さく、早期の石鏃はやや大きい。シカやイノシシは食用になり、その骨も利用されて骨角器になっている。サルの骨も骨角器になっている。後述するが狩猟された動物すべてが食用の対象かどうかはわからない。

ところで草創期末の小形石鏃を出土する遺跡には、特徴的な立地がある。それは小河川敷である。小石鏃は単独で使われたのではなく、シャフトに埋め込まれて河川漁労の際のヤスのカエシにでもしたのだろうか。

いっぽう、この遺跡では堅果類（ドングリやトチの実）を調理する石皿や磨石は数点あるだけである。ほかの石器に比較して極端に少ない。栃原岩陰遺跡では、植物採取というよりは、狩猟と河川漁労に依

存する生活が行なわれていたようである。

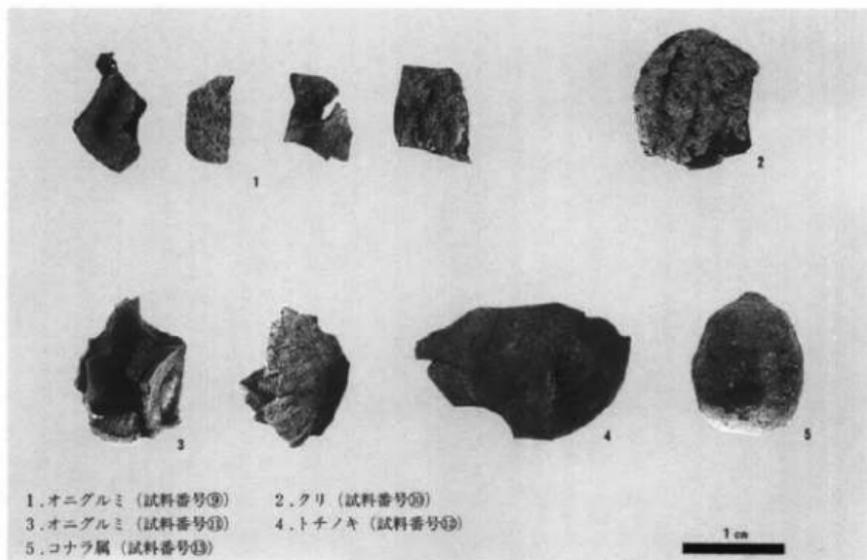
前期と中期 縄文時代前期（六〇〇〇年前の遺跡）と中期（四五〇〇の食料獲得 〇年前）の遺跡には、町内で塚田遺跡（前期）と川原田遺跡（中期）がある。

石器の面からみると前期の遺跡には石鏃や石匙が安定的に残され、打製石斧は少ない。また中期の遺跡には打製石斧がたくさんある。前期は狩猟を安定的に行ない、中期の打製石斧は山菜（とくに根茎類）の採集に用いられたとされる。前期と中期では生業戦略に大きな転換があったことを予想できる。

塩野川原田遺跡では縄文中期のゴミ穴からクリ・オニグルミ・ドングリ・トチなどの種子が見つかっている（写75）。こうした植物質食料の利用がわかるよい例である。

縄文時代後期 縄文時代後期（三〇〇〇年前）の遺跡には、塩野にの食料獲得 滝沢遺跡があり、シカ・イノシシや鳥類の骨が出土している。こうした動物が食料として利用されていたことがわかる。

明科町北村遺跡では、三〇〇〇体余もの人骨が発掘されたが、その人骨を同位体食生分析という分析にかけ、その人が生前に食していた蛋白質の種類が明らかにされた。蛋白質から分類された食物は、C3植物とよばれるクリ・ドングリ・トチの実など、アワなどの雑穀類（C4植物）、シカ・イノシシなどの草食獣、マグロ・マダイやサケ類も含まれる海産魚類、ハマグリなどの海産貝類である。このうちもつとも



1. オニグルミ (試料番号⑨) 2. クリ (試料番号⑩)
 3. オニグルミ (試料番号⑪) 4. トチノキ (試料番号⑫)
 5. コナラ属 (試料番号⑬)

写75 川原田遺跡で発掘された種実遺体

多く検出されたのがクリ・ドングリなどの植物で、北村遺跡の人々は堅果類に依存していたことがわかった。ドングリ・トチの実などはアタ抜きをしないと食用にならない。北村遺跡の分析結果を裏付けるように中野市栗林遺跡(縄文後期)ではアタ抜きの施設(遺構)が発掘されている。

縄文時代の 海のない長野県ではあるが、山の資源は豊富である。**食料資源獲得** それをうらづけるように、安定した狩猟と採集が行なわれていたことがわかる。しかし縄文草創期・早期・前期と中期・後期で依存する食料が違ふ可能性がある。とりわけ中期以降は打製石斧の増加や本格的アタ抜き施設などの発掘事例が増加してきていることが注意されよう。

つぎに視野を広げ日本列島縄文時代の食料についてみてみる。

青森県三内丸山遺跡は縄文時代前期から中期までの遺跡である。この遺跡の立地はラグーンの際であり、海産貝類の宝庫である。この遺跡の縄文時代前期の動物骨を分析した結果がある。もつとも多く出土したのはムササビとノウサギであり鳥類ではカモが多い。一般的にいわれるシカやイノシシは大変少ない。三内丸山の縄文人はシカ・イノシシなどよりも、海産魚類で動物性タンパク質を摂取していたのであろうか。

三内丸山では、大きなクリ材が住居の柱として利用されているので、クリは常食されていたと考えられる。またクルミの殻も多い。特筆されるのはキイチゴ・ヤマブドウ・サルナシの種子とともにニワトコの



図124 浅間南麓で食用が推定される動植物

種子がまとまって出土したことであろう。ベリー類とニワトコで発酵酒ができることから、お酒をつくって飲んでいた可能性がある。

つぎに県内ではみることのできない貝塚に目をむけてみる。貝塚は太平洋岸に多く残されている。北海道の三沢4遺跡（早期）はヤマトシジミが主体である。同じ北海道の戸井貝塚（後期）はタマキビ類・ムラサキインコの岩礁性貝類とシカ・オットセイの骨が大量に出土した。千葉県の新田野貝塚（前期・中期）はヤマトシジミ主体で、中期は前期の五倍の貝が残されている。茨城県中妻貝塚ではヤマトシジミが主体でハクチョウ・ガン・カモが多い。シカ・イノシシ、ウナギなども出土している。貝類ばかりでなく、多種多様な食糧資源を獲得していたことがわかる。

人骨の同位体食性分析は北村遺跡でもふれたが、全国規模でその集積が行なわれた（図15）。分析結果は北村人が植物食料で80%、東京

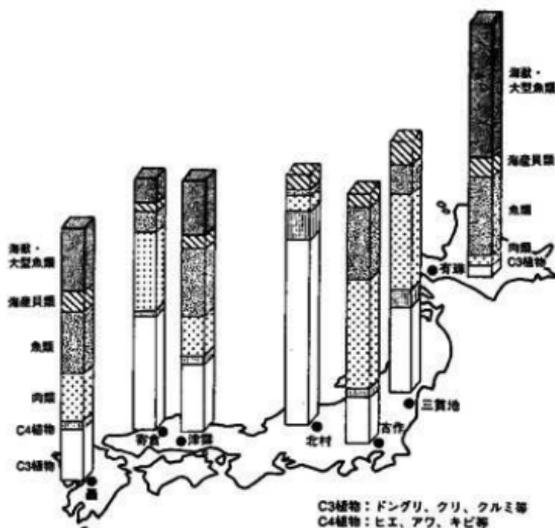


図125 人骨のコラーゲン同位体組成と食資源データベースから推定したタンパク質の資源となった食物群の割合（『縄文人の時代』より）

湾沿岸の古作貝塚人は獣類と魚類が多く、北海道の有珠○遺跡人は魚類・海産類が多いという結果がでた。

このようにみると、残された遺物の内容は多種多様であること、同位体食性分析からは、地域によって異なる食指向があることがわかる。

各地の遺跡に残された動植物遺存体は、そのときに食されて運良く残ったものである。それが多種多様だということは、縄文人がさらに

多様な食糧資源を上手に活用していたことを物語る。いっぽうで同位体食性分析は、縄文人が特定の時代と地域で主とする食物にちがいがあつたことを物語っている。わたしたちも同じだが、食料は文化の重要な指標である。縄文人は時代と地域によって多様な食料資源の活用をはかっていたことがわかる。

三 縄文時代の住まい

浅間山麓における 当地において住居跡がはじめて調査されたのは、住居跡の発見 昭和六(一九三二)年の宮平遺跡で北佐久教育会によって行なわれた。昭和二〇年代には『信濃史料』編纂のための調査、昭和五十六(一九八一)年には農道舗装の際、町教育委員会によって緊急発掘調査が行なわれた。

昭和六(一九三二)年の宮平遺跡の発掘調査では、敷石住居跡が発見された。当時、敷石住居跡の認識が定まらず、祭祀的な遺構と特殊視されていたが、調査担当者である八幡一郎は、「北佐久地域の考古学的調査」のなかで、すでに住居跡であるとし、平地住居であるという認識をした。平地住居というのは、地表面を掘り下げ柱を立てて上屋根をかけた竪穴住居に対し、地表面を床としたものをいう。このとき、住居に必要な炉跡や柱穴が検出されなかったが、八幡は小県郡滋野村寺ノ浦や戊立遺跡と共通する点、敷石の状態や土器の点から敷石住居跡であると判断した。

最近の発掘調査の増加で、敷石住居跡でも地表面を掘り窪めた竪穴

のもので柱穴をもつものや、柱穴をもつが壁がみられないもの、柱穴や壁のない敷石だけの敷石住居跡だけが報告されている。また、敷石が柄鏡形であるものや、柄鏡形の竪穴住居跡なども発見されている。浅間山麓では柄鏡形敷石住居や敷石住居が多い特徴がある。これは、敷石材に適當な板状石(鉄平石)を容易に得ることができるとであろう。さらに、敷石住居がはたして日常的な「住居」であるのか、「祭祀的な遺構」とするかの議論がある。しかし、柄鏡形住居を含め、敷石住居は多くが竪穴住居とは同時に存在しない。そのことから住居として機能していたことは明らかである。柄鏡形(敷石)住居によって構成される集落が存在し、柄鏡形(敷石)住居は縄文時代中期末葉から後期前葉にかけて中部地方関東地方に浸透したひとつの住居形態だったと考えられている。

中部地方において、縄文前期の長野県阿久遺跡では、屋外で配石遺構と石棒が検出された。これに対して、縄文中期後葉の棚畑遺跡で、竪穴住居の奥の部分に石壇のような配石が検出された。この配石と埋室の位置は炉を中心に住居を左右に分割する線上にある。縄文中期後葉で柄鏡形住居が出現する以前に、このような竪穴住居があることから、埋室や石棒を中心とした祭祀儀礼が竪穴住居構成員によって行なわれ、その背景に敷石住居が出現したと解釈されている。前期までの屋外の石棒や配石遺構にかかわる祭祀が屋内に取り込まれたとする見解である。

いっぽう、加曾利E3式期の古段階、(柄鏡形)敷石住居発見直前、曾利ⅢからⅣ式期に、環状ないし弧状の大形の配石遺構が北関東群馬

県、南関東神奈川県、山梨県にみられる。たとえば、群馬県富岡町田窪中原遺跡、中之条町久森遺跡、山梨県韮崎市後田遺跡などでは柄鏡形敷石住居跡とともに埋壘をともなう弧状の配石遺構が確認されている。石壇や配石をもつ竪穴住居跡が分布する中部地方長野県南信八ヶ岳山麓では、中期後葉にこのような大規模な配石遺構は見あたらないようである。また、八ヶ岳山麓では、柄鏡形敷石住居跡もまれである。石壇や配石をもつ竪穴住居跡は、中部地方でも長野県南信八ヶ岳山麓から相模野台地あたりまで分布する。柄鏡形住居とは相模野台地あたりで分布が一部重なるもの同じ広がり示していない。分布が同じでないということは、柄鏡形敷石住居は石壇状の配石をもつ竪穴住居から生まれたものとはいえない。その出現については、敷石住居や屋外埋壘と配石遺構も影響していたものと考えられる。ちなみに、田窪中原遺跡では加曾利E3式期に柄部をもたない竪穴住居があり、屋外の大規模な配石遺構には同じ時期の土器が埋設されていた。前期には阿久遺跡のような石棒や立石などがある大規模な配石遺構があり、おそらく安定した食糧の獲得や豊かな生活を願うような祭祀儀礼が集落全体で行なわれていたのであろう。中期になると後葉まではそのような配石遺構は見あたらず、土器の把手などの装飾や耳飾り、土偶などにみられる呪術的ともいえる道具が目立っている。中期後葉加曾利E2式(曾利II式)期には埋壘や石壇などの竪穴住居にみられる施設は、竪穴住居に住む家族単位で祭祀行為が行なわれた証であろうか。加曾利E3式期になってふたたび大規模な配石遺構が出現し、このあと後期まで中部地方の大規模遺跡では集落全体、いわばムラを



写76 阿久遺跡全景 (「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—」より)

あげての祭祀が行なわれていたと考えられる。

浅間山麓での考古学的にも早い時期の発掘調査による発見では、今日でも議論の焦点となっている「敷石住居跡が住居であるか祭祀的遺構にすぎないか」という問題をすでに提起していた。その点で学史的に重要な意味があった。そして、縄文時代を通じて、この敷石住居が出現する時期は、家族単位による戸別祭祀的なものが集落全体の規模になる過渡的な時期であり、生活の上でのひとつの大きな変化が生まれてきた時期であった。

住まいの変化

御代田町で住居がみられるのは前期からである。前期は塚田遺跡、東荒神遺跡、川原田遺跡、下赤堂遺跡で、中期は川原田遺跡、滝沢遺跡、宮平遺跡、後期は滝沢遺跡、宮平遺跡、西荒神遺跡で竪穴住居跡が見つかっている。このうち、御代田町において竪穴住居跡が多数見つかった集落遺跡は、宮平遺跡、川原田遺跡、滝沢遺跡である。これらの遺跡は、おおよそ宮平遺跡より古い時期の集落遺跡が川原田遺跡で、新しい時期の集落遺跡が滝沢遺跡という関係にある。川原田遺跡では前期前葉から中期中葉の多数の竪穴住居跡が、滝沢遺跡は後期前半の数石住居跡が検出された。そこで、御代田町の竪穴住居跡の変遷を川原田遺跡、宮平遺跡、滝沢遺跡を中心にみてみる。

川原田遺跡の前期のJ37号住居は平面形が方形で、壁より小さい柱穴が並ぶ形であり、炉跡はほぼ中央にある。ほかの竪穴住居跡は明確な柱穴がみられないが、方形である点は共通している。前期でも後葉の諸磯式期になるとJ18号住居にみられるように住居の角が丸みをもち、円形に近い形に変わり、柱穴は住居内側にもつようになる。

柱穴は中期になると壁際にはみられなくなり、内部の床面上に径が大きく深い柱穴が掘られ、上屋を支える主たる柱、主柱が明瞭になった。柱の間と壁際にはしばしば溝が掘削された。これを周溝といひ、屋内の排水施設といわれるが、かならずしもすべての竪穴住居跡にあるわけではない。川原田遺跡では中期の竪穴住居跡も同様である。関東地方をも含めると周溝は前期にもあり、中期には柱穴の深

い堅牢な竪穴住居跡の多くにみられ、中期後葉加曾利E3式期になるとだいに少なくなる傾向がある。

川原田遺跡では土器型式からみて、中期中葉から後葉の竪穴住居跡がほぼ継続して存続していたと考えられる。中期になると平面形態が円形もしくは楕円形になる。川原田遺跡J15号住居やJ51号住居は明らかに主柱をもち、柱の間に周溝をもつ。J15号住居は中央に石囲炉をもつ六本柱の住居構造である。J29号住居は壁際に周溝をもち、地床炉であるが、楕円形である。ほかの竪穴住居跡の多くは形が円形か不整形で周溝をもたず、石囲炉である。J11号住居やJ5号住居、J4号住居、J5号住居は五本柱である。円形あるいは楕円形で主柱をもつ住居構造は中期後葉まで続く。また、炉の位置は中央あるいはやや北よりにあるものが多い。同時に住居規模も比較的大型化した。また、中期後葉になると加曾利E1式期の川原田遺跡J13号住居のように、円形でもやや角をもつ五角形や六角形の竪穴住居跡も存在した。加曾利E3式期の滝沢遺跡J13号住居でも、円形というより六角形もしくは五角形のような丸い角をもつ形態である。さらに、中期後葉で八ヶ岳山麓や南関東に、隅丸方形や明らかに五角形や六角形の竪穴住居跡がみられる。これらの竪穴住居跡は主柱の位置が角にあるため、上屋根構造も五角形・六角形であったことが想定される。このような変わった形態の住居跡は、茅野市棚知遺跡や潮見台遺跡で見つかった。

いる。

縄文時代を通じて、住居形態に大きな変化がみられるのは、中期後葉から末葉にかけてである。それは、従来ローム層まで深く掘り込ん

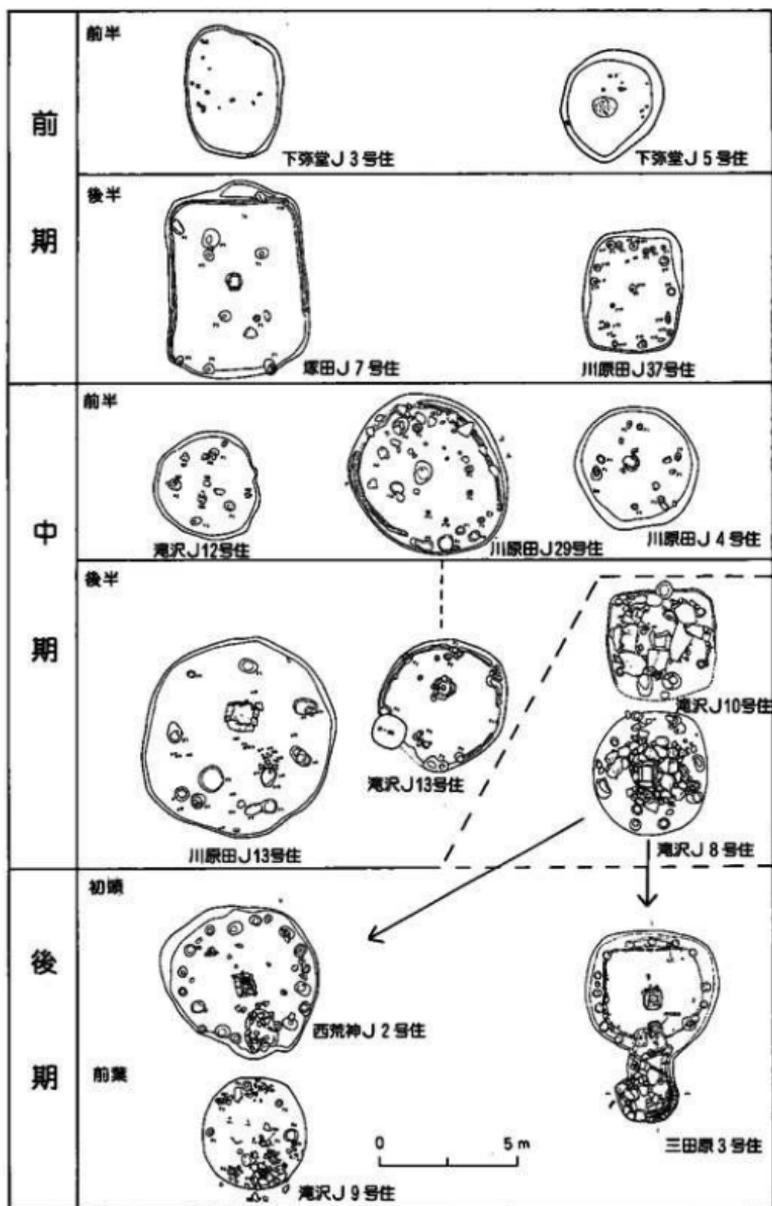


図126 縄文住居跡の変遷図

でつくられていた竪穴住居は少なくなり、ローム面まで掘り込まない住居や壁が確認できない敷石住居が現れることである。

中期末葉の加曾利E4式になると、宮平遺跡J9号住居や滝沢遺跡J10号住居のように、壁際に対応するピットをもつ敷石住居跡がみられる。発掘調査では柄の部分が出されていないが、この対ピットがあることから柄鏡形敷石住居であったのかもしれない。後期初頭でも滝沢遺跡のJ8号住居やJ9号住居のように柄鏡形でない敷石住居が、中期末葉から後期前半にみられる。

後期前半の滝沢遺跡J5号住居は、不整形の竪穴住居と考えられる。敷石が一部残り、南側に対応する深いピットが二個、加えて埋設土器をもつた石囲炉がある。滝沢遺跡では後期前半堀之内式期においても敷石住居ではあるが、柄鏡形の可能性のあるものとなしいものがある。

滝沢遺跡の近くの小諸市三田原遺跡群で、同じ堀之内式期の住居跡が調査された。岩下遺跡では後期初頭、名寺式期とつぎの段階の堀之内式期に柄鏡形敷石住居跡が検出された。残りのよい名寺式期の3号住居では壁際に柱穴があり、小さな礎がめぐり、柄部では敷石の縁に石が積まれた状態である。堀之内式期の4号住居も主体部（住居中心部分）の柱穴に沿って小礎がめぐり、柄部の敷石が明瞭に残っていた。さらに4号住居は柄部の敷石が弧状に外側にのびて、列石とながっていた。両者が併存するかは不明であるが報告が待たれるところである。また、ともに炉跡は石囲いで、埋設土器をとまなっている。

浅間山麓では住居形態の面からみると、前期から関東地方と同じよ

うに方形で、中期になると円形や楕円形が多い。中期末葉になると関東地方（とくに南関東で濃密に分布する）で多い、柄鏡形の住居形態が伝わり、石材の豊富な土地柄であるためか敷石住居が多くみられる。柄鏡形敷石住居も分布し、後期前葉には千曲川伝いに浅間山麓北信から東信まで分布が広がる。しかし、柄鏡形でない敷石住居もあり、柄鏡形という関東地方の影響を受けながらも中部地方、とくに浅間山麓の独自性は保っていたようだ。後期前葉になると関東地方では、柄鏡形の形態をとらない竪穴住居跡がしばしばみられるが、長野県では北信山ノ内町伊勢宮遺跡や東信望月町平石遺跡では柄鏡形敷石住居が見つかっている。長野県でも南信にいたると柄鏡形敷石住居はまれであり、いっぽうで群馬県田代山麓中原遺跡や妙義山山麓の松井田町行田遺跡で柄鏡形敷石住居が発見されていることから、浅間山麓南西部、軽井沢町や御代田町から千曲川伝いに北信まで、柄鏡形敷石住居が伝わった可能性がある。

炉跡の住居の炉にはいろいろな種類がある。基本的には単にいろいろ穴を掘り窪め火を焚いた床床炉、石で囲った石囲炉、大形の底のない土器を埋めて使った埋設炉、土器を割って囲った土器片囲炉、炉に土器を埋めて使ったものなどである。

埋設炉は大形の口縁部から胴部にかけての土器を炉の枠のように用いたもので、これに対して炉跡の埋設土器は、胴部から底部にかけての比較的小振な土器を使っている。さらに、石を炉の回りに敷いて土器を埋設した複式炉は中期後葉におもに東北地方に分布するなど、炉

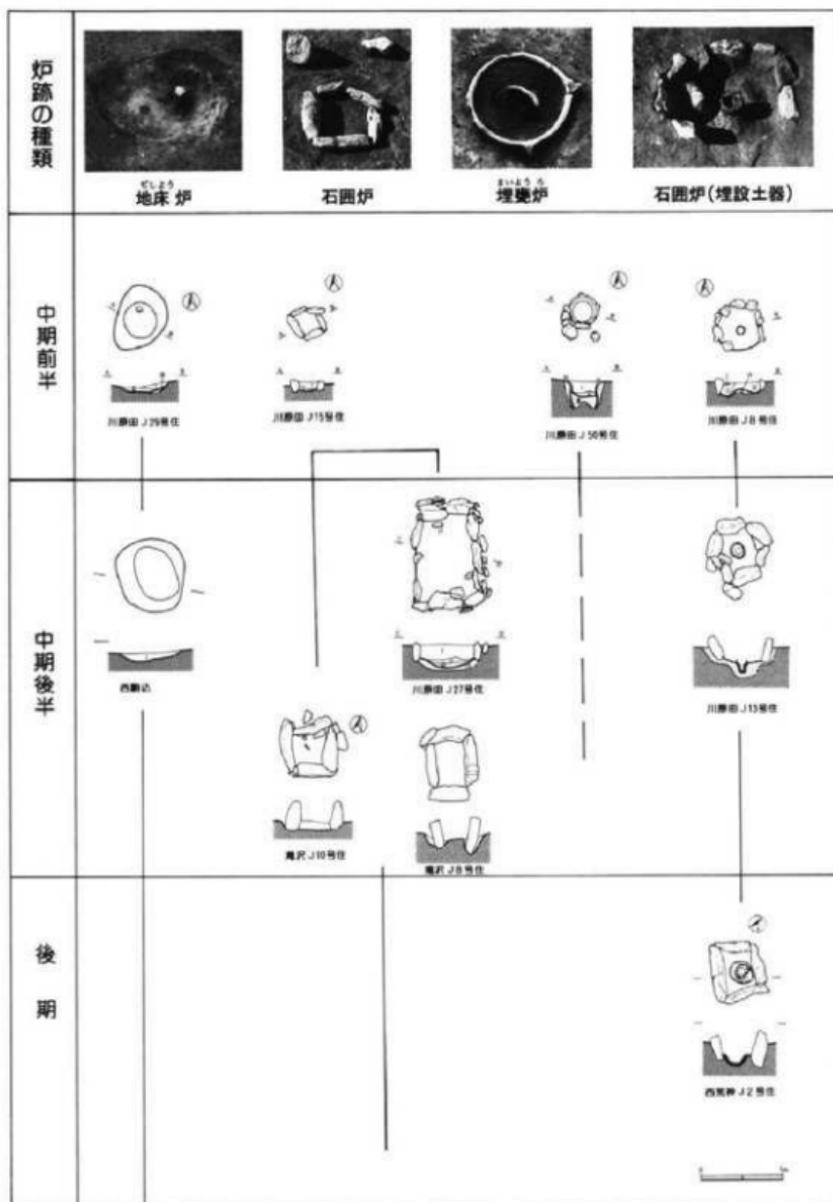


図127・写77 炉跡のいろいろ

跡は地域や時期によって特徴がある。

川原田遺跡では、御代田町ではいまのところもっとも古い前期の住居跡が二軒発見されている。ひとつはJ37号住居で、焼けた土の堆積した層はみられないが、住居跡中央にピットがあり位置から炉跡に相当するとも考えられる。もうひとつの住居は、炉跡らしいピットさえも確認されていない。川原田遺跡で、前期中葉の三軒、前期後葉の一軒についても同様で炉跡にあたるものがみられない。中部地方、関東地方では、早期の竪穴住居では炉跡と考えられる施設に明瞭な焼土の堆積はみられない例が多いが、前期では焼土の堆積の厚い炉跡が少なくない。関東地方とくらべて御代田町域では、前期においてもはつきりした炉跡がみられない住居がある。

中期になると前に述べたように、掘り込みの深い堅牢な竪穴住居が構築されるようになり、炉も時期をおうごとに焼土の堆積がみとめられるはつきりした形になってくる。川原田遺跡では、炉跡に明らかかな地域性が認められた。前期中葉に地床炉、前期中葉の終わりに埋煙炉が消滅、かわって大形の方形石囲炉や埋設土器をともなう円形石囲炉がでてくるようである。さらにこの時期に住居が大形化に運動するかのようになり、炉も大きくなる傾向がある。炉跡が長方形になって大形化する特徴は、八ヶ岳西南麓でもみられる。

中期後葉の滝沢遺跡J13号住居は大形の石で囲った円形炉のなかに土器が埋設されていた。中期末葉になると敷石住居には鉄平石を方形に囲った炉が登場する。滝沢遺跡J10号住居、J8号住居、宮平遺跡J12号住居などである。このうち宮平遺跡の炉はやや時期的に新しく、

方形の石囲炉に埋設土器をともなう。

後期前葉にも方形石囲炉が引き継がれる。これは三田原遺跡群J4号住居、望月町平石遺跡の柄鏡形敷石住居跡、上田市日影遺跡、山ノ内町伊勢宮遺跡などで見つかっている。埋設土器をともなう方形石囲炉は後期前葉堀之内式期の柄鏡形敷石住居にみられ、浅間山麓だけでなく中部地方に特徴的である。

炉内埋設土器 石囲炉に埋設される土器は、口縁部から胴部下半の**と埋煙炉** 土器、あるいは胴部上半から底部の比較的小形の土器を用いる。鉄平石を用いた方形の石囲炉内に土器が埋設されるのは、

中期後葉加曾利E3式期ころからで、後期前葉堀之内式期には多くがこの方形石囲炉に埋設土器をともなう傾向がある。さらに、堀之内式の時期では胴部下半から底部の土器が多く、口縁部から底部をもつ土器をも埋設しており、底部をもつ土器が使われている。炉内埋設土器の大きさは、口縁部径や胴部の最大径が10〇から130である。また、後期初頭の炉跡で二個体の土器が埋設されていた例がある。たとえば、西荒神遺跡J2号住居では、内側に胴部上半の土器の外側に底のあるやや大きめの土器を埋設していた。同じ時期の佐久市西片ヶ上第1号敷石住居跡の炉跡では、内側中央に胴部上半から底の土器を埋設し、その周囲に口縁から胴部の土器で囲っていた。外側の土器の胴部最大径が炉内埋設土器の中でもっとも大きい値になっている。また、埋設された土器の下に焼けた土が堆積していた。このことは土器の内側で火を焚いていたことを物語っている。炉内埋設土器に共通してい

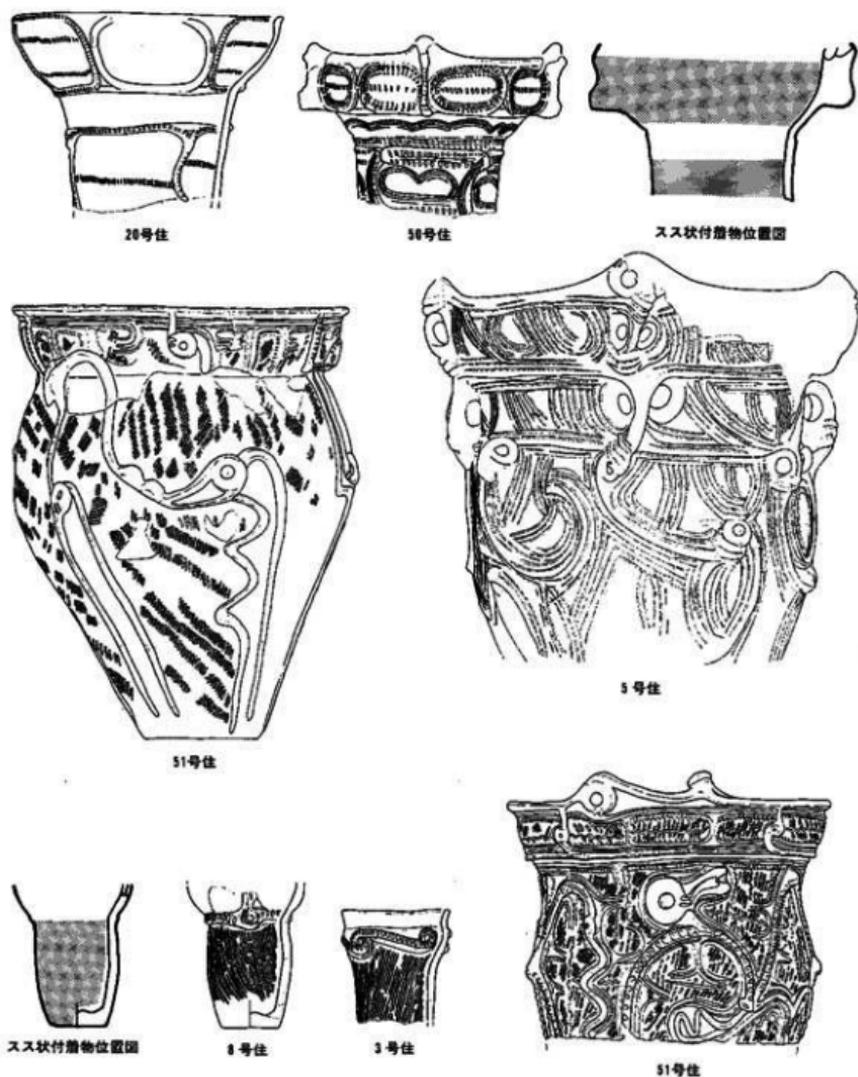


図120 炉内埋設土器とスス状付着物 (S=1/8)

スス状の黒色付着物は、製作時における土器焼成でも発生する。使用時に付着したススとの識別は難しいが、同じ位置に均一に残された付着物や、帯状の付着物は、使用時に生じたものと考えられる。

ることは、口縁部の径もしくは胴部最大径が三〇〇もない小形の底部のある土器をもちいていることである。また、石囲炉のなかに土器を埋設していることは、熱効率を高めるためであろうか。

いっぽう、当地では埋燬炉は中期中葉にみられる。川原田遺跡では四軒の埋燬炉をもつ住居跡が見つかっている。このうち三軒が阿玉台式土器を炉にもちいている。阿玉台式土器は千葉東部の利根川下流域に分布する土器で、浅間山麓では特異ともいえる。これらの炉に埋設された土器は、いずれも口縁部から胴部の大形土器を用いている。

口縁部径が最小で三〇〇、最大で四五〇で、土器を炉の枠のように利用している。また、底のない土器を用いる特徴がある。

大きさをグラフ化すると図四になる。口縁部と器高の比率がほぼ同じで、炉内埋設土器より埋燬炉の土器の方が大形であることがわかる。

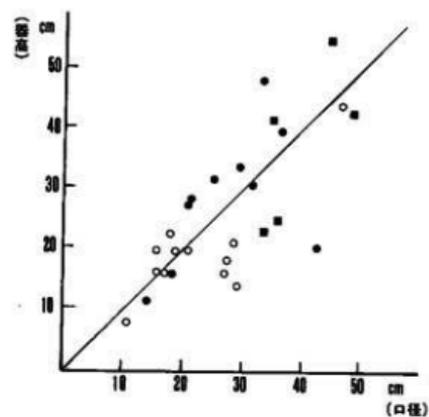
ところで、炉内埋設土器と埋燬炉の土器を観察するときのような特徴がある。炉内埋設土器の内面には胴部下半にスス状付着物がある。埋燬炉の土器には口縁部と胴部下半に二か所に黒色付着物があり、なかには口縁部内側に光沢のあるターレット状の付着物も観察された。これらの土器の状態は、明らかに煮沸に使った痕跡である。また、土器を煮沸し使用することによって、器壁の目がつまり水などの液体が漏れにくくなるが、実験的な方法で明らかになった。炉の施設に容器を直接かけ固定させて使ったものと考えられる。火にかけっぱなしで鍋を揚げつかせてしまう失敗の経験は、誰しもあることであろう。ただし、底のない土器が埋燬炉に多いことは、土器として煮炊きに使っていたものを転用した可能性があるが、埋燬炉の土器は一概に同じ位

置にスス状付着物が認められることから、土器の内側にも一つ土器をおいて使ったのであろうか。土器をどのように使っていたかは今後検討すべき課題である。

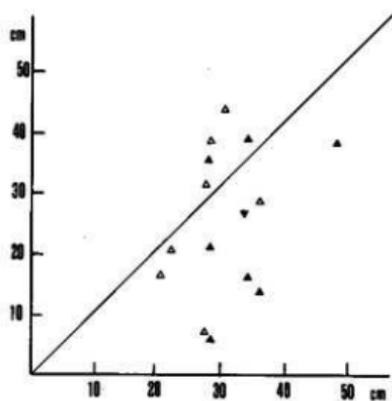
東北地方では石をほぼ三角形に敷き、配石で囲った複式炉が中期後葉に多い。この炉の中央に小型の土器を一つか二つ埋設している。複式炉は中部地方の石囲炉と、小形の土器を埋設して炉の施設として使うという点では共通するが、石囲炉が中期中葉から後期前葉あるいはそれ以降もみられると、地域的にも形態の差こそあるが広く分布する点異なる。

住居内埋燬 住居内埋燬は埋燬炉に使われる土器ほど大きくはないと屋外埋燬が、比較的小振りの土器が使われた。埋設状態はいずれも正位（口縁部ないし胴部上半を上に向けた向き）である。時期的には中期後葉加曾利E3式期から後期初頭称名寺式期にみられる。とくに、柄鏡形敷石住居の住居中央部（主体部）と柄部（張出部）のつながるところに土器が埋設された。後期前葉堀之内式期になると埋燬がみられなくなる。この傾向は柄鏡形（敷石）住居が多い関東地方と同じ傾向である。

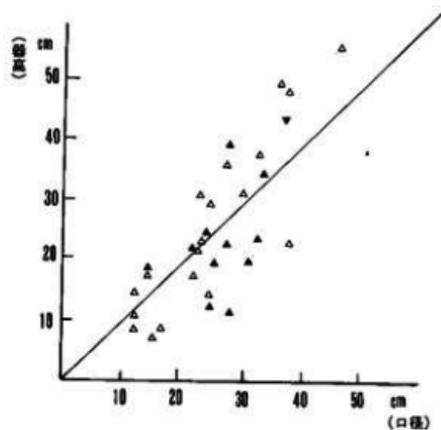
屋外埋燬というのは、土器そのものを正位あるいは逆位（逆さま）に埋設したもので、大きな土坑をとまなわない。土器のなかに子供や幼児や住居内埋燬と同じく嬰兒やヘソの緒などを埋納したといわれている。土坑から出土した土器は、大人の墓にみられることはすでに記したとおりである。



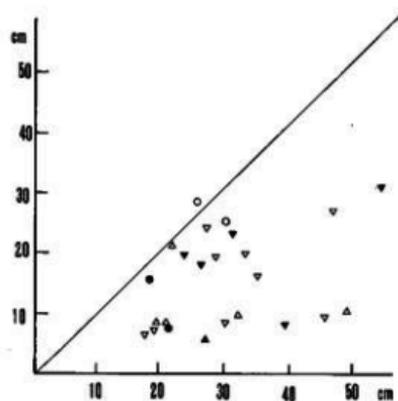
御代田町内遺跡



棚畑遺跡 (南信)



県内の主な遺跡



田籾中原 (群馬県)

● 口径あり

■ 埋燵炉 口径あり

▲ 埋燵口径あり

▼ 住居外埋燵口径あり

○ # なし

△ # なし

▽ # なし

※ 「埋燵炉」は炉の枠のようにもちいられているもので、内部に焼土が堆積しているものに限って呼称した。

図129 埋設土器大きさ比べ

中部地方では、屋外埋葬は関東地方や東北地方にくらべて少ない。関東地方では、中期後葉加曾利E3式期あるいは曾利II式期から後期初頭ないし後期前葉期の内式期に多くみられる。そこで、群馬県田代^{たしろ}中原遺跡を住居内埋葬などくらべてみると、全体的に器高にくらべ口縁部あるいは胴部の径の大きい土器をもちいている傾向があり、屋外埋葬はわりと大きい土器を使っていることがわかる。図四のように屋外埋葬は、田代中原遺跡を長野県内のおもな遺跡や茅野市棚畑遺跡とくらべてみても口縁部あるいは胴部の径の大きい土器をもちいている。このように埋葬の土器は、口縁部や胴部最大径と器高が同じような大きさである傾向がみられる。

炉内埋設土器では底部のあるものが多く、口縁部はあるものもないものがある。これに対して、埋葬は底部のないものが多い。棚畑遺跡では逆に埋設された埋葬があり、いずれも口縁部から底部まで遺存している。

縄文中期の遺跡は長野県ではかなり多い。このうち中期の遺跡では埋葬をもつ住居が多い傾向にあるが、浅間山麓で少ないようである。たとえば、町城の川原田遺跡では一軒もみられない。これに対して、やや時期的に新しい茅野市の棚畑遺跡ではほとんどの住居跡にみられる。土器を埋めこむ風習が流行しなかったのは、浅間山麓南部に特徴的である。

家の間取り

家は雨風を凌ぐだけでなく、獣などの外敵から身をまもるためにも重要である。炉で暖をとり、安心して休むことができる。いわば太古からの「安住の地」であった。ま

た、食料が豊富に確保できれば少なくとも貯蔵庫の役割もはたしたであろうし、活動の拠点となり安定した生活を送る源になったのである。

発掘調査による遺物の出土状態からだけでは、実際には寝る場所、作業場所や食器類などの道具の収納場所はわからない。ましてや、食事のときに、家族の座る場所などはなおさらわからない。考古学的資料からは、家がどのように「使われていたか」を柱穴や付帯施設、住居にともなう遺物の「でかた」などから、家屋内での生活を想定することは可能である。ここでは、縄文時代でも住居が構造的に発展したと考えられる中期中葉から後期前葉についてとりあげてみたい。

まず、住居内で「間取り」はどのように行なわれたのであろうか。

敷石住居跡、とくに柄鏡形敷石住居跡の石の敷き方からみて、共通する空間があったことがわかる。後期前葉の神奈川県下北原遺跡のように柄鏡形敷石住居跡は、まず炉周辺から柄部までの空間をつくっており、住居中心部と使い分けられていることがうかがえる(図四)。

つぎに、住居奥の部分(奥壁部)は立石や配石がみられるなど特徴的な間取りの部分である。富士見町見松遺跡3号住居跡は、石壇状の配石遺構を奥壁部にもつ。神奈川県尾崎遺跡の竪穴住居跡は中期後葉加曾利E3式期で、奥壁部に長さ七〇cmの石が立っていた。中期末葉加曾利E4式期の東京都新山遺跡では、奥壁部と炉辺部に明らかに住居空間をつくっている。ここの柄鏡形敷石住居跡は奥壁部に二重に石が配され、かたわらに立石があった。新山遺跡では二つの住居跡に共通して奥壁部から炉辺部右側に敷石がみられた。後期初頭の東京都上布田遺跡では奥壁部には敷石がみられない。このように、奥壁部の



図130 敷石住居内のようなす (さかいひろこ画)

宮平遺跡の縄文中期後半のJ 9号住居をモデルにその空間利用を描いてみた。入口には埋甕がある。

空間は中期後葉において、配石で囲う、石塚状に石を積み、配石や敷石を置かない空間とするなど、明らかに家のなかで「特別な」空間として利用された可能性が高い。

中期後葉加曾利E2式(曾利II式)期には、出入口部に対応するビット(対ビット)や埋甕をもつ竪穴住居跡がある。炉を中心にして左右対称の中心となる軸の上に、配石あるいは立石、炉、埋甕、対ビットがつくられた。月見松遺跡や尾崎遺跡がこれにあてはまる。また、やや新しい時期の曾利IV式期の茅野市棚畑遺跡2号住居でも、隅四方形でやや出入口部が突出したような五角形ともとれる形で、左右対称の位置で半分に割るとちょうど中心となる軸上に炉跡、配石、埋甕、対ビットがつくられていた。このような竪穴住居は隅四方形ないし五角形に近い形をしており、長野県でも八ヶ岳山麓の中期後葉の遺跡にみられる。埋甕をもつということと対ビットをもつことが竪穴住居の出入口部の特徴ともなっているが、後期にはみられなくなる。

ところが、中期末葉には柄鏡形(敷石)住居という形に変わって別の地域、浅間山麓を含む千曲川流域、関東地方などに分布する。柄鏡形敷石住居は八ヶ岳山麓でもより関東地方に近い山梨県には分布するが埋甕をもたないものが目立つ。後期前葉堀之内式期には出入口部および連結部に埋甕をもたなくなる。ところが、柄鏡形敷石住居では柄部に敷石を敷く労力を多くかけている事例が少なくない。たとえば群馬県行田遺跡では柄部に階段状の大きな平らな石が積まれていた。

出入口部にある埋甕は、胎衣(胎盤)などを入れ家の出入口の敷

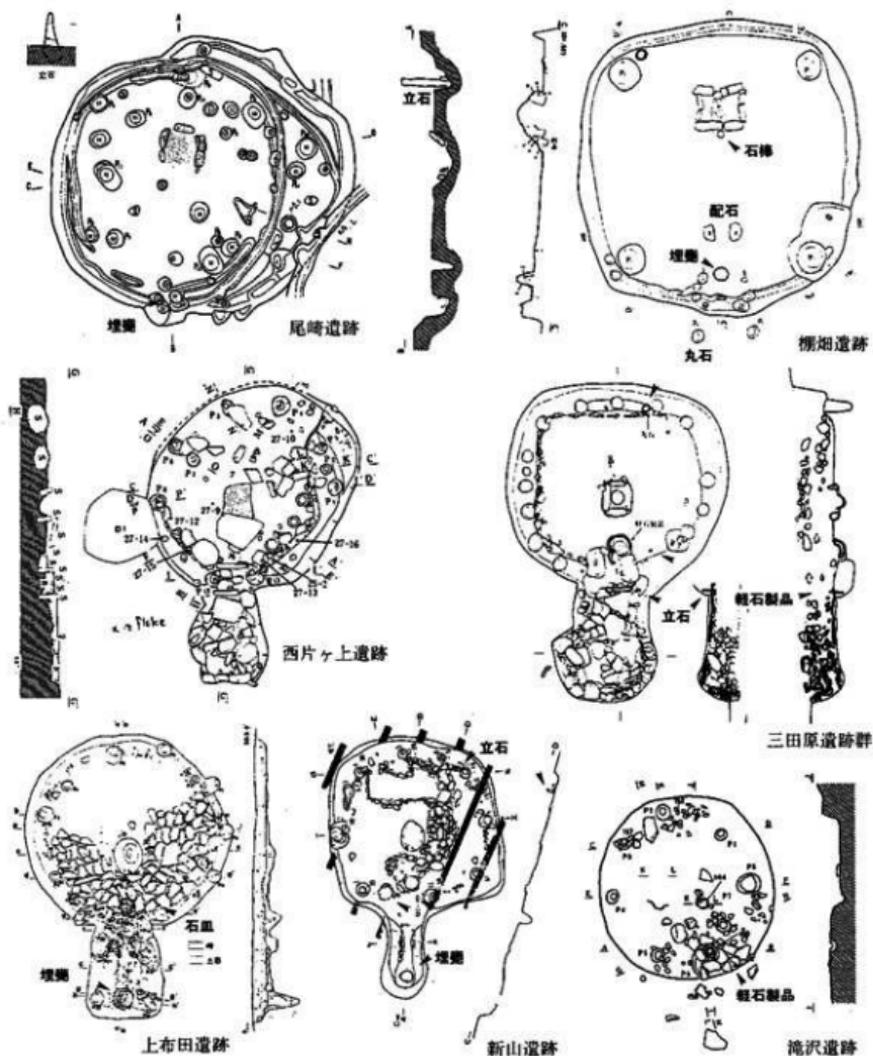


図131 住居の間取り (S=1/100)

居の部分に埋納した戦前までの民俗例との類似が指摘されている。また、両向きに対ビットがあることから、何らかの上屋構造があったことも想像できる。さらに、柄鏡形敷石住居の連結部に注目すると、佐久市西片ヶ上遺跡では埋裏はもたないが、敷居のように住居中央側と柄部を仕切るように鉄平石が立てられていた。同じように、三田原遺跡群3号住居跡では柄部にかかる部分に石が立てられていた。上布田遺跡は同じ位置に石皿が立てられていた。なお、対ビットの間に石鉢状の軽石製品が三田原遺跡や滝沢遺跡でも埋設されており、埋裏の代用品と考えられる。軽石の石鉢は火山地帯ならではの産物である。

三田原遺跡群3号住居跡は中期末葉の柄鏡形敷石住居で、柱穴から内側に石が敷いてあったため、住居壁との間に空間部分が存在したことが明らかにになった。これもひとつの住居空間の利用の現れとみることができる。

竪穴住居をも含めた住居には、模式図に示した空間が認められる。竪穴住居や柄鏡形敷石住居に共通して存在したであろう空間として、柱と壁の間にめぐる空間(外帯)、奥壁部、炉辺部、炉辺部右、炉辺部左、出入口部が想定できる。柄鏡形(敷石)住居には、加えて住居中心部と柄部とをつなぐ、連結部と柄部の空間があったのであろう。

各住居空間がどのように用いられたかについて、配石などのともなう施設や出土遺物などからみてもみる。

住居空間の 後期初頭の東京都上布田遺跡では住居主体部と柄部と**利用** のつながる部分に緑泥片岩製の大型の石皿が立てて

置かれていた。滝沢遺跡J9号住居は柄鏡形住居跡ではなく楕円形で、連結部に相当するようなビットのかたわらに軽石製の臼状の埋裏の代用品と考えられる石鉢が床に埋設されていた。さらに、注目すべきことは柄鏡形敷石住居跡である三田原遺跡群3号住居の連結部の対ビットの間に同じような石鉢状の軽石製品が埋設されていた。3号住居は柄部との境に鉄平石が「仕切る」ような状態におかれ、柄部にかけて石が敷かれていた。柄部の東壁は小振りの円礎を積み上げるようにつくられていた。この対ビットから柄部にかかる部分にも明らかに空間部分が認められる。また、奥壁部には丸石がおかれていた。

奥壁部に棚畑遺跡のような石壇状の施設をもつ住居跡は、富士見町月見松遺跡3号住居などにもみられる。また、新山遺跡にみられるような立石がある住居跡は、神奈川県尾崎遺跡など同じく中期後葉の住居跡にもみられた。三田原遺跡群3号住居からは丸石が奥壁部から出土しており、テラスのような施設が作られている。東京都貫井二丁目遺跡では、柄鏡形住居跡の奥壁部の壁に割られた土器が貼りつけられていた。土器列中央の柱穴の覆土上面には石棒によくもちいらる緑泥片岩が出土した。このことから、奥壁部は家の中での特別な空間、祭祀的な空間が存在していた可能性が考えられる。

つぎに、さきあげた事例の中で特徴的な住居空間は、連結部である。連結部には対ビットがあり中期末葉から後期初頭には埋裏か、もしくは三田原遺跡群や滝沢遺跡にみられたようにそれに変わる遺物が埋設されていた。さらに、この空間部を仕切るように石が立てられており、現代の家にみられる「敷居」のような役割をはたしているの

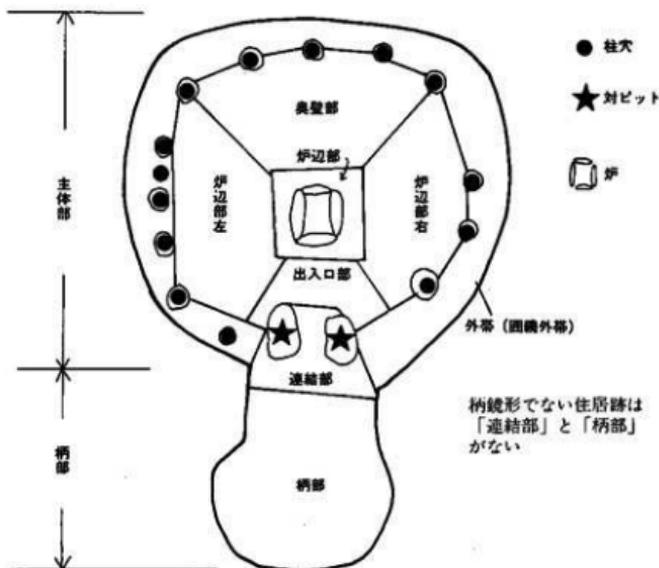


図132 住居跡の間取り模式図

あろうか。
 竪穴住居の出入口部を特定する根拠は、おもに民俗例から出入りに土器が埋設されていたことによる。たしかに、八ヶ岳山麓の埋喪をもつ竪穴住居は、炉を中心として左右対称である。住居に中心

軸を引いた場合、軸上に炉や埋喪がほぼのつてくる位置にある場合が多い。茅野市与助尾根遺跡の住居をみると、炉跡が中央にあつて埋喪がない場合は、なかなか「出入口部」はわからない。しかし、炉跡がいつぼうの壁によつた位置にある場合は、それに対応する場所が出入口部であつた可能性が高い。杓形敷石住居の場合は、竪穴住居の間取りに柄部が加わつたと考える。関東地方と同様に、中部地方の杓形敷石住居では埋喪をもつものは中期末葉から後期初頭に限つてみられるが、ほとんどが連結部あるいは出入口部にだけみられる。東京都新山遺跡(図131)のように柄部先端には埋喪はみられないが、三田原遺跡群第3号住居のように柄部に敷石が敷かれ、柄部先端のいつぼうが階段状に積まれていることから、柄部に出入口があつた可能性は高い。柄部については、今後構造的な面や遺物のあり方から改めて検討すべき課題である。

住居面積

御代田町でもっとも古い竪穴住居跡は、下弥堂遺跡で調査された縄文前期初頭のものである。下弥堂遺跡では前期初頭の住居跡が一〇軒発掘された。この時期の住居跡はほかに、塚田遺跡で一二軒、川原田遺跡で一軒、滝沢遺跡で二軒調査された。塚田遺跡では、前期の竪穴住居跡を二四軒発掘しており、このうち一二軒が中ごろのものである。前期の住居跡の床面積をみると、初頭では推定で二五平方メートル以上が一軒あるが、おおくは一〇平方メートルの中ごろになると床面積は最小で一〇平方メートル、最大で二八平方メートルである。

- △ 下弥堂
- 滝沢
- ▲ 西荒神
- 東荒神
- 川原田
- ▽ 西駒込
- 塚田

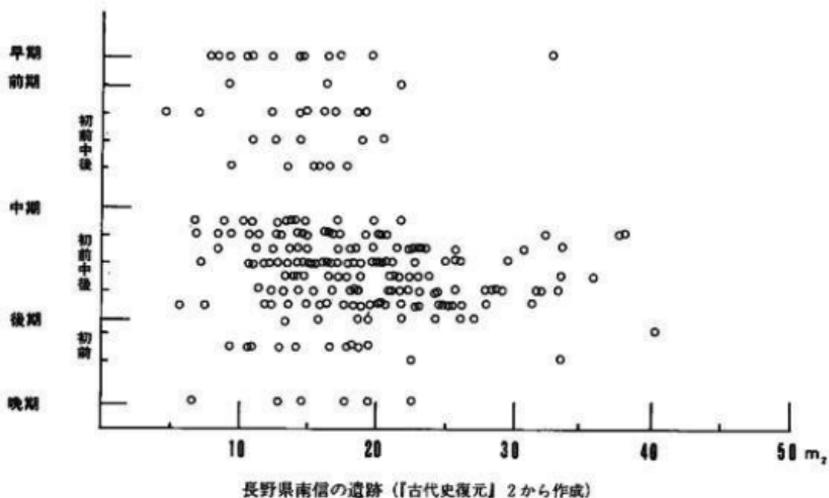
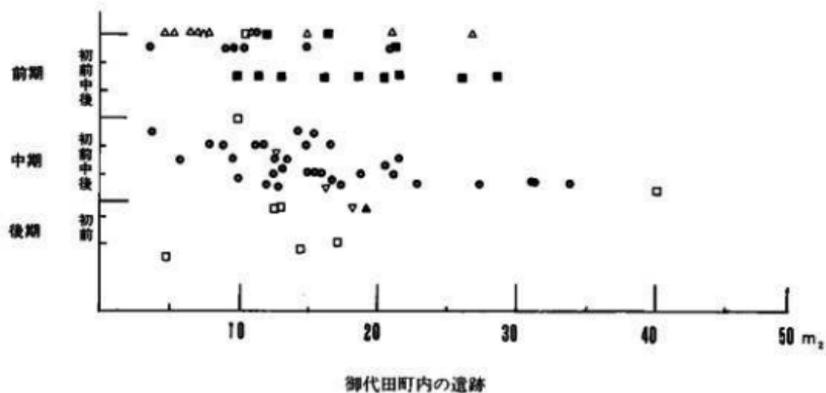


図133 住居跡床面積の推移

中期では川原田遺跡から三三軒以上の竪穴住居跡が見つかった。中期前葉の竪穴住居跡九軒、中葉七軒、後葉一七軒で、これらを中心に床面積をみると、後葉になるにつれて大きくなる傾向がみられる。前葉では床面積は、八平方メートルから一六平方メートルであったものが、後葉になると床面積が、最小で一〇平方メートルが一軒、最大が三四平方メートルに近いものがあるが大方向一〇平方メートルから二〇平方メートルに集中するようである。最大の床面積は、中期後葉の竪穴住居跡で、四〇平方メートルと予想される。

滝沢遺跡の中期末葉から後期前葉の住居跡をみてみよう。中期末葉の住居床面積は、中期中葉のものとはほぼ合致し、一二平方メートルないし一三平方メートルである。後期前葉では最小の床面積で約五平方メートル（堀之内Ⅱ式期）、最大で一八平方メートルである。これらは、数石住居ないしは対ピットをもつ住居跡であるため、柄鏡形（数石）住居跡であったと仮定すると柄部の面積がおよそ三平方メートルから五平方メートルと床面積は二〇平方メートル近くで、中期中葉から後葉の床面積と差程変化はみられない。ちなみに、遺存状態の良好な三田原遺跡群の後期初頭3号住居跡では一九・八平方メートルで、柄部を除くと一六平方メートルである。

住居跡の床面積について東日本では前期に大形住居跡が出現する遺跡がある。集落に一辺が一〇メートルを超えるような竪穴住居跡が一ないし二軒あり、また炉跡を二つないし三つもつものもあることから「共同作業場」とか「雪国の家」、「祭祀場」などと諸説紛々している。浅間山麓ではいまのところそのような事例は報告されていないが、碓氷峠を越えた安中市中野松原遺跡では、前期前葉の大形住居跡が検出された。後期では一例だけ大形の住居が見つかった遺跡がある。小諸市久

保田遺跡の後期前葉堀之内式期の柄鏡形数石住居跡（図134）で、角礫が柱の周りをめぐっている。堀之内式期の柄鏡形住居の床面積が八、七平方メートル（丁7号住居）であるのに対し、九倍近くの大形住居跡は七五平方メートルの大きさを測る。久保田遺跡の大形住居の周礫は、大きい角礫が住居覆土中にあることから、生活時に礫があつたとは考えづらい。また、極端にほかの住居と大きさが異なることから特殊な意味をもつた住居であつたと考えられる。また、群馬県荒砥二之塚遺跡でも普通サイズの住居に混じって、大形の柄鏡形住居跡が見つかった。

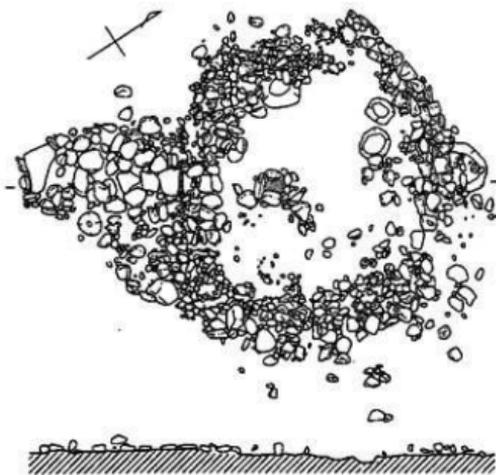


図134 小諸市久保田遺跡の大形数石住居（1：120）

壁の有無がわからず、掘り込みの有無も確認されなかった。床面には大小の礫がめぐる。このような周礫が住居使用時に存在したか疑問視する意見もある。（【久保田遺跡】より）



写78 群馬県荒砥二之堰遺跡の大形柄鏡形住居跡

〔「荒砥二之堰遺跡」より〕

荒砥二之堰遺跡では中期末葉加曾利E4式期から後期前葉堀之内日式期の竪穴の柄鏡形住居跡で集落を形成している。柄鏡形住居跡はいずれにも床面上に柱に沿って小さな礎がめぐる配石がみられる。このうち堀之内式期に一軒だけ大形の住居があった。大きさをくらべると同じ時期の柄鏡形住居跡が二六平方メートル、二七平方メートルであるのに対し、大形の柄鏡形住居跡（第35号住居跡）は六二平方メートルを計る。第35号住居跡は大きいというほかに、柱穴の周りに段がめぐる構造になっており、この点もほかと異なる。

後期の大型住居跡は炉跡が一つであるなど、久保田遺跡は別として、荒砥二之堰遺跡にみるようにとくに際立った違いはみられない。逆に前期には、縦長で炉跡が二つや三つある場合があり、このことから共同作業場とか共同の住居であるとか雪国の家屋であるとかいわれている。後期の大型住居跡とは同一に考えることはできないが、ひとつの集落で一軒程度しかないこと、かならずしほどの遺跡にもあるわけではないことを考えると、一つの地域の拠点となった集落に特徴的存在したものと考えられる。大型住居跡の問題は、遺跡間の役割を考える上でも重要な問題で、このような住居の出現の背景には、安定した生活があり、拠点的集落とともに狩りなごともなうキャンピング的な（一時的な）集落があったことが想像される。

屋根の形

日本の家は古来から木造建築で、気候的には湿度が高く温暖なため、発掘調査では、屋根が見つかるケースはほとんどない。見つかるのは地面に残された住居の床面や柱穴・炉などである。床に敷いてあったであろう敷物や棚、柱をはじめとして壁など有機物で作られた施設などはめつたに残っていない。ただ、まれに火災にあった家の柱の断片が残されていることがある。

家の上屋構造は、主柱を中心に梁、桁、垂木などによって構成される。建物には竪穴式、平地式、高床式があり、これに掘立柱建物が加わる。縄文時代は全時代を通じておもに竪穴住居であったが、山形県押出遺跡などの調査から平地住居が住居として使用されていたことが分かってきた。円形にまわる杭列の内側に土器などを含んだ覆土がマ

ウインド状に堆積していたのである。

青森県三内丸山遺跡では、柱穴が方形に並ぶ縄文前期の掘立柱建物が見つかった。さらに、従来弥生時代に出現したとされていた高床式建物が、富山県桜町遺跡では貫通する四角い穴のある建築部材の発見されたことにより、すでに縄文中期から高床建築が始まっていた可能性がでてきた。ただし、高床式建物の事例はきわめて少ないので、今後の資料の増加を待たねばたしかなることはわからない。

平地式と掘立柱建物との違いは、建築学者によれば、「平地面上に掘立柱を用い建物を造る」点は共通するが、平地式建物は「壁全体でうける形式」であるのに対して、掘立柱建物は「側柱が構造上の主柱なる形式」であると規定している。最近、群馬県子持村黒井峰遺跡や中筋遺跡で、火山灰で一度に埋没した住居が発見された。五世紀や六世紀の事例で、竪穴住居跡の周りに土堤がめぐり、上屋が落ち込んだ状態で見出された。竪穴住居跡では板や草による立壁があり、出入口には梯子がかけられ、屋根には土が置かれるという構造が明らかになった。また、竪穴住居跡のほか立壁をもち、地面を掘り込んでいない平地住居があり、夏の住まいや倉庫として利用されていたらしい。縄文時代の家の上屋構造がかならずしも五世紀や六世紀のものともまったく同じとは考えられないが、雨水を防ぐための土堤や、立壁、草屋根だけでなく土屋根が縄文時代に存在したという可能性はきわめて高い。さらに中部地方や北関東にみられる中期中葉や後葉の一辺近くもある壁の高い竪穴住居跡は、豪雪などの気候に耐えうる住居構造で、大形

従来、縄文時代の竪穴住居跡は建築学的見地から屋根が土に直接かかる「伏屋式」だけと考えられていたようであり、民家の屋根の部分を復元したようなイメージでとらえられがちであった。長野県、尖石遺跡や与助尾根遺跡は、昭和三〇年代に建築学の東京大学教授藤島友次郎が復元したもので、伏屋構造の竪穴住居跡復元の先駆けといえる。

ところが、最近火山灰に埋もれた集落の調査や、数多くの発掘成果により竪穴住居跡に付属する施設として土堤や壁立などがある可能性がでてきた。また、富山県桜町遺跡では縄文中期の貫通した穴のある建築材が出土した。これによって、木を組み合わせ建物を建てる技術をもち合わせていたことが判明した。富山県不動堂遺跡では、中期の高床式建物が復元されているなど、縄文人は高度な技術をもち、多様な建築物を造っていたことがわかってきた。

建築学の視点では、主柱と梁や桁をもち「伏屋式」と、側壁を立てる「壁立式」に分け、縄文早期末葉には壁立式に変わることが指摘されている。また、早期では竪穴住居は垂木で上屋をささえるテントのような構造、前期になると主柱、桁、梁をもち垂木の上に茅などの草を葺き、壁に草や板などの立ち壁が作られる壁立式に変わるともいわれている。

以下に屋根の架け方を分類した宮本長二郎の説を引用する。

伏屋A式—「竪穴の側壁部下端部から竪穴壁面の途中にかけて垂木

尻を据え付けて屋根をかけ、屋根に土を葺く形」北海道と東北地方にある。

伏屋B式—「竪穴壁上端から竪穴外縁部にかけて、垂木尻を据え付



図135 竪穴式住居断面模式図（宮本1988より）

けて屋根をかける」もので、土で屋根を葺いたもの。

伏屋C式—草で屋根を葺いたもの。旧石器時代から近世までありとくに縄文時代中期に盛んになり発展した。

二段伏屋式—「主柱を境にして桁から上の小屋組を草葺き、桁から下の地上面までを土葺きとする」。弥生時代中期の焼失家屋に「主柱と竪穴壁面の床面に、垂木の炭火材が密に接近して遺存しており、

主柱の内側の住居中央部には、ほとんど炭化建築材を残さない例が多い」ことを根拠に、「土葺きから草葺き屋根への過渡的な形式として、縄文時代中期にはすでに成立していたとみてよい」としている。

「伏屋B式」と「伏屋C式」、「二段伏屋式」は主柱のある点で共通しており、屋

根が土であるか草であるかの違いで識別できるのは、焼失家屋が多数検出されない限りむずかしい。また、地域によっても大きく異なる可能性が大きく一律に論じられない難点がある。近世の民家にみられる草屋根から、土屋根から草屋根へと発展的にとらえる点はより合理的であろう。

柱穴と上屋根

家の構造は気候や風土に即したものであり、地域ごとに微妙に異なる可能性が高い。早期はより小規模な竪穴住居を作っていた。柱の在り方をみると、早期には壁よりの位置に小さく浅い柱穴がめぐり、炉跡は小さなピットにしかすぎないが、前期になると壁柱や大きく深い柱穴や周溝、焼土が堆積している炉をもつ竪穴住居がみられる。前期中葉には円形や「コ」の字形の石囲炉である。

早期から前期にかけての竪穴住居跡の変化は、上屋根を考えると、テント式の中央で垂木をまとめる形から主柱によって桁がつくられ、垂木が組まれる住居構造を想定する。この時期、前期初頭の約六〇〇〇年前は、縄文時代でもっとも温暖で縄文海進がすすんでいた。中部地方の豪雪地帯の遺跡では、前期から壁や柱穴が一歩近くあるしつかりした構造の竪穴住居跡がみられる。ただ、縄文時代全般では、竪穴住居はもっとも温暖であった六〇〇〇年前では、移動の多い生活であったこともあって、掘りかたの浅い簡単なつくりで、中期以降はだいに寒冷になるにつれて、また地域によってはしっかりした造りになるようである。

大きさと 関野克は昭和十三（一九三八）年に埼玉県上福岡遺跡^{上福岡遺跡}建て替えの縄文前期の竪穴住居跡の分析を行ない、拡張住居の床面積を検討し、人ひとりが手を広げられる範囲、三平方メートルをひとりの面積とした。

御代田町域の竪穴住居に住む人数を時期ごとに、おおまかにたどっていくと、前期では初頭で一軒に二から五人、前期中葉で三から九人で、中期になるとふたたび初頭で減り一から五人、前期中葉から後葉にかけて二から七人と多く、もつとも多い場合は実に一三人という人数が単純にあてはまる。中期末葉から後期初頭にはふたたび四から六人程度に減る。とくに中期の家の大きさは一定のまとまりはあるもの大きいものがみられる。

いっぽう、住居の拡張や重複が多いのも中期中葉や後葉である。住居の拡張というのは、竪穴住居構成員すなわち家族が増えるなどの理由で同じ床を利用し、柱の位置をかえて広げることである。このとき、拡張されたプランは柱の位置や深さによって判断する。大きさにあわせて炉や周溝などが作りかえられたりもする。これに対して、重複は、ひとつの住居の形に関係なく、時代の異なる別の住居が重なっているもので、床面が異なっていたり、壁や周溝などが切りあっている。拡張はあくまでも家の空間を広げる点において、重複と大きく違っている。

長野県内では中期の遺跡がかなり多い。中期の遺跡の多くは、竪穴住居の拡張や重複が目立つ。このことは、中期の継続期間が長いこと

も考えられるが、住居面積が比較のおおくなっていることからみて、集落の人口そのものが増加していた可能性が高い。ひとつの集落の人口を出すには、一時期に同時に存在する家を見極めねばならず、ひとつの型式、たとえば加曾利E3式土器が何世代にかけて存続するかという問題にもつきあたり、単純に床面積を三平方メートルで割って住居の数をかけるというわけにはいかない。遺跡ごとの細かな分析、すなわらひとつの型式のうちで、「同時期」（ジャスト・モーメント）の住居跡をその位置や土器の出土状態（接合関係）などから判断していかねばならない。

しかしながら、おおよそ御代田町域では、前期においてはきわめて小さな家に少数で住み、中期になってひとつの住居に五人前後が暮らし、なかには一三人位収容できる竪穴住居を構築していたことは確実である。つまり中期になってより安定した集落が営まれていたことが想像できる。

住居の流れ

住居には構築→使用→廃棄の流れがある。住居の流れは住居の一生とか、住居のライフサイクルなどとよばれ、最近、住居廃棄跡の問題をとりあげ、出土遺物や覆土の状態から家が棄てられ埋没していく過程を発掘調査によって明らかにしていることとする報告や研究がさかんである。われわれが発掘調査で目にするのは、上層が朽ちてなくなり、その窪地を利用してゴミ捨て場と化したしまった住居跡である。住居跡には家として住んでいた痕跡と廃棄のための凹地の二段階を考えなければならぬ。



写79 川原田遺跡J-5住に廃棄された土器

竪穴住居跡に残された土器や石器は、たいがい住居が廃絶した後捨てられたものである。中期ではとくに大形破片や、完形土器が集中して出土する例が多い。これに対してがなどに使われた土器や、床面直上から出土したものは、住人が使っていた可能性が高い。

住居を使用していた状態の見極めはなかなかむずかしい。住居にもなう施設、がや埋燵、柱穴などや、炉に埋設されていた土器などは住んでる人が直接使っていたものである。また、多くが敷石住居の敷石は石囲炉を作ってから石を敷き、配石などは床面に設けられた施設であることから住居使用時にあったものであろう。一般的に、住居の時期はともなう土器や炉内の土器、床面出土の土器がない場合、覆土

中の土器の大形破片や土器の量で時期を推定することがあるが、これには以下の理由で難がある。

住居跡の覆土は通常、竪穴住居跡の壁際からレンズ状に堆積する。埋没によって生じた凹地は、新たに住居を構築し、生活を始めた人々のゴミ捨て場となった。したがって、住居跡覆土中から出土土器は、後の人が廃棄したもののあることが多く、住居が使用されていた時代を正確に示さない。住居の時期を決定づける一級資料は、住居にともなうが内埋設土器や埋燵、ついで床面に接して出土した土器やがの覆土から出土した土器である。

石囲炉や敷石など家を構築するときに必要な材料の調達は、近くにある埋まりきらない廃屋の石を抜き取って使うことがある。また、柱も抜き取って使われた。関東地方では、貝塚に構築された竪穴住居を埋める貝層中に、柱を抜き取った跡が確認された。

四 浅間山麓の縄文集落

集落の立地

浅間山麓南部の縄文集落は、千曲川流域とその支流の裾野は小さな起伏はあるものの巨視的には南面に向き、これと向かいあうような位置に森泉山、平尾山、八風山、荒船山が南に連なる。

浅間山麓の裾野やこれらの山々は千曲川やその支流によって開析されている。遺跡は豊かな湧き水が得られる日のあたるサンライン地帯に分布する。

また、浅間山麓は火山灰に厚くおおわれているために遺跡の立地をとらえるさまたげとなっている。さらに、高速道路などの発掘調査などで最近資料が増えてきたものの、縄文時代の時期ごとの集落立地を検討するだけのデータが不足している。ここでは、御代田町域を中心として浅間山麓南部の縄文集落をおおまかにみたくうえで、代表的な遺跡について時期ごとに比較してみたい。

集落遺跡というのは、竪穴住居跡などの家があり、生活の拠点であったであろう遺跡をさす。たとえ一軒しか住居跡が見つからない遺跡でも集落、家族単位のみうであつたと考える。また、集落遺跡に対して、土器や石器などの遺物やおとし穴などの土坑などで構成される遺跡は狩猟活動の場などであつたことが想定できる。

つぎに御代田町の遺跡を中心として各時期の集落遺跡のようすについてみてみよう。

草創期

縄文時代草創期は槍先形尖頭器（石槍）などや土器が報告されている遺跡があるにもかかわらず、この時期の竪穴住居跡の報告例は少ないようである。

東日本、中部関東地方では旧石器時代の居住形態を継承している可能性がある。竪穴住居跡が発見されるのはきわめてまれで、遺構は石器が集中したブロックがある。佐久市下茂内遺跡では尖頭器の製作跡が見つかつている。これらの遺物集が居住の施設であるかどうかは疑わしい。ガラス片のような黒曜石や安山岩の石クズの上に覆きまされたとは考えられないからである。遺物集中は石器やその未成品が

含まれていれば石器製作跡あるいはその残骸を含めたゴミ捨て場と考えるのが妥当であろう。発掘調査で住居の痕跡は確認できなかったが製作跡の近くに、簡略な居住施設があつたことは想像できる。黎明期の縄文人の生活は一定の場所に留まることのない、食料を確保するための移動に富んだものであつたであろう。

豊富な石材の産地に構えられた下茂内遺跡は、一定の種類石器、尖頭器だけを作っていた遺跡である。これは縄文時代の初めには、すでに専門的に石器を供給した製作工場の存在を示唆するものであり、重要である。

後半になると木曾郡大桑村お宮の森裏遺跡では、草創期後半の表裏縄文をともなう竪穴住居跡が九軒見つかつている。いずれの竪穴住居跡も掘り込みが浅く、柱穴も浅い簡単なつくりであつた。浅間山麓南部では草創期の集落遺跡はいまのところ皆無であるが、今後、火山灰の下に眠っている遺跡が発見されるかもしれない。

早期

竪穴住居跡が確認されたのは望月町新水B遺跡や佐久町後平遺跡である。新水B遺跡では早期の前半押し型文土器の時期から後半の沈線文系土器の時期まで集落が営まれていたようである。

御代田町では塚田遺跡で土坑が見つかつている程度であり、縄文時代の胎動が感じられるこの時期には依然として定着した集落遺跡が少ないようである。

前期

縄文時代の文化的要素がほぼ出揃ったといえる形成期には、御代

田町でも集落遺跡が多くみられる。塚田遺跡と下弥堂遺跡では前期の初頭から竪穴住居跡が作られた。下弥堂遺跡では二三軒の竪穴住居跡（時期不明他にあり）が見つかっている。塚田遺跡では、竪穴住居跡が初頭一二軒、中葉が一二軒みられる。ところで、竪穴住居跡が同時に併存したかどうかは、出土する土器の型式が同じであること、ついで土器や石器での接合関係がみられること、位置関係などによって決定される。

塚田遺跡の場合、遺物における接合関係がみられないようなので、ほかの二つの条件で考えなくてはならない。このとき、竪穴住居跡の形や炉跡や柱穴などの構造的な違いは、通常時間的な指標とはなりえない。ほかの遺跡の例からおおよそ三軒から五軒程度で集落が構成されていたと考えられる。塚田遺跡の場合は、初頭では南に五軒、北に五軒、東に離れてある二軒はそれぞれ調査区外に広がっている集落にとりこまれようか。中葉は初頭とほぼ同じ位置に北側の七軒が三軒ないし四軒が継続し、これより南西の二軒、南の三軒に分けられようか。これの調査区西側に集落が広がっ

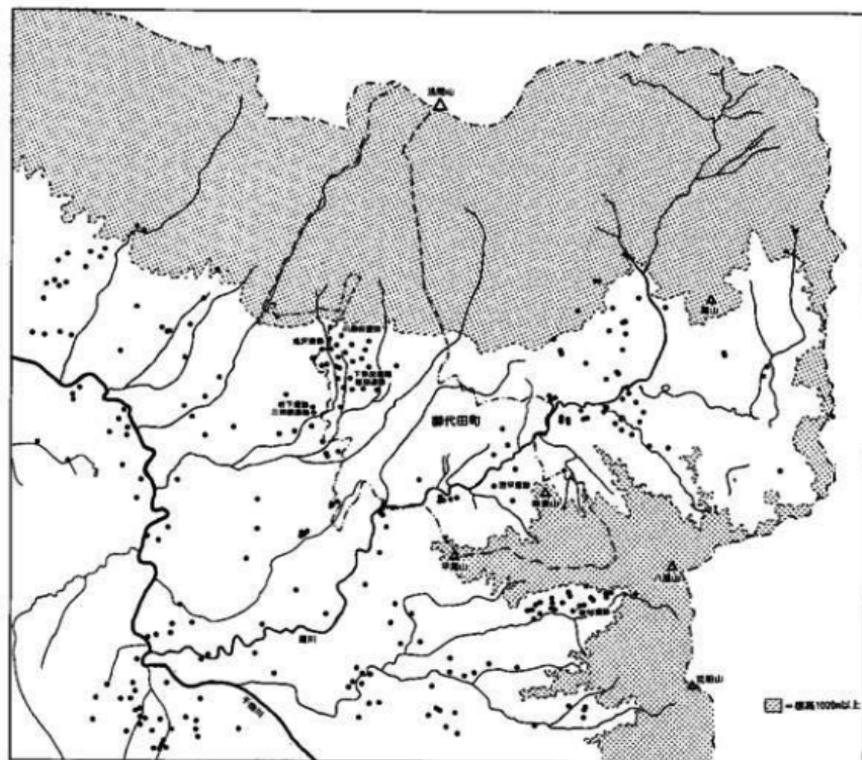


図136 浅間山麓を中心とした縄文遺跡分布図

ている可能性もある。

川原田遺跡では竪穴住居跡が前葉に二軒、中葉に三軒、後葉に一軒が標高八七六一八七八の位置にみられる。土器型式で連続していないことから、移動を繰り返したなかでほぼ同じような位置に集落が形成されたと考えられる。

竪穴住居跡にもなう遺構には土坑があるが、貯蔵穴のほかに墓の用途が考えられる。墓穴の場合は隅丸長方形あるいは横円形が考えられる。また、土坑でも下弥堂遺跡のD4号土坑(写30)のように円形で、石が中央部分に多く置かれていた。こういった集石土坑は、覆土に焼土が混入していたり、披熱し赤く変色した石や、石にスズやタール状の付着物がみとめられる場合、調理場の施設であった可能性が高い。

中

土器にみる前半の華やかさから縄文時代の燦然ととらえられ、後半ではひとつの画期をむかえ展開していく。これらの変化は、おもに川原田遺跡や宮平遺跡、滝沢遺跡の集落でみることができる。ここでは中期前半は川原田遺跡、後半は滝沢遺跡からみてみたい。

中期初頭の遺跡は中部関東地方では、最近になってようやく発掘調査例が増えてきた。滝沢遺跡で三軒報告されている。前期にくらべると、一軒ないし二軒の竪穴住居跡しかない遺跡が多いことから、一時集落が衰退したような感をいだかせる。

中期前半になるとふたたび住居軒数が増える。本節三では川原田遺

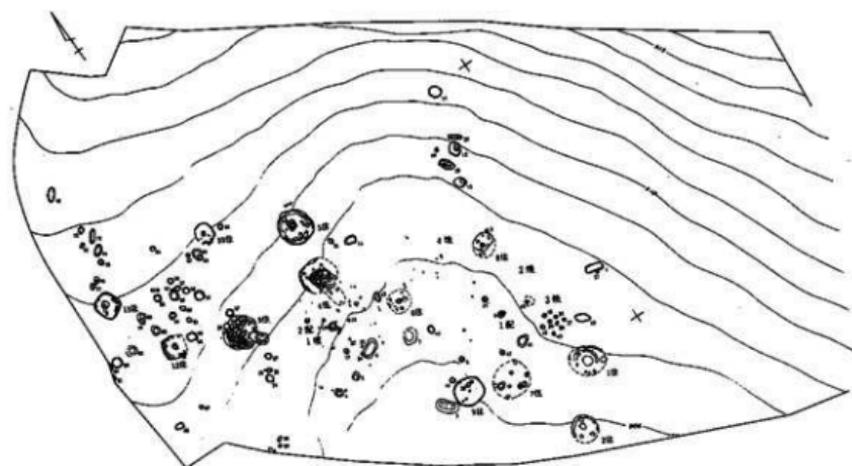
跡をA、B、Cの三群に分け、各々一五軒、二〇軒、一〇軒程度ととらえている(図70)。

中期後半では、滝沢遺跡では二軒だけである。両者とも土器の点から明らかな時期差があるため、このころは集落は一軒程度の小規模なものであったのかもしれない。宮平遺跡では数軒検出されているが、限られた調査のためその全貌は把握できない。

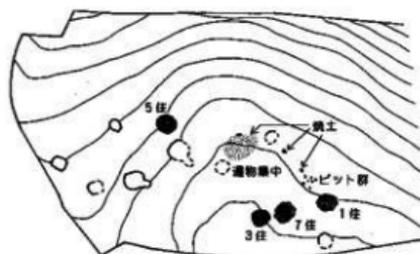
佐久市吹付遺跡は中期後葉の竪穴住居跡や柄鏡形敷石住居跡一二軒からなる集落遺跡である。土器型式の点から連続して居住が繰り返された好事例である。ここでは集落の動きをみるためにくわしくみてみよう。

加曾利E3式(曾利Ⅲ式)期では竪穴住居跡が四軒、この後に加曾利E3式(曾利Ⅲ-Ⅳ式)期が三軒に分けられ、そのどちらに属するか不明な一軒、加曾利E4式期が五軒ある。竪穴住居跡のほかに墓と考えられる土坑が住居の西と南側にある。南の土坑群の中に加曾利E3式期などの配石遺構が二基ある。また、東側には円形の土坑群があり、貯蔵穴と考えられている。このように居住域と墓域、貯蔵穴群に分かれているようである。さらに出土遺物が8住居辺に集中する傾向が認められ、焼土があることから報告では中期後葉での「ある種の儀礼空間」を想定しているようである。ただ、焼土があるものの遺物の集中だけでは単なる鹿藪場である可能性も捨てきれない。このように、居住域の南に墓域が広がる傾向はほかにもみられ、後期の集落遺跡に土地の空間利用の仕方が継承されていくようである。

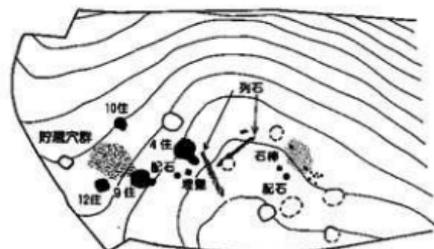
中期末葉から後期になると、ふたたび浅間山麓南部では住居軒数が



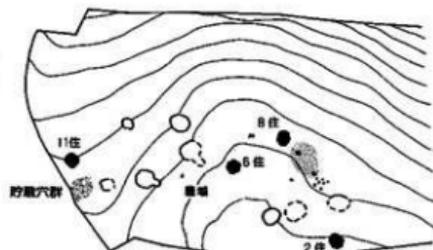
加曾利 E 3 式期



加曾利 E 4 式期



加曾利 E 3 (新) 式期



「貯蔵穴」や「土坑墓」の判断は報告書の記載にしたがった。形態によるものであろう。土坑の機能を特定できるような様子などや、人骨はいずれも出土していない。

図137 佐久市吹付遺跡集落変遷図 (『長野県埋蔵文化財センター年報』より)

増え縄文集落は活気をとりもどすようにみえる。滝沢遺跡では、中期末葉が二軒、後期初頭が二軒、後期前葉が三軒となる。住居跡の分布は北に広がる可能性が高いが、集落の規模はおおよそこの程度であつたろう。中期末葉にともなう土坑などはあきらかではないが、後期になると円形の配石遺構や耳形土製品、垂れ飾りなどの特殊遺物が出土していることからそれらをともなう墓域や祭祀的な空間が南に広がっていたと考えられる。後期になると北側に居住域、それに接して南側に墓域や祭祀空間が存在していたのであろう。

滝沢遺跡と同じ時期から集落がつけられる小諸市三田原遺跡群についてはさらに大きな集落、拠点的な集落であつたことが想定される。

すなわち、中期末葉に九軒、後期初頭一軒、後期前葉六軒が分布する。とくに、後期前葉になると柄鏡形敷石住居跡に隣接して大形の配石遺構が作られる。これは、北側に居住空間、配石遺構の南側に墓域や祭祀空間が作られていたことが想定される。さらに、三田原遺跡の北東に岩下遺跡があり、ここでも中期末葉から多数の住居跡が見つかっている。中期末葉から後期初頭に六〜七軒、後期前葉に一六軒ほどの住居跡が重複しながら分布している。ここでも中期末葉から柄鏡形敷石住居跡が多く、後期にはほかに竪穴住居跡もあるようである。注目すべき点は、ここでも後期の柄鏡形敷石住居跡に接した南側に、大形の配石遺構が造られていることである。また、弧状の配石遺構内側には住居跡はみられず小形の配石遺構が作られている。出土遺物の検討がまたれるが、おそらく大形の配石遺構の内側は墓域か祭祀的空間が作られていた可能性が大きい。

中期から竪穴住居跡が弧状ないし環状に分布するが、これは縄文人が台地縁辺部の良好な選地を行なった結果であり、そこに集落を作る計画性、スペースデザインがあつたかどうかはわからない。たとえば、竪穴住居跡を構築する上で、すでに森林が伐採されているなどや居住の条件を満たしている場所が重なつた場合も考えられる。

しかし、前期のころから居住域、墓域などの空間意識はみられ、中期後葉から配石遺構などによって現れる。縄文人における土地利用の「決まり」のようなものはあつた可能性が多く、その背景に縄文人の意識、ムラの掟のようなものさを感じられる。

遺跡の消長

県内では、縄文中期の遺跡が全国的にみてもかなり多い。後期になると遺跡数は激減することから後期に入ると「衰退」と考える向きが多かつた。ところが、南関東では後期になると馬蹄形や環状の貝塚や集落が増加し、衰退どころか縄文文化はますます発展していくようすがうかがえる。

県内では最近、浅間山麓を中心として中期末葉から後期前葉の遺跡が多く発見され、決して遺跡数は激減したとはいえない。

注意を要するのは、縄文集落が一般的に中期前葉になると竪穴住居跡の軒数が多いばかりか、それらが重複していることから、あたかも人口が多いような錯覚をおこすことである。しかし、実態は繰り返し居住が行なわれた結果であることを念頭におかなければならない。

遺跡の消長を浅間山麓南に限ってみてみると、図18のようになる。前期初頭に集落遺跡がみられ、前期後葉まで存続する。前期末葉には

遺跡名	時期	草創期	早期	前期			中期			後期			晩期	
				初頭	前半	後半	初頭	前半	後半	初頭	前半	後半		
御代田町	東荒神					▨								
	西荒神										▨			
	下大宮													
	関屋						▨							
	中屋際					▨								
	川原田					▨			▨					
	塚田					▨								
	下弥堂					▨								
	滝沢								▨		▨			
	西駒込										▨	▨		
	城之腰						▨			▨				
	広畑													
	宮平										▨			
炭場													▨	
小諸市	岩下				▨						▨			
	三田原										▨			
	久保田										▨			
	石神											▨	▨	
軽井沢町	茂沢南石堂											▨		
佐久市	吹付										▨			

(▨)住居アリ — 住居ナシ

図138 洩間山麓を中心とした縄文時代遺跡の消長

※ 各時期の遺物の有無は報告書の記載によった。また、前期・中期・後期にある「初頭・前半・後半」という区分は、本文中の「初頭・前葉・中葉・後葉」よりも大きくとらえた区分である。資料不十分のため、上記の区分にせざるを得なかった。

遺跡はいったん途絶え、中期初頭にはわずかみられるが継続しない。中期前葉から中期後葉の初めまで集落が継続し、このあとふたたび遺跡は存続しない。中期後葉の終わりから中期末葉から後期初頭あるいは前葉まで集落が継続する傾向がみられる。すなわち、浅間山麓では住居跡がみられる前期から定住する傾向がみられるが、前期末葉から中期初頭、中期後葉に集落の断絶ともいえる画期がみれる。これは、巨視的にみれば集落立地の違いであり、また住居跡の大形化や大規模な配石遺構などの存在はより定住化した証ともいえるであろう。

浅間山麓南部は、縄文中期後葉にはより関東的な土器や住居形態、柄鏡形敷石住居をとりいれた地域であり、関東平野からみれば中部山地の玄関口ともいえる地域性が如実にあらわれている。千曲川を下れば下るほど北陸や東北地方の影響が土器の随所にみられるが、浅間山麓では住居形態の点からは関東地方の影響をうけつつも、独特の石囲炉などを中部地方で共有するこだわりがみられる。また、八ヶ岳山麓にくらべると浅間山麓南部はより関東地方の影響下が強いが、そのなかでも、中期には独自の焼町式土器や他型式の狭間に佐久系土器が生まれた。他地域の影響を受ける窓口で在りながら独自性を堅持していたのが浅間山麓南部に住んだ縄文人であったのだろう。

〔引用・参考文献〕

- 八幡一郎 一九七八 「北佐久部の考古学的調査」
長野県教育委員会 一九八二 「長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—阿久遺跡」
軽井沢町教育委員会 一九八三 「茂沢南石堂遺跡」
御群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九八五 「荒砥二之堰遺跡」
鈴木公雄編 一九八八 「古代史発掘2 縄文人の生活と文化」 講談社
御群馬県埋蔵文化財調査事業団 一九九〇 「田藤中原遺跡」
茅野市教育委員会 一九九〇 「棚畑遺跡」
御長野県埋蔵文化財センター 一九九一 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—」
本橋恵美子 一九八八 「縄文時代における柄鏡形敷石住居址の研究」

〔信濃〕40—8・9

第九節 縄文時代の地域間交流

一 縄文社会における領域と交流

自分たちで調達 車社会の今日、仕事・買い物・スポーツとわれわれ
 できるもの れの一日の活動は多種多様になり、その活動領域（かつどうくわい）
 はかなり広がりがつある。さて、イギリスのワイト・フィンジヤ（おつじや）と
 グスらの研究によれば、アフリカの狩猟採集民であるクン・ブッシュ
 マンは通常ホームベースを中心に半径一〇・、歩いて約二時間の範囲
 内で生業活動を行なうという。これより遠い地域で仕事をする場合は
 必要に応じて生活拠点を移すようだ。現代ならさしずめ通勤苦からの
 がれてアパートを借りた单身赴任者というところであろうか。

これを川原田ムラの住人にあてはめてみると、北は浅間山の裏側ま
 で、南は佐久市の種畜牧場付近まで、東は中軽井沢までが行動範囲に
 含まれる。これは川原田ムラを中心にみた場合の「遺跡テリトリー」
 である。ところが川原田ムラに住んでいた集団は秋になると千曲川の
 側で二―三日キャンプしてサケを捕ったかもしれない。また、春にな
 ると森泉山の中腹でキャンプをして山菜を採ったかも知れない。そこ
 で今度は森泉山の中腹を基点として半径一〇・を設定すると、さらに
 南は白田町付近まで達する。こうなると見かけの領域（遺跡テリトリ

ー）にくらべ、実際の活動領域はかなり広がる。このように、集団が
 通時的に必要とする物資を確保するために活動を行なったすべての範
 囲を林縁作は「核領域」と命名している。いうまでもなくその中には、
 男性はより遠く、子づれの女性はより近くというような状況や、獲得
 対象に応じてさまざまな種類のサブ領域が含まれている。

塩野西遺跡群では「核領域」内で採集できる資源の中で、実際に調
 達できた予想されるものはシカ・イノシシなどの動物、サケ・マス
 などの魚類・淡水産貝類、石器の原料である安山岩・黒色ガラス質安
 山岩、土器の混和材の中の砂粒の一部、家の構築材や燃料となるクリ
 の木・トチの木やこれらを含む堅果類、接着や顔料の塗彩に欠かせな
 い漆など日常生活の基盤を成している。また、核領域の縁辺部はほか
 の集団との入会地として機能していたと考えられる。

核領域では調達 縄文集落から出土する遺物の中には、このような
 できないもの 日常の行動範囲から外れて、さらに遠くからもた
 らされたと考えられるもの（非現地性物資）がある。たとえばヒスイ
 は、新潟県糸魚川市の小滝川（こたきがわ）や青海川（あまのうみ）上流域周辺に原産地があり、海
 岸部にそれを原石から玉に加工したと考えられる遺跡が集中する。こ
 れが中部・関東・東北地方から北は北海道までの遺跡で出土している。

接着剤として使用されたアスファルトも、北海道石狩低地帯や、秋田県・山形県・新潟県を中心にした日本海岸に産地が限定される。前々後期・晩期にかけて東北地方北部から中部関東地方へと出土遺跡が拡大する。また、黒曜石、ガラス質黒色安山岩なども原産地から離れた関東地方で出土している。ただし後者は塩野西遺跡群の縄文人にとってはいくつみても日常行動圏である核領域に含まれている。最後に土器についてみると、核領域の外で作られた可能性の高い土器の第一は、核領域内で通常見かける土器とは異なり、ほかの地域に分布の中心がある土器型式、すなわち「他地域の土器型式」である。第二に、核領域内で作られた土器と同一の土器型式でありながら施工技法や文様の細部が異なるものである。それらが本当に核領域外で作られたのか、核領域外の土器を模倣して作ったのかは後述するが、焼町土器を主体とする川原田遺跡の場合は、勝坂式・阿玉台式土器が相当する。このようにある遺跡にとって、核領域の外に広がる非現地性物資の産地領域を、林は「交渉圏」と命名する。

このほか、塩野西遺跡群では産地が特定できないものに、顔料の素材となっているベンガラや東北のものに近い頁岩べんがらなどがあげられる。ベンガラは下弥堂遺跡J9号住居出土の前期前葉塚田式土器、滝沢遺跡出土の前期後葉北白川下層II式土器をはじめ、川原田遺跡や滝沢遺跡出土の中期中葉土器のほとんどから「きわめて限られた露頭から採取された」と推測される定型性の高いパイプ状の粒子形態をもつものが検出される。いっぽう頁岩も東北の頁岩の本場のものに近い良質の石材であるがその採取エリアは特定されていない。これらが核領域で

採れるのか、はたまた交渉圏に由来するのは今後の課題として残される。

調達か 縄文人たちは一体どのようにこれら非現地性物資を手交易か に入れたのだろうか。

一つには自らが産地へ赴いて採取した可能性がある。旧石器時代に野辺山から沼津・箱根、相模野台地・武蔵野台地へと食料を調達しながら移動を繰り返していた人々は、信州の黒曜石産地をルート上に取り込んで石器の原料となる石を採集できるような行程を工夫していたとされている。縄文時代になるとそこまで広範囲・短周期ではなくとも、草創期・早い前期の初めまでは、住居跡の構造や付属施設の貧弱さから一時期定住してもすぐに移動するような生活システムを予測した(第四節)。もし、この移動範囲内にさまざまな資源が含まれていればそこで直接採取が行なわれた可能性がある。定住性が高まってからは、その資源を旨指して直接採集に赴いた痕跡もつかめる。たとえば後期中後葉の水銀朱の生産遺跡である三重県森添もりぞえ・天白遺跡では、東北系・中部山地系・北陸系・三河系などの他地域の土器が多く出土している。これはつぎに述べる交易による交換材である可能性と同時に、それぞれの地域の人々が朱を入れる入れ物として郷里からあらかじめ持参した忘れ物と考えることもできる。

二つめに、これら非現地性物資は交易品として入手された可能性がある。また、ヒスイ・水銀朱をはじめアスファルトや蛇紋岩製へびまねいしの磨製石斧の一部は、原産地の近くに加工遺跡が見つかっている。逆にこれ

ら非現地性の石材から作られた石器を保有しているすべての遺跡で、原石や原石あるいは中途段階からの加工を特徴づける作りかけ石器や石層が出土するわけではない。このようなことから、ヒスイの玉、蛇紋岩製の磨製石斧、黒曜石製の石器の一部などは、加工が行なわれていた痕跡をもつ原産地に近い集落や、各地域の拠点的な集落で集中的に採掘や加工が行なわれ、ほかの集落に交易品として搬出された可能性が高い。ただし交易品の中には原石もあれば、半加工品、製品などさまざまなレベルがある。

以上調査の可能性と交易の実例を概観した。厳密にこれら非現地性物資がどのような状況でもたらされたかというプロセスの具体的な解明は今後の課題となる。次項以下ではこれら物資の代表として土器と石器を取り上げ、より具体的に核領域と交渉圏について考えてみることにする。

二 類似した土器が広域に広がる理由

土器が動くか たとえば焼町土器（焼町土器）という名称は第五節で紹介したよ
人が動くか うな特徴をもつ一連の土器に対して便宜的に付けた
ものである。もちろん縄文中期の人々がこれらを指す名称をもつてい
たかどうかはわからない。しかながらこのような特徴を有する土器群
は中南部はもとより、北は現在の飯山市から新潟県南部、西は群馬県
から栃木県西部まで分布する（図48）。このように似通った土器が広域
に分布する背景は何だろうか。

たとえば、ムラ全体の人々が一つの土器型式が分布する範囲を移動して生活する場合はあるのだろうか。とくに集落の安定化が進む中期以降はどうであろうか。八ヶ岳西南麓では、集落が同一尾根上に移動する例や、沢を挟んで反対側に分村する例がみられた。いっぽうアメリカの人類学者ルイス・ビンフォードの狩猟・採集民のモデルによると、定住的な拠点集落をもちながらもそこから必要に応じて狩猟や採集に出かけ、一時滞在用のキャンプを作って一定期間とどまるような例が紹介されている。このように資源の消費を自然の回復力以下に抑えるために集落をすべて移動、あるいは一部を分村させたり、季節ごとに異なる資源をより豊富に獲得するために一時的に移動することは自然の生態系に強く依存している縄文社会にあつては十分考えられる。それでは、同様な土器が出土している遺跡はすべて同一集団が残したものであるのだろうか。予想をさきに述べると、あるものはそうでありあるものは違うということになろう。たとえば林は千葉県新田野貝塚の人々が資源を適正規模に保全するために生活拠点を移動させた可能性を指摘しているが、それは半径一〇、内外の三つの集落間に限られる。逆にいうと、資源の適性化だけの目的で土器型式の範囲くらい広い領域を移動する必要はない。

今度は土器自体を検討の対象としよう。かりに二つの遺跡が同一集団によって残されたものであるとすれば、両者の食器の構成はかなり似通ったものになるはずである。ところが、勝坂式と阿玉台式と焼町土器の組み合わせの場合は各遺跡で大きく異なる。また焼町土器の製作上の癖（文様の細部の形や使用工具の種類）は北から南までまった

く同じとはいえない。

このような点から、われわれが遺跡とよんでいるものの幾つかは、同一集団が残したものである可能性は否定できないものの、土器が広域に類似する背景は、単に集落の移動すなわち集落の構成員の移動という理由だけでは説明がつかないことがわかる。

この問題をさらに踏み込んで考えるためにまず、当時の土器作りがどのように行なわれたかを検討しよう。

土器は誰 「むかしむかし、蛇が年老いた夫婦を粘土のある場所が作るか」に導き、粘土と砂あるいは灰床からとった石をあらかじめ砕いたものと混ぜる方法を教えた。壺づくりは神聖な業であり、男は蛇を讃える儀礼をとり行ない、宗教歌を歌う土器づくりの女に近づいてはならなかった。」北ミズーリのヒタツツァ・インディアンにとって土器作りは女の仕事であり、さらにさかのぼるとこのように蛇が人間に与えた聖なる業であったとされる。いっぽう南米のユルカレ族の神話では「収穫の仕事のない季節に、粘土を採りに、肅々と出発するの」も「人里遠く身を隠して仮小屋を建て、儀礼をとり行なった。」のも女たちで、さらに作った壺に焼成のときにヒビが入ることを避けるために、粘土を揉む際には「互いにいっさい声を立てず、合図のみで意志疎通した」とされている。

日本における土器作りの記録の例としては「正倉院文書」の天平勝宝二年の「浄清所解」での土師器の製作の記載がある。ここでは同様に女性が土器作りを担い、男性が土を掘り、運び、打ち、薪を採り、

薬を備え、京に運ぶ仕事に従事していたとされる。ニューギニアのピルビル・ヤボア族やモツ族でも女性が土器を作り、男たちはそれを船で運んで交易をしていた。

マードックの「労働の性別分業に関する比較資料」の世界各地(二)四の民族例では、女性が土器作りを担う割合は八割を超え、男性が採鉱や交易をする割合はいずれも七割と高い。この点でこれらの個々の事例を裏付けている(図30)。これは女性が子供を生み育てるために居住域からあまり遠く離れられないという特性や、体力面では男性に劣る反面、持続的作業を得意とするという身体的特性などが総合された自然な生理的役割分担と考えられる。

このように土器が広域に類似する背景を理解するには、土器のもつ象徴的意味合いとそれを担った土器作り人、土器を交易品として運搬する人という図式を念頭に置く必要がある。神話や民族例、もしくは奈良時代の文献がそのまま縄文時代に演繹できるかという課題が常に横たわっているもの、前者を女性、後者を男性とし、粘土の調達やそのほかの過程は両者がかわる可能性を念頭において話をすすめよう。

粘土の採掘

地球表面の岩石は気温や大気、水などさまざまな要因で風化され、土に変わっていく。これらに地表や地下の水が作用してやがて粘土が生み出される。そのため母岩の性質や、その後の風化作用、熱水変質、統成作用の度合いによって粘土の性質も多様である。

それは土器に使う粘土はどこから採ってきたのだろう。アノノルドの調査した世界各国一〇〇の民族例のうち六〇例までが居住域から二・未陶に粘土の採集地が取まる。ただし二一三・一二例、三一五・一一例、五一〇・一五例も見逃せない。このように遠隔地に赴く背景には陶工が良質と考える粘土はどこでも簡単に手に入るわけではないことを示す。今のところ御代田町域では土器の粘土自体の産地に関するデータは無いものの、前期前葉の土器の混和材の中には、浅間火山起源と推測される安山岩やそれを起源とする鉱物、五・六・南の森奥山周辺に分布する緑色凝灰岩起源の岩石・鉱物を含むものがあつた。混和材の採集地はアノノルドの民族例のうち三七軒が一〇、以内に収束するとされる。かりに混和材と粘土の産地がごく近かつたとすると、土器作りのための粘土は核領域の中で調達できたことになる。しかしながらいかに核領域とはいっても一個の土器を作る粘土がかりに四軒としても、三つ作るためには一二軒以上が必要となる。そうすると粘土採集地が遠くなればなるほど、粘土の採集に男性の手を借りる必要が生じるだろう。ただし、粘土の採集の不自由さをあえて留してまでも土器を各戸・各集落単位で作ろうとしたかどうかは疑問の余地がある。

土器作りの時期 土器作りの時期はそれがパートタイムの仕事かフルタイムの仕事をかにも左右される。パートタイムの場合、ほかの作業が忙しくない時期で失敗の少ない乾期が選ばれることが多い。

縄文土器の場合このような条件を満たすのは秋の初めであろう。焼

成の折の燃料として生草を使うと乾燥した草や木材との火の回りに時間差が生じてゆっくり焼くことができ、ひび割れが防げるといふ利点があるが、この問題をクリアーできれば春も候補にあげられよう。とくに漆が塗られた土器の製作に関しては、永嶋正春の指摘のように夏季に漆の採集から塗布作業が限定されるため、塗りの作業に先行して土器が作られていたとすると、春がさらに有力となる。

土器作りの手順と時間 土器作りは物心ついたころから始められ、たいがい一〇代半ばかり終わりころには一人前になるらしい。年長者の陶工ほど熟練しているのはいうまでもない。それでは土器作りにはどのくらいの工程と時間が必要なのであろうか。日本各地で土器作りの実験が行なわれているものの、各地域ごとの業地粘土の性質とその状態に応じて混ぜ込む混和材の種類が左右され、その地域の湿度や気温などさまざまな環境条件によって工程ごとに異なる時間の設定が行なわれるといっても過言ではない。ここでは一例としてフィリピンのカリంగా族の工程を紹介しよう(図10)。

まず粘土を採集し、よく練って業地土を作る。カリంగా族が使う粘土は元々適度な砂粒を含んでいるため何も混ぜないが、そうでない場合は、粘土の性状によって混ぜものを入れる。入れる理由は粘土の収縮率を一定に保つことで形を作り易くしたり焼いたときのひび割れを防止する、あるいはより華やかに土器を飾るためなどさまざまである。この混ぜものが「混和材」である。川原田遺跡のJ11号住居で床面で土器作りの原料と思われる粘土が出土しているが、ここには岩石や鉱

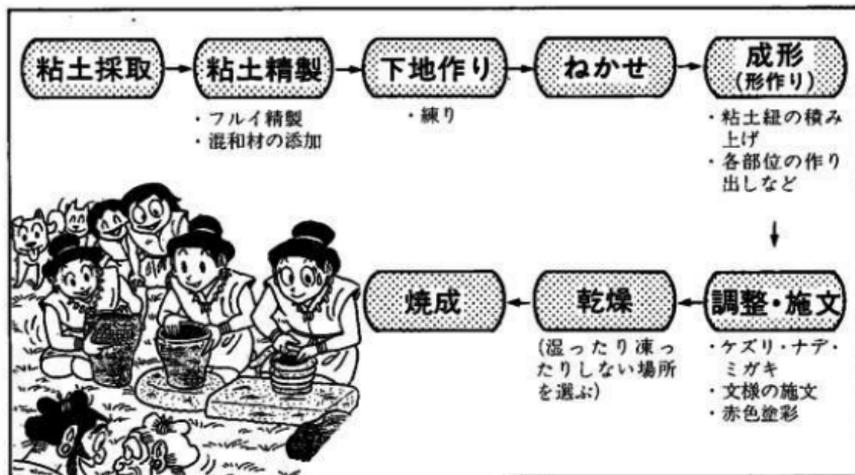


図140 土器作り工程表

世界各地の民族を調べたところ、土器作りはもっぱら女性の仕事であった。この調査結果から、縄文土器も女性によって作られたと考える人が多い。図中のイラストも縄文女性が土器作りをしている風景を再現している。

物があまり含まれていなかった。ところが、そこから出土した土器を観察すると両者ともかなり大形のものが含まれている。このように完成した土器に含まれている岩石・鉱物は、さきの理由から故意に入れられた混和材である可能性が高い。縄文土器の混和材は岩石を砕いたもの、川原の砂、性質の違う土、繊維など多様である。

カリంగా族の場合は一〇分くらいの時間をかけて粘土を丹念に練り、すぐに成形にはいる。ただ粘土の質によっては数時間練る必要があるものや暗く涼しいところに「ねかせ」る必要が生じる場合もある。このようにして素地土が完成すると、もともと土器作り人の腕の見せ所である、成形・調整・施文という工程に入る。成形すなわら形作りは、細長くのびた粘土紐を積み上げて行く輪積みという方法がとられる。さらにそれを削ったりして、基本の形ができると、いろいろな工具を使って文様が付けられる。さらに粘土輪と粘土輪の境をならして水漏れを防いだり、凹凸をなくすために内外面の調整がなされる。工具はミガキ石が用いられる。ミガキのような簡単な作業から、幼女は土器作りに参加し始めるという。

土器を一昼夜乾燥させるといよいよ焼きである。集落の広場で、竹や生草を燃料として、約六〇〇度で二〇分程度の野焼きが行なわれる。

土器作りの カリంగా族の例では若い土器作り人は、年長者とともに分組に土器作りを経験することによって技術を習得するケースが多い。また、土器作りは三〜二人のグループで行なわれるが、このグループは親族関係にある女性を中心となつていとされてお

工具の種類やその使い方はグループの中で共通性が高い。同様に轆轤を用いない土器が作られているビルビル・ヤボフ族では女性が交易専用の土器を作っているが、もし村落外の男性と結婚して婚出するようなことがあったらただちに土器作りの権限を失うとされている。このようにみえてくると土器作りは集団の成員が代々伝える門外不出の技術伝統であったはずである。それではこのような集団の伝統ともいえる技術体系で作られた土器が広域に類似している理由はどこにあるのだろうか。

一つにはさきに挙げた両村にみられたように、ある集団の中で粘土採掘地に近いか、逆にほかの資源に乏しく土器を交換財にする必要があるなどの条件を備えたいくつかのムラだけが土器製作を担う場合が考えられる。そして土器製作を担わないムラは物物交換によって土器を手に入れるのである。ただし土器作りを担うムラ人は奈良時代の須恵器生産職人のようにフルタイムの工人である必要はまったくない。たとえばカリンガ族では直径一〇・〇に広がるバシル地域の一四村のうち二村（かつては五村）が土器製作を担っているが、この二村の女性はず段は農業を主産業としており、農業が忙しくなかつた時期にあたる三月と七月九月におもに土器を作っている。九時間で四個が成形まで終了し、二日間乾燥させたとしても一人が九月後半からの一ヶ月に三〇―四〇個は作れる。集落の女性がかりに五人であればさらに五倍である。ただし文様の複雑な焼町土器は製作時間をより長く見積もる必要があろう。一軒の保有量が貯蔵用一つ、煮炊き用大小で二つ、

予備に一つとし、貯蔵用土器を長く寿命の短い煮炊き用を短く見積も

って平均四ヶ月の使用に堪えるとした場合、一世帯あたり一年の使用量は二二個である。つまり五人の一ヶ月の土器作りで三ムラ分が作れることになる。プエプロインディアンズのズニ族のように年に一度精査が通りすぎるときに、屋根から大量の土器を地面にたたきつけるといった故意の土器破壊の祭りが行なわれる場合は別であるが、通常はバートタイムの土器作りで十分間に合うのではないだろうか。

土器作りを労働コストという側面からみた場合、いかに低コストで多くの土器が作れるかが重要であろう。労働コストを低く抑えるには①粘土の産地が近いこと、②それが短時間に成形を行なっても、焼成のときに割れにくい良質の粘土であること、③土器焼きに使う燃料が豊富であることが最大の条件であったろう。わざわざ良質の粘土産地から遠いムラ人が、少量の粘土を何度も取りに赴いたり、焼成のときにひび割れてしまったり水漏れをおこしやすい悪い粘土で我慢したりするよりも、交換によって財としての土器を手に入れようとしたことは想像に難くない。まして縄文時代の交易ネットワークはかなり広範囲に発達していた可能性が高いが、その最大の理由は定住生活に即した労働コストの削減にあつたらうと考えられる。このように考えると、日常の生活領域を共有する数集団で特定のムラ人が土器作りを担い、土器を供給するような領域内の分業が現実味をもつてくる。

土器の移動 このようにある領域もしくはある地域圏の中で、土器と横 倣 自体がとくに頻繁に流通するケースとして、たとえば

河西字らによる八ヶ岳南麓の縄文中期後葉の五遺跡の土器の分析があ

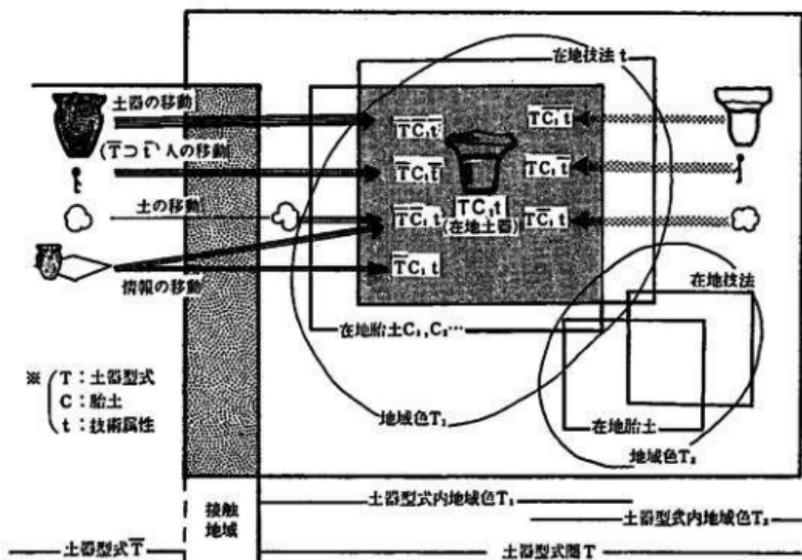


図141 情報の伝達 (『信濃』44-4より)

個々の土器の型式(T)、胎土(C)、技術属性(t)の組み合わせから、土器型式圏外からの土器の移動や、それをベースにしての模倣製作の有無が推測できる。土器型式圏内でも土器が頻りに移動する。

けられる。ここでは、誰も在地で作られたものとして疑わないだろう。曾利式土器の七割以上が実は同じ八ヶ岳南麓の半径約二〇・以内の集落間を移動していたことが、胎土分析と型式学的分析の結果わかったのである。この量比から推測すると、土器が交易品を入れた器とするよりも、土器自体が狭い範囲内での交易品であったと考えられよう。共通の土器を使用することに何か特別な価値があったのだろうか。

このような土器の移動は、土器型式の分布圏を越えておこる場合がある。そしてさらに、実際の流通品を真似て新たな土器を作る、すなわち模倣製作が行なわれた例もあり、土器が広域で類似してくる要因の一つとしてとらえられる。たとえば上條朝宏は会津盆地で出土する火焰型土器に類似する会津タイプ胎土が在地の大木8a式土器の胎土と一致するものとまったく別のものの二種類があることを突きとめた。このことはすくなくとも会津タイプのうち前者は在地の人が地元土を用いて火焰型土器の模倣品を作ったことの証となろう。

滝沢遺跡J12号住居出土の土器群(図43)には寺内隆夫によるとそれぞれ千曲川流域の系統、諏訪湖盆地域から千曲川上流域の系統、北信地域、新潟県境地域の系統、東北地方から影響、関東地方の影響のみられるものがある。とくに東北地方から影響の推測される大木7a式土器は、東北地方と北関東を結ぶ群馬県に多くみられる要素を取り込んでおり、むしろこの地域からの搬入が予想される。このような土器の表面にみられる文様要素は前述の

ような、土器の移動や模倣を含む複雑な情報伝達の様相を暗示しているのである。

土器作り人 これに対し、都出比呂志は弥生土器の分析に際し、土器の移動器を作る女性自身が婚姻によって移動したことに よって類似した土器が広域的に拡散するといった考えを述べている。畿内地方の範囲内では調整技法の細部や施文要素の組み合わせ方の違いが土器の小さな地域色となつて顕在化するものの、それらは地域間で排他的ではなく、異なる地域間相互に「入り込」むゆるやかな関係にある。都出氏はこの現象の背景には女性がほかの集落の女性と接触する機会が多い、すなわち婚姻によってほかの集落にかけ込むことが多いという事実があると考えたのである。縄文土器の作られた一万年の間にも、型式成立の背景の一つとしてこのような可能性があったのだろうか。縄文時代の研究では、新潟県巻町豊原遺跡三群土器や、五領ヶ台式土器の分析から、女性だけの移動によって土器が拡散するという図式は否定されているが、当地方での検討は今後の課題として残される。そこでここでは、日本列島の婚姻史と土器作りのための労働コストという側面のみからこの問題を検討してみたい。

考古学から 縄文人が結婚した後の居住地について、実際に人骨のみた婚姻 検討から言及したものに春成秀爾の抜歯研究がある。

氏は、婚姻に際して歯が抜かれる（抜歯）が、その抜かれ方が集団全体で大きく二つのタイプに分かれ、いっぽうのグループの遺体にと

なう副葬品が多いことや、墓地が区別されていることに着目し、いっぽうが在来者、もういっぽうをほかのムラからの嫁入り者であるといふ仮説を立てた。ここから日本列島では、まず妻方居住婚があり、その後東日本では選択居婚（中〜後期）を経て、夫方居住婚（後期末以降）に移行していく。そのいっぽうで西日本では縄文時代を通じて、選択居婚を含むものの、妻方居住婚が優勢であったという結論が導かれている。

また、田中良之は古墳時代の西日本各地の古墳出土人骨の歯冠計測値・性別・年齢構成・埋葬順位・人骨配置・移動などの情報を総合して親族関係を分析した。ここでは五世紀後半までは兄妹・姉弟・姉妹が一緒に葬られ、出産歴のある女性も自分の兄弟と一緒に葬られ夫と葬られることはない。五世紀後半には男性家長と男もしくは女子供と一緒に葬られるようになる。家長の娘は出産歴があつても父と葬られる。ところが、六世紀前半には家長の妻が家長と一緒に葬られるようになり、ここで初めて墓の中で嫁入り婚が貫徹されたようである。

これに対し、奈良時代の研究では大きくは当時の戸籍を家族の実体に適合していると考えられる説と、本来は一緒に住んでいない成員を書き並べたものであるという説が対立している。後者を支持する研究者は多く母系制もしくは父方・母方双方の承認が重視される双系制を主張する。そして双系制では母子とその夫という単位が家族の基本となるため、母方居住婚が多く行なわれていたとされる。さきの古墳時代の事例とこのような文献史学の成果を総合した田中は、伝統的な双系社

金に五世紀の軍事的な緊張によって、首長や家長だけに父系の出自が成立したものの、一般成員の双系を含めての二重構造が平安時代末まで続き、ようやく平安時代末になって父系直系家族が成立したと総括している。逆に、平安時代末以前は支配層と被支配層、家長とそれ以外という時期の違いがあるものの、婿入りも嫁入りもあり得たということであろう。

このように偏った素材による非通時的・断片的な事例の掘き抜きから非常に荒っぽい方をする、縄文時代には婿入り婚が、そして縄文晩期以降平安時代末までは婿入り婚と嫁入り婚が、それ以降嫁入り婚がどちらかという優勢になるという図式が描き出される。当然、今後はさまざまな考古資料を用いた総合的かつ通時的な検討からこれらの断絶を補う作業が不可欠となる。

労働コスト 一五歳以上に達した者の平均死亡年齢は、縄文人のからみた婚姻 場合男女ともに三一歳である。離乳年齢が二―三歳と推測される先史時代において女性の一生の間の出産数は推計で四―五人ほどである。たとえば一八歳で結婚したとしてもその後の人生のほとんどは、現在よりもずっと生命への危険度の高い出産と、乳飲み子の子育てが繰り返されることになる。さらにそこへ縄文人の食生活の主体をしめる植物質食料の採集という労働が付加される。このような点から、土器作りの技術や複雑な文様の継承に関しても、採集に関する知識の伝授においても、女性が婚入にともなう新たな知識を習得し直すことは、生涯のうちでそれに割くことのできる時間が限ら

れているだけかなりの労働コストのロスとなる。さらに、かりに出産前後に実家へ戻っていたとしたらロスが大きいどころか、一生をほとんど実家で過ごすことになろう。集団全体の中の女性労働の比重が高い縄文時代においてはこのロスは集団を維持する上で致命的なものに成りかねない。少子化という集団維持上のロスが十分予想されたにもかかわらず、働く女性を支援する保育施設や老人介護施設の拡充に積極的ではなかった現代社会と違って、合理的に生きる縄文人はあえてロスを冒してまで「嫁入り婚」を選択することはなかったのではないかというのが現時点での私の見解である。

三 縄文土器の胎土分析

胎土分析の たとえば、縄文土器の胎土分析が集落間で進んで、集目的と方法 落ごとに土器の胎土がまとまりをもちほかの集落とはまったく異なることがわかったとしよう。さききのべたような土器がいくつかのムラで集約的に作られて別のムラに移出されたという説や、遠くから土器が搬入されそれを真似て新たな土器が作られたという説は即座に否定され、ここで初めて土器を作る人がほかの集落に移動して幼いころから学んだ土器を作るような形態、たとえば女性の婚入の可能性が浮上する。このように胎土分析は従来考古学がもっとも苦手としていた、親族組織の解明にまで踏み込める可能性をもった研究分野である。

胎土分析の「胎土」とは土器を構成する素地全体を指す。縄文土器

には前項で述べたように混和材が入っている場合が多いため、胎土分析では素地粘土自体の分析と混和材の種類の特定の両方を行なう必要がある。もし土器がその遺跡に搬入されたかどうかを結論づけたい場合、かりに含有鉱物が地元のものであっても粘土がよそのものであれば、いちがいに在地で作ったものとはいえなくなってしまう。どちらかといえばうだけを分析しただけでは解釈の偏りを招くことになる。

素地粘土の分析にはE P M Aや蛍光X線分析装置が用いられ、粘土の構成元素の特徴を各地の地質学的情報と対比することで粘土の採取領域を推測する。いっぽう、混和材を特定するもつとも確実な方法は土器を切断して中に入っている岩石・鉱物の種類やその特徴を偏光顕微鏡で観察することである。偏光顕微鏡を通してみられるさまざまな特徴は、その鉱物がどのような岩石に由来するか、最終的にどこでとられたものかなどの多くの情報を提供してくれる。また、岩石・鉱物の種類ごとに土器に含有されている数をカウントして比較することで、かりに同じ混和材でも調合方法の違いによって集団もしくは個人の癖を特定することができる。ここでは混和材の胎土分析によって現在までにわかってきた彌代田の土器の様相について概観することしよう。

早・前期の 早期後半の鶴ヶ島台式に組成するとされる縄文地文の土器の胎土 尖底深鉢（塚田遺跡早期第Ⅲ群土器）の表面には大型の石英・斜長石・黒雲母が目立つ。いっぽう同時期にあたる条痕文土器にはそれより細粒の斜長石がみられる。これらの岩石・鉱物の量比を調べると、石英にくらべて斜長石の割合が高い点で似通っている。

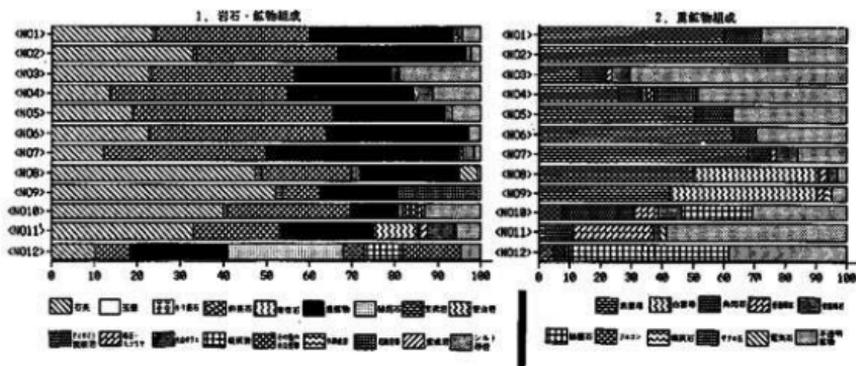
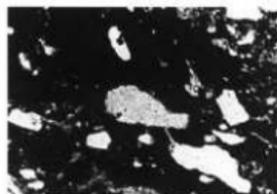
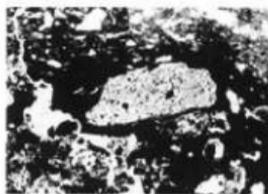


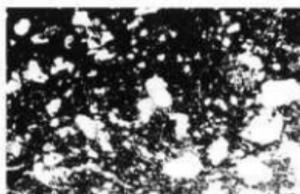
図142 塚田遺跡出土土器の岩石・鉱物・重鉱物組成
 1～6：早期第Ⅲ群土器 7：条痕文土器 8・9：木島式 10：関山式 11・12：神ノ木式



No.11の流紋岩ガラス ニニコル

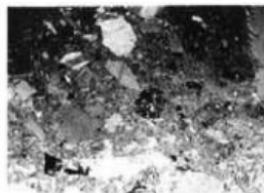


No.11の安山岩 ニニコル

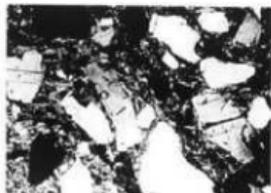


No.11の組成 ニニコル

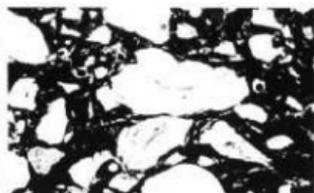
〈神ノ木式土器の胎土〉



No.1の玉髄 ニニコル



No.1の黒雲母と石英・斜長石



No.1の組成 ニニコル

+

ニニコル
 〈塚田遺跡早期第III群土器の胎土〉

写80 胎土の顕微鏡写真

また、石英・斜長石の形状はバブルウォール型を呈し、尖った形状のものが見られることから火山岩中でも流紋岩に由来することが推測された。これらのなかにはサニティン・ザクロ石・ジルコンなど和田峠付近に由来する鉱物が混ざっているものがあり、それらに限っては和田峠付近で採集された可能性がある。

いっぽう、前期の関山II式と神ノ木式の胎土はこれらとはまったく異なる。塚田遺跡の関山式には横方向のナデを光沢を帯びるほどに入念に行なったものと(写26②)、ナデ調整は行なっていないものの器面に若干の凹凸が残るもの(同③)とがある。さらに神ノ木式はナデ調整がかなり粗雑なもの(同①)と、関山式の③のように若干の凹凸を残すものがある。胎土分析の結果、①の技法で作られた神ノ木式には浅間火山起源、すなわち在地のものと同推測される安山岩片やデイサイト質ガラス片がみられた(図12 No.11)。ところが③の技法で作られた神ノ木式の混和材はこれとはまったく異なり、緑麻石や準間状組織の玄武岩など佐久市駒込・内山付近に分布する駒込層の変質の進んだ緑色凝灰岩を起源とする可能性の高い混和材がもちいられている(同No.12)。関山式の胎土は、この両者いずれとも異なり、変成岩起源の石英や所属不明の鉱物を含んでおり、緑色凝灰岩・玉髄・ひん岩などの組成から確率付近が混和材採集地である可能性が指摘されているものの、その産地は推測の域を出ない。

分析の結果からは調整ごとに胎土が異なる結果がでたわけであるが、在型式である神ノ木式のなかでも調整において関山式からもっとも距離を置くものが在地胎土で作られていたことは、この土器が在地の

土で在地の人が作った土器と見なすことを可能にしよう。さらに今のところ胎土からの確証はないものの、関山式を搬入品とみることができれば、③の技法で作った神ノ木式は関山式の調整を真似た上に混和材も変えて作ったものとなろう。また、もしも駒込層の変質の進んだ緑色凝灰岩を起源とする混和材を多く含んだ神ノ木式土器が駒込層が分布する付近の遺跡で多く発見されればこれらはその地域(約二一)からの搬入品という可能性も浮上する。今後は集落内の成員が関山式・神ノ木式という型式ごとに胎土と技法、文様を使い分けていたという可能性も考慮に入れて分析点数を増やす必要があろう。

中期の土器 川原田遺跡J11号住居における縄文中期中葉(勝坂IVの胎土 式古)土器のうち焼町土器の混和材は石英・斜長石・

黒雲母を中心に輝石類がかなり多く角閃石やスコリヤも含まれる。同じ焼町土器でもものによつては鉱物の大きさに若干の違いが認められるため混和材の割合の仕方が作り手もしくは作った時期で多少違うものの、基本的には混和材が非常に類似していることがわかった。これに対し文様構成や施文方法からみて勝坂式の本場で作られたと推定される非在地系勝坂式土器の一部はそれぞれ含まれている岩石・鉱物の組成が焼町土器とはまったく違い、花崗岩や変成岩を含むものが目立つ。また、在地系勝坂式の中には焼町土器とかなり類似した胎土のものも異質なものがあるようである。いっぽう勝坂II式に共存する阿玉台式はいずれも大型の黒雲母が大量に入る点で、明らかに型式と素地土作成技法が連動している。このように中期中葉の土器では在地の土

を用いて作ったと考えられる焼町土器・在地系勝坂式の一部と、搬入品の可能性の高い非在地系勝坂式、在地胎土に黒雲母を故意に添加したと推測される阿玉台式が特徴的であった。

今後はここに粘土の元素組成の情報を加えて、これら混和材と粘土の採集地の関係をつかむ必要があろう。

胎土分析から見た 塩野西遺跡群付近は基盤にシソ輝石デイサイト核領域と交渉圏が、約二・北の浅間山麓にシソ輝石普通輝石安

山岩が分布している。さらに約一二・南東の八風山周辺を中心にガラス質黒色安山岩、約六一七・南に広がる平尾山・森泉山から和英峠付近には緑色凝灰岩、さらにその付近から南には志賀溶結凝灰岩が分布する。神ノ木式・焼町土器の混和材はこの領域で採集できるものと思われる。ただし大量に含まれる大型の黒雲母は、浅間周辺の離山・雲場火砕流、和田峠の黒雲母流紋岩、御岳第一軽石層、八ヶ岳東麓の古期ローム相当層中の黒雲母浮石層のものなどいくつかの可能性があり特定がむずかしい。また、早期の土器群の一部には和田峠付近の岩石組成を示すものがあり、早期後半の人々が移動してきた可能性を示唆する。また第四節第二項で述べたように前期の東海系土器は白雲母を含むことから、南信を含む東海地方から搬入された可能性を有する。このように土器からみた核領域と交渉圏は時期によって変化するが、早期には和田峠を含む領域が核領域となり、前期には遺跡から半径一〇・の核領域と六〇・以上南を含む交渉圏が推測できよう。

四 石材の流通

縄文前期から中期への、日常リングの皮をむくには果物ナイフ、石器装備と石材の変化 木材を切断するには鋸を使う。鉄を主体にした道具が一般的である今日、私たちは道具の用途に応じて、形を選び、炭素やクロム・ニッケルなどとの混合割合によってその硬さを調整する。形と素材とは道具の両輪である。さかのぼって縄文時代も道具をその目的に応じて自在に操るためには形のみならず、素材そのものを慎重に選択する必要があったらしい。それでは塩野西遺跡群の人々がどのような石材を入手したかを順にみていこう。

前期前葉、下弥堂遺跡の人々は矢の先に装着する石鏃のほとんどを、硬質頁岩（五二頁）かチャート（三八頁）で作り、黒曜石の使用率は六割とかなり低調である。ところが前期中葉になると黒曜石の使用率が上昇し、中期の川原田遺跡では、なんと石鏃七七点のうち八〇頁までが黒曜石で作られるようになる。

いっぽう小形薄片石器の石匙（万能ナイフ）・スクレイパー（皮なめし具）・錐（穴開け具か）・ピエスエスキュー（くさび）も前期にはおもに硬質頁岩やチャートで作られるが、ガラス質安山岩や頁岩、ホルンフェルスなども幅広く使われる。中期になると小形薄片石器はいくつかの素材で作られる「散らばり型」石器と、一種類の素材に集中する「集中型」に分かれる。たとえば石鏃と石錐は黒曜石への「集中型」であるのに対し、石匙やスクレイパーは「散らばり型」である。これ

に対し、ピエスエスキューなどは黒曜石七六頁にガラス質安山岩一六頁であるため、集中のピークが数種類に分散する「分散集中型」といえるようか。

打製石斧は前期の下弥堂遺跡全体では三点出土したのみであるが石材はチャート・頁岩・ホルンフェルスと多様であった。中期川原田遺跡でも、安山岩が全体の半数を占め、頁岩1が二四頁など九種類もの石材に分散する「散らばり型」傾向を示す。磨製石斧は前期・中期ともに蛇紋岩に限定される。

いっぽう石皿や磨石など大型で植物質食料の加工に関連するものは、前期中期を通じて安山岩に集中している。

石材変化の このように石器装備全体の中で小型の薄片石器の石材が変化していく背景は一体何があったのだろうか。逆に石斧や大型の礫石器の石材が変化しない背景にはどんな事情があるのだろうか。

石器を見渡すと、機能と石材の対応関係がはっきり決まっているものとそうでないものがあったらしい。たとえば石皿は大型であることが第一の条件であり、さらに堅果類や土器の混和材である岩石や顔料などを磨り潰すという用途を考えると、石に凹凸があり摩擦係数が高いことも必要条件となる。このような条件を満たすためには、運搬の効率的にも素材の特色上も居住域の近くで入手できる安山岩が妥当である。このような指向性は、通時的に変化がなかったということである。

いっぽう剥片石器、なかでも石鏃・石錐における、チャート・硬質頁岩から黒曜石への素材の転換はかなり顕著である。石器の器種をトータルした重量別の石材組成のうち、黒曜石は前期前葉（下弥堂遺跡六軒の住居中）は一割未満だったものが中葉（塚田遺跡六軒中）には三―五割（城之腰遺跡ではすでに八割）、中期中葉（川原田遺跡六軒中）には三―七割に達する。とくに前期中葉以降は黒曜石の中には原石が含まれてくる。堤隆は、これを黒曜石供給の安定化現象として説明する。すなわち黒曜石は原産地である和田峠や霧ヶ峰から、たとえば長門町大仁反や東部町久保在家などの集落との交換によって塩野西遺跡群にもたらされたと仮定し、前期中葉以降にその交換システムが潤滑に機能したと考えたのである。前期中葉には安中市注連引原遺跡で黒曜石原石の貯蔵例が見つかっているが、中期になるとさらに信州から南・北関東までの地域の拠点的な遺跡において原石の貯蔵と分配が行なわれるようになる。

黒曜石とともに前期中葉になって使用頻度の上がる石材にガラス質黒色安山岩があげられる。重量をくらべた場合、前期前葉（下弥堂遺跡一四軒中）では一七割、中葉（塚田遺跡六軒中）には二四割を占める。ただし中期（川原田遺跡五二軒中）になると四・五割へと低下してしまう。ガラス質黒色安山岩で作られる石器は打製石斧を除いては黒曜石で作られる石器と重なるため、黒曜石を補充する形で使われているようである。その原産地は山本藩によると遺跡から一・二・の八風山から香坂川にかけての地域であることが判明している。

中期に増加する打製石斧の主体は遺跡から六一七・〇の平尾山・森

泉山近隣で入手できると推察される安山岩である。この場合もガラス質黒色安山岩は硬質頁岩とともに、この安山岩を補充している。

ただし石匙だけは前期前葉から中期を通じて、一つの石材に偏ることなく、黒曜石・チャート・硬質頁岩・ガラス質安山岩が使われる唯一の器種である。このように石匙は典型的な「散らばり型」であるわけだが、このうち下弥堂遺跡の前期前葉のもの使用痕の顕微鏡観察などから、動植物質の素材の加工や切断に用いられる「万能ナイフ」という用途が推定されている。多様な素材は機能の多様さと関連していた可能性もあるのではないだろうか。

これらの検討から、小型の剥片石器においては、前期に多用されていたチャートや硬質頁岩が、中期になってより加工しやすく鋭利な黒曜石が交換によって手に入りやすくなったためそれらに取って代わられ、黒曜石で作る石器を補充する形で使用されるようになったと考えられよう。

前期前葉の石材が千曲川右岸の半径三〇・〇に分布することは、その時期の集団の移動範囲を示す可能性が高い。黒曜石原産地を移動範囲にもたなかった前期前葉の人々は右岸の石材を道具の中に振り分けた。いっぽう中葉になって定住の傾向が強まると、各集落間のネットワークが緊密化し、黒曜石の交換システムが機能し始める。すると今度は黒曜石を主体として、ほかの石材を補充的に使うようになっていった。中期に入ると黒曜石を中心にした剥片石器と安山岩を中心にした打製石斧・礫石器、そしてほかの石材によるそれらの補充という組成はさらに安定化する。ただし、前・中期を通じて磨製石斧は秩父三

波川層群や茅野から天竜川にかけて分布する蛇紋岩を使用している。

補充石材の さて、前・中期の補充石材のうち、一〇一・二・圈内

入平方法 で手に入るガラス質黒色安山岩や安山岩は各ムラの領域内に属するため、人々が直接採集もしくは狩猟の際に直接に取りに行ったものであろう。いっぽう南北相木の秩父層群より産出するチャートや別所層もしくは佐久山系での産出が予測されている硬質頁岩はいずれも一〇・以上三〇・内に属する。これらが前期中葉以降の交換によって入手されたものか直接採集によったものなのかは課題として残る。

ところで、前期前葉にあたる長門町中道遺跡のSB09住・東部町真行寺遺跡のSB03住では石鏃はすべて黒曜石であった。このような状況を見渡すと、比較的原産地に近い集落では前期前葉段階にはすでに黒曜石の直接入手活動が活発化していたことがわかる。

これに対し、下弥堂遺跡から南へ六、下った佐久市栗毛坂遺跡群では、早期後葉一・中期初頭のトータルなデータではあるものの、石鏃二五四点のうち、チャート製は一三点にすぎず、約八割が黒曜石で占められる。ここでは黒曜石製のものと同チャート製のもの製作技法の違いから後者が搬入品である可能性も指摘されている。このほかの刻片石器も石匙を除いて黒曜石が圧倒的に多い。産地は和田峠・星ヶ塔・八ヶ岳が含まれているとされる。ところが森山山の裏側にあたる佐久市吹付遺跡の縄文中期後葉一・後期前葉の石器は石鏃一八点のうち黒曜石：チャートが2：1、石錐では八点のうち黒曜石とチャートが同数

であった。そして石材の重量比は、チャートが黒曜石の四・二倍であった。この関係は、川原田遺跡の住居跡出土石材が黒曜石がチャートの二倍であるのくらべ明らかにチャートの割合が高いところに特色がある。川原田遺跡での補充石材はここでは主要石材となっている。ここはチャート産地に一〇・少しと迫り、これらが入手し易い立地であったことはたしかである。塩野西遺跡群にもこのような原産地に近い遺跡からチャートなどの原石が交換によってもたらされた可能性が考えられる。

核領域・交渉圏の 以上土器・石器を中心に塩野西遺跡群の縄文時

ネットワーク 代の人々の領域を考えてきた。これらの資源をある集団が調達に赴く場合も、交易で入手する場合もほかの集団との接触は避けられなかつたろう。一つの景観的なムラの構成員をかりに「集団」とよぶとすると、ある「集団」にとって核領域の縁辺部を共有し、ときには土器の分配を行なうこともあるような隣接集団とは資源の採集や共同の儀礼などさまざまな局面を通じて頻繁な接触が図られただろう。また、そのほかに交渉圏の遠隔地集団とは、資源のやりとりを通じて常に距離に反比例することのない個別の緊密な関係を保持していた形跡がある。このような地域間ネットワークに乗ってマツリの道具やヒスイの玉や耳飾りのような、もつ人の特別な役割を示す威信材が流通する。その反面ネットワークを常に円滑に保持するためであるかのように一見して経済的には意味のないもの、たとえば北陸地方の砂岩製の石斧などの交換も行なわれる。隣接集団はもとより遠隔

と季節的移动域もしくは石材獲得域の半径二〇・〇の成立。住居形態が定形化し付帯施設をもつ点、住居構造の多様化、土器の平底化や多系統の土器の共用、石器石材である黒曜石交易ネットワークの成立や六〇・以南からの土器の搬入などは、定住生活を推測する要素となる。とくに神ノ木式の土器の胎土が二系統に分けられそれぞれ異なる調整技法で作られている点は、いっぽうが在地製作で、他方は一二・〇への混和材(粘土)採集もしくは搬入品である可能性を有し、ここにも交易ネットワークが機能する。また、二系統の土器併存は関山式の胎土いかんによっては関山式の搬入のみならず、集団が季節的に移動してきた際に残したものである可能性を有する。

④ 中期中葉：定住の拠点となる基幹集落を作り、一〇・〇は日常の資源獲得において使用される。さらに特殊な作業にもなつて一時的に居住地となる場所をも含んだ核領域が成立する。核領域の中が小移動圏となつた可能性もある。さらにその外の半径四〇・〇圏は黒曜石やチャートなど日常使用する道具の素材を交換する中間的な領域である。核領域を共有する集落間で土器作りの分業体制が成立していた可能性が推測されるが課題も多い。そしてさらにこの

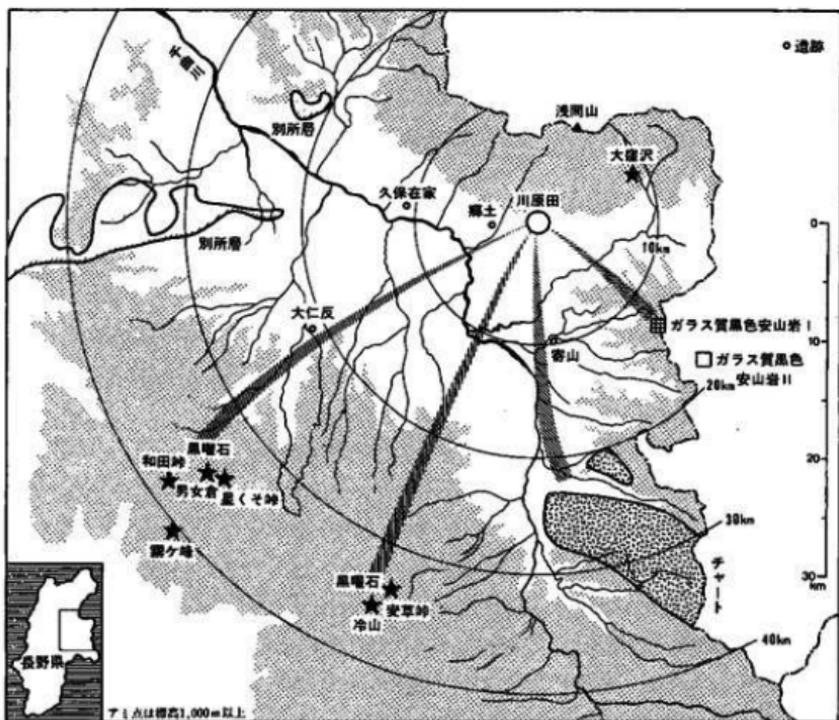


図145 縄文中期中葉の領域

外の領域である交渉圏からヒスイなどの特殊な物品の搬入が推測される。

⑤中期後葉～後期：定住の拠点となる基幹集落の分散小規模化と敷石住居、再葬墓、石棺墓など施設建設にかかわる呪術性の高まりと構造の複雑化。それにとまなう石材採集などの労働コストの高まり。土器や遺構形態の広域的な斉一化の進展。

〈引用・参考文献〉

岡村道雄編 一九九七 『ここまでわかった日本の先史時代』角川書店

金子量重ほか 一九八九 『アジアと土器の世界』アジア民族造形文化

研究所

クロード・レヴィ・ストロース 一九九〇 『やきもち焼きの土器つくり』みすず書房

小林正史 一九九三 『カリంగా土器の製作技術』北陸古代土器研究

第三号

須藤健一 一九八九 『母系社会の構造』紀伊国屋書店

田中良之 一九九五 『古墳時代親族構造の研究』ポテンティア叢書

都出比呂志 一九八九 『第四章五 土器の地域色と通婚圏』日本農

耕社会の成立過程

角林文雄 一九七八 『ニューギニア・マダニ周辺の土器作りとその経

済的機能の研究』民族学研究 四三—

DEANEARNOLD 一九八五 『Ceramic theory and cultural

process] Cambridge

朝長野郎埋蔵文化財センター 一九九一 『上信越自動車道埋蔵文化

財発掘調査報告書』二 『第二節吹付遺跡・第一八節栗毛坂

遺跡群』

林 謙作 一九九二 『縄紋時代史二三 縄文時代の生業』『季刊考古

学』三九

林 謙作 一九九二—一九九四 『縄紋時代史一四—二二 縄文人の

領域(一)』『季刊考古学』四〇—四六

春成秀剛 一九八一 『縄文社会論』『縄文文化の研究』八

水沢教子 一九九二 『縄文社会復元の手続きとしての胎土分析』『信

濃』四四—四

第十節 ドクトル・マンローと宮平遺跡

マンロー博士 浅間山麓の古代史の扉は、軽井沢サナトリウムの英と浅間山麓 国人医師であり考古・人類学者のNGマンロー博士によって開かれた。マンローが亡くなる二年前の昭和十五年軽井沢で撮影されたポートレートは、丸眼鏡の奥から理知的な瞳をのぞかせるマンローの人とをりをよく伝えている(写81)。

マンローは一八六三年にスコットランドで生まれ、明治二十四年に来日したのち、横浜・軽井沢・北海道二風谷での医療活動を続け、そのかたわら昭和十七年七九歳で亡くなるまで、日本考古学やアイヌの人々の人類学的研究を続け不滅の業績を残した。明治二十八年に帰化して日本名を満郎と書いたが、日本語はあまり堪能にはならなかったようである。

マンローが軽井沢を訪れるようになったのは、大正初期のことらしい。大正元年にマンローは豊井宮平遺跡を調査し、「茂沢付近の遺跡地名表」を『人類学雑誌』に発表している。当初マンローは軽井沢に避暑に来たにすぎなかったが、縁あって大正十三年には軽井沢サナトリウムの院長に就任し、昭和三年までその職にあった。

当時マンローを軽井沢サナトリウムに訪問した人物には、キリスト信徒である内村監三がいる。また、土井晩翠は結核患者としてマンローの治療を受けていた。堀辰雄の『美しい村』に登場するレエノルズ

博士もマンローがモデルとなったともいわれている。このほかアインシユタイン博士やヘレン・ケラーなど世界の歴史上に残る人物も日本でマンローと会見している。こうしたそうそうたる人物を引きつける魅力をもマンローは十分にそなえていた。マンローは研究面ではロックフェラー財団や岩波書店の岩波茂雄氏より研究費の助成を受けている。

太平洋戦争中は、いくら帰化したとはいえマンローは外国人、特高警察の監視下におかれ、スパイ容疑を着せられて殴る蹴るの暴行を受けるといふ苦い経験をしたこともあった。いっぽう、マンローは生涯において四度の結婚を経験しているが、最後の夫人であった日本人の



写81 マンロー博士(昭和15年・軽井沢)



写21 宮平遺跡の耳飾り 径約7cm
(大井源寿氏蔵)

チヨ・マンローは、戦後の昭和二十九年、六九歳になるまで軽井沢サナトリウムに婦長として勤務している。

豊昇の大井源寿氏は幼いころ、馬に乗った背の高い外国人が家に来て、当時は

めずらしかつたビスケットなどをもらった記憶があるのだという。その人がマンローで、大井家所蔵の宮平遺跡出土の耳飾りをみて、ぜひ欲しいといい、当時の二〇〇円で売ってくれないかと大井氏の父に懇願したそうだが、父はしばらくお堂に置いて考えをまとめ、やはりだめだと返事をしたという逸話が残っている。その耳飾りが写21に載せたもので、みごとな装飾の施された直径七センチの優品である。マンローはたびたび宮平遺跡を訪れ、当時宮平を発掘中の考古学者八幡一郎東大講師）とも歓談している。またマンローは軽井沢茂沢南石堂遺跡の踏査などもしばしば行なっている。マンローが集めた古代コレクションは膨大な数におよぶが、軽井沢にあったものは関東大震災の難を逃れて残った。現在京都の同志社大学には、マンローが神奈川県早川などで発掘した旧石器とされた石器が展示されている。

マンローは明治四十一年「プレヒストリック・ジャパン」(『先史

時代の日本』という七〇〇頁におよぶ英語の名著を著し、先史時代の日本文化についての大きな研究業績を残した。この本はイギリスでも出版され、日本の先史文化が西洋にも紹介されることになった。特筆されるべきは、この本のなかで、日本に縄文以前の文化―旧石器文化が存在することがいち早く説かれたことである。しかし日本の旧石器時代の存在の証明は、その約五〇年後の昭和二十四年、群馬県岩宿遺跡の発見まで待たねばならなかった。

いっぽう、人類学者としてのマンローは、アイヌ文化への造詣が深く、英文で「アイヌ―その信仰と儀礼―」という優れた民族誌を出版したり、「熊祭り」(イオマンテ)の記録映像なども残している。とはいえマンローは、よそもの人類学者が現地に来て、民族資料だけをさらっていくというような野蛮な調査者ではなかった。マンローは北海道二風谷のコタンに居をかまえ、結核をはじめとする病気に手の施しようがなかったアイヌの人々を無料診察で支え、そのかたわら民族の文化を記録するという仕事をなしたけたのである。したがってその財政基盤は夏季の軽井沢での出張診療による収入が支えていた。

ただ残念なことに「熊祭り」のフィルムは、戦時中に特高警察によって没収され、六巻のうち四巻をスタスタに切り裂かれ、今日ではそのダイジェスト版しか残されていない。この残りのフィルムが返ってきたとき、マンローはただ一言「ファシストめ！」と吐き捨てるようにいったという。

〔引用・参考文献〕

桑原千代子 一九八三 『わがマンロー伝』新宿書房

第二編 古代



塩野牧の検印風景

浅間山の南麓におかれた塩野牧は、長倉牧・望月牧とならぶ伊久地方の御牧（朝廷の直営牧場）の一つで、100頭前後の馬が朝廷の献上馬（貢馬）として飼育されていたらしい。牧では、馬が2歳になると、毎年9月に国司・牧監が牧長と立ち会って体軀を検査して籍帳を作り、馬の左股に「官」の焼き印を押した。小田井西の野火付遺跡からは、数馬が馴馬とみられる馬骨が出土している。

第一章 弥生時代

第一節 弥生文化と浅間山麓

一 弥生時代のあらまし

戦争は第二次世界大戦の傷跡も癒えぬ、昭和二十二（一九四七）年から二十五（一九五〇）年に発掘された静岡県登呂遺跡から発見された弥生時代農村は、高床倉庫のねずみ返し部分が見つかるなど、当時の生活が遺憾なく復元されたばかりか、生産跡の水田は世界的にも例がない点でも注目を集めた。当時、考古学研究者をはじめ、国民の多くは登呂遺跡の弥生農村に対し、牧歌的で、平和な印象を抱いていた。そしてその感覚は最近まで続いていた。

戦後五〇年を過ぎた現在、集落の周りを囲む堀（環濠）や柵などの防衛施設の構築、殺傷能力の高い大型化した弓矢の鐵てつの存在などが判

明したことにより、弥生時代には戦争が頻繁に起きていたことが推測されるにいたった。そして私たちは「弥生社会」という言葉に対してきな臭さを感じるようになった。

長野県では、紀元前一世紀になると防衛施設（環濠）を備えた集落が出現した。畿内・瀬戸内にかけての西日本各地では、土地や鉄の争奪戦が行なわれた時期である。こういった背景からして、西日本の争乱に巻き込まれるように長野県でも戦争が勃発していたと考えるのが普通である。が、本章ではあえてこの時期の長野県域には戦争はなく、平和であったと考える。

また、本章では紀元前一世紀に大規模な人の移動があったことも予測した。長野県においては、人の大移動によって本格的稲作農耕が始まり、地域社会が形成されていく歴史上の大きな変革が弥生時代中期

に起こったのである。では、移動してきた人々がどこからやって来たのか。結論に達するには、十分な検討を要するが、中国・朝鮮も含め、アジア的視野で歴史を見ていけば、近い将来、長野県に水田を開いていた人々のルーツが判明するであろう。

二 稲作の起源と伝播

世界最古の 日本では米作りの開始をもって弥生時代と定義する。稲作跡とが多い。そこでまず稲作の起源は世界のどこにあったのかたどってみることにしよう。

最近まで稲作の源流については二つの有力候補地があった。一つはインド東北部のアッサム丘陵から中国南部の雲南台地^{ユンナン}。一つは揚子江中下流域である。その根拠は紀元前四〇〇〇年ごろ書かれたインドの『婆羅門経』^{ウパニシット}に稲作の記録があったこと、従来中国で発見された最古の水稲農耕文化は紀元前四〇〇〇年前の河姆渡文化^{ハムトウ}であったことなどによる。

ところが最近のあいつく発掘調査の成果により、稲の原産地は中国の揚子江中下流域に絞込まれつつある。

昭和六十三（一九八八）年には揚子江中流域の湖南省彭頭山遺跡^{ヘントウサン}から栽培種とみられる稲穀が八一九〇〇年前の地層からまとまって出土し、平成三（一九九一）年には江蘇省草鞋山遺跡の六一七〇〇〇年前の土器を出す地層から大量のイネの細胞化石（ブランドオパール）が発見され、平成七（一九九五）年には日中合同調査によりこれが水



写真1 雲南省のモチツキ(若林弘子氏提供)

田耕土であることが明らかにされた。また、同じ年に中流域の湖南省玉塘岩遺跡^{ユトウガン}では約一万年前の地層から稲穀が発見され、世界最古の栽培種として注目を集めている。

以上の発掘成果から稲作の起源をめぐる検討会が各地で行なわれ、一万年以前の気候条件、植生などの側面からも揚子江中下流域が稲作の原産地であることが有力視されるようになってきた。

稲作日本へ 揚子江中下流域の遺跡から発見された稲穀は、日本型伝播とよばれる粘りの強い短粒米で、日本の古代米、および現在私たちが日本人が食べている米と形は同じである。いっぽう雲南省などの華南地域やインド・東南アジアなどの温暖な地域で栽培されている稲穀は長粒米のインド型といわれ、粘り気が少なくバサバサしている。平成四年の米不足のおり、タイからの支援で輸入された米が

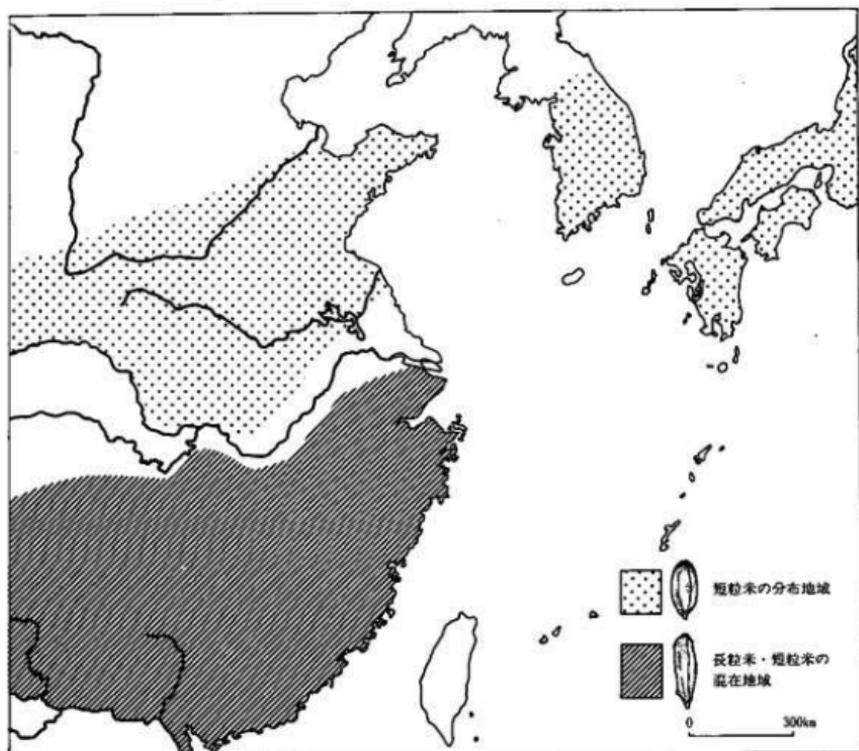


図1 短・長2種類の米粒 日本は短粒米の分布地域

それである。このような稲穂の種類からみて、日本稲作の源流は揚子江中下流域にあった可能性が高まっている。しかし、今までは伝播経路も含め諸説があった。

一つめは雲南省や福建省などの華南地方から台湾・沖縄を経て島伝いに南九州へいたる南回り説、二つめは華南・江南地方の農民が対馬海流に乗って直接北九州へ稲作をたずさえて上陸したとする直接渡米説、三つめは揚子江下流域から山東省へ北上し、海路で朝鮮半島南部へ東進そこからまた、海路で北九州へ上陸したとする間接渡米説である。現在では中国・朝鮮・日本における日本型の分布状況(図1)、日朝出土の石包丁などの農耕具の類似性などから、間接渡米説が有力となっているが、揚子江下流域から朝鮮半島への伝播経路については山東半島を経ず、海路で直接朝鮮半島へもたらされたとする意見もある。

三 金属器の導入

金属器を使って 弥生時代の特徴は稲作の開始と変わったこととともに青銅や鉄などの金属製品を積極的に使い始めたことである。剣・矛・戈など

は戦闘用の優秀な武器で、戦争が起きた際には、絶大な威力を發揮する反面、その殺戮の状況は凄惨を極めたと考えられる。また、こういった武器類は当時は貴重品で、ムラの有力者層が権威の象徴として保持し、祭りにあたっては、ムラ共有の重要な祭器にもなった。また、鏡や鐙、巴形銅器なども祭祀にあたっては重要な器物であった。導入当初の金属器は弥生人の精神の充実にも多大な貢献をしていたのである。

金属器は弥生人の精神生活に大きくかわっていたと同時に、生産力の増強にも一役かった。とくに、後述する鉄器の普及は、耕地の開墾にあたり絶大な威力を發揮した。日本の原野は、次々と稲穂のたれる水田へと変わっていった。

青銅器の 日本列島では青銅器に先んじて鉄器の使用が始まった。使 用 といわれるが、北部九州を中心にまず首長墓の副葬品として目立つのは青銅器である。西日本を中心とした青銅器文化の流れは弥生前期末―中期前半にかけては朝鮮からの輸入品が主体で細形の銅剣・銅矛・銅戈や多鈕細文鏡、中期中ごろ―末は前漢鏡、中国式銅剣、後期初頭―前半は国産の巴形銅器、中国新の王莽が作った貨泉、後期中ごろから終末は後漢の内行花文鏡、獸帯鏡へと変化する。いっぽう、国産品には鐘のような音色を奏でた銅鐃や巴形銅器などの祭祀用具がある。これらのうち、剣などの武器や音響器機にあたる銅鐃は、本来の使用目的からは掛け離れるほどに大型化し、ムラ共有の祭器になっていった。

鉄器の普及

つぎに鉄器が日本列島へ大量に入るきっかけについて記しておこう。中国では前漢武帝（在位紀元前141―187）の時代に匈奴の脅威に対抗するため兵器、馬、鉄の輸出を禁止した。これを「馬弩関」という。武帝の死後、昭帝の治世、始元5年（紀元前82年）になって「馬弩関」は廃止され、南部朝鮮、倭国の北部九州へ鉄製武器が流入する。ちょうど、日本列島は弥生時代中期後半をむかえ、倭国大乱に先んじた抗争があった時代である。この抗争を激化させる原因が鉄製武器の輸入と無関係だったとは思えない。以後、とくに倭国の北部九州の諸首長は急速に鉄製武器を保有するようになる。鉄製武器の代表格鉄剣・鉄矛・鉄戈はすべて中国・朝鮮で青銅製品をモデルに作られ、倭国には弥生中期中ごろから輸入され、後期初頭まで重用される。鉄刀は後期から登場するが全国で二〇例の出土しかなく、普遍的な存在には古墳時代に入ってからである。これらの鉄製武器は墓の副葬位置からみて鉄剣↓素環頭刀↓鉄戈↓鉄矛という序列があったようだ。また、これらは農業共同体の首長クラスが己の権威づけのために持ち歩いたものと考えられ、それがどんなに短い剣でも所持することに大きな意味があったようだ。鉄剣は全国で一〇〇例以上、鉄矛は一〇例、鉄戈は二〇例発見されている程度でやはり当時の貴重品であった。

これらの出土地は朝鮮半島の玄関口北部九州に片寄るが、長野県・群馬県でも比較的多く出土している点が注目される。たとえば、佐久市五里田遺跡では弥生中期末―後期前半と考えられる東国最古の鉄剣

群馬県有馬遺跡の後期後半の礎床墓からは朝鮮から群馬に運ばれた東日本唯一の長剣(全長五七^〇)、上田市上田原遺跡の弥生末の土坑からは全国一〇例目の鉄矛、北信濃の木島平村根城遺跡では弥生後期後半の遺構から朝鮮半島南東部の伽耶地方からもたらされたと思われる満巻き装飾をもつ鉄剣など、このほかにも鉄鍬なども含め多数の鉄製武器が出土した。

また、武器ではないが小県郡武石村上平遺跡や群馬県高崎新保遺跡では全国一二遺跡でしか出土例のない巴形銅器が、佐久市社宮司遺跡では弥生時代前期末から中期前半に比定される朝鮮製の多鈕細文鏡の再加工ベンダントなど東日本ではほとんど類例のない朝鮮・九州系遺物が出土した。さらに、弥生時代後期にいたるとやはり他地域には少ないらせん状に巻き上げた鉄剣が多く出土するのも長野・群馬の特徴である。このほかに、鉄製の斧・鋤などもみつかっており、木材の伐採量はかなり多くなり、加工具の進歩により鋤・鍬などの耕作具も大量に作られたと考えられる。弥生時代の長野・群馬、言い換えれば栗林から箱清水・樽式土器の分布圏における金属器の出土例は周辺諸地域を圧する状況にある。その背後には後に述べるように朝鮮・九州との人の移動をともしなった強いかわりが感じられ、外来の金属器文化と、外来の人々の移住によって長野県の弥生社会の骨格ができてきたことがうかがった。

四 弥生時代の始まり—早前期

前期の年代

日本の弥生時代は紀元前三〇〇年から紀元三〇〇年までのおよそ六〇〇年間と考えられ、便宜的に前・中・後期の二〇〇年ごとに時期区分してきた。しかし、最近では科学的年代測定法の進歩により、開始・終焉ともにもう少し古く繰り上げて考えようとする動きがある。また、従来縄文時代晩期と考えられてきた土器を出す地層から水田跡が発見されたことから弥生時代の開始をもう少し古い時期に定めるため、早期を設けようとする意見もある。以上をまとめると弥生時代の開始は紀元前四〇〇年以前、終わりは西暦二六〇年ころと推定される。

先駆けの九州

日本でもっとも早く稲作を受け入れ、発展させた地域は北九州である。佐賀県唐津市の菜畑遺跡を代表として日本最古の縄文晩期／弥生早期の水田跡が発見された。これらの水田跡は一定区画をもち、灌漑施設をともしう完成した姿であった。日本の水稻農耕は原初的な段階をふまず、最初から発達した技術が、中国大陸・朝鮮半島からそのまま伝えられて始まったのである。

稲作の伝播とともに、さまざまな文物が縄文時代の日本にやってきた。当時の人々はこれらすべてを受け入れず、取捨選択をした。まったく新しい必要を道具は採用したが、縄文時代以来伝統的に使ってきた道具も利用できるものは継続して大切に使用した。こうして日本国



図3 環濠集落の防衛構造



写2 松本市針塚遺跡の遠賀川式土器 (松本市教育委員会提供)

有の農耕文化／弥生時代が始まった。

稲作の広がり

まず、全国に先んじて紀元前四〇〇年以前に北九州で開始された水稲耕作は、その後一〇〇年ほどの間をおいて日本列島各地、とくに伊勢湾までの列島西側のはとんどの地域と東北地方の日本海側に急速に広がった。この紀元前四〇〇年から二〇〇年ごろまでの約二〇〇年を便宜上弥生時代前期という。

前期を象徴するものとしては特徴的な「遠賀川式土器」がある(写2)。列島西側のはとんどすべて、また、日本海側の東北地方各地の前期の遺跡などに片寄って分布している。共通する土器が日本各地の前期の遺跡に分布することは稲作伝播にあたって源を同じくする集団がいたこと。また、列島西側・東北の日本海側など朝鮮半島に近いか、

中国大陸に対して表を向いた地域に偏在する状況は「遠賀川式土器」をもつ集団が半島・大陸と強いかわりをもっていたことが想像される。この時期の中国は戦国時代から秦・漢の成立期にあたり、戦乱が頻発していたため、中国の一部の集団が戦禍を避け、朝鮮半島へ逃げていた記録がしばしばみられる。したがって、さらに一部の集団は日本列島にまで移住した可能性もある。

「遠賀川式土器」をたずさえた人々の集落は濠で居住域を囲うことが多い。これを「環濠集落」という。この濠は敵や害獣の侵入を防ぐために掘削したもので、稲作農耕を西日本を中心とした各地に試作し、定着させていった開拓者集団が在来の縄文集団の襲撃に備えてつくったものと考えられる。代表的例は福岡県板付遺跡、大阪府安満・東奈良遺跡、京都府扇谷遺跡などをあげることができ、集落内は竪穴住居と土屋構造をもつ貯蔵用竪穴で構成されることが多い。

稲作伝播の このほか、東北の太平洋側、茨城・栃木など東関東、**遅れた地域** 山梨・長野県などは「遠賀川式土器」を出土する前期の遺跡が少ない地域である。これらの地域では、まだ大勢は縄文時代の晩期の段階にあった。長野県では豊丘村林里遺跡、松本市針塚遺跡、長野市伊勢宮遺跡、明科町はうろく屋敷遺跡など点々と「遠賀川式土器」が見つかっているに過ぎない。御代田町域をはじめ、佐久地域では未発見である。

この時期の長野県内では小諸市水道跡などで発見された「浮線文土器」という特徴的な文様をもつ縄文晩期後半の土器があり、この土器



写3 桑復文土器

野辺山矢出川南遺跡出土

(由井茂也氏蔵)

をもつ縄文化継承集団が時代の中心を担っていたのである。

長野県などのように強固な縄文社会が継続する地域には、徐々に稲作を教えようとする動きもあった。その象徴的存在が東海地方に生まれた「条痕文土器」である。「条痕文土器」は「遠賀川式土器」よりも県内各地でたくさん見つかっている。佐久地域でも由井茂也氏により南牧村の矢出川南遺跡で発見された(写3)。「条痕文土器」は「浮線文土器」と一緒に見つかることもあり、縄文集団へ稲作を知らしめる重要な役割を果たしていたことが想像される。

紀元前二〇〇年ころ、「遠賀川式土器」「条痕文土器」をもつ西方から長野県へやって来た稲作集団は、「浮線文土器」の縄文集団と接触し、水田開拓にあたって交渉を始めたばかりの段階だったのである。この状況は中期の初頭まで続く。

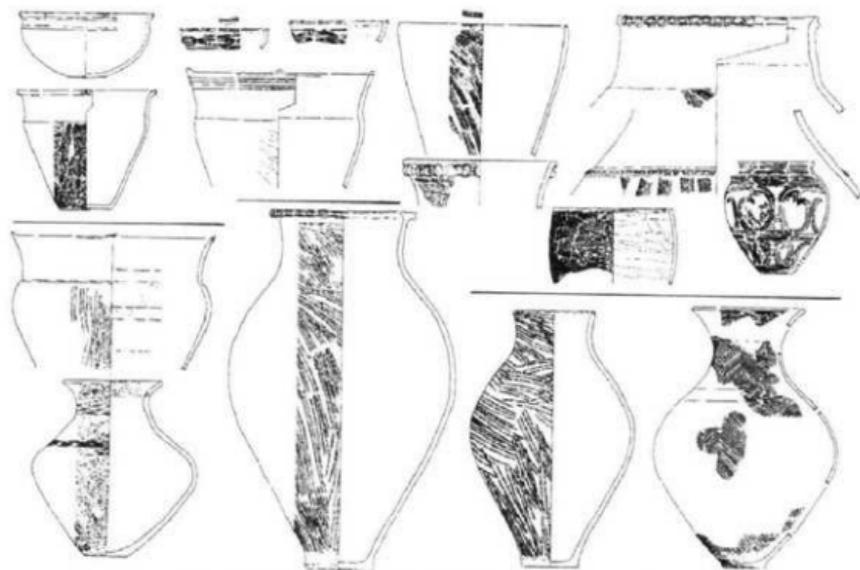


図4 縄文晩期から弥生前期への土器の変化 (『季刊考古学』23より)

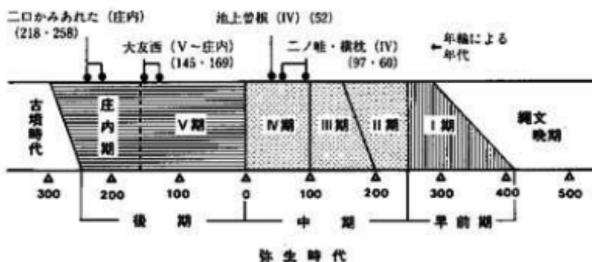


図5 年輪年代を参考にした弥生時代の年代

中国の「漢書」地理誌に「夫れ楽浪海の中に倭人あり。分かれて

分かれて百余国 紀元前五〇
地方分権の時代 年といえは
果が得られた。建物跡の畿内の
土器編年学上の時期は中期を三
期区分(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式と分け
られる)したうちでもっとも新
しいⅣ様式、そしてそのⅣ様式
を五段階に細分した場合、真ん
中のⅣ―Ⅲ期にあたる。この発
見によりⅣ―Ⅲ期は従来の推定
年代西暦五〇年よりもさらに一
〇〇年もさかのぼることになっ
た。

中期の年代
ここでは弥生時代中期は紀元前一〇〇年ころから紀元
前後ころまでの二〇〇年間をいう。年代決定のきつ々
けは大坂府池上曾根遺跡の大型建物跡の一本のヒノキの柱であった。
これを年輪年代学に基づいて測定したところ、紀元前五二年という結

五 地方分立の時代—中期

百余国をなす。……」とかかれた時代に相当する。ちょうどこの記述
と符合するように日本各地で大規模集落が登場する。また、そこから
出土する土器は地域の独自性を主張するかのようにならざるを得な
形と文様をもつ(図6)のである。日本各地でそれぞれの風土・習俗
を生かして稲作農耕を取り入れた地域づくりが行なわれた結果、土器
様相にも違いが生じたのである。この事象が中国側からみればいくつ
もの国が分立していたように映ったのかも知れない。

とここでここではじめて登場した「倭人」であるが、これは中国側
が当時の日本人を蔑視した表現である。倭という文字には腰が曲がっ
て背が低い、醜いなどの意味がある。在来の縄文人と渡来系の弥生人
とは平均身長で隔たりのあることが指摘されており、考古学的にも
当時の日本人は背が低かったことがうかがえる。そしてこれ以後六世
紀の終わりまで、日本列島は対面する中国・朝鮮から倭人の住む国
「倭国」とよばれ、自らもこの国名を使うようになる。

大規模集落 紀元前五二年前後に相当する日本列島各地の遺跡は神
各地に誕生 奈川県大塚遺跡、千葉県佐倉市大崎台遺跡、埼玉県神
明ヶ谷戸遺跡、群馬県清里、庚申塚遺跡、滋賀県二ノ柱・横枕遺跡、
愛知県朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡、大阪府池上曾根遺跡、奈良県唐古遺
跡、佐賀県袖比本村遺跡(銅鐸の安永田遺跡近)、吉野ヶ里遺跡、福
岡県吉武高木遺跡(早良園)、比恵・那珂遺跡(奴国の拠点集落のひとつ)、
長崎県原の辻遺跡(一支国比定)などが代表的で、長野県でも長
野市松原遺跡、松本市宮淵本村遺跡、佐久市北西ノ久保遺跡など大規

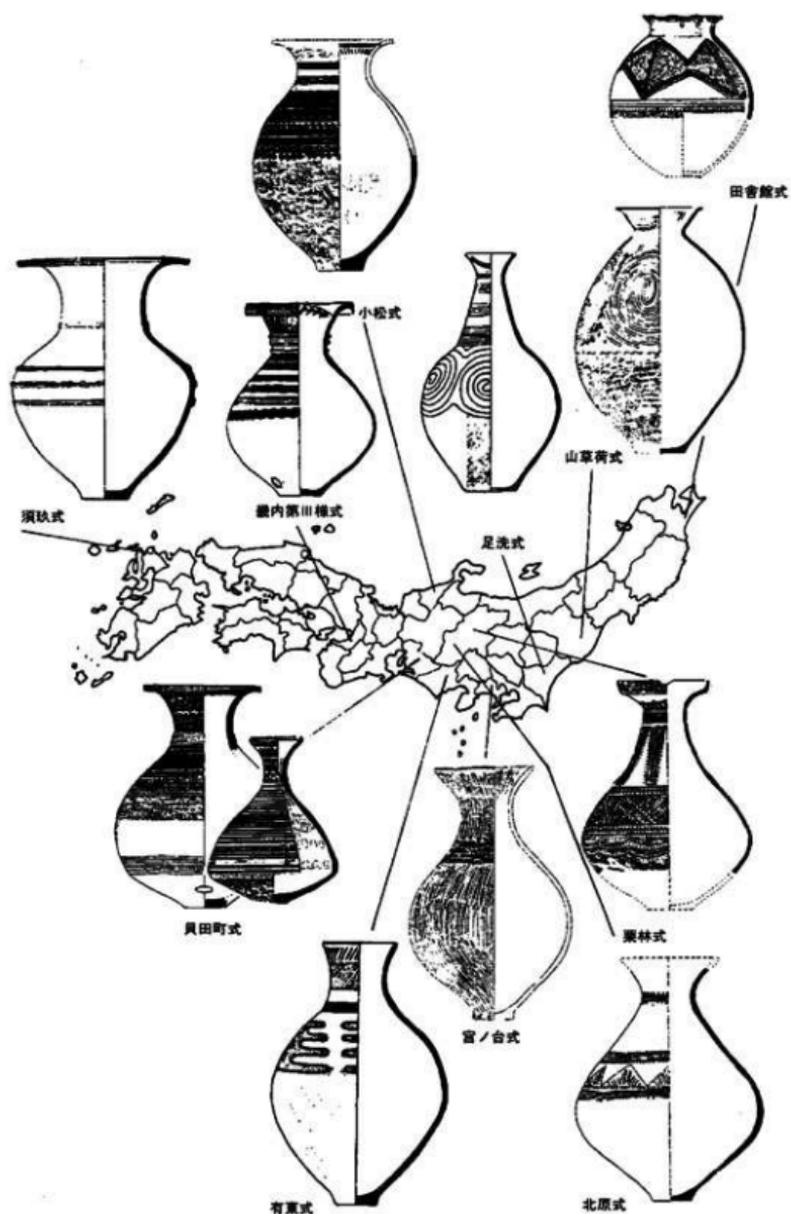


図6 2000年前、中期のさまざまな弥生土器

環濠集落が続々と出現する。これらの集落は、環濠をもつ場合が多く、集落を取りまとめる人々が居住したと考えられる宮室を思わせる大型建物が中心部に構えられていることが大阪府池上曾根遺跡など最近の調査でわかってきた。また、唐古・鍵遺跡では楼閣という二階から三階の重層建物が描かれた土器(図8)が出土しており、すでにこのころから「魏志倭人伝」を彷彿とさせるような集落景観ができ上がっていたことがわかってきた。

また、この時期、西日本の瀬戸内沿岸地域では高地性集落も多発していた。高地性集落とは山頂や丘の上など水稲耕作には適さない見晴らしの良い高所に築かれた集落で、住居は五軒前後と最小単位で構成されることが多いが、定住性の高い大きな集落がつくられる場合もあった。烽火台と考えられる施設が見つかることもあり、有事の連絡用といわれる。こういった状況から高地性集落は社会的・軍事的緊張時に登場した有事に備えての集落と考えられている。

環濠集落や高地性集落が多出する状況は、「後漢書」や「魏志倭人伝」等の記載にみられる倭国大乱(二世紀後半・西暦一八〇年前後)に先んじ、史書に記録のなかった西日本を中心とした広域な争乱が紀元前一世紀ころにあったことを示している。

これを裏づけるような現象が愛知県朝日遺跡で確認されている。それまで尾張固有に育まれていた弥生集落に畿内地方の人たちが集団で侵入し、先祖伝来の集落・墓は畿内集団の強力な軍事力によって破壊されてしまった。その後は畿内集団主導で集落造り、また、墓造りが行なわれ、そこで製作される土器も畿内地方特産の凹線という文様を

つけた土器が尾張でもつくられるようになった現象が遺跡にみられる。こうした集団移動をともしなう抗争が西日本各地で繰り返られていたことが想像される。

千葉・神奈川 いっぽう、東日本では太平洋側の関東、とくに神奈川の環濠集落 川原と千葉県に中期後半の環濠集落が目立つ。これは西日本に比べると小規模であるが、従前の集落よりははるかに大きい集落が忽然と出現しているため、他地域からの人の移動、それも水田を開拓する人々の集団の移動があったと考ええてよいだろう。かれらがつくった弥生時代中期後半の土器は高ノ台式土器(図6)と総称

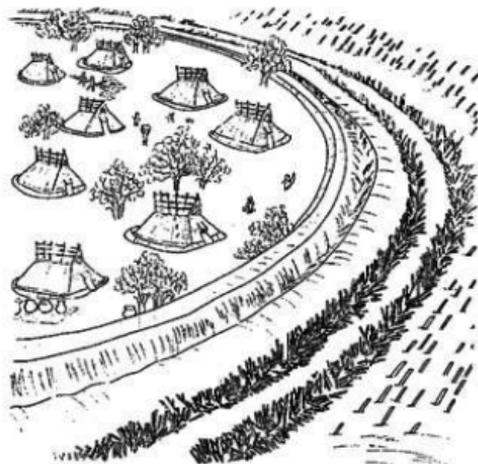


図7 環濠集落の想像図

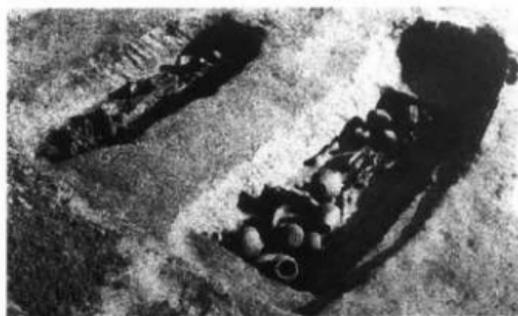


図8 樓閣の復元図（唐古・鍵遺跡）

される。前代から発達していた須和田式土器などに象徴される縄文文化継承集団の領域に立ち入って開拓を進めるには、まず有事に対する環濠の備えを万全にしておくことが肝要だったのである。

長野県の本格的農耕社会の形成 県内では弥生時代前期から継続して東海地方の「条痕文土器」集団が長野県の人々に稲作を勧め

ていた。こうした粘り強い努力が実り、稲作が県内に根づき始めるのは、中期前半・紀元前二〇〇―一五〇年ころのことである。このころの長野県では関東の須和田式土器と同じく、縄文的色彩を濃厚に残した土器（図9）が製作されていた。これらの土器をつくった人々の集落は発見例が少なく、生活実態についてもわかっていないが、まだ、縄文時代以来の伝統的な生業も重視し、完全に稲作に依存していない状況が想像される。



写4 長野市松節遺跡の木棺墓（長野市立博物館提供）

生の異なる習俗が融合して造られている。長野県の善光寺平の沖積地では紀元前一五〇年ころからすでに稲作農耕を行なうため、弥生集団の進出が友好的に行なわれていたことがこの墓跡の存在からわかる。ただし、このころはまだ試作的で小規模な稲作経営に甘んじ、縄文時代からの生業も合わせて行なわれていた段階であったと考えられる。本格的稲作社会にいたるにはもう少し時間が必要だったのである。

また、長野市松節遺跡の墓跡からは東西交流の匂いを嗅ぎ取ることができる。墓跡には西日本の弥生社会に特徴的な木棺が採用され、葬られた人の骨は渡来系の形質を示していた。いっぽう、木棺の中には複数の遺体を一緒に葬ったり、土器・玉などの副葬品が納められていた。こういった風習は弥生時代になく、縄文時代の伝統的な習俗である。

粟林式土器 長野県に本格的稲作を定着させたのは
 の 成 立 「粟林式土器」を造った集団である。粟
 林式成立段階の土器は善光寺平以北や大町市以北に分布
 しているため、誕生地もその辺りだったと思われ、しだ
 いに分布域を拡大する。その立地のはとんどは、水源に
 恵まれた開田可能な沖積低地である。高山村湯倉洞窟や
 真田町唐沢岩陰・陣の岩陰遺跡のような山間部の狩猟
 場に住むこともまれにあるが、基本的に粟林式土器を造
 る集団は稲作を生業とする集団だったのである。

粟林式土器の最大の特徴は、ひとつの土器の文様要素と
 して、旧来の縄文、棒状工具による沈線文、畿内を経由
 して北陸の弥生中期土器「小松式土器」の影響力が濃厚
 な縄文の三種が同時に採用される点にある。これは長
 野県に居住する縄文文化継承集団と、日本海側の北陸地
 域を経由して中部高地に乗り出した水田開拓集団が手を
 結んだ結果生み出されたものと考えられる。粟林式土器
 は縄文・弥生の両集団が友好的に手を結んだ証として成
 立したのである。

大規模集落の出現 長野県の本格的稲作農耕社会はこ
 と人々の移住 うした成立事情があったためか、
 西日本や関東のような大きな異さ、抗争の痕跡があまり認
 められない。発掘成果では環濠集落といわれるものは長

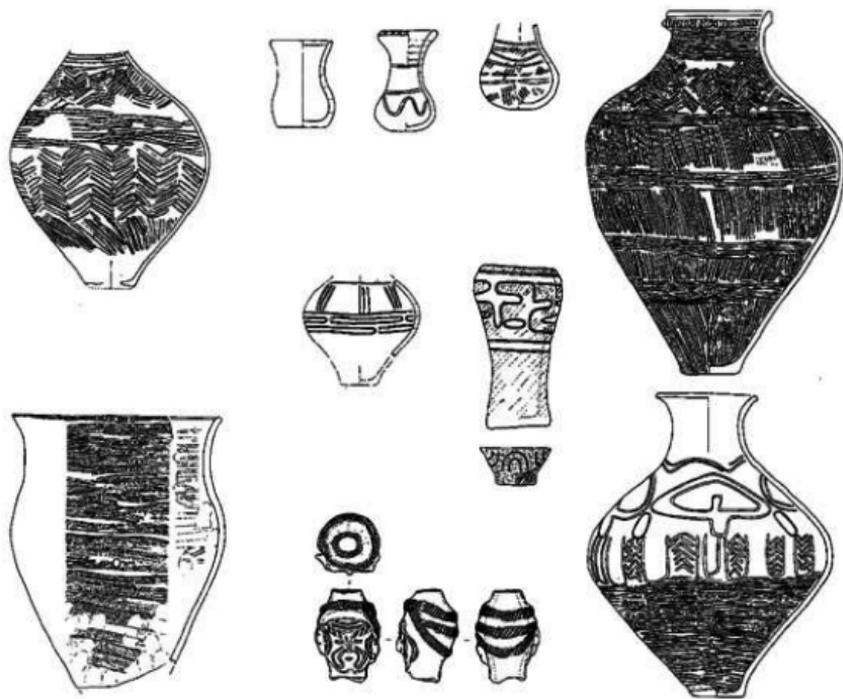


図9 佐久平の初期弥生土器(1:8)

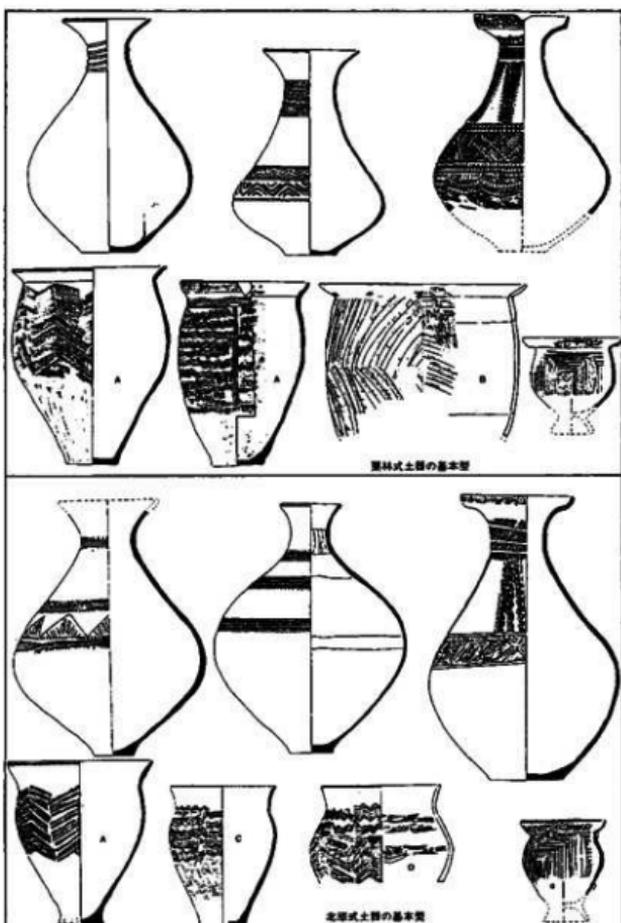
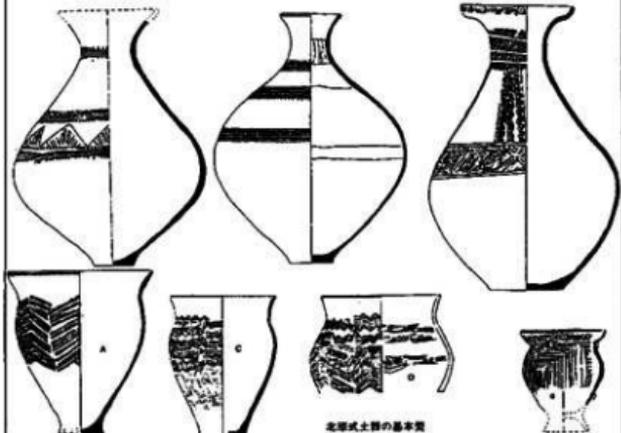


図10 粟林・北原式土器のモデル

野市の数遺跡だけに存在、大型建物は未発見ということがわかってい
る。

環濠集落といわれるものの代表例は松原遺跡、春山B遺跡などである。松原遺跡は発掘軒数だけでも三〇〇軒を超す竪穴住居跡と一〇〇軒を超す平地住居が発見され、全体規模はその四〜五倍になろうかかという特大集落である。今まで見つかったいる掘立柱建物跡は小さなも



しかし、環濠は松本・佐久などへの地域的な広がりはみせず、後期に
いたって一時消失してしまうなど、時間的な連続性も乏しい。こうい
った状況から弥生時代中期後半から後期前半までの長野県は軍事的緊
張状態が欠如した社会、言い換えれば平和な社会だったのである。長
野県に再び環濠が出現するのは倭国大乱から古墳発生前夜、国内の統
合に絡む大きな社会変革期に長野県ははじめて大きな戦争を経験した

のばかりで、大型建物は未発見
であるが、これだけの大規模集
落を統率するには盟主の存在は
不可欠である。おそらく、未調
査部分に大型建物跡が眠ってい
ると思われる。

また、この集落の環濠は多重
ではなく、幅は最大三メートル
溝の内外に住居があり、集落を
囲い込む濠というよりは、集落
を仕切る溝だったという説もあ
る。溝の全体像が明確でない段
階で即断はできないが、もし、
これが環濠であるとすれば、西
日本弥生社会の文化事象のひとつ
として信濃の善光寺平に導入
されたものとして評価できる。

のである。

また、松原遺跡の巨大集落は徐々に大きく成長したのではなく、かなり短い期間に形成されているようである。その理由は、善光寺平では松原以前の集落は少なく、あっても小規模なものだからである。常識的に考えて、短期間で何十倍にもなるような人口増が自然に起こり得るわけがない。したがって集落膨張の背景には人の集団移動があったと思われるのである。これを直接証明する材料は乏しいが、前期期の松筋遺跡の渡来人の人骨の存在は、中期後半・粟林式土器成立時期にいたって西日本あるいは朝鮮半島から人々の大移動があったことを示唆している。

佐久平への善光寺平に松原遺跡のような大規模集落が出現して間違なく、松本平と佐久平にも大きな集落が誕生した。

やはり、粟林式土器をともなつた集落である。松本では宮淵本村遺跡、佐久では北西ノ久保遺跡がその代表例で、いずれも環濠はもたない。

佐久市岩村田の北西ノ久保遺跡は、ほぼ舌状台地上のすべてが発掘されており、その際に見つかった弥生中期後半の竪穴住居跡は九二軒であった。二時期以上にわたる変遷があると考えられるため、一時期四〇軒前後の竪穴住居が併存していたことが推測され、これが当時佐久平最大の集落と考えられてきた。ところが、最近、北西ノ久保遺跡の立地する舌上台地と地続きの東側に広がる台地上の西一本柳遺跡の調査が開始され、そこから粟林式土器を出土する竪穴住居跡が多数発見された。また、狭小な谷で隔てられた西側台地上の五里田遺跡か

らもやはり同時期の竪穴住居が密集して発見された(図11)。これらは土器様相からみて北西ノ久保遺跡と時期的な差はなく、併存していた可能性が高い。この周辺の広域な台地のどこまでこの集落が展開しているか不明であるが、今まで予想もできなかった大規模な弥生中期集落がこの一帯に眠っていたのである。

弥生当時の佐久平におけるこのような集落膨張現象は、善光寺平と同じく、急激である。したがって、佐久平にも稲作の開拓集団が、大挙してやってきたことが十分に推測されるのである。そのなかにはかなりの数の渡来系の人がいたのであろう。

なお、その当時の御代田の情勢はまったく不明であり、粟林式土器はかけらすら発見されていない。

さらに南へ こうして粟林式土器を持つ集団は大挙して、比較的平和に県内における分布圏を拡大し、松本・佐久のほか、諏訪・上伊那など「北原式土器」の分布する下伊那を除く県内ほぼ全域に本格的稲作農耕を定着させていった。そしてさらには県境を

越え、群馬県から埼玉県北部、山梨県にまで進出(図12)し、海なし四県に一大勢力を構えるにいたつたのである。さらにはこの分布圏のほかに粟林式土器は他型式の存在する新潟・石川・富山・愛知・岐阜・静岡・東京・神奈川・栃木など周辺地域にまで流入している。このように広域な分布をもち、他地域にまで影響をおよぼすような粟林式土器のまとまりを「漢書」地理誌の「百余国」の一國と考えても良いのではないかと思う。



写5 北西ノ久保遺跡 密集する弥生中期竪穴住居群
(佐久市教育委員会提供)

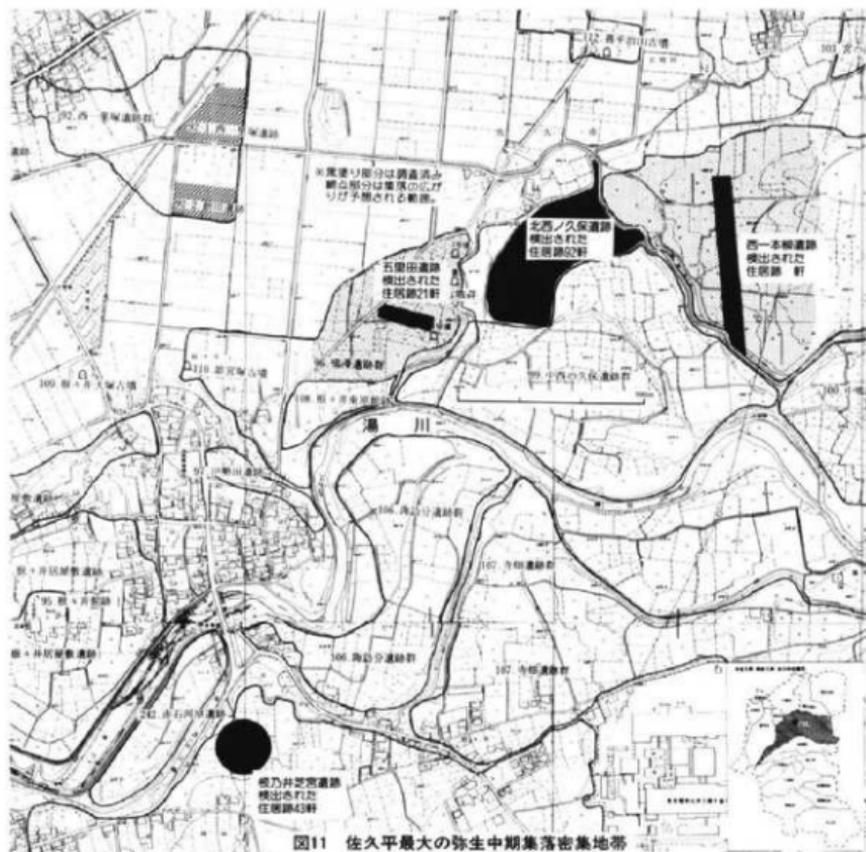


図11 佐久平最大の弥生中期集落密集地帯

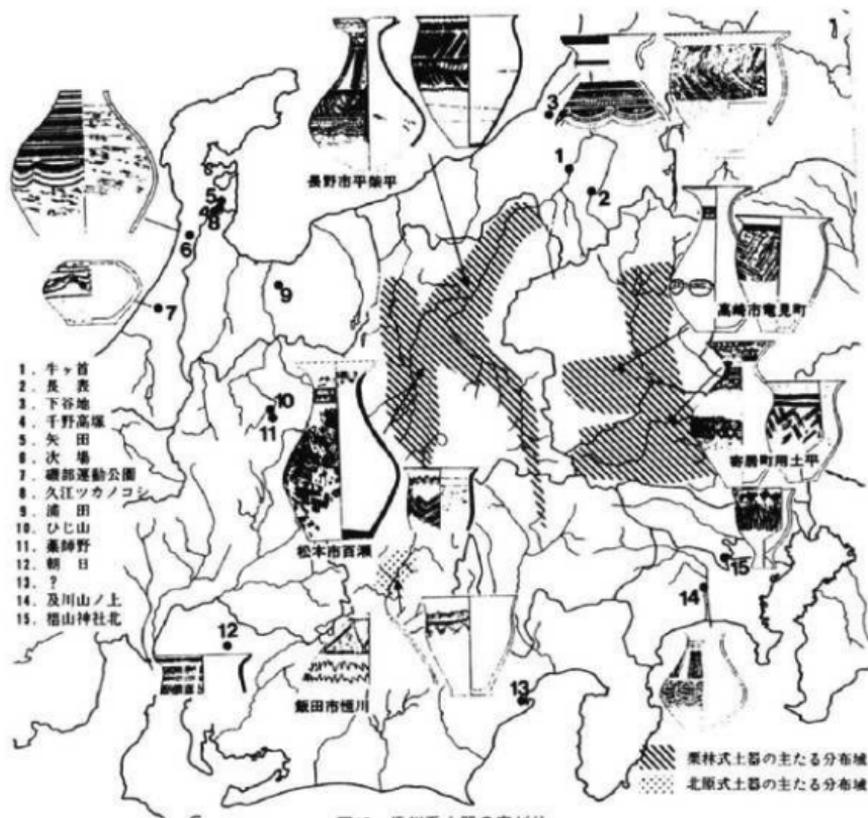
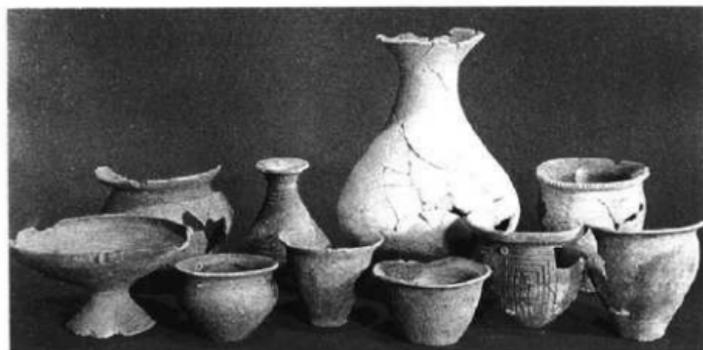


図12 信州系土器の広がり



写6 栗林式土器のセット (佐久市西八日町遺跡Y-3号住居跡、佐久市教育委員会提供)

六 争乱の時代—後期

後期の年代

弥生時代後期の始まりは紀元前後、そして弥生時代の終わり・古墳時代の始まりは奈良県箸墓古墳の完成年

代と考え西暦二六〇年ごろとする。西暦二五〇年ごろに卑弥呼が没し、二六六年には邪馬台国が魏に最終朝貢したといわれる。

各種の後期

弥生時代後期にいたると、中期に確立された地域色は弥生土器 さらに発達し、それぞれに個性的な土器がつくられた

(図13)。この中で注目されるのはいち早く実用本位の無文土器をつくり出した畿内地方である。畿内第V様式と総称され、次代の古墳時代の一般容器、無文様の土師器発生の源となり、弥生終末から古墳初頭にかけては山陽・山陰・四国・東海など周辺地域に大きな影響を与えた。また、九州では器面に粘土帯の文様をもつ土器が主体であったが、しだいに近畿・瀬戸内方面から楠描文の流入が顕著になる。中部高地や栃木・茨城などの東関東や東北南部では伝統的縄文施文の呪縛が解け始め、中部高地では縄文を払拭して楠描文を多用(吉田・箱清水式)、東関東・東北南部では楠描文と縄文の融合(十王台式)が図られる。このように弥生時代後期の土器は地域的個性を深めつつも、しだいに畿内の弥生土器の影響をこうむるようになっていく。この状況は畿内に近い地域ほど早く濃厚である。畿内を中心とした地域ではすでに統合が進んでいたことを示唆しているように思われる。

なお、南関東の久ヶ原・弥生町式、東北北部のように古墳発生前まで縄文を多用する地域も残っていた。

倭国大乱

各地域では生産力の増強が図られ、力の蓄えにともなうてしだいに地域間の武力衝突が激しくなった。「倭国大いに乱れ、更相攻伐して曆年主なし……」(後漢書)や「三国志」の記載にみられる倭国大乱は推定年代二世紀後半、邪馬台国の前史をあらわすものとして注目され、このころの日本列島は三十数国まで統合されていたらしい。では、実際の弥生時代後期の集落の状況はどうだったのであろうか。

まさに弥生時代中期後半・紀元前一世紀には伊勢湾以東の西日本と関東で環濠集落と高地性集落がたくさんつくられ、倭国大乱に先じた広域抗争があったことが推定された。後期西暦二世紀後半には環濠集落や高地性集落が西日本・北陸・中部高地・関東など中期後半よりも分布範囲を拡大してたくさん見つかっている。中期後半には西日本を中心に起こった抗争が、後期半ばを過ぎたころになるとさらに広域化したことがうかがえる。代表的な環濠集落は九州では中期から継続しさらに内濠をもつなど発展した構造をもつ佐賀県吉野ヶ里遺跡のほか同県千塔山遺跡、福岡県三國の花遺跡、畿内では中期の環濠が埋まっから再度掘削した奈良県唐古・鍵遺跡、滋賀県針江川北遺跡、東海では愛知県朝日遺跡、阿弥陀寺遺跡、見晴台遺跡、静岡県伊場遺跡、石川県鉢伏茶臼山遺跡、東京都では下山遺跡、埼玉県では木曾良遺跡、馬場北遺跡、群馬県では日影平遺跡、長野県では塩尻市上木戸

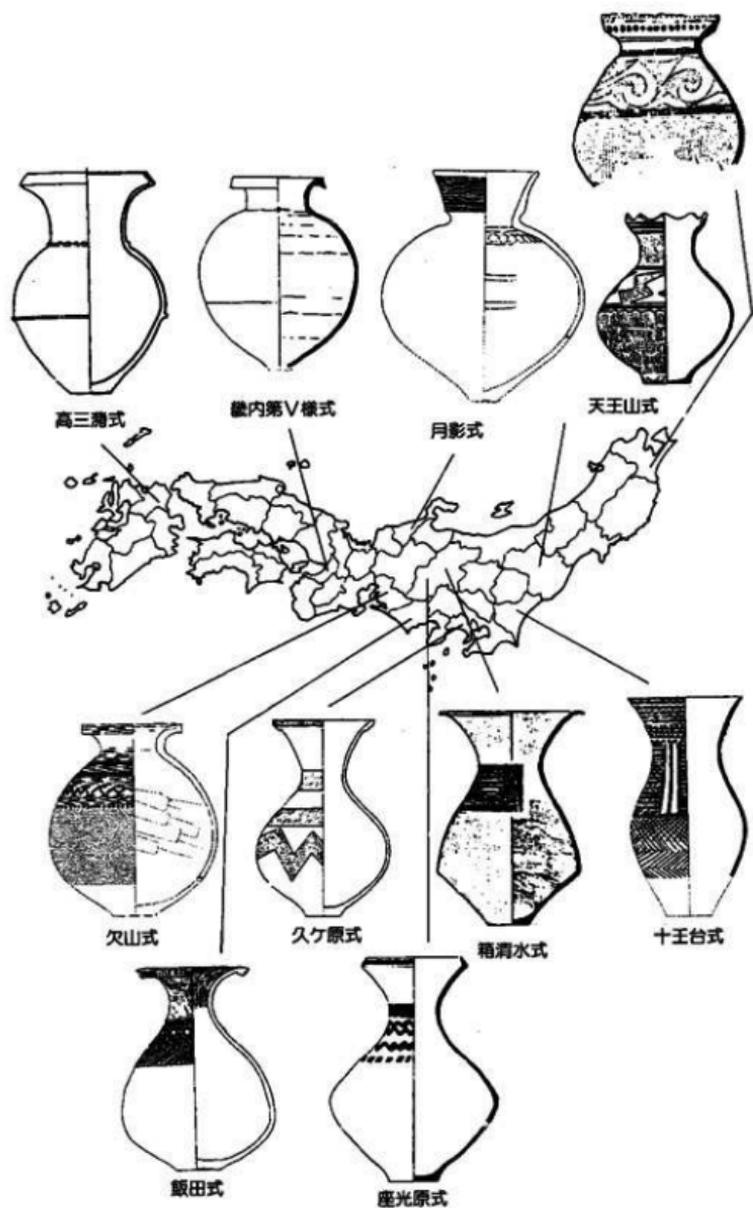


図13 1800年前、後期のさまざまな弥生土器



写1 戸板遺跡の環濠（佐久市教育委員会提供）

遺跡、飯山市須多ヶ峯遺跡で確認されているほか、佐久平では岩村田の西一里塚遺跡、新子田の戸板遺跡で見つかった。

また、環濠をもつ高地性集落は中期後半から継続する大阪府東山遺跡・観音寺山遺跡などにみることができ

る。これら環濠のなかには針江川北遺跡で宮室を思わせるような柵で囲われた大型

の掘立柱建物、吉野ヶ里遺跡で横視を思わせる掘立柱建物などが見つかっている。また、環濠はめぐっていないが城柵を思わせるような柵列で囲われた大集落の群馬県中高瀬観音山遺跡も存在するなど「畿志倭人伝」に記された国の内部を思わせるような集落跡が列島各地で見つかっている。

千曲川流域で 千曲川流域の弥生社会は後期になると、ようやく赤い土器の発達 縄文の伝統的習俗から抜け出すことができた。栗

林式土器にみられた縄文の回転施文は消え、土器に採用される文様は畿内の弥生中期土器の文様を真似た欄楯文が中心となった。こうした

土器を吉田式土器（図14）という。そして吉田式土器を発展的に継承したのが、「箱清水式土器」である。「箱清水式土器」の特徴は前述の欄楯文をさらに多用する点とともに、貯蔵用の壺、盛りつけ用の鉢・高坏など煮沸具にあたる甕以外の器の表面のほぼ全部に粘土を混ぜたペンガラ（酸化第二鉄）を塗りつけて真っ赤に焼き上げる点にある。

実物を見ると実にきれいで不思議な魅力に満ちた土器（口絵写真）であるが、当時の人々は赤く彩る土器を日常に使い、特別な時だけに用いた形跡はない。弥生時代に日常の器をこうまで彩る地域はほかになく、一部の土器に塗るのは尾張地方の後期前半の「山中式土器」のバレススタイル（宮廷様式）の壺・高坏、北九州の中期中ごろの「須玖式土器」の壺・高坏くらいである。これらの土器をどうして、赤く塗ったのか、その理由は謎である。

なお、吉田式は二段階・箱清水式は三段階の時間的流れがあることが指摘されている。ここでは後期の時期を示すあたりあまいで煩雑な記述を避けるため、土器編年（図16・17）に準拠して後期を時期順に1～5期（たとえば後期1期、後期2期……など）に細分して表記する。後期1期は吉田式の古段階、後期2期は吉田式の新段階、後期3期は箱清水式古段階、後期4期は箱清水式中段階、後期5期は箱清水式新段階に相当する。

下伊那の弥生時代後期 「箱清水式土器」は善光寺・飯山・大諏訪・松本の弥生時代後期 町・上田・佐久など県内北半分の地域

に分布する。これに対し、下伊那から伊那市の半ばまでの県南部地域

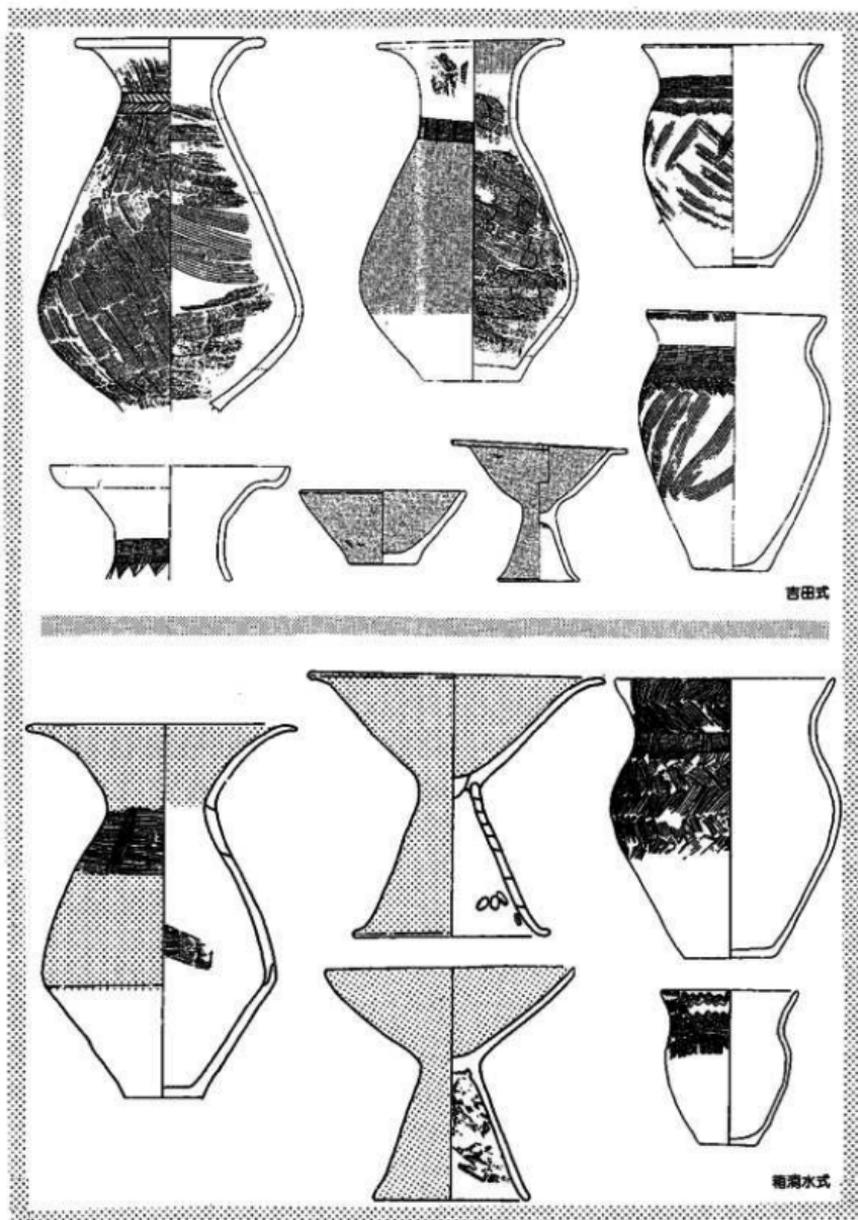


図14 吉田式土器（上）と箱清水式土器（下） 千曲川流域の後期弥生土器

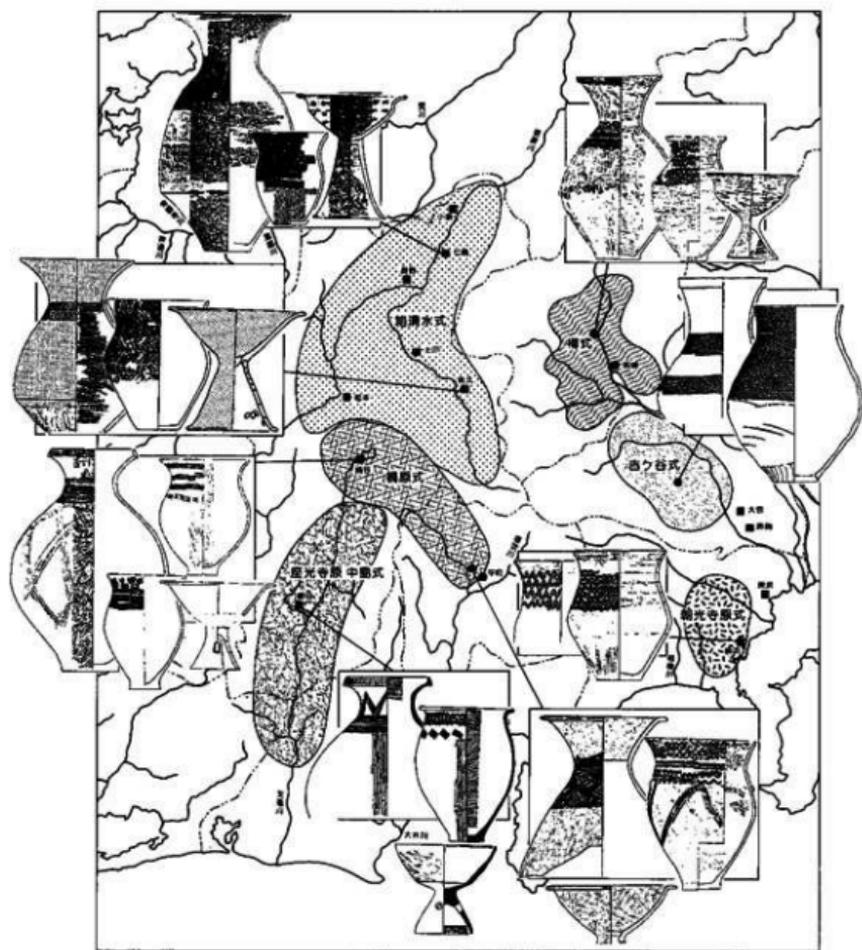


図15 県内3カ所の弥生後期土器分布圖と県外の類似土器（『赤い土器のクニ』より）

には「座光寺・中島式土器」、諏訪・松本など県中央部には箱清水式と座光寺・中島式の折衷型式、橋原式土器が分布する（図15）。「座光寺・中島式」は「箱清水式」とは逆回転の畿内地方と共通する縞縞文を壺・甕に採用する点に特徴があり、高坏は東海西部の「欠山式土器」のものを補充している。こうした土器様相の違いに象徴されるように、県内の弥生時代後期には三つの地域圏が存在していたことが予想される。

「箱清水式土器」の分布圏では千曲川やその支流沿いの沖積地や低湿地の近くに集落形成することが多い。水田経営にあたっては長野市出土の木器

の状況や農具に使われた石器の減少傾向からみて、鉄器の普及した農耕社会であったと考えられる。

いっぽう、下伊那の「座光寺・中島式土器」の分布圏では、天竜川の兩岸に発達した段丘地形を利用して、稲作・畑作農業が発達した。高位の段丘面では、水田ができないうえ、畑で陸稲がつくられた。そこで使用する農機具は打製石器が多く、全国でもこの地域でしかみられない「有肩扇形状石器」という固有な土掘り具も発明された。

諏訪ではこの両方の文化が融合したような状況で「橋原式土器」が作られた。松本では、「橋原式土器」に近い形状の土器が作られたと考えられるが、資料が少なく実態が明らかになっていない。

同系統の文様や形を持つ土器は周辺諸県でも中期後半以来引き続き作られた。群馬県では「樽式土器」とよばれ、山梨県では型式名がないが、金の尾遺跡出土土器などがこれにあたる。また、埼玉・群馬県には縄文が地される弥生土器が生まれた。「吉ヶ谷・赤井土式土器」とよばれ、文様の違いこそあれ、形は「箱清水・樽式土器」と共通した側面をもつ。

拡大する 栗林式土器をともなった開拓集団の大移動によって定住社会 着した千曲川流域の水稲耕作は、後期にいたって各盆地単位に根づきそれぞれに発展した。

後期1期の代表的集落は善光寺平の長野市吉田高校グラウンド遺跡である。都合一〇軒の竪穴住居が発掘され、若干の拡大が予想されるものや小規模な集落であったと考えられる。このほかに後期初頭に

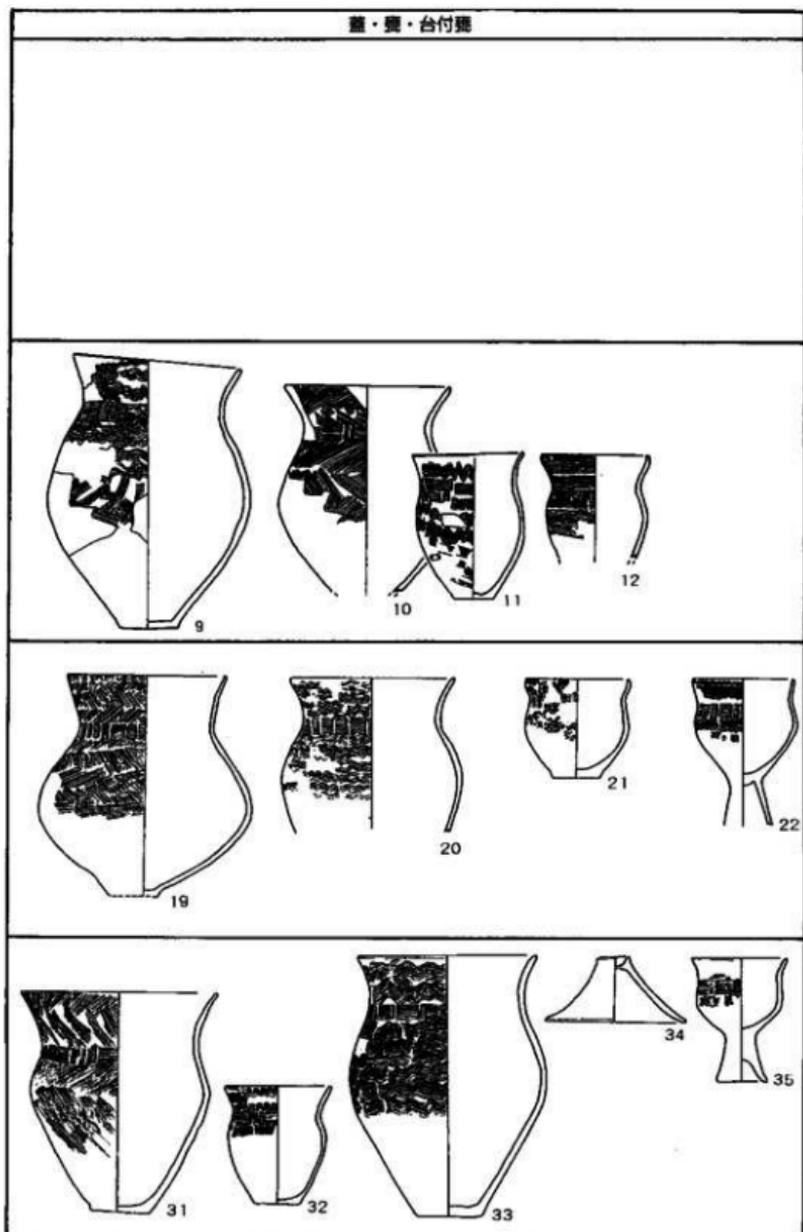
位置付けられる遺跡は発見されていなかったが、最近塩尻市井手遺跡や松本市竹淵遺跡などで見つかりはじめており、この時期の集落の実態解明も近い将来できそうである。

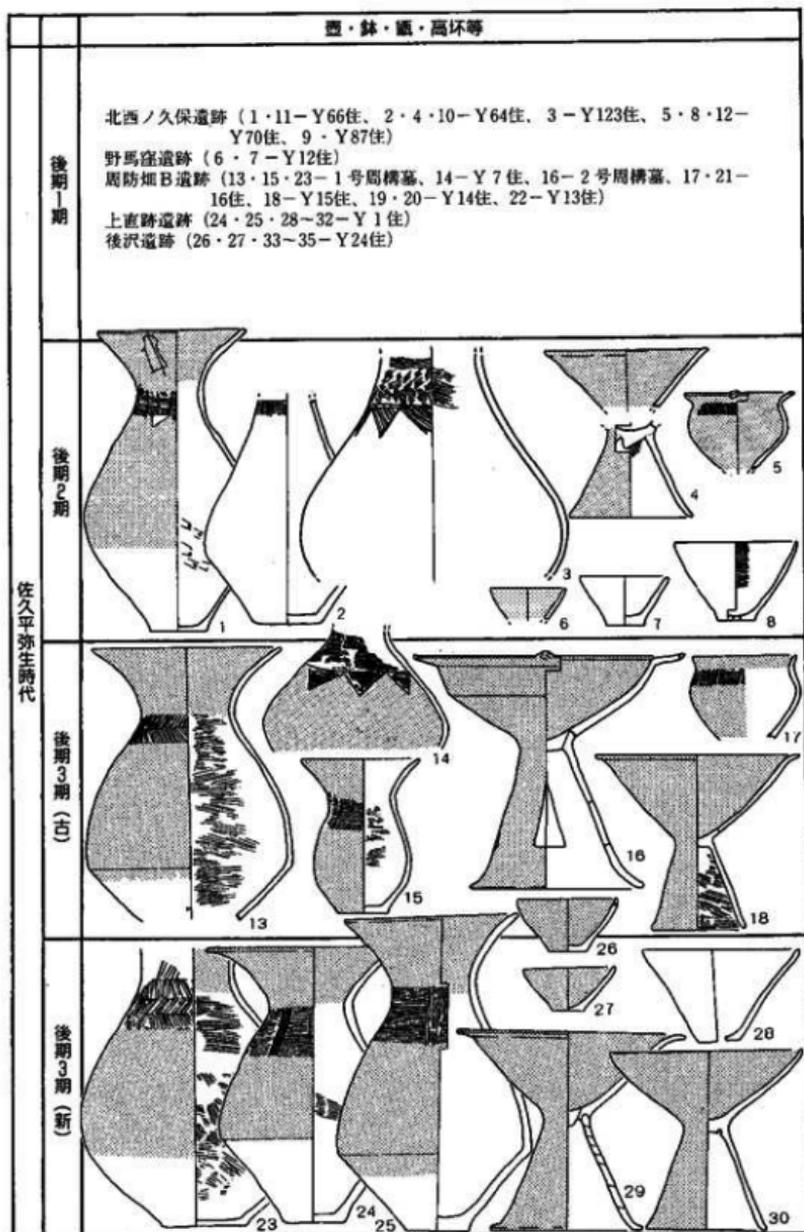
後期2期では善光寺平では長野市小島地地点遺跡、豊田村、南大原遺跡など、佐久平では北西ノ久保遺跡、周防畑B遺跡、穂村遺跡、野馬窪遺跡などがある。後期1期ではいったん少なくなったかみえた集落がふたたび成長のきざしをみせる。とくに佐久地方でこの時期最大と考えられる周防畑B遺跡では一時期推定二〇軒弱、北西ノ久保遺跡では十数軒の竪穴住居で構成される集落が営まれるようになる。また、中期後半にはなかった場所にも集落が生まれていくものもこの時期であった。すなわち、中期後半ではいくつかの拠点に集住していた人々が、後期に入ると新しい耕地を求めて地域内各所の原野に分散したようである。そして開拓を進めて収益を多くしていった結果、当初小さかった集落もだいに大きくなっていった。

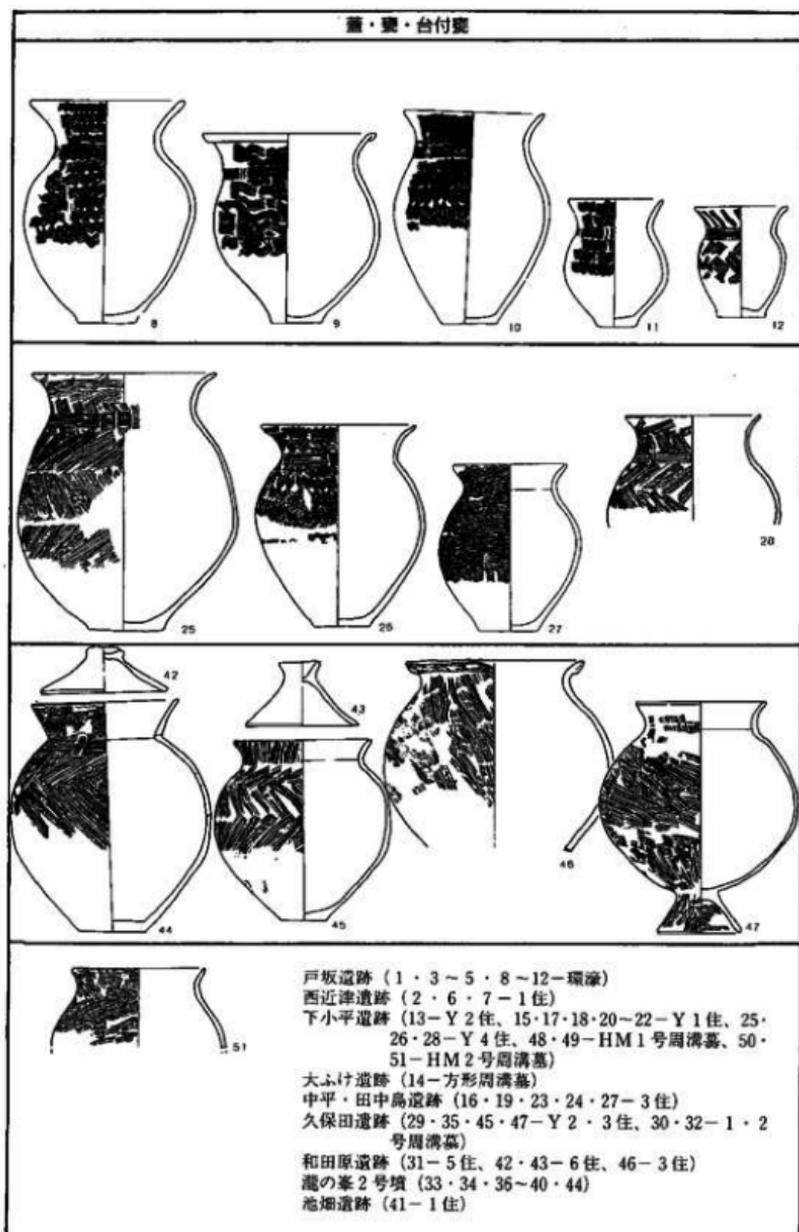
後期3期では善光寺平では長野市松原遺跡・本村東沖遺跡（長野高校地点）、神楽畑遺跡、佐久平では佐久市北西ノ久保遺跡・周防畑B遺跡・上直路遺跡、後沢遺跡が該当する。松原遺跡では二四軒の竪穴住居が見つかっており、中期後半に三〇〇軒近くが所狭しと居住していた状況と比較するとかなり開放とした集落になってしまったようにみえるが、後期2期に比べると成長のあとがうかがえる。また、本村東沖遺跡では四一軒の竪穴住居跡のほか掘立柱建物跡もあり、その範囲はさらに広がる。3期最大級の集落跡である。佐久平で最大級と目される集落遺跡は北西ノ久保・周防畑B遺跡で一時期二〇軒程度と考え

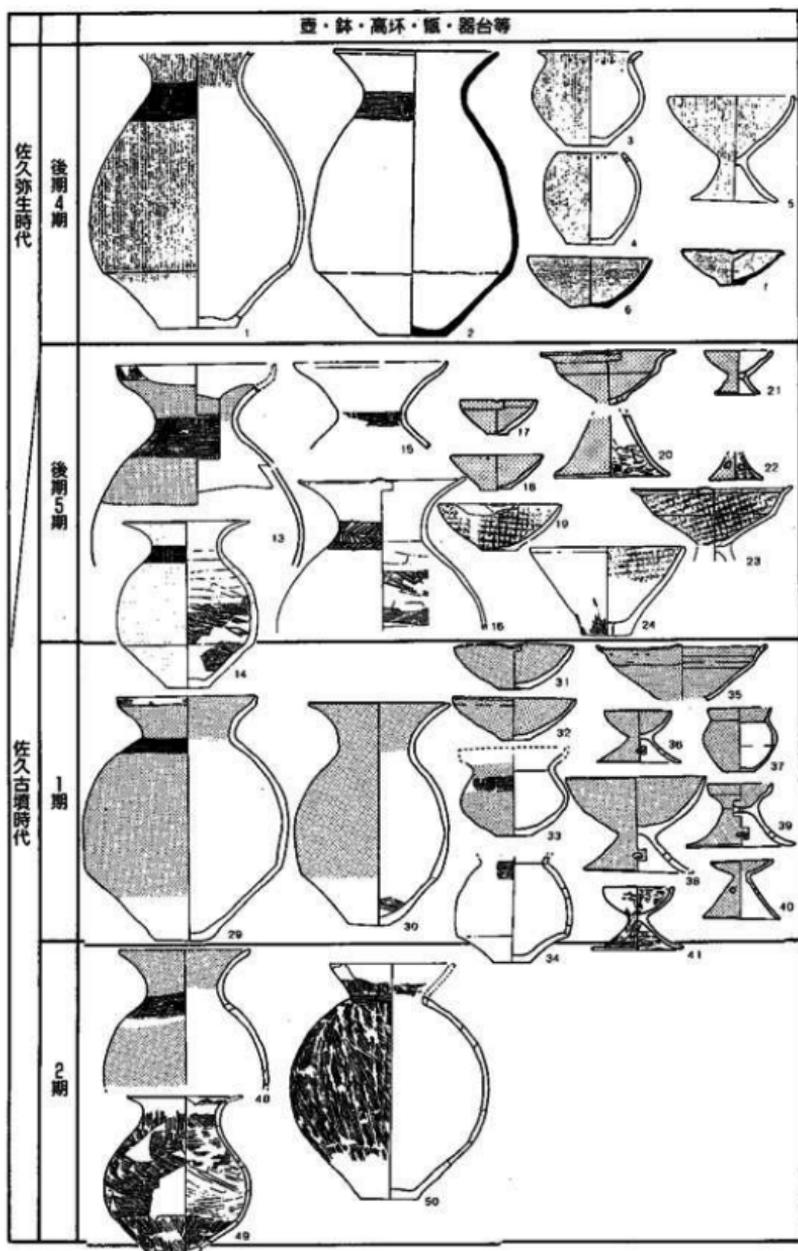
蓋・甕・台付甕

図16
後期弥生土器の移り変わり(1)









られる。上直路遺跡は部分的調査のため集落規模は不明だが、長辺一〇〇にもおよぶ佐久平最大級の竪穴住居跡から屋内埋葬の両腕に銅鏡(銅の腕輪)が着せられた人骨が見つかった。おそらく、集落の首長クラスの居宅だったのであろう。後沢遺跡では三〇〇×六〇の台地上全域にわたり三二軒の竪穴住居跡が見つかった。二時期にわたる集落と考えられ、大きい部類の集落に属する。

この後期3期までは、善光寺平・佐久平の弥生集落の間に大きな規模の差はみられない。

後期4期から古墳時代にかかわってくる5期では善光寺平では長野市篠ノ井遺跡群・榎田遺跡・四ツ屋遺跡、佐久市戸坂遺跡・下小平遺跡・池畑遺跡、御代田町細田・下荒田遺跡などで好例がみられる。

善光寺平では篠ノ井遺跡群上信越自動車道地点では4-5期を中心とした竪穴住居跡が一五三軒あり、3期と比べて飛躍的に集落規模が大きくなり、人口が急増している状況が把握できる。背景には善光寺平に弥生3期には北陸系土器の流入が顕著となる状況から、北陸方面から人の移動があったと考えられることもできる。また、3期並行と考えられる木島平村根塚遺跡で朝鮮半島南東部の伽耶地方産のうす巻き装飾をもつ鉄剣が出土していることから、騎馬民族の夫余族の南下に追われ朝鮮半島から日本海ルートで北信濃へ亡命した集団があったとする説もあり、外国から移住者があった可能性も否定できない。いずれにしても中期後半でいったん途絶えたかにみえた他地域からの集団移住がふたたび後期後半に始まったようである。「箱清水式土器」分布圏にはこのほかにも多雄細文鏡・細形銅剣・巴形銅器・鉄矛など東日本で

はほとんど例のない朝鮮・九州系遺物が出土している。朝鮮半島・九州との人の移動をともなう想像を越える交渉があった可能性は高い。

これに対し、佐久平では4期以降集落規模の縮小、および集落がそれまで形成されなかった地域にまで拡散して分布する傾向が目立つ。4期の遺跡は佐久平では不明確で、該当するのは環濠が発見された戸坂遺跡のみ、5期に入ると下小平遺跡で五軒、池畑遺跡で二軒、細田遺跡で一〇軒、このほかの同時期の遺跡では一〜二軒程度の出土しか認められない。また、5期以降にはそれまで未確認であった千曲川本流沿いにも集落・墓が形成される。佐久市大ふけ・細田遺跡、小諸市久保田遺跡、浅科村中平・田中島遺跡などがこれにあたる。これらの遺跡でとくに目立つのは埋葬部の周囲を円形や方形の溝で囲った周溝墓が群在することである。

古墳発生にかかわる時期になると善光寺平の弥生集落は隆盛期をむかえ飛躍的に拡大する。そのいっぽうで、佐久平の弥生集落はこと切れたように一挙に分解し、激減してしまうのである。この背景には古墳築造の動きが少なからず関与したことが予想される。

川境に異な 弥生時代後期3期をすぎたころになると佐久平では千
る土器様相 曲川流域にあってほかの盆地と異なる個性的な土器の
文様を描くようになる。とくに顕著なのが千曲川の東、右岸地域である。その最大の特徴は、壺における篋描の矢羽状文と、甕における篋描きの横羽状に組みあわせた文様(図22)である。これは後期1・2期にあたる「吉田式土器」の文様要素であり善光寺平では「箱清水式

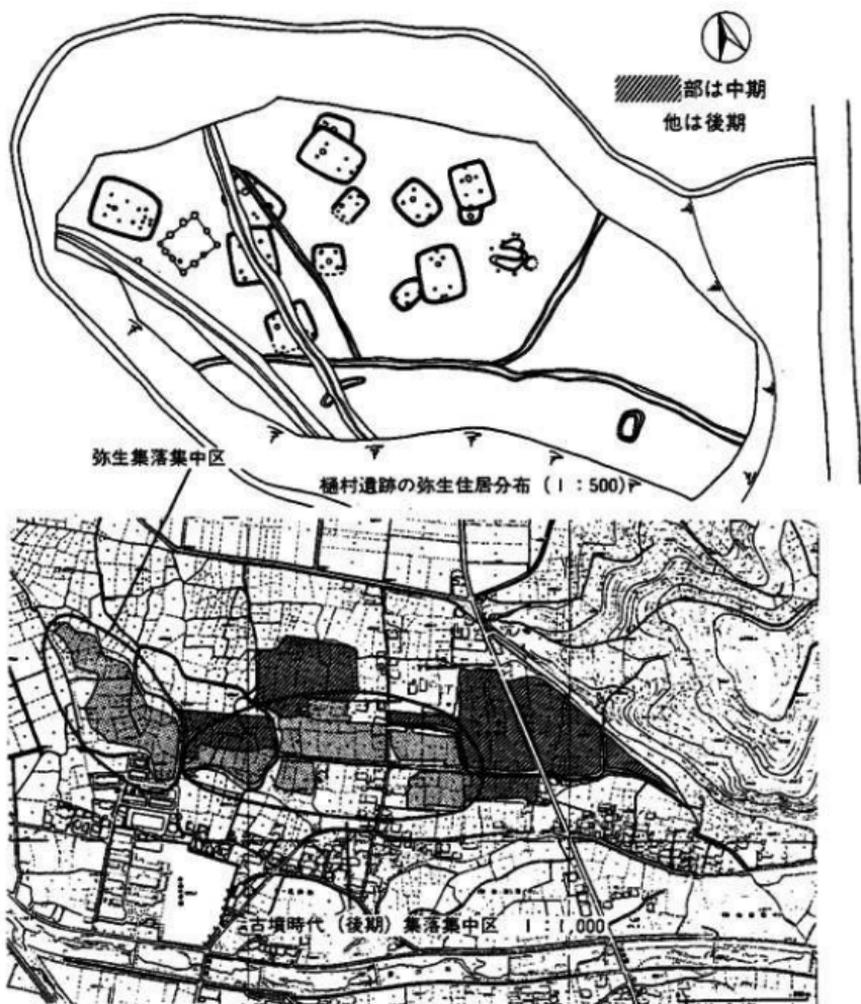


図18 桶村遺跡の弥生集落

桶村遺跡は佐久市平賀に所在する。昭和57・58(1982・1983)年に発掘調査が行なわれ、弥生時代中・後期の竪穴住居跡13軒が発見されたほか、古墳時代後期の竪穴住居跡も300軒以上発見された。この地域は弥生時代中期に開拓がはじまり、古墳時代後期に一大発展をとげたのである

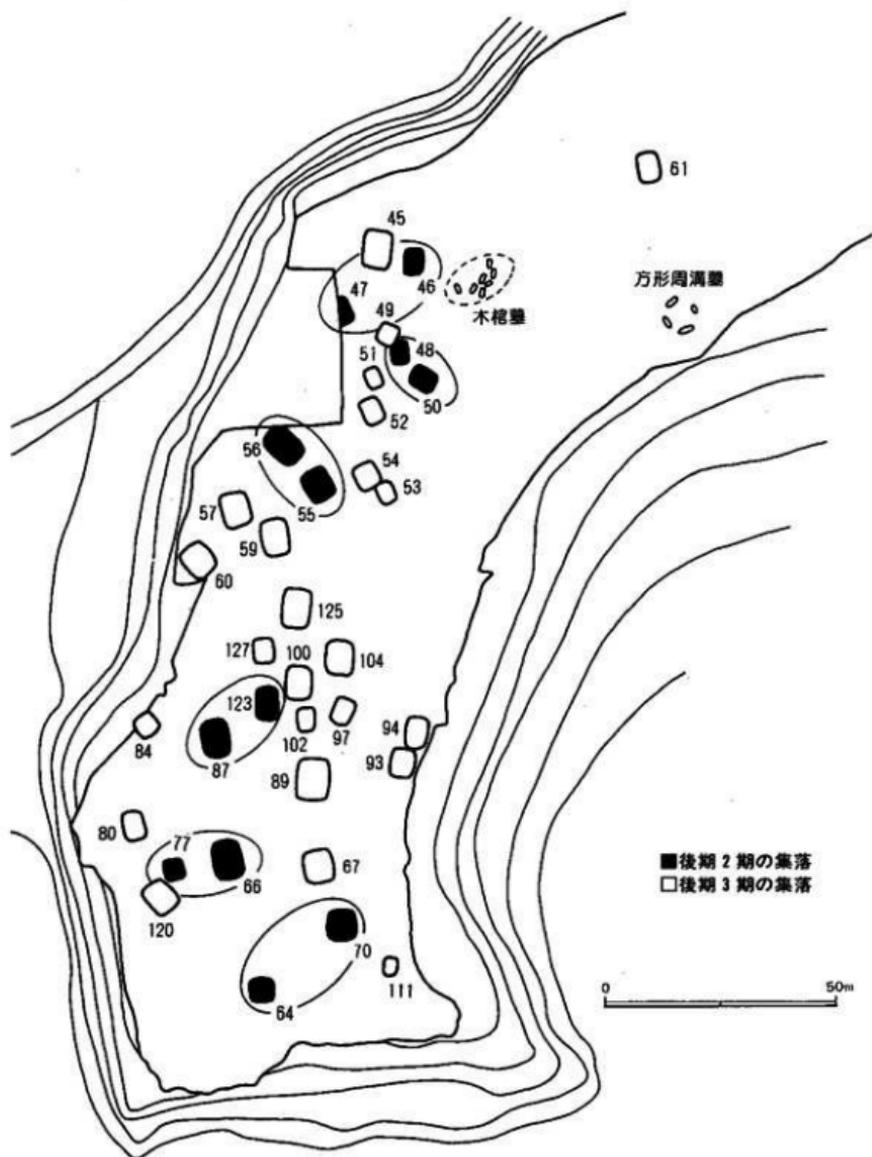


図19 佐久平の弥生後期の最盛期 北西ノ久保遺跡の住居配置、2期は二軒一対で集落構成
 図中の番号は住居跡の番号。

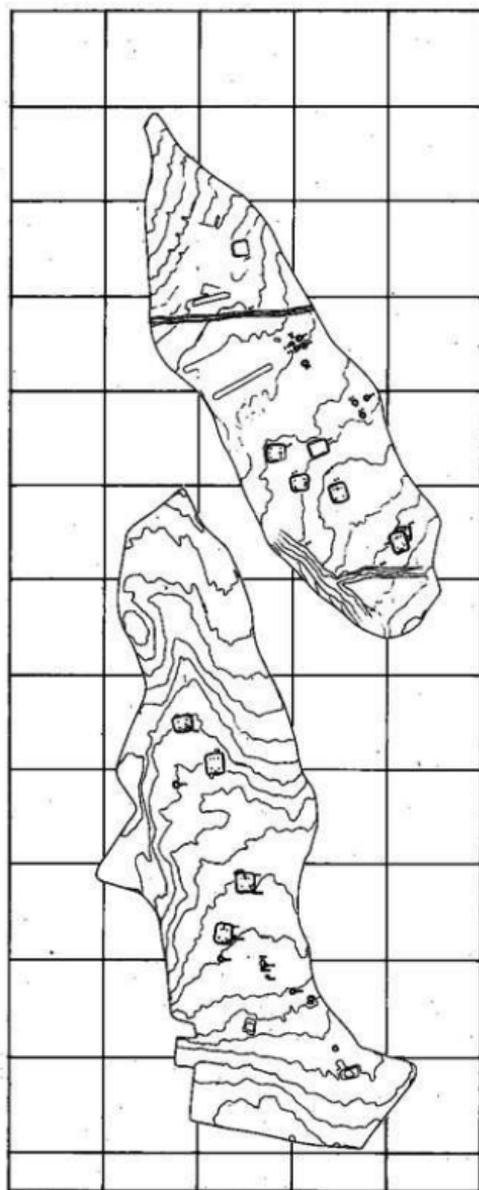


図20 御代田町細田遺跡全体図 (1:1,500)

土器」の成立にあたる3期以降消滅する文様である。このような古いままの文様が佐久平の千曲川右岸地域では後期3期以降古墳時代初頭まで継承されている。東部町・上田市までの千曲川右岸地域一帯は、これと同様な土器様相を示し、狭いながらも同一の地域圏を形成していたと考えられる。また、最近まで千曲川流域の弥生後期土器は峠を越えて群馬県にまでは入り込まなかったと考えられてきた。ところが、富岡市の拠点集落のひとつ南蛇井増光寺遺跡で、佐久市周防畑B遺跡の後期3期の出土土器と非常に良く似た土器群(図21)が発見されたのである。この発見により、険しい峠を越えて、千曲川流域という枠組みにこだわらない越境交流も弥生時代後期にあったことがわかった。

そのいっぽうでは、佐久平・上田平にかけての千曲川左岸地域一帯では、後沢遺跡の土器に象徴されるように篋形矢羽状文や櫛形横羽状文は3期以降ほとんど残らない。同じ盆地内にありながら川を隔てて異なる土器様相を示す現象は当時の社会構造の一端を示しているものと考えられ興味深い。

こういった現象は佐久平ほど顕著ではないが、善光寺平においても認められる。千曲川と犀川にはさまれた篠ノ井遺跡群と千曲川右岸の覆田遺跡、また、犀川左岸の浅川扇状地遺跡群の出土土器を比較すると同時期であるのに、若干の違いがみられる。

千曲川流域の弥生社会で文化的発信地となり、中核的役割を担った

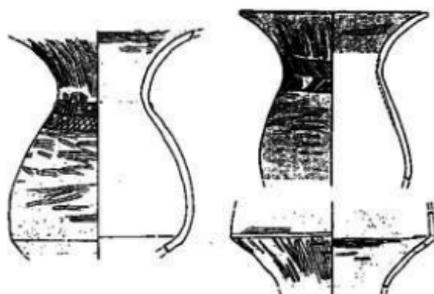


図21 富岡市南蛇井・増光寺遺跡の後期弥生土器
佐久地域との共通性が強い

遺跡群等で選択された新たな文化要素は、近隣の流域内の拠点集落へ伝えられ、これがさらに遠隔地の拠点集落へとリレー式に伝達されていくような情報体制が千曲川流域全般、さらには群馬・埼玉・山梨県のような同じ橋樑文土器をもつ中部高地一円にできていたのではないかと想像するのである。これが県内では各地域・各遺跡において「箱清水式土器」の範疇にあるものの善光寺平からの遠隔地ほど、佐久平のように基本からはずれた土器様相を示す原因になったと考えられるし、さらに遠い県外では伝言ゲームのように伝達事項が、だんだん変化して伝えられていった結果、群馬の「樽式土器」、山梨の金の尾遺跡出土土器のような「箱清水式土器」とはかなり異なった形状の土器を生み出す結果になったと考えられる。

集落がどこだったのか、いまだ絞り込まれてはいない。しかし、土器型式の変化に先進的要素と主導的要素を兼ね備えている地域は善光寺平であり、そのなかでも際立っているのは篠ノ井遺跡群である。おそらく、篠ノ井遺跡群とその周辺の拠点集落が、外からの文化的要素を他に先んじて受容できたのであろう。篠ノ井

上小地域の 後期弥生社会の中核地と目される善光寺平を対象にした
状 況 て、佐久平の弥生社会の状況をみてきた。ここで両地域の中間地帯上田平の状況についても触れておくことにしよう。

上田平は一九九五年現在で人口一万余人を数え、県内三位の人口密集地である。ここでは弥生時代中期後半の集落遺跡は未確認である。この温暖で水源に恵まれた地域が、本格的稲作社会の建設途上で拠点として利用されなかったのは実に不思議に思える。上田盆地で弥生集落の形成がはじまるのは後期3期以降である。集落規模については全域が把握された調査が少ないのでわからないが、おそらく肥沃な塩田盆地の水田地域を背景にかなりの収穫があったことが予想され、佐久平を上回る集落が営まれたことも考えられる。

七 御代田の弥生集落

空白の時代 御代田では現在、弥生時代前・中期の遺跡は確認されていない。紀元前三世紀～紀元二世紀の五〇〇年間、

町内には人が生活した痕跡が残されなかったのである。四五〇年前には塩野で焼町土器を作り、紀元前三～四世紀には水式土器をとまなつて生活を展開した人々はどこへ行ってしまったのであろうか。

縄文から弥生への移行で人々の生活は大きく変化した。狩猟・採集中心から稲作等の農耕へと生業が変化したのである。冷涼な御代田町では、この生業の変化に適合できず縄文人が移住してしまったと考え

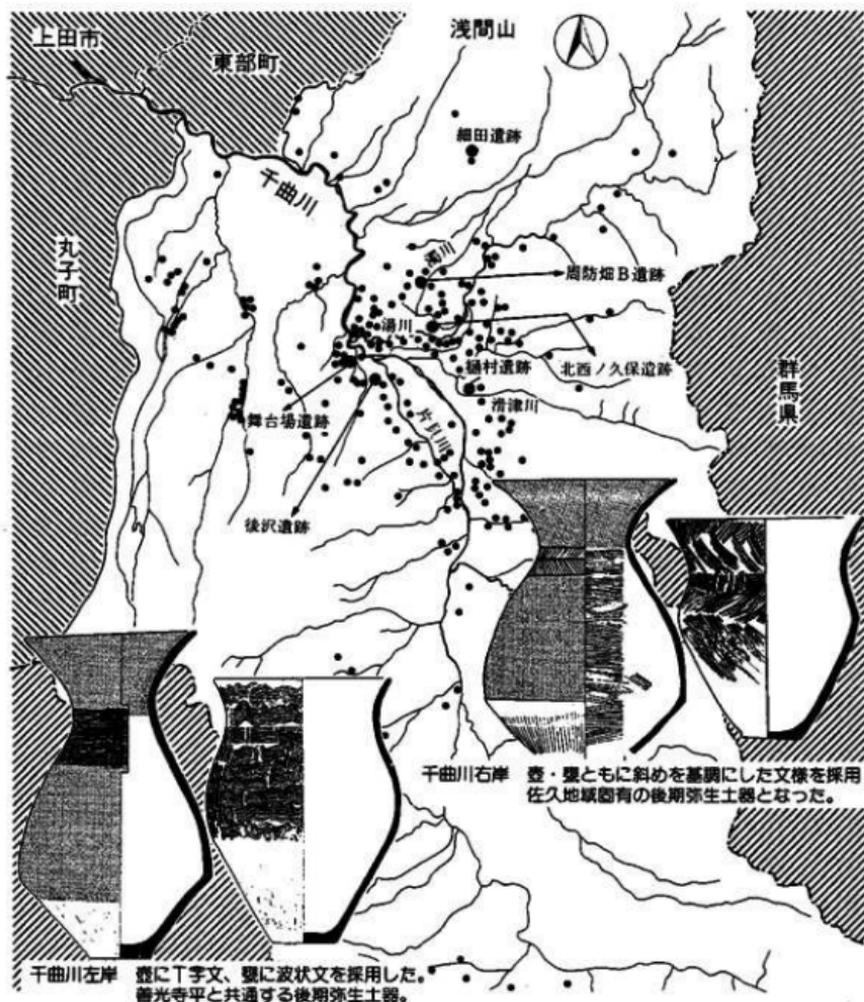


図22 佐久地方の弥生遺跡の分布 川を隔てて弥生土器の文様が異なる

た弥生時代の人々は、水田開拓可能な温暖な

佐久地方に拠点を構え、近くに立地していた。

い一等水田地帯のすぐ沢という冷害にあわな

遺跡(図23)で、樺木

村が発見されたのは塩野の細田遺跡と下荒田

西暦二五〇年ころのできごとである。この農

本格的な稲作りの農村が営まれた。推定年代

御代田町域では弥生時代の終わりにようやく

弥生終末に開拓 細田遺跡の集落

住空白の間、御代田町の山林・原野は採集の場となっていたのであ

られる。五〇〇年の唐



写8 Y-5号住居跡
ここから一粒の炭化米が出土した



写9 網田遺跡のY-7号住居跡



図23 網田・下荒田遺跡・弥生集落想像図 (小山内玲子画)



写10 細田遺跡から榎木沢をのぞむ



写11 細田・下荒田遺跡出土の弥生土器群

真っ赤に彩色された土器もたくさん混じっている。壺・甕・坏・高坏
などがあり、縄文土器にくらべ、さまざまな機能に適應した土器が作
られた。

地を捜して、標高八五〇以上の高冷地御代田まで足を運び、樺木沢の地を発見したのである。細田・下荒田遺跡の弥生集落に居住した人々は水田を切り開く時、田植え・稲刈りの時などはすべて共同作業で行なつた。細田遺跡は同時併存九軒、下荒田遺跡は五軒の集落規模から考えて大人・子供あわせて六一七〇人が生活していたのであろうから、その労働者数は乳飲み子や幼児・病人を除く約四〇人程度だったと推定される。

山あいの洞穴 御代田町の浅間南麓標高一五〇〇以上の地点に洞穴がにむむ弥生人あり、そこから獣骨とともに弥生土器が出土した。

この洞穴は、山犬の穴洞穴とよばれている。弥生土器は破片のため、細かな時代がわからないが、中期後半以降後期までの範囲に納まる。御代田の山間部に弥生時代に生活していた人々がいたのである。

こうした山間部の洞穴に残された弥生時代の生活の痕跡は、近隣では北相木村の^{天狗岩}折原岩陰(標高九六〇)、小海町の^{天狗岩}天狗岩洞穴、白田町の^{かまのいり}芦内岩陰(標高一〇一〇)など、東北信では真田町^{てんごう}唐沢岩陰(標高一二四〇)、陣の岩岩陰(標高一四〇〇)、高山村湯倉洞穴など県内各所に確認できる。

これら洞穴遺跡はいくつもの時代が複合していることが多かったため、とかく縄文時代に注目が集まり、弥生時代のあり方について検討されることは少なかった。折原岩陰などはその代表例である。しかし、平成七(一九九五)年天狗岩洞穴で弥生後期の単純層が発掘され、想像を超える内容をもつことが明らかになった。弥生時代の洞穴は単な

る狩猟を行なうための季節的なキャンプ地ではなく、海産貝のイモガイの装飾品を手に入れている状況からみて、交易のため東西を往来する人にとっては峠の民宿的な施設としても利用できたと考えられる。イモガイの装飾品は一泊の代金としてもらったか、鹿・猪などの乾燥肉と交換して手に入れたのであろう。

弥生時代は稲作農耕の時代としての印象が強いが、山間部の洞穴や岩陰に住み、通常は狩猟・畑作を生業として暮らしている人々もいたのである。かれらは捕獲した獲物の加工品をもって里におり、米などと交換した。時には太平洋側からきれいな装飾品をたずねた人も訪れ、一宿を請われることもあった。洞穴遺跡の弥生集落は山間部といつても僻地ではなく、地域間交流にあたっては重要な位置を占めていたと考えられる。

第二節 人々の暮らし

一 集落・耕地の拡大

水田の開拓

弥生時代は稲作農耕の開始に象徴される時代である。弥生人はまず、各地域の水源に恵まれた温暖な土地から水田の開拓に着手した。そしてその水田は朝鮮半島からそっくり技術移入されたため、弥生早期から完成された姿のものであった。

長野県では県内の弥生文化発展に主導的役割を果たした善光寺平で広大な水田跡が発見されている。千曲川の自然堤防と周辺の河川によって作られた肥沃な土壌をもった後背湿地に立地する長野市石川条里・川田条里遺跡である。

川田条里遺跡ではまず中期後半に自然流路付近の限定された小さな範囲に初期水田が営まれ、ついで後期には人工用水路を掘削した水田が大きく広がっていく。この土地では中期後半から後期の間に用水を引くなど開拓技術が進歩し、耕地が飛躍的に拡大し稲作農業が発達していったのである。また、このような大規模水田の開拓にあたってはいくつかの集落の労働力の結果が不可欠でもある。

なお、水田一枚の面積は約三〇平方メートル程度で、保水、排水を考慮して地形を巧みに生かして作られていた。近い将来同様な水田跡が佐久

地方でも発見されると思われる。

畑作

弥生時代に導入された農耕文化は稲作を基本としていたが、日本でもっとも早く水田を開いた長崎県葉畑遺跡ではシソ・ゴボウ・アズキなどの畑作物の種子も出土した。このため、弥生時代は最初から米ばかりでなく、畑作物も積極的に栽培していた状況がうかがえる。また、佐久市でも水田を開くには不都合な台地上に紀元二世紀ころに作られたムラ、下聖端遺跡から出土した炭化種子の内容をみると、米よりも麦が多く、畑作に依存していた生活であったことがわかる。同様な状況は、伊那谷にもあった。伊那谷の弥生文化はまず天竜川の氾濫原にのぞむ低位の段丘に定着するが、時代が下るにしたがい、人口が増えると、高燥な段丘の開拓に乗り出していった。そこでは当然水田を作るには難があるため、畑作が中心であった。伊那谷の弥生人は打製の石器（石斧・有肩扇状石器など）を用いて、堅い原野を畑に変え、陸稻・麦・粟などを栽培し、生活の糧にしていた。

弥生時代には狩猟採集に依存していたムラもあった。平地のムラから派遣されたと考えられる山間部のムラ、大阪府東山遺跡は一時期七軒程度の小さなムラである。ここでは稲の穂積みを行なう石包丁はほ

大型磐刃石斧



扁平片刃石斧
図24 鉄の斧と石の斧

とんどなく、叩き石・磨石・石皿など動物や木の実などを加工する道具が見つかった。

加工具の変化 稲作開始ころの鉄器は手斧、鋤ウツリなどの加工具が中心と農具の創出であり、太形蛤刃石斧や扁平片刃石斧などの石器とともに用いられていた。弥生後期になると千曲川流域では他地域よりも鉄器が増加し、石の加工具は減少する。鉄製加工具の普及により木の加工が容易になり、木製農具の大量生産が可能になった。優秀な農具がたくさん作られることにより勤勉な倭人は農地の開拓を促進し、広大な水田を切り開いていったのである。

石川糸里遺跡の水路からは耕作具の鍬・鋤、土をならす柄ぶり、脱穀用の杵・臼、横碓など多量の木製品が出土している。これらの製品は農家で最近まで使われていたものと大差がない。また、佐久市後沢遺跡では鉄斧が出土し、御代田町下荒田遺跡のような山麓の小集落でも刀子（ナイフ）が出土している。



写12 石包丁 稲の穂首がりに使った



図25 現代器具と変わらぬ耕作具

収穫具の石包丁は千曲川流域の各弥生集落で出土しているが、あまり目立った存在ではない。後期にいたるとこれに代わる鉄製品が普及していた可能性は十分にある。

千曲川流域の後期弥生社会、いい換えれば赤い土器に象徴される箱清水式土器文化圏の繁栄は、他地域を圧倒する鉄器の大量普及に依存するところが大きかったとも考えられるのである。これは同系統の樽式土器文化圏、群馬県側でも同様なことがいえる。

二 衣食住

家の造り

弥生時代の一般的な住居は竪穴住居であるが、滋賀県や長野県飯山・中野地方などでは掘立柱建物^{ほりたてむら}跡^{あと}、また、新潟・石川県の一部の遺跡では平地住居^{へいぢきやうぢ}が多用されるなど、各地の気候・風土によってその土地に適した住居が造られた。また、竪穴住居の平面形態にしても地域によりさまざまな形が創出された。

なお、榎等取穫物の保管は掘立柱建物の多い地域では高床倉庫に、そうでない長野県の諸地域では竪穴住居空間を利用したと考えられる。長野県では掘立柱建物と竪穴住居が場所を違えて共存する飯山地方、平地住居と竪穴住居が共存する長野市松原遺跡以外の地域は竪穴住居が主体である。

掘立柱建物が多用される飯山地方では、中期後半の竪穴住居が西日本的な灰穴炉をもつ凹形住居と類似し、北陸経由で西日本との交渉があったことがうかがえる。これはこの地域の墓制にも反映されており木棺墓が採用されている。凹形竪穴住居は中期後半において中野市でも主体を占めるが、善光寺平南部にいたると方形・楕円形竪穴住居、さらに平地住居とも共存する。平地住居は新潟・石川などの影響を受

けているものと考えられる。松本盆地では中期後半でも最初の時期に凹形住居がみられるが、しだいに方形・楕円形へと変化する。これら以外の地域では中期後半の凹形竪穴住居は基本的にみられない。

上小地域は中期後半の痕跡がなく不明、佐久地域は方形・長方形竪穴住居が主体を占め、群馬県と共通する。下伊那地方は中期後半段階では長方形竪穴住居が主体を占める。

後期になると地域相は解消の方向に向かい千曲川流域で長方形基調、天竜川流域では方形基調と異なった形態の竪穴住居が造られるが、飯山・大町などでは楕円形住居も残存する。

なお、最近では佐賀県吉野ヶ里遺跡で見つかった楼観・物見台とみられる掘立柱建物跡、同吉野ヶ里遺跡や大阪府池上曾根遺跡で見つかった楼閣を思わせるような大型の建物跡、また奈良県唐古・鍵遺跡の中期後半の土器（IV様式）に描かれた重層構造の建物の絵面に象徴されるように、弥生中期の段階の畿内・九州における宮室を思わせるような重厚な大型建物の存在が注目されているが、長野県では未発見である。

また、唐古・鍵遺跡や京都市中海遺跡では土壁建物跡、奈良県星ヶ丘遺跡など弥生末の鍛冶工房跡なども発見されているが、長野県ではこういった変わった建物の有無についてもわかっていない。

食料

最近北部九州では今まで猪と考えられてきた骨が、豚の骨であることがわかり、家畜を飼育していたことが明らかになった。これをきっかけに北部九州で三例、畿内でも三例、神



図26 吉野ヶ里遺跡の大型建物想像図

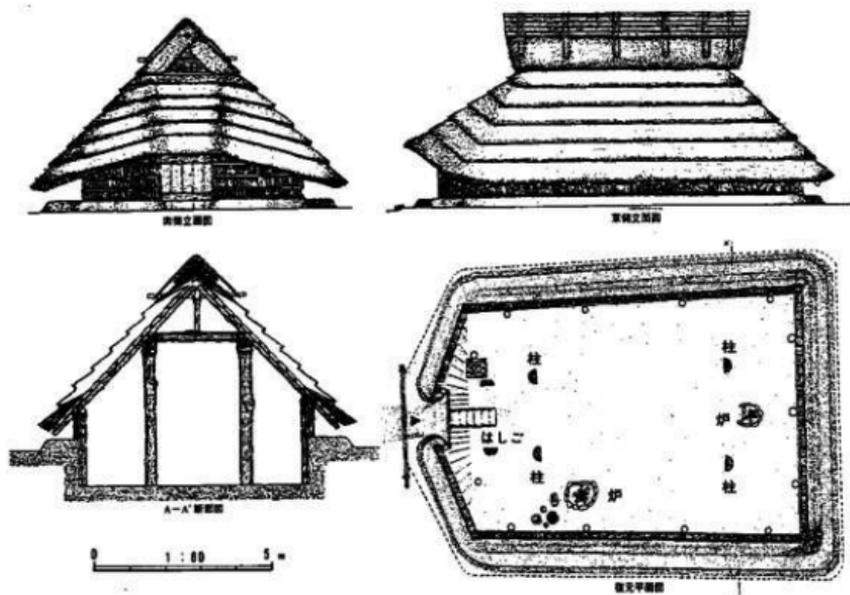


図27 群馬・長野の弥生後期にみられる割材を使った竪穴住居の上屋復元（『中高瀬観音山遺跡』より）

奈良県で一側の豚の骨が確認された。今まで弥生時代には家畜を飼う習慣がないといわれてきたが、今後さらに豚の骨の発掘例が増えれば定説がくつがえる可能性もある。ニワトリも弥生時代に倭国へやってきました。食用にしたかは定かでないが、おそらく、第二次世界大戦からしばらくまでと同じように卵を産まなくなったニワトリをつぶして食べた程度だったと考えられる。犬は縄文時代には手厚く埋葬されていた。ところが弥生時代の犬の骨は解体された跡があるので食用にされていた可能性が高い。

このほか、稲作社会にいたってかれらは何を日常食していたのであろうか。その一端を示す資料が佐久市下聖蹟遺跡で発見された。

下聖蹟遺跡の弥生後期の竪穴住居跡は焼失していた。多くの炭化材に混じって炭化した種子も出土した。分析によれば米の比率は少なく、麦が多い。山ブドウも多く出ているとのことである。このような結果から、水稲耕作だけに依存せず畑作中心の集落があった

こと、縄文時代に劣らず山の幸を栄養源として確保していた状況などが彷彿とされる。また、動物骨の出土例がないので確認はないが、野鳥や鹿・猪・熊・たぬきなどの獣も捕らえることができれば、弥生人の口に運ばれていたことは間違いない。

弥生時代は現代のように飽食の時代ではない。主食として米を選択した時代ではあるが、それが十分に収穫できる保証はなかった。米のはかに雑穀や根菜類、山野草、海・川で捕獲できる魚介類、さきに登場した豚・犬など

の家畜、食用になるあらゆるものから栄養を摂取していたのである。

衣

『魏志倭人伝』によれば、倭人の男は「頭に鉢巻き、衣服は布を結びつけてつないであり、ほとんど縫っていないもの」「いわゆる「横幅」衣、女は「中央に穴をあけて頭を通してこれをきていた」いわゆる「貫頭」衣を着ていたとされる。縄文時代の晩期後半、褌衣にかわって織布がつくられるようになり、弥生時代に広まる。織りの道具は各地の遺跡から出土しており、弥生人が衣類の製作に熱心に取り組んでいたことがわかる。現代人が弥生時代の貫頭衣の製作に取り組んだところ、植物繊維を取り出して長くつなぎ、撚りをかけて糸にするのに五七日、織りに八日、仕立てに一日、合計六六日かかったという。織る労力よりも、糸を紡ぐ労力の方がはるかにたいへんだったのである。長野県では糸を紡ぐために使用した紡錘車が弥生時



写13 細田・下荒田遺跡出土の紡錘車



図28 紡錘車の使用例 糸をつむぐ貫頭衣を着た女性

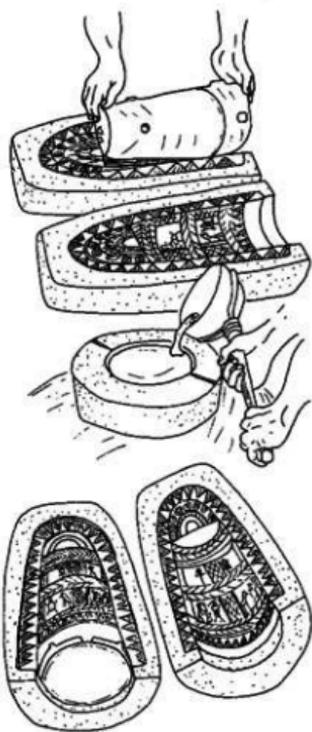


図29 銅鐻の製作

代の遺跡からたくさん出土している。御代田町でも塩野の細田遺跡や下荒田遺跡(写13)から出土している。

祭 祀

弥生時代を代表する祭祀遺物には、剣・鏡や巴形銅器などたくさんあるが、もっとも象徴的なのは国内で製作された銅鐻である。銅鐻は内側に舌をつるし、揺すると音を発するベルのようなもので、その源流は中国黄河文明で家畜をよび集めるのにつかったベルという説などがある。畿内を中核として東は長野県(塩尻市柴宮銅鐻は有名)、西は九州にまで分布する。弥生時代に豊作を願う稲作農耕にかかわる祭りに際して使用されたものと考えられている。最近まで続いていた豊作を願う春祭り、収穫を感謝する秋祭りは弥生時代の祭りが原形だったという説もある。弥生人は芽吹き春、憂愁の秋に銅鐻の音色をどんな思いを込めて聞いていたのだろうか。銅鐻には倉庫、鹿などの狩りをする人、魚を獲る人、杵をつく人、猪、

鷄、すっぱん、とんば、かまきり、いもりなどの絵面が描かれているものが多い。収穫に対する祈り、感謝あるいは自然との共生を願ったのであろうか。いずれにしても弥生時代の共同体社会には欠くことのできない役割をもつ祭りの道具であったことは間違いない。弥生時代に重視された銅鐻も弥生時代の終焉、古墳時代の始まりをもって埋納・隠匿されるにいたった。大和に端を発した強力な酋長たちを頂点とする新たな祭りの施行によって、弥生時代の伝統的な祭りはとり止めて余儀なくされたのである。最近では出雲・島根県の加茂岩倉遺跡で三八个まとめて埋納された銅鐻が話題をよんだ。銅鐻はこのようにひっそりと埋められているものが多い。

このほかの祭祀行為にト占骨もある。これは鹿の肩甲骨に焼き火ばし状の棒をおしつけて、ヒビの入りがたで吉凶を占うものである。ト占骨は更埴市生仁遺跡、長野市四ツ屋遺跡で確認されている。

それに類するものとしては、佐久市北西ノ久保遺跡Y-10号住居跡から見つかった鹿の角・四肢骨と猪の子(瓜ボウ)の下顎骨がある。これらの骨は住居とともに意図的に焼かれたもので、何らかの祭祀的な意味をもつものと考えられる。なお、瓜ボウの骨は肉がついた状態で焼かれたことが鑑定結果明らかになっている。